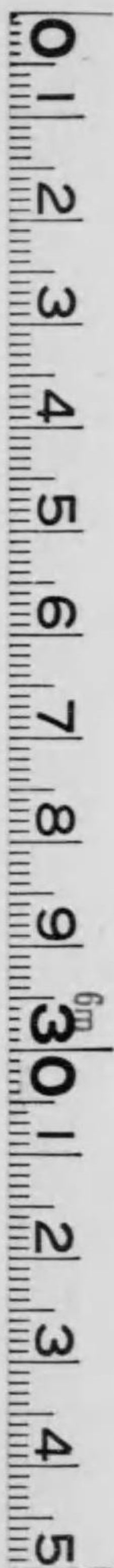


實用裁縫小物集

11
390



始



東京和服裁縫研究会編

實用裁縫小物集

夜具、布團
油單の類

梅津書店藏版

はしがき

この裁縫小物集は日常細々した物で婦人方が覺へてゐなければならぬ物
を最も注意して集めたものです。

ことに夜具布團の如き日々使用するものを布團屋に造らせる所が多い
やうですが、人手に依らねば出来ぬといふ事では經濟上は勿論不便の上も
ない事です。それ故夜具布團座布團枕蚊帳に至る迄寝具の一通り完全に出來
るやう詳述しました。

神樂家具履風呂敷蓆日履の類を特に其の一篇に加へましたのは一寸誰に
でも心得てゐるやうであつて、多く右左と裏と表とを間違へたりしてあつて見
悪いものです。この本ではそれ等の間違のないやうに正式で簡易に出來るや
う掲せました。

外に普通仕立物で解り易くて誰れも間違へ易い裁方縫方等及應用仕立直
しの十數種を添へました。



大正
9. 10. 28
内交

故に普通仕立物以外婦人方の心得置くべきもののみを蒐集してありますれば家庭學校等の有益な良參考書として是非座右に備へられんことを望みます。

目次

一 紐の縫方及び結び方

時計の紐の縫方	一
羽織の紐の縫方	一
新橋結び	四
釋伽結び	六
梅結び	四

二 新案コートの裝飾の作り方

蝶結び	一八
三輪結び	三
渦巻結び	五
わらび結び	六

三 帽子涎掛及び守袋

帽子	二九
----	----

ひもつき涎掛……………三六
 桔梗形及び梅形涎掛……………三六
 普通形涎掛……………三六
 松形巾着及び飾紐の結び方……………三六
 菱形巾着……………三六

四 實用袋物

女物巻煙草入……………三五
 朝日巻煙草入……………三五
 小學校用カバン……………三三
 手提袋……………三三
 さくら袋(手提)……………三三
 守刀袋の縫方……………三三
 旅行用信玄袋……………三三

五 前掛の縫方

割烹前掛……………三九
 ギヤダ付前掛……………三九

六 人形の着物

人形の着物の割出し方……………三九

七 子供用新案物種々

寝冷知らず……………一〇三
 一つ身夏ちやんく……………一〇八
 夏ちやんくの代用服及び帽子……………一一三
 一つ身袖無羽織……………一二〇
 大阪ちやんく……………一二八
 一つ身袖無被布……………一三三
 一つ身搔捲……………一四〇
 一つ身抱着……………一四九
 四つ身抱釣鐘型及び分銅型……………一五四

八 蒲團の縫方

座蒲團……………一六〇
 經濟的搔捲……………一六五

夜具 一八七
 鏡蒲團 一八七
 八つ吹蒲團 一九五
 飾り夜具 二〇〇
 枕の縫方 二〇三

九 蚊帳の縫方

普通形蚊帳 二二六
 座らずに出入の出来る蚊帳の仕方 二二九
 底のある蚊帳 二三四

十 油篋の種々

篋筒の油篋 二二九
 長持の油篋 二三三
 釣臺の油篋 二四〇
 風呂敷の縫方 二四四
 鉄箱の油篋 二四八
 鏡及び鏡臺の覆 二五五

用篋筒の油篋 二六一
 針箱の覆 二六四
 傘袋 二六七

十一 山田流及び生田流の琴袋及び三味線袋の縫方

山田流琴袋普物の縫方 二七一
 生田流琴袋の縫方 二七九
 山田流上等物琴袋の縫方 二八三
 三味線袋の縫方 二九〇

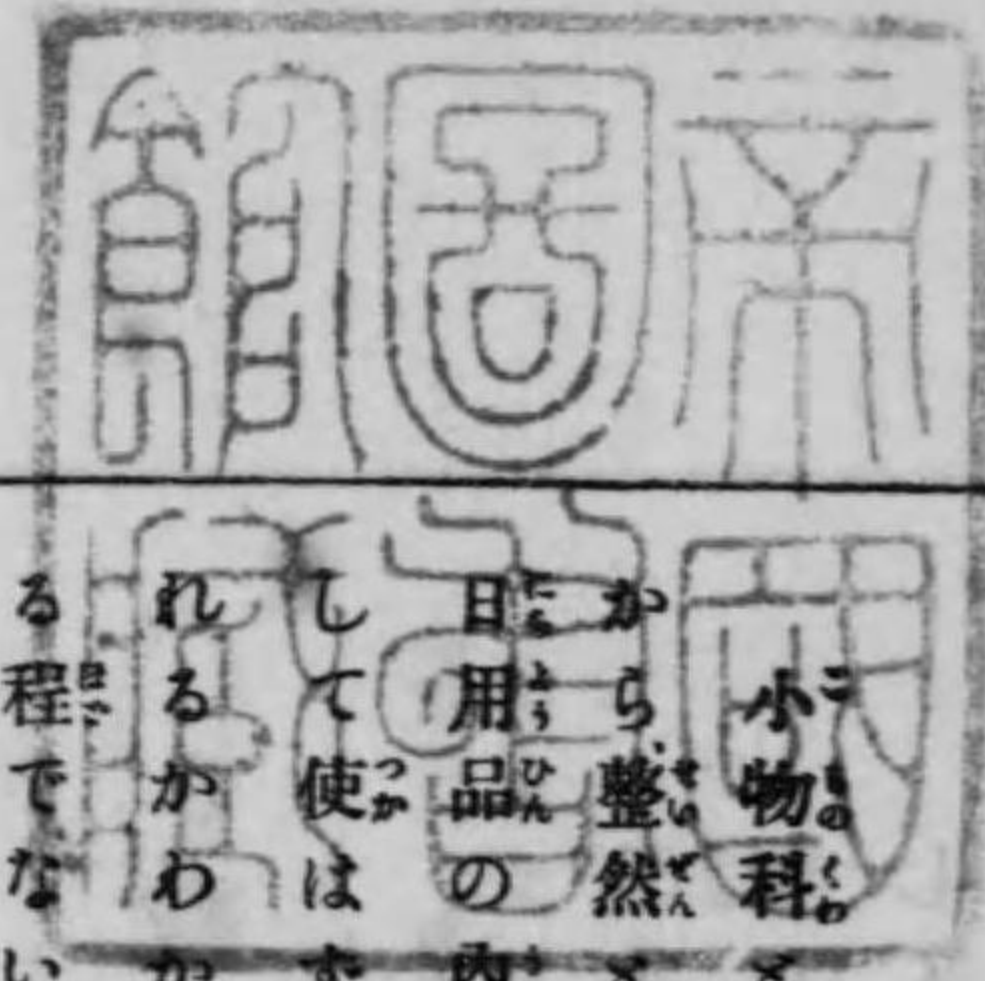
附録

薄物の衿肩當 一
 衣紋を抜く着物の仕立方 一〇
 着物を羽織に直した時の衿のつけ方 一三
 袖口と裾廻しの取代へ方 一七
 男物袷羽織の積り方 二一
 女物袷半コートの積り方 二四
 男物單衣羽織の積り方 二六

女物單衣半コートの積り方……………二六
 男物袴の積り方……………三〇

目次終

實用小物全集



紐類

小物科と總稱致しまして其の實なか／＼意味の廣いものでございますから、整然と定りをつけてお話しする事がむづかしくございますが、成る可く日用品の内、實際役に立つ物をお教へ致したいと思ひます。紐類などは決して使はずに居られる物では無く、多い方は一つの體に、何本巻きつけて置かれるかわかりませんが、其の通り種類も澤山ございますが大同小異で一々擧げる程でないものもありますから、直ぐ氣のつく物を二三種擧げてお話しする事に致します。

一時計の紐

何品に限らず、縫裁よく丈夫にと云ふ事は忘れてはなりません、殊に斯

う云ふ品は其の心懸が必要でございます。

1、用布 丈一尺七寸幅四分

外 丈一寸七分同幅

2、地質 お召縮緬羽二重紗等を、時節に依つて替へるのも宜しうござ

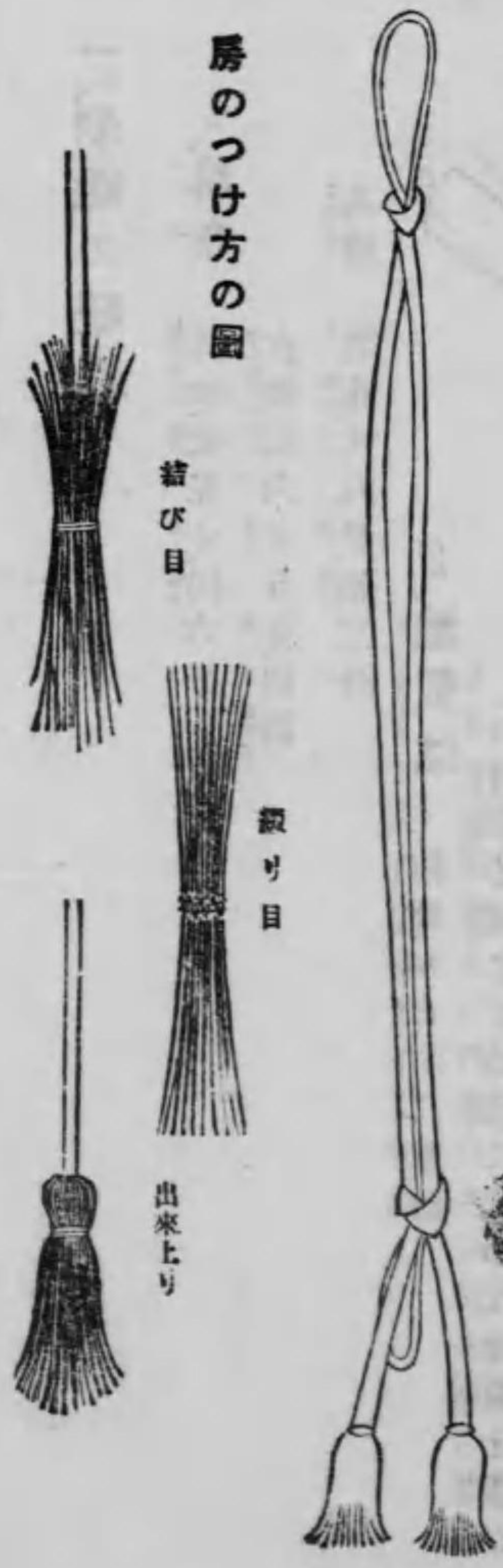
います。

3、縫ひ方順序 最初七寸五分丈だけ出来上り一分巾の本拵けに致し

ましたら、二寸を其糸にて、片方の拵け代だけ折て、片方から細々／＼そ
の中へ巻込んで来た布を五厘足にかかります(まつりますのを表へ針
目を出す)地厚の時には一分布を巾で切捨て、成る可く細く巻きます
續いて七寸五分を前の通りに拵けましたら、かがりました二寸をわに
して片方の紐で結びます、次には下から八分の處で、もう一度結びます
と二本の紐丈けが少し違いますがそれはかまいません、揃へる場合に
は結ぶ紐の方を三分許り長くして置けば、宜しうござります、此の時、一
寸七分の布を真中の二寸の様に細く造らへて置きまして、間へ入れて

結びますが、後から見えない様に中の方を、糸でつけてしまひます、是れ
がメタルをつける處で、二寸の方が時計に着きます。
4、房の造り方 絹糸を左の二本の指に、五十度程巻きつけましたら、
一處缺を入れて長くして、圖の様に紐の圓をまはして上から結へます、
其の時針に糸を通して、極くこまかに向前へ出して、さぢつけてから、半
分に折つて其の上を一分位下た處を二廻程結へます。
出来上りの圖
時計のつく處

房のつけ方の圖



結び目

綴り目

出来上り

二、羽織の紐

1、用布

男物、丈五寸、幅六分

女物、丈六寸五分、幅同

其他 乳布、丈八分、幅三分

2、地質は

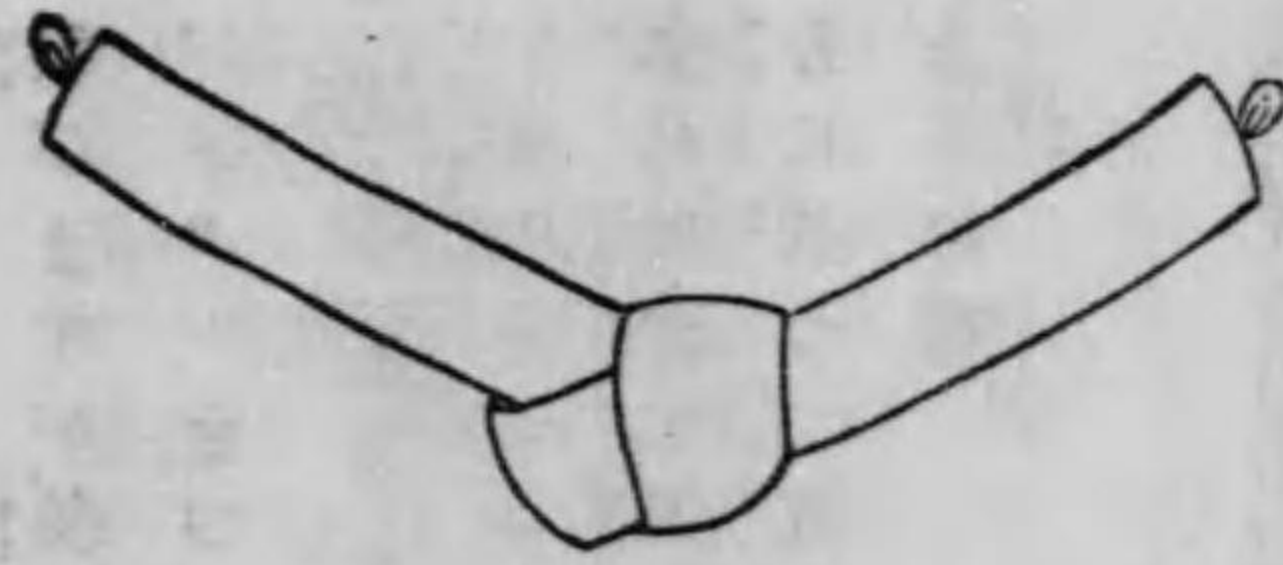
縮緬お召羽二重紗

(時計紐と同じく時節に依つて地質を選びます)

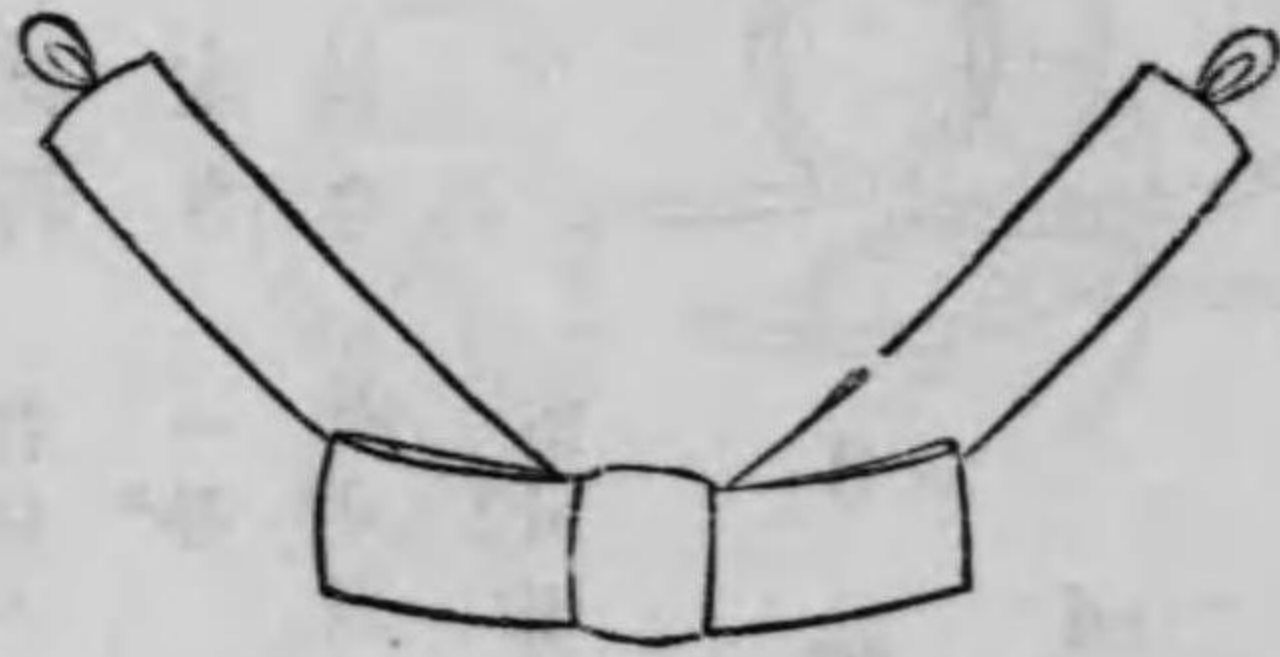
3、縫ひ方

イ男物は心に真綿を入れて、出来上り二分に本
桁けを致します。乳は時計の紐の時の乳と同
じに造りまして、両端へつけしたら、紐の中央
の處でコマ結びを一つ致します。

(物男) 圖り上來出



(物女) 圖り上來出



ロ女物は心なしで同じく二分の出来上りに桁
けます。乳も凡て男物と同じでございませが、
結び方を花に致します。他の人の二本の指を
結ぶ丈けの幅に出して貫ひまして、それへ片
方の紐を一つ掛けて中央で結びますと格好
よく出来ます。

此の他、帶止等も此の種の桁け方を應用致し
まして、両端をよだれ掛けの紐先の様に致し
ますと、直ぐ出来ます。

新橋結び

輪結びの種類には櫻結び蝶結び三結び等色々ありますが茲には新橋結びと申しまして重にコート合羽の紐に用ひ老人にも若い方にも向くので大變に重寶な結び方で御座います。

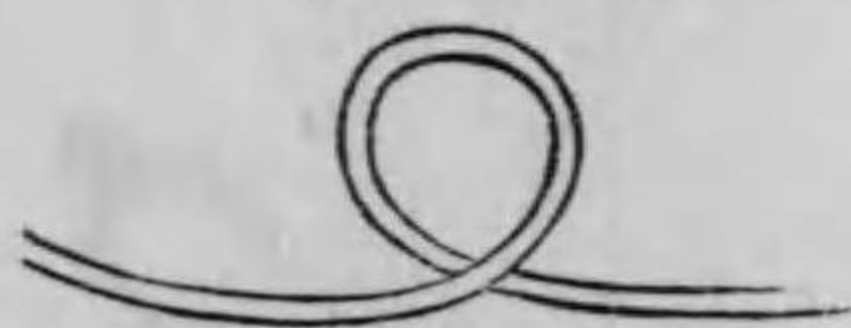
1 材料 打紐と共正束と有ります。

2 太さ 一分

長さ 七寸五分(三本釋迦附)

五寸五分(四本) (輪(三本) 釋迦とホツク(二組))

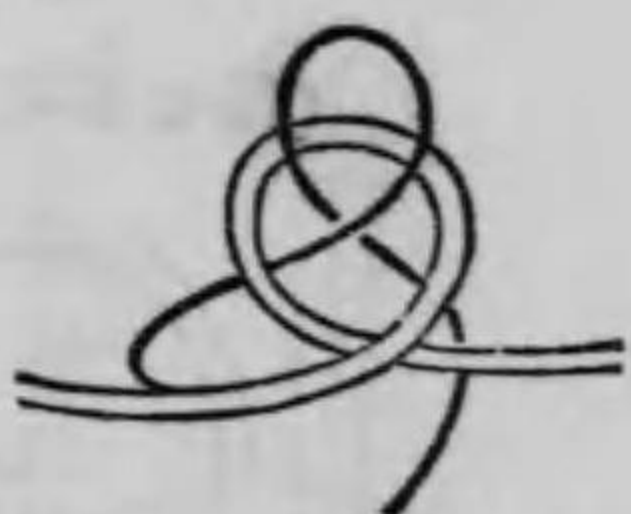
圖一第



3 釋迦結びの結び方

1、打紐の兩端を左右に持ちまして真中に輪を拵へ左の紐を右の紐の上に致します。

圖二第



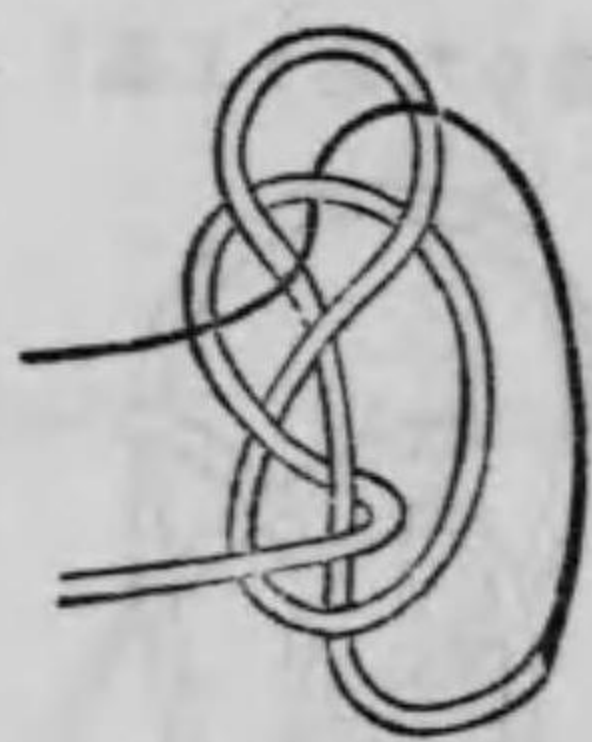
ロ、左の紐の端を左の方の輪の下を通して輪の上部にまたげて左の紐を下にして輪をこさへまして、其左の紐の端を下部の輪の右の下へ出します。

圖三第



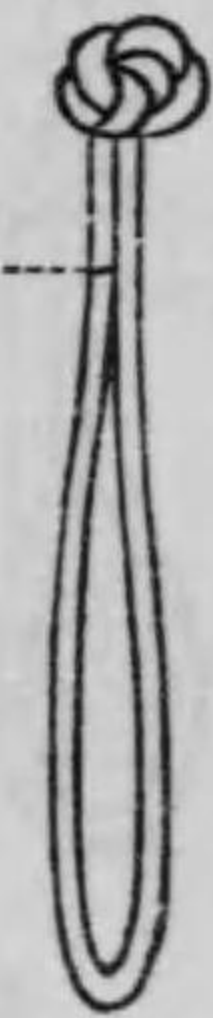
ハ、二圖に置きましては左の紐の端は右の紐の下になつて居りますのを反對に右の紐を下に致しますと三圖の様になります。

圖四第



ニ、三圖の右の紐の端を、四圖の様に上部に向つて半分輪を書きながら上部の右の輪をまたいで次の輪の上部の下をくぐり、其端を上部の輪の左から下部の輪の左にまたがつて出します、左の紐は下部の輪の下になつて居りますのを引抜き上部の下つて来て居る紐

圖一第



1、四寸五分の紐をつぎ合せ上圖の如き輪にいたします。

4 輪迦の結び方

圖り上來出



以上は釋迦の結び方でありまして、扱て釋迦が出来ましたら長い方の紐を四寸の所まで切り、一方の五分の紐とはぎ合せます、そして輪加に結びます。次に輪加結びを申上げます。

ト、六圖の通りになりましたら兩端の紐を持ち一たんを五分だけにして一方の紐の方へ紐をしめると圖の様に出来上ります。

圖六第

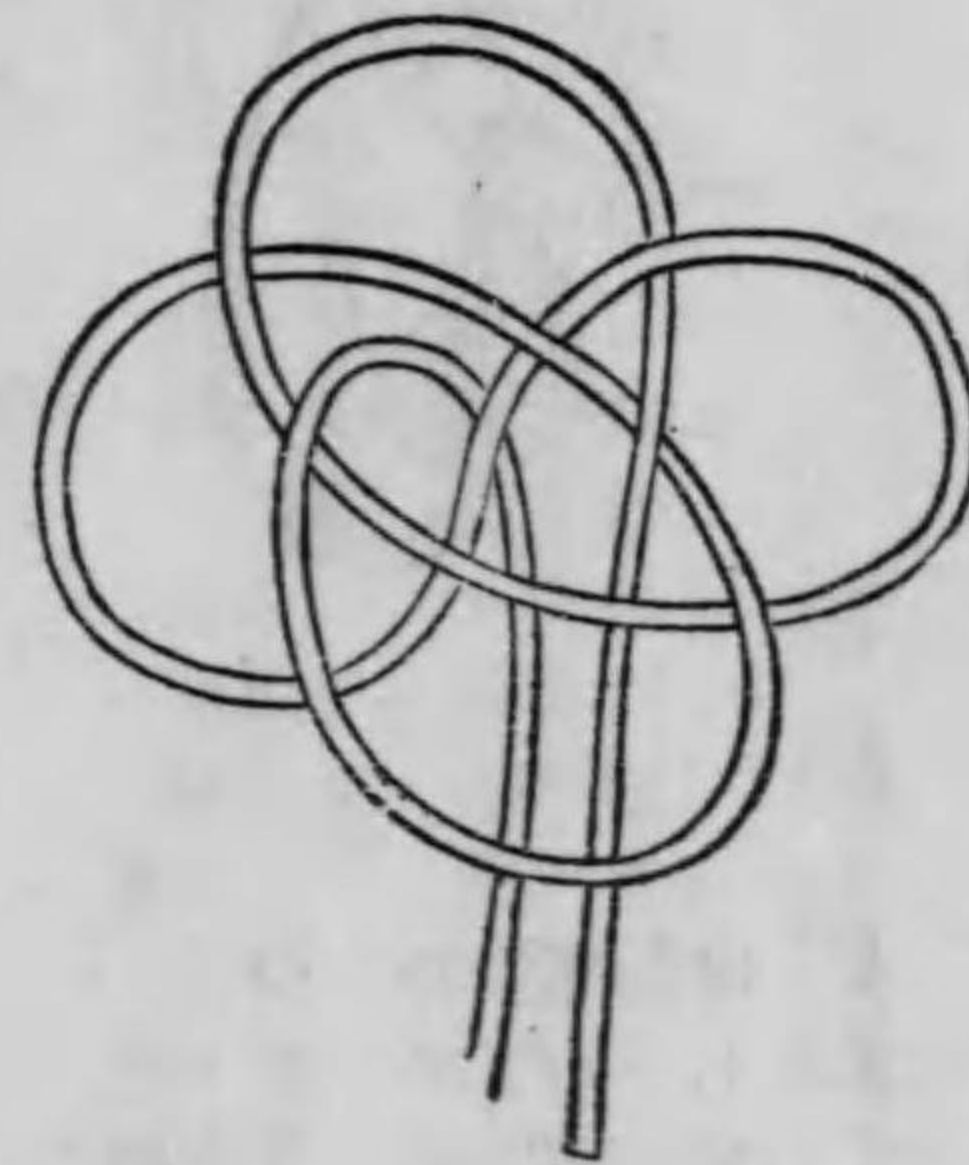
(圖るた見りよ表)



へ、五圖を表面返しすれば六圖の通りになります。

圖五第

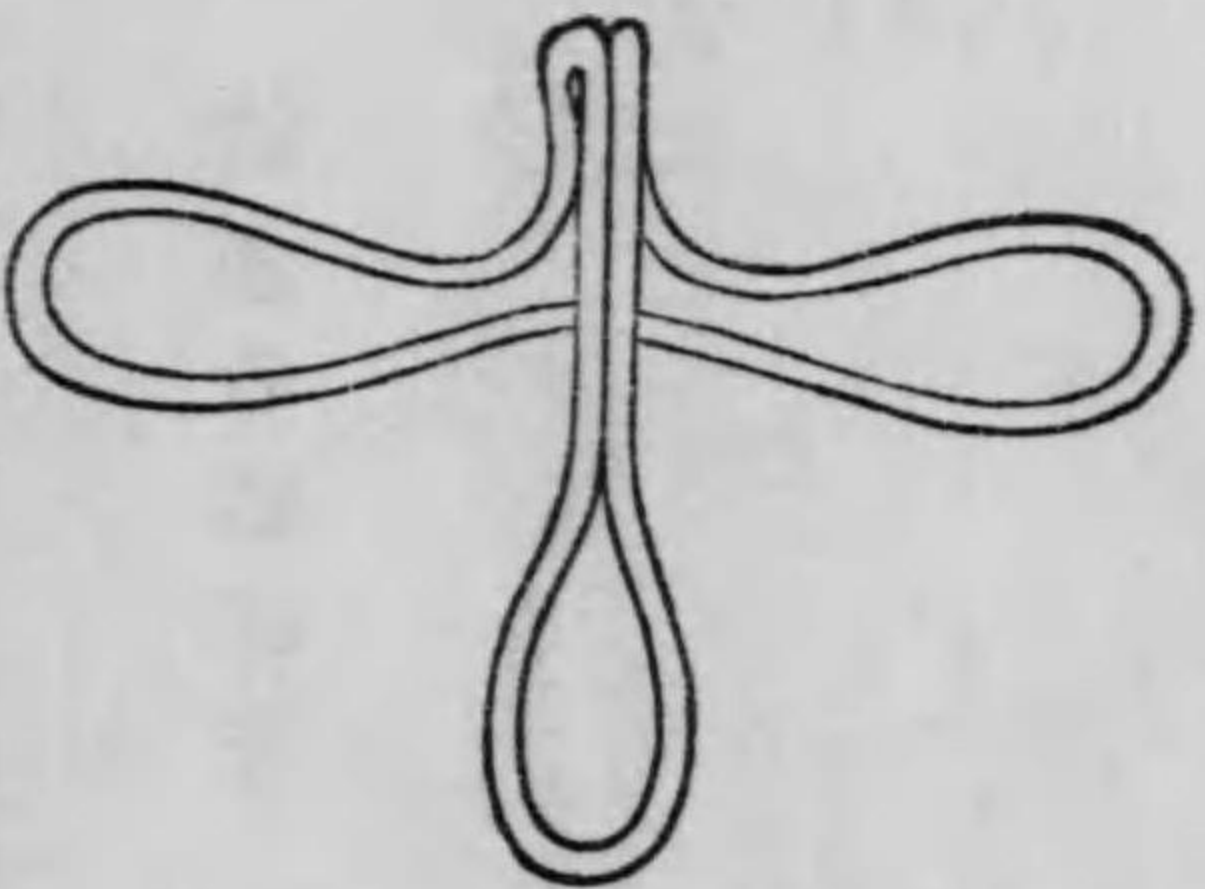
(圖るた見りよ裏)



ホ、四圖に於て出来上りましたものを位置をかへて兩端の紐を上部に向けますと圖の形になります。

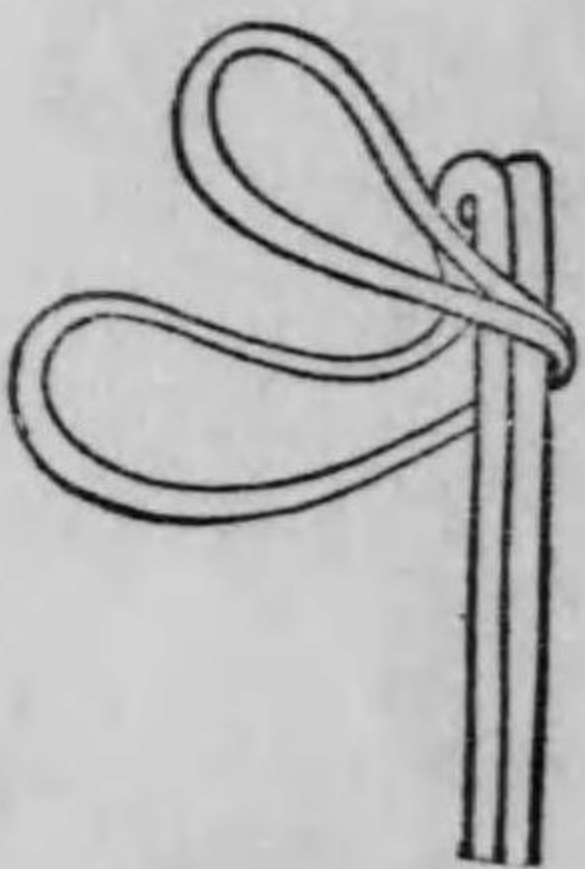
の上をまたいで左に出します。

圖二第



□、つき合せた打紐を二本揃へて圖の如く三つの輪にいたします。

圖三第



ハ、上の輪を二本揃へて五分の處から下に折ります。

ニ、左右の輪の中央をまたがつて下にたれて居る二本の紐の上から左の二本の紐の上へねぢれない様にしてもつて行きます。

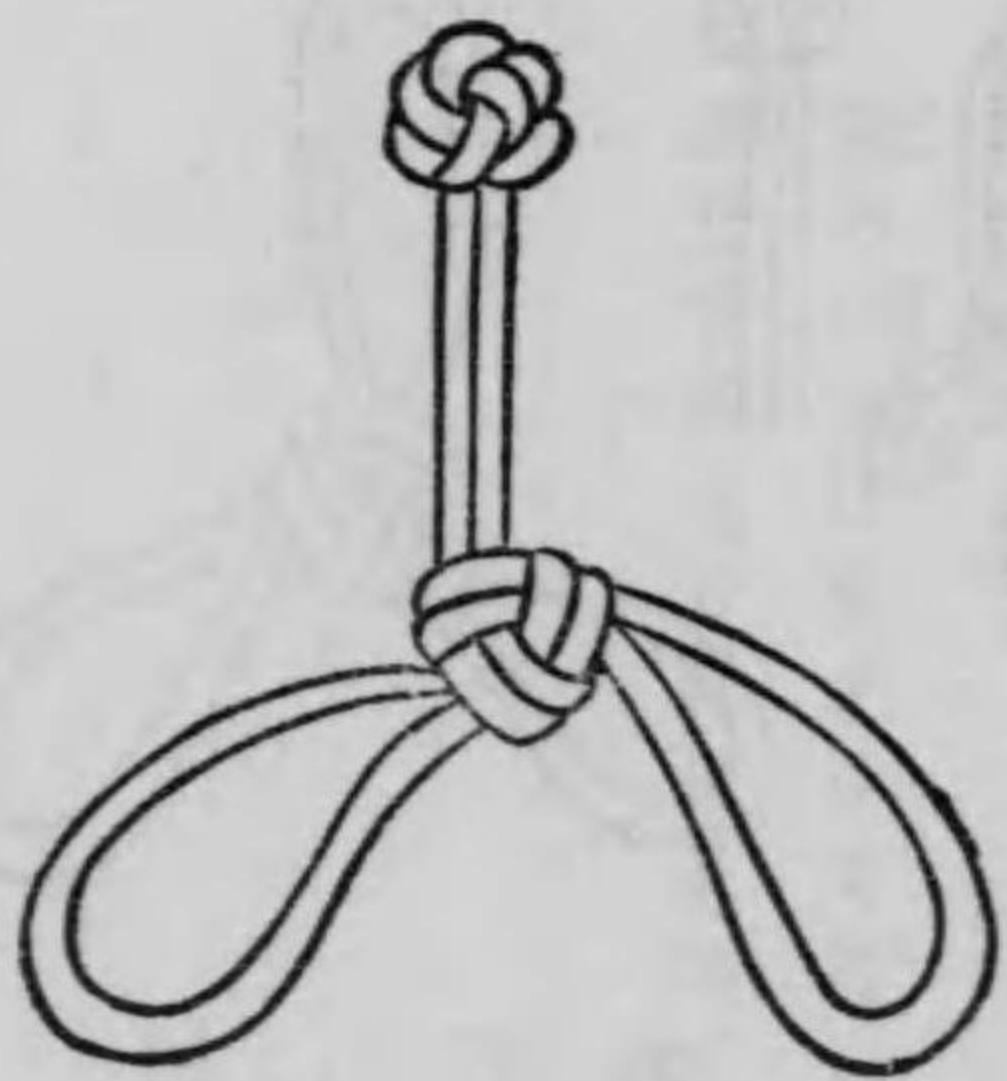
圖四第



ホ、第三圖で左の二本の紐は右の二本の紐の下になつて居ります。

ヘ、其儘左の二本の紐を右の紐の上をまたいで上から折れまがつて輪になつて居る間に輪になつて居ます二本の紐の端をねぢれない様に通しますと第四圖の様になります。

圖五第



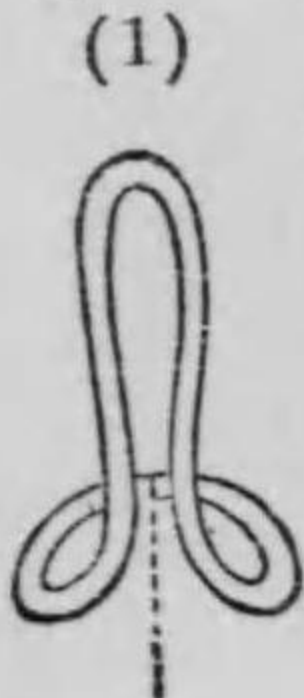
ト、以上の如くにして紐を引締めれば第五圖の型のもので出来きます。

第六圖



釋迦附の方が出来上りましたら輪加附の方も同じ様に輪迦だけ第六圖の様に結びまして三つづゝ出来るわけで、残りの打紐一本が釋迦一本にホック一つをこしらへるのであります。

第七圖



第七圖



第七圖



第七圖の如く釋迦を一つ拵へて五分の處で切ります。残りの打紐は3圖の如く間で接いでホックをこしらへます。

附言

釋迦結びをこしらへる時、一方五分だけ残して、長い方の紐の方へ締めてまわります。そして釋迦結びは、なるたけ堅い方がよう御座いますから、堅くも締めるには、錐を以て致します。釋迦結びの玉を拵へる時には、猪口になり中の紐が引込みたがりますから、なる丈具中の紐を上に出す様に心掛けて紐を締めて行くのがよろしいのです。紐の寸法は定まつて居る様なものゝ紐の太さによつて幾らか違つて来ますから、それによつて嗜好を取らねばなりません。

梅結び

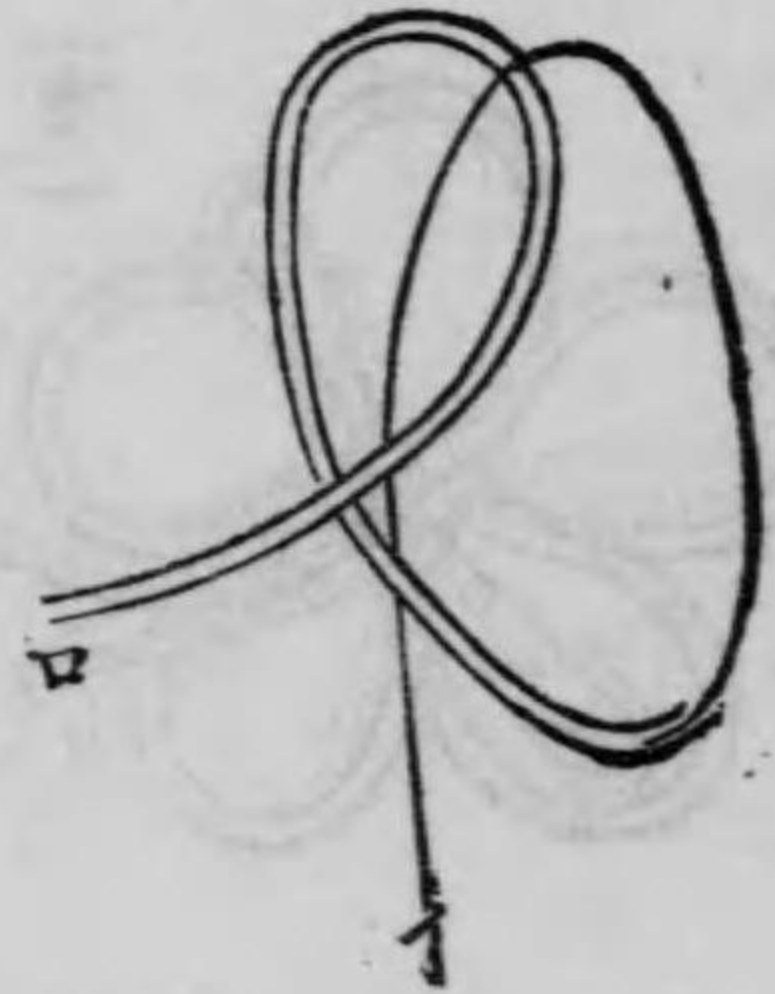
輪加付結びの種類は三號に於て述べました通り、三結び、蝶結び、新橋結び等の外に、尙梅結びと申すものがござります。梅結びは新橋結びと同様に、被布コート等に用ひられて居りますが、然し大人のものには用ひません、小さい子供の袖無しや、被布の飾から、十四五歳位迄の學校行き合羽か、被布に限つて用ひます。

1 材料 打紐を用ひます。

2 太さ 一分五厘。
長さ

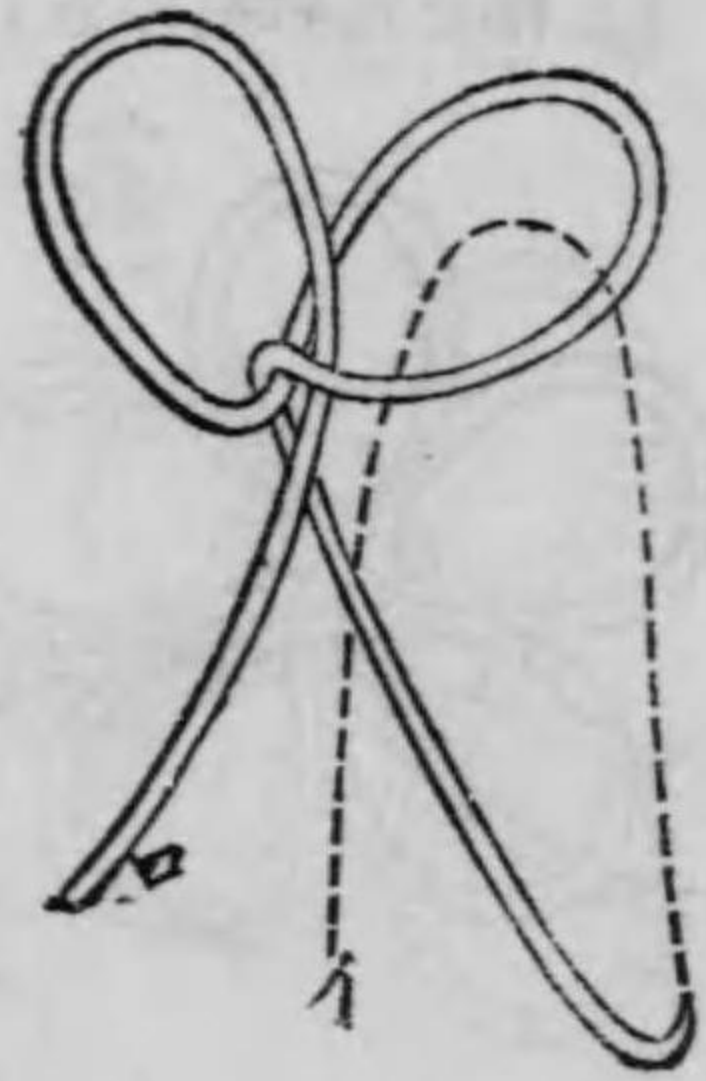
4 梅結びの結び方

圖一第



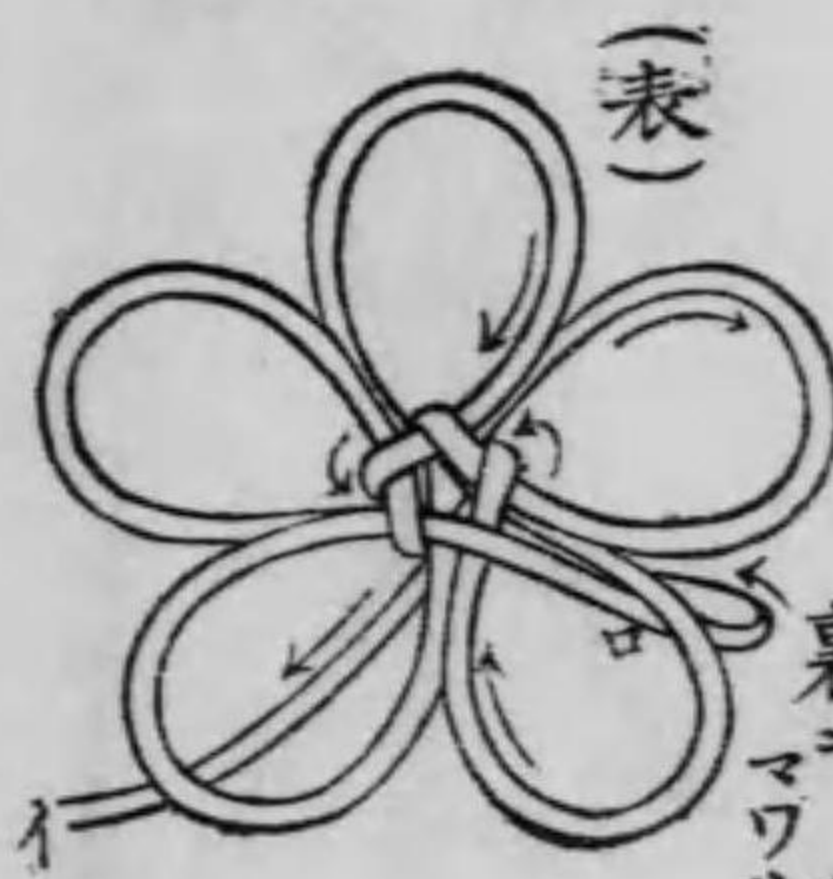
1 打紐の兩端を左右に打ちまして、真中に輪を拵へ、ロの方の紐をイの上に乗せします。

圖二第



□ イの紐の端をロの紐をまたげて、輪中に通しまして、一圖の輪と同じ輪を拵へまして、其輪の手前の方へ一ねぢねぢますと、第二圖のやうになります。

圖三第
(る作をんべ花の五)



梅結び

裏ニマワル
ハ

ニ

圖四第
(る作をんべ花の五)



又、其の紐の端を、二番目の輪の中に入れて三番目の同じ輪を拵へて、手前にねぢて左の親指を押へ、この通りをくりかへして同様の輪を五つ拵へれば、三圖の様になります。

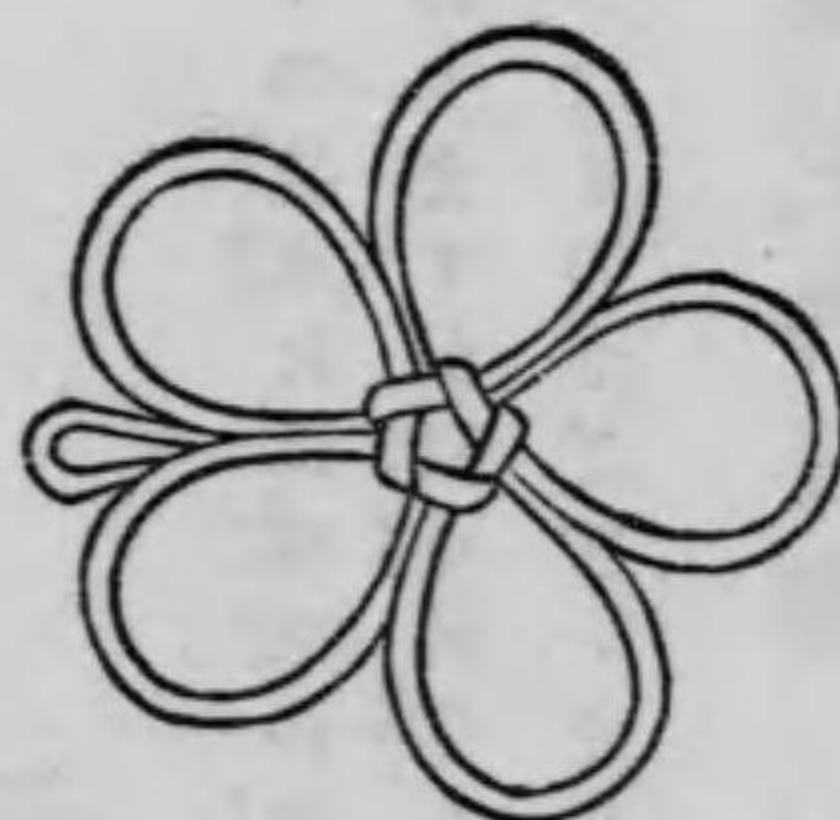
一六

五個の輪が出来ましたら、口の紐の端を、最後の輪の中に通します。そして其全體を裏にかへして左の手に持ち直します、そして五番目の輪を通して来た口の紐を二つに折りまして、イの紐の上をまたいで、二つに折つたイの紐の正面にある、五つ組み合つたる紐の一つの間をぐららせて、輪加と輪加との間に出します。

圖五第
(裏)上結

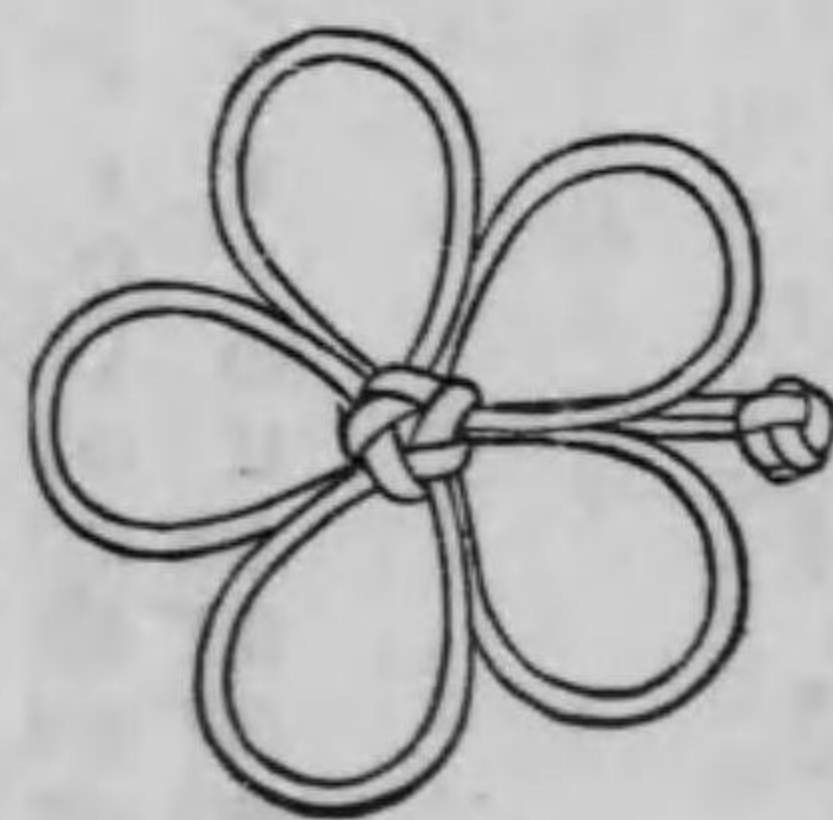


圖六第
(表)上結



梅結び

圖七第
付迦釋結



即ち第四圖に矢の行き方を示してある通りに結ぶのです。そして結び上りましたら、よく結び目を締めまして、イとロとの兩端を一分残して切り、そこを、しつかりと糸で縫ひつけます。

釋迦付きは、新橋結の時に話したのと同じでございます。

一七

新案コートの装飾

コートの装束には在來の共布で結びますものゝ中に、新橋結び、わらび結び、等色々ありますが、只今お話しやうと思ひますものは、本講義録で赤松氏の新案になつたものでございます。

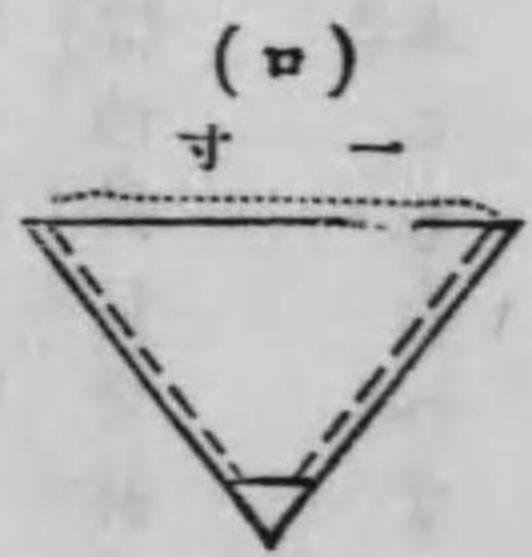
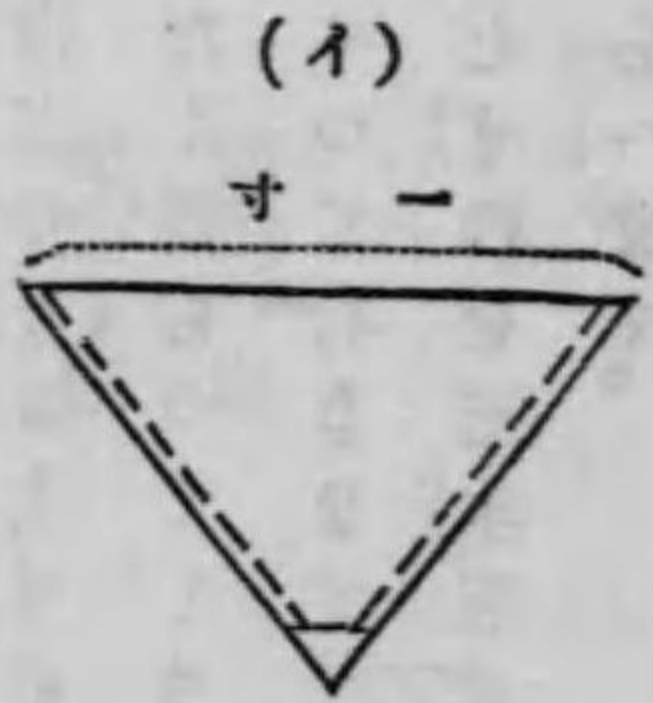
一、蝶形、共装飾

これは子供の袖無羽織及び、十四五才から十六七才の娘さんの半コートの飾に適當して居ります。

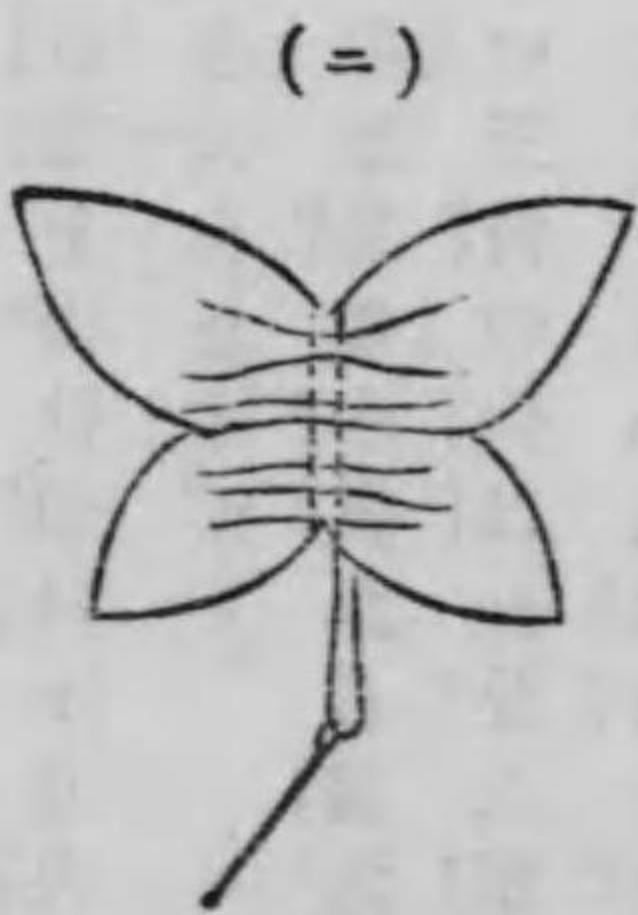
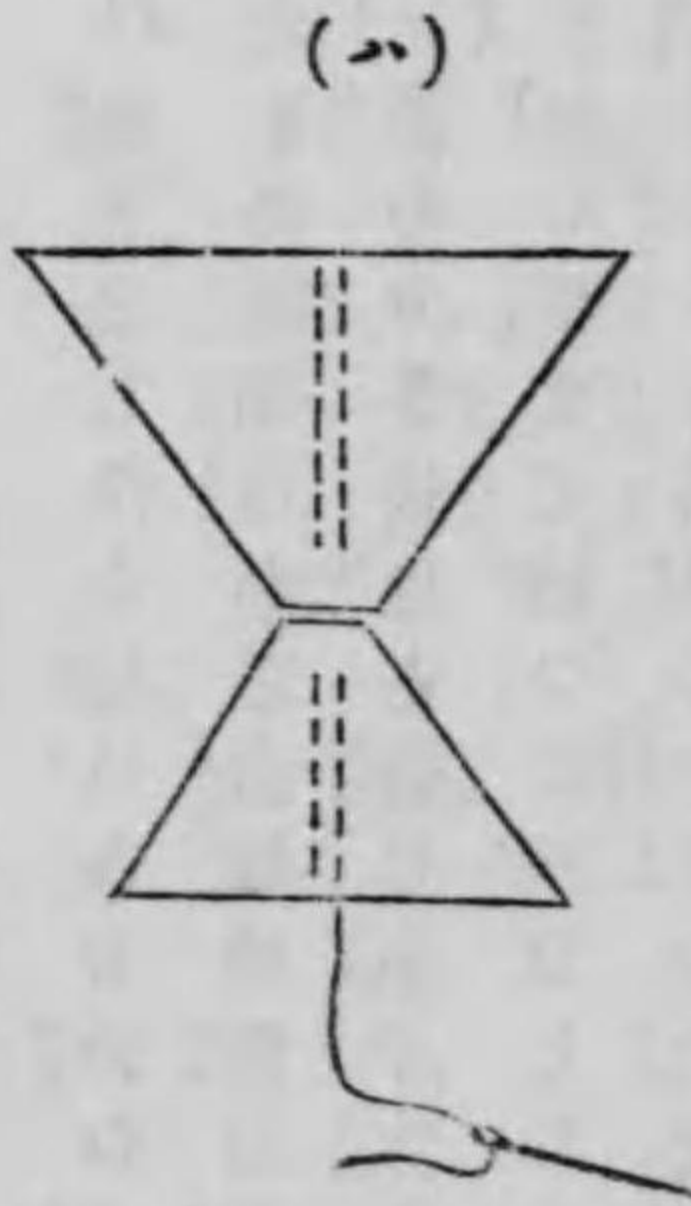
1、用布及び寸法

コートの前落しから取ります。一寸二分四方の布六枚、一寸四方の布六枚、三分巾七寸長さ、三本、三分巾五寸五分一本。

2、縫方



1、一寸二分の四角の布を(イ)圖のやうに三角に折り下を二分切り落します。同じく一寸角の三角も下を一分五厘切り込みます。二枚とも圖のやうに一分の縫代で兩端を縫ひます。そして六枚づゝ縫



ひ終りましたら縫込みを向ひ合せて折縫を掛け、切口から表へ返します。そして其切口から兩端の角の隅へ綿を入れます。

(ハ) 圖のやうに、地と同じ糸で大きい方の三角の中央から、切込み中央一分五厘の處まで縫つて來ましたら、小さい三角の切口一分五厘の處から、其針で小さい三角の中央を上まで縫ひます。それから又針を返し、今二枚の三角を縫つて來た縫目と平行して縫ひ戻つて來ます。この二筋の縫目をべめれば蝶の形となります。

ロ、紐のかがり方

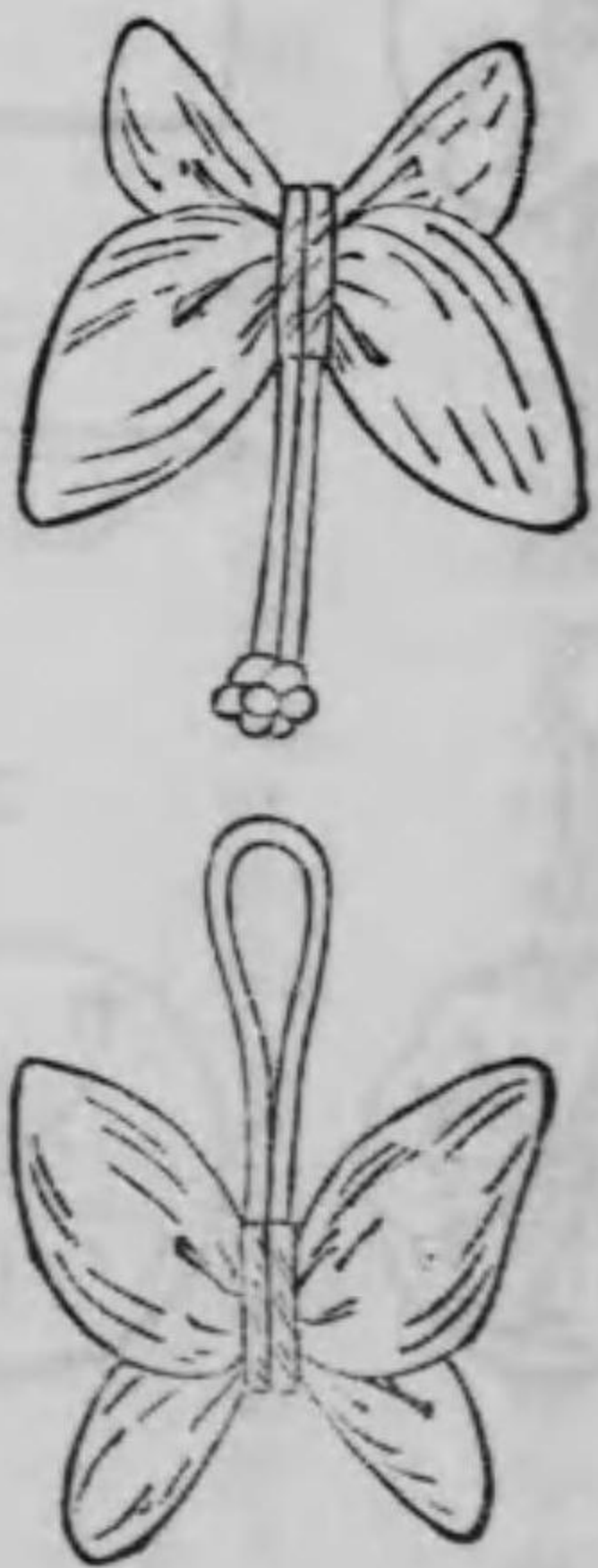
巾三分長さ七寸の布を取り、一分の折を折りまして、折をしない方から、かく振ぢつて、ままして、五厘足位の針目で極く浅く(地糸二本位にかけ)かゝつて行きます。

七寸のを三本五寸五分のを一本こしらへましたら、釋迦と輪迦とをこしらへます。

釋迦附輪迦附とも二本の紐を揃えて蝶の背中へ渡し、裏へかゝつて、

ます。輪迦の方だけ釋迦の出入るだけをあけてあと二本くつけて置きます。

蝶結び出
來上り圖



二、菊結び

菊結びは寶石入り装束で重に若い方に適します。

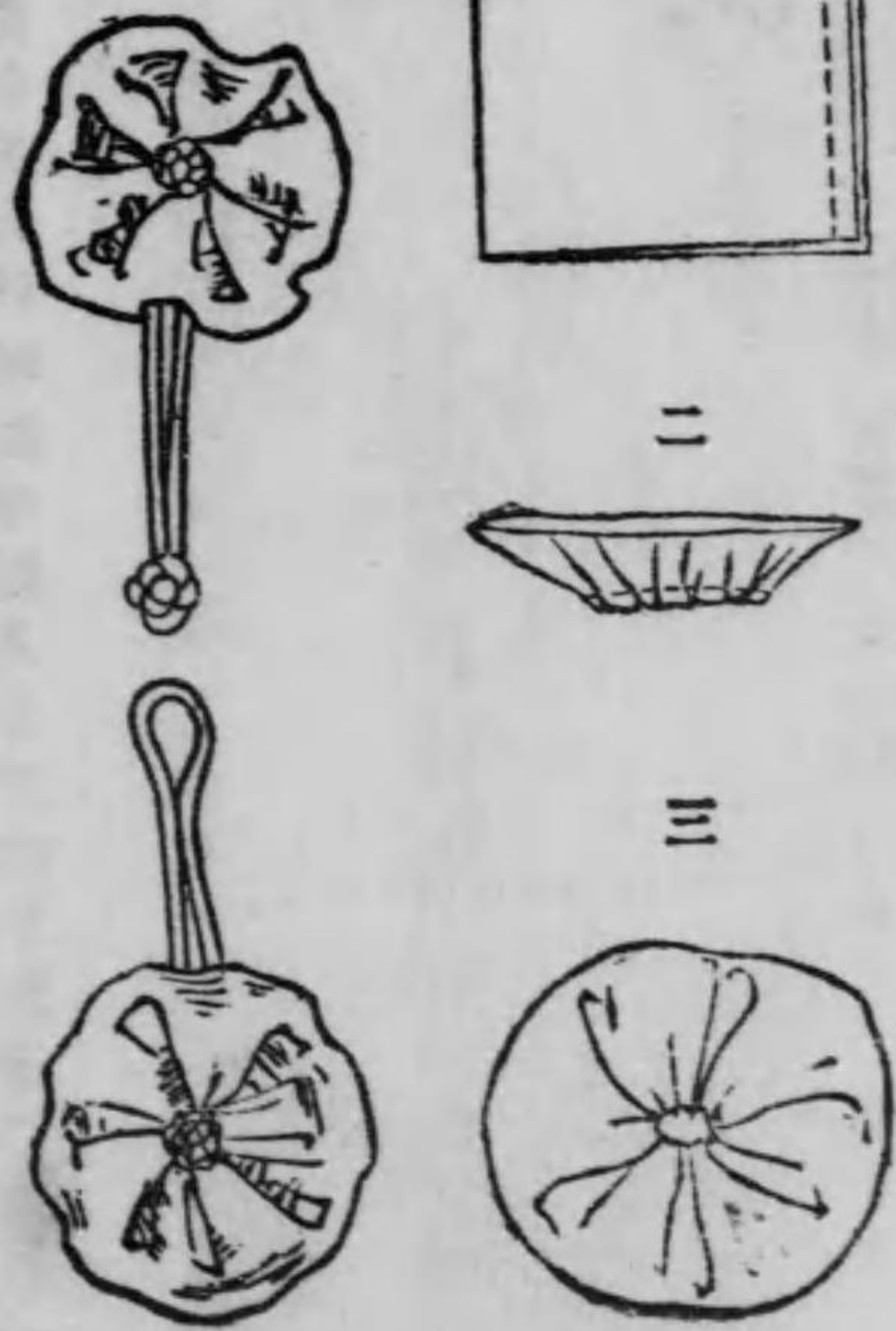
1、用布及び寸法

コートの前落しを使ひまして、巾一寸、長さ二寸七分のもの六枚と、三分巾六寸の長さ三本、三分巾五寸五分長さの一本、入用ます。

2、裁方

二寸七分の布を取り始め、両端を縫ひ合せて、縫目を二つに割つて置きます。そして、こんどは輪になつた布を中央から二つ折にしまして、一分の縫代で縫ひ合せて置きます。其時に糸は二本にしまして、地と共色にして置きます。そして、輪のなりに縫ひましたら、糸で縮めて、めますと菊の花が出来上ります。尙左圖を参照。

出来上り



出来上りましたら、蝶と同じく紐をかゝつて、釋迦と輪迦とをこしらへ、菊の處へつけます。石を入れますには、ばんじやく糊をつけて置けば落ちません。

三、三輪結び

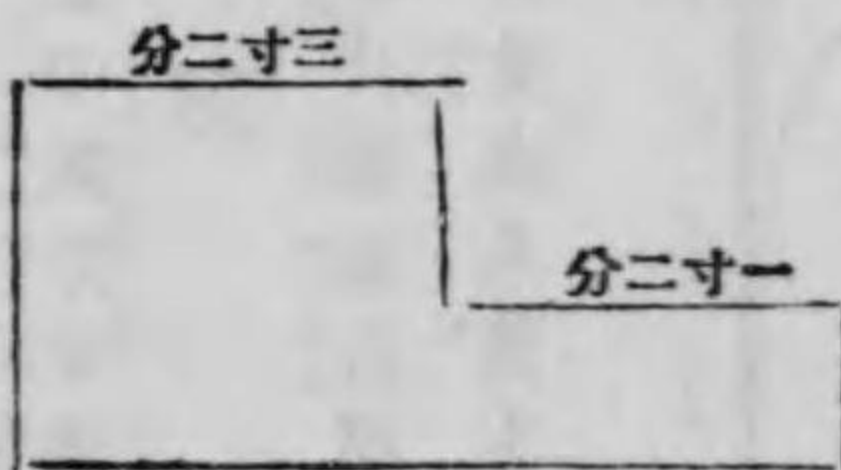
蝶結び、菊結びと同じく同じ年頃の人の裝飾でございます。

1 用布及び寸法

コートの前落から取ります。

2 裁方

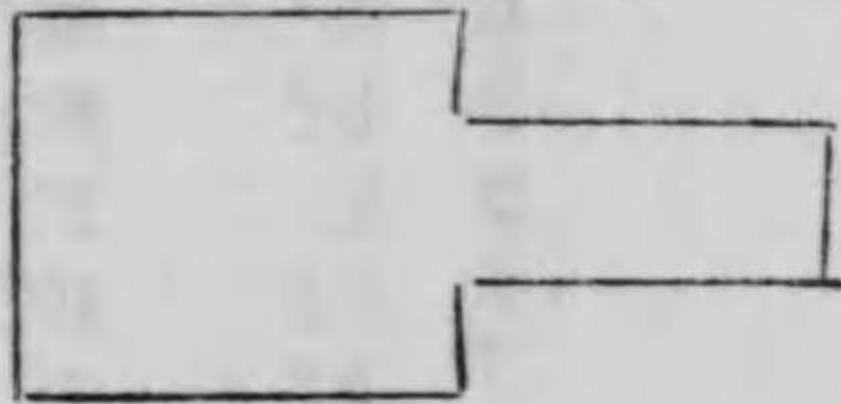
第一圖



輪迦附の裁方

第二圖

(第一圖を開いた圖)

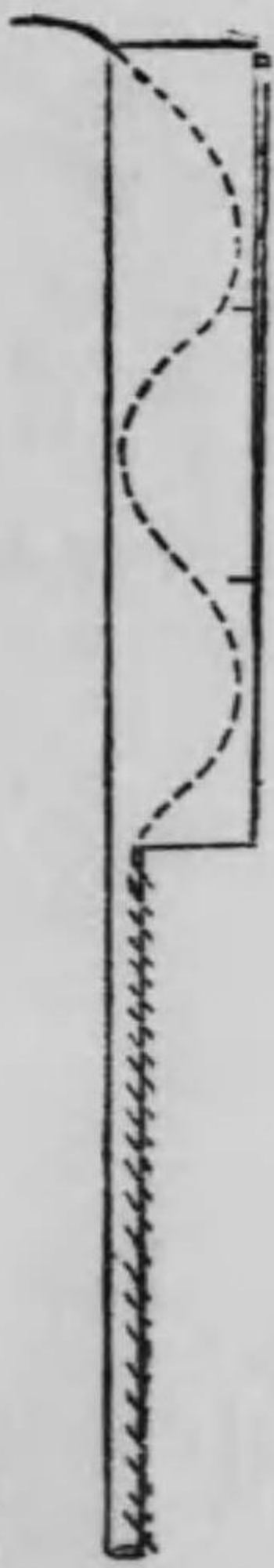


以上は輪迦附の裁方でございます。釋迦附は紐の處、四寸にいたしますだけで、外に變りはありません。

3 縫方

以上の裁方で輪廻は三枚釋迦附三枚を取ります。

最初に輪廻及び釋迦になる部分を片方だけ一分の折にし、他の一分の方から振ちて、かゝつて置きます。



の格好に縫ひちとめますと、自然に二分の縫代は紐の根元の處に折れ曲つてまゐります。五分五厘出した紐の折り返りの下に其縫込みを入

釋迦及び輪廻でない
広い方の布を一
分の折込みで、兩側
の中の方へ折りま
して最初に二分の
縫代を取り、あとを
一寸づゝ三分して
圖のやうに梅の花

れて、表に糸目の出ないやうにかいつて、其糸で輪廻の方に釋迦の這入るだけ穴をあけ、二本を裏からかゝつて置きます。釋迦附は最初かゝつて置きまして、釋迦を結んでから縫ひます。

三輪結のびの出
上のり圖



四、渦巻結び

これは少し年を召した方の装束に適して居ります。

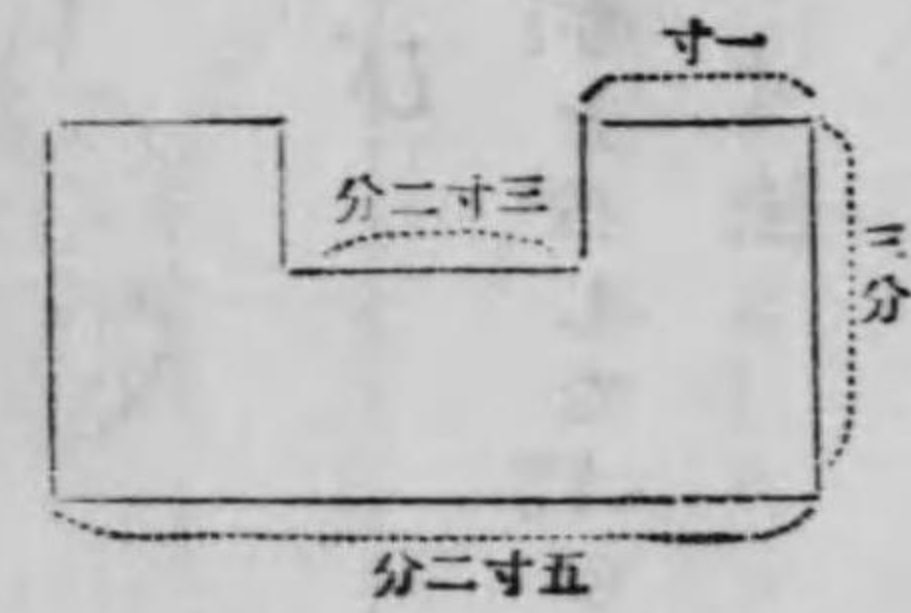
1、用布及び寸法

コートの前落から取ります。

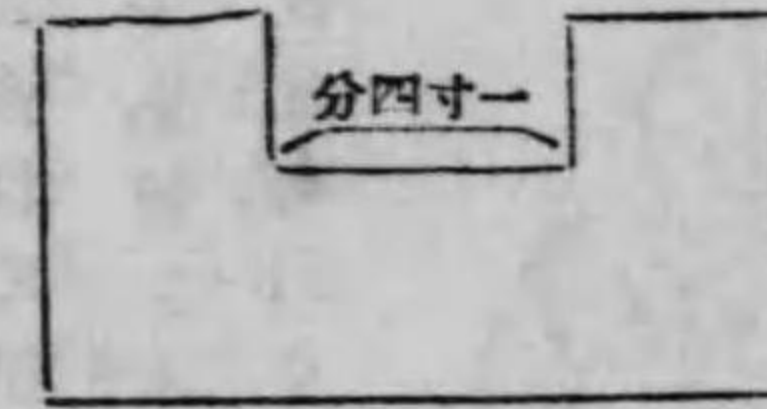
2、裁方

新案コート製法

第一圖 二折に折して裁るたち附釋

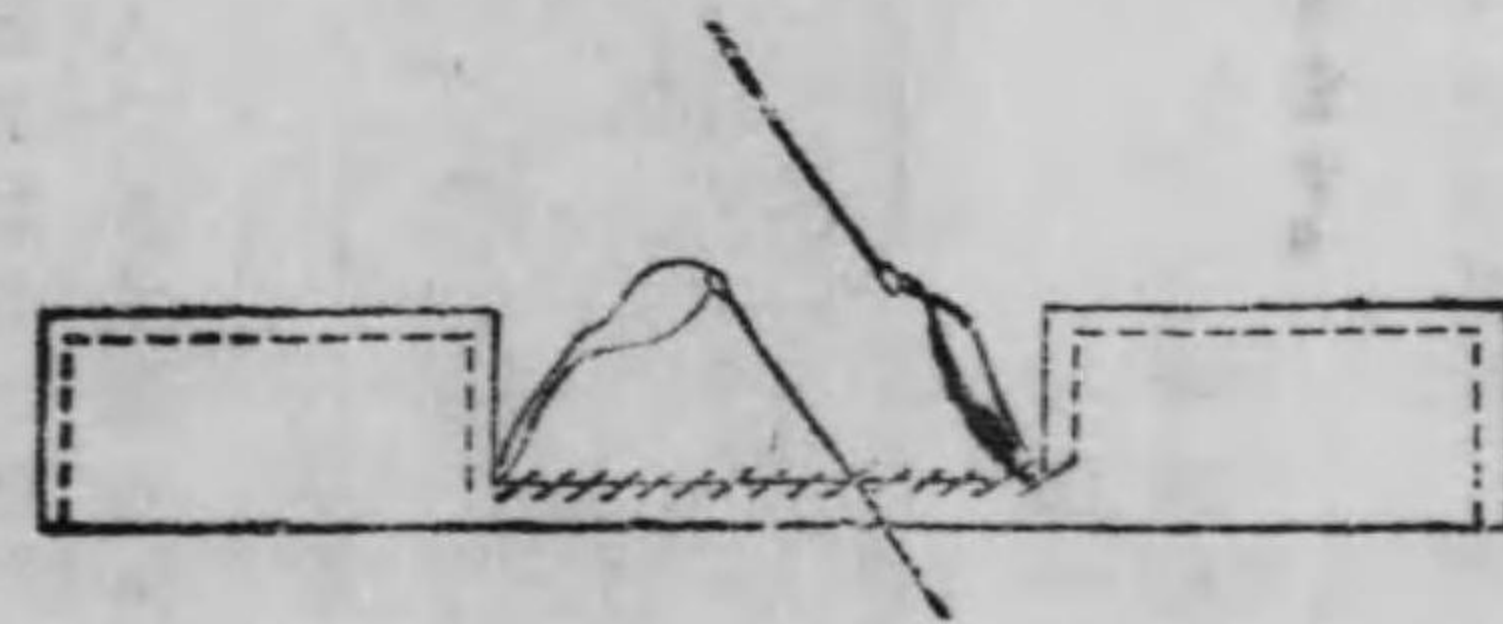


第二圖 輪附



釋附三枚
輪附三枚

(1) きまづら



(ロ) きまづら



釋迦又は輪迦になります中央の狭い處を一分折りまして折らない一方から固く振ぢつてかいたりしましたら前と同じく輪迦及び釋迦をこしらへます。

次に広い布の方の兩側を又一分づゝの折を中に折りまして二つに合せ釋迦輪迦をかゝつた糸を切らずにそれで五厘の深さに端から端まで縫つて行きます(即ちイ圖で示しますやうに)それを縮めてロ圖のやうに渦巻とします。兩端ともに出來上りましたら出來上り圖のやうに背中合せにします。

新案コート製法

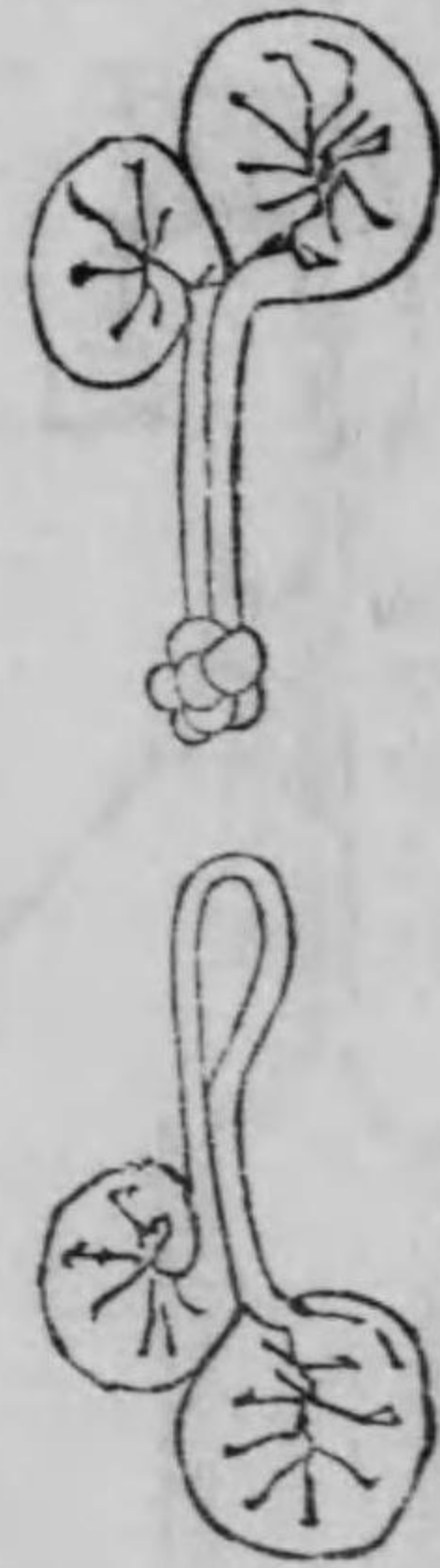
渦巻結出上り来り圖



五、わらび結び

すべて渦巻と同じ拵らへ方で御座いますが、たゞ兩端を背中合せに合せ
る時一方を上へ一方を下に拵しらへればわらびとなります。

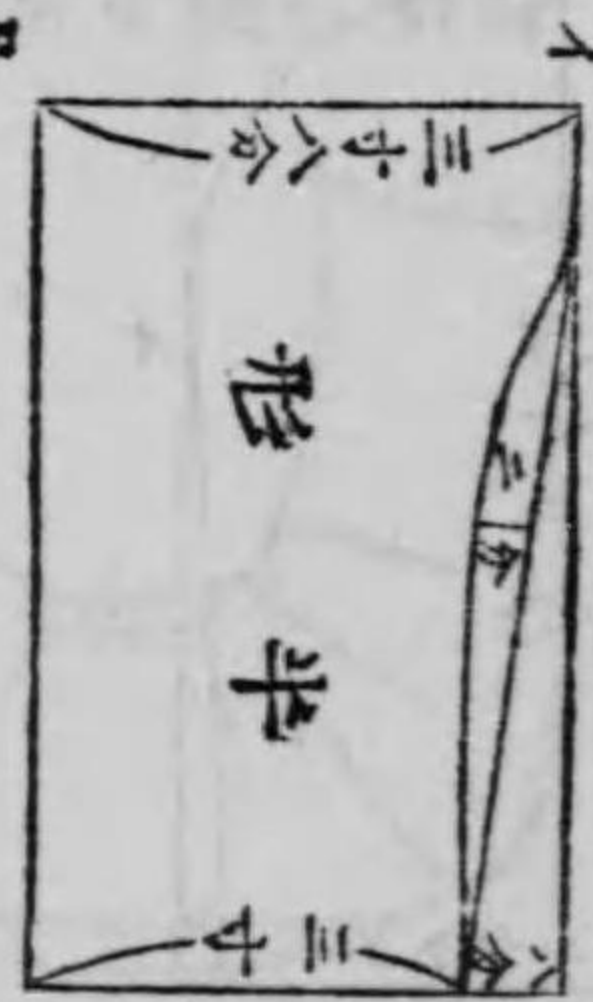
わらび結び出上り来り圖



雪帽子

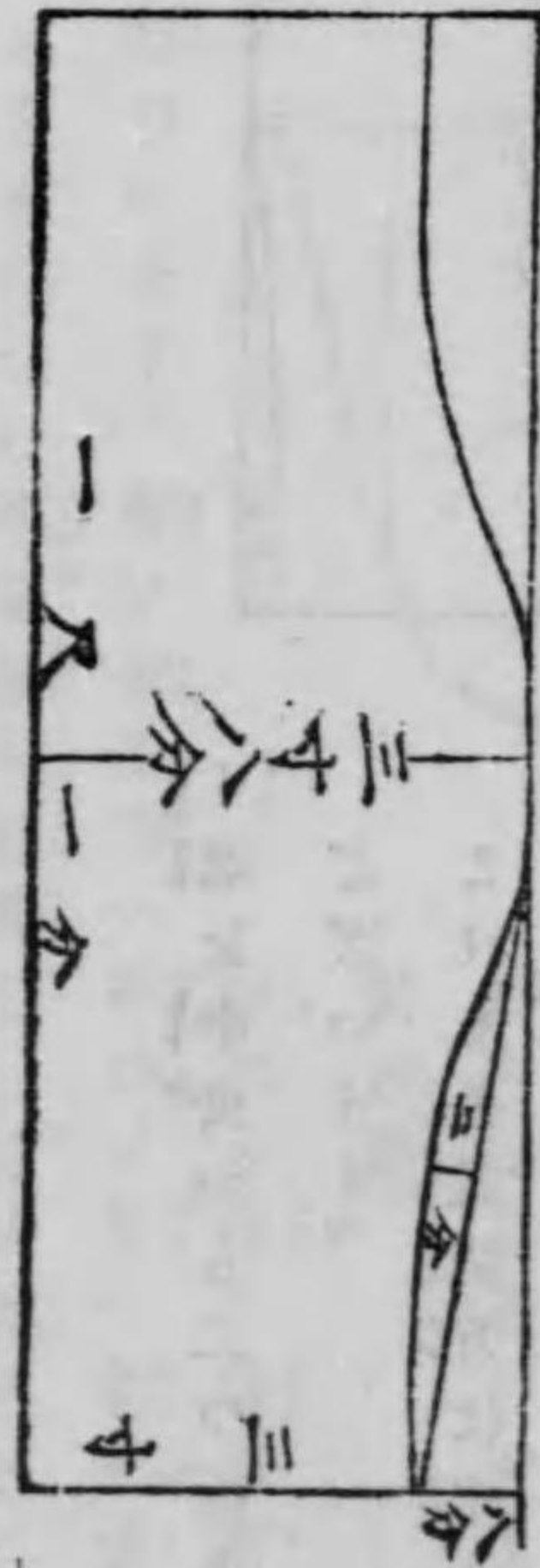
一、裁方

(ト) 裏布裁方



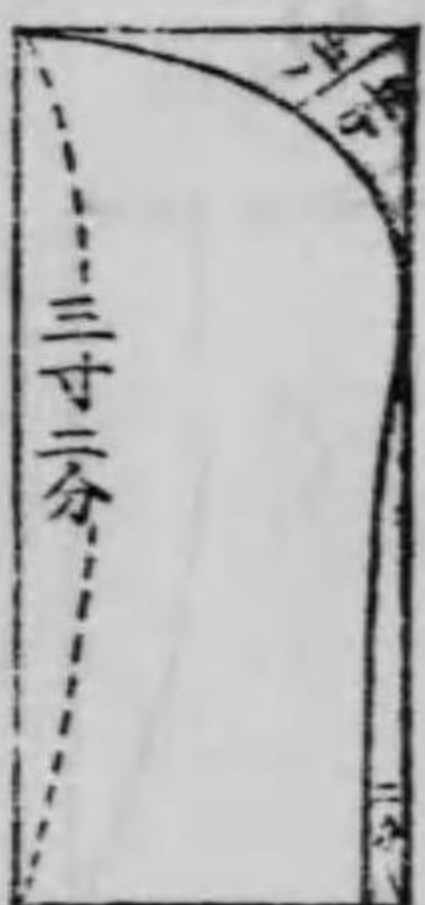
表身頭を二つ折りにして(イ)圖のやうに
裁ちます。裁方は裏表とも同じ、只イ、ロ
の峯が裏布の方は四寸五分五厘、ハ、ニ、の
方が裏布は三寸六分、ハ、ホが七分と寸法
が異なるだけです。

(ロ)



(イ)圖のたい開

(イ)



(イ) 襦を中央から二つ折りにして裁つた圖で
ございます。
これも裏表裁方に變りございません。只裏
襦の六分だけ丈が長うございます。

(ロ)



(ロ) 二つ折りにして裁ちました襦を
開いた形でございます。

用布

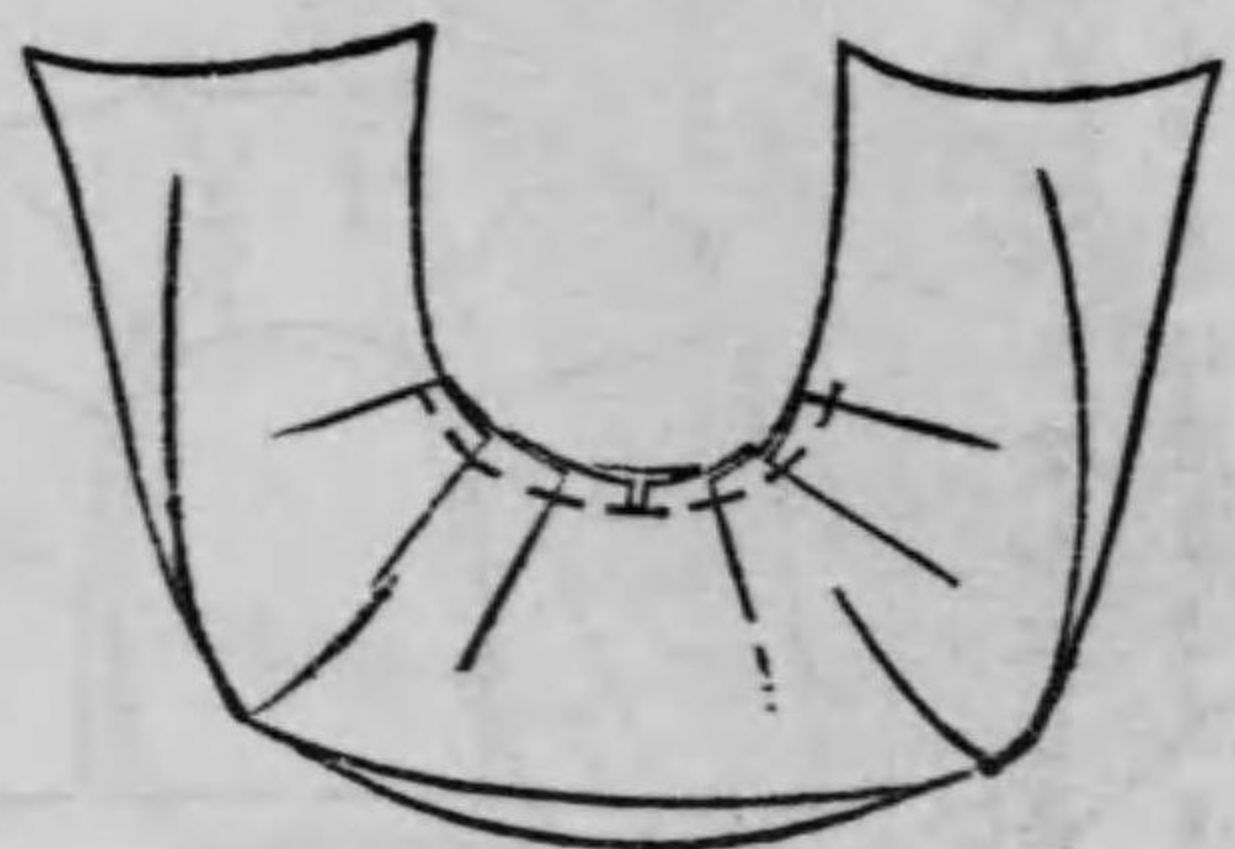
表 びろうど紋羽二重絹

裏 ネル、ギヤダ(羽二重絹)

二、縫方

表身の裁目曲線の方を襦の兩端と身頃の兩端とを合せて待針を打ます。

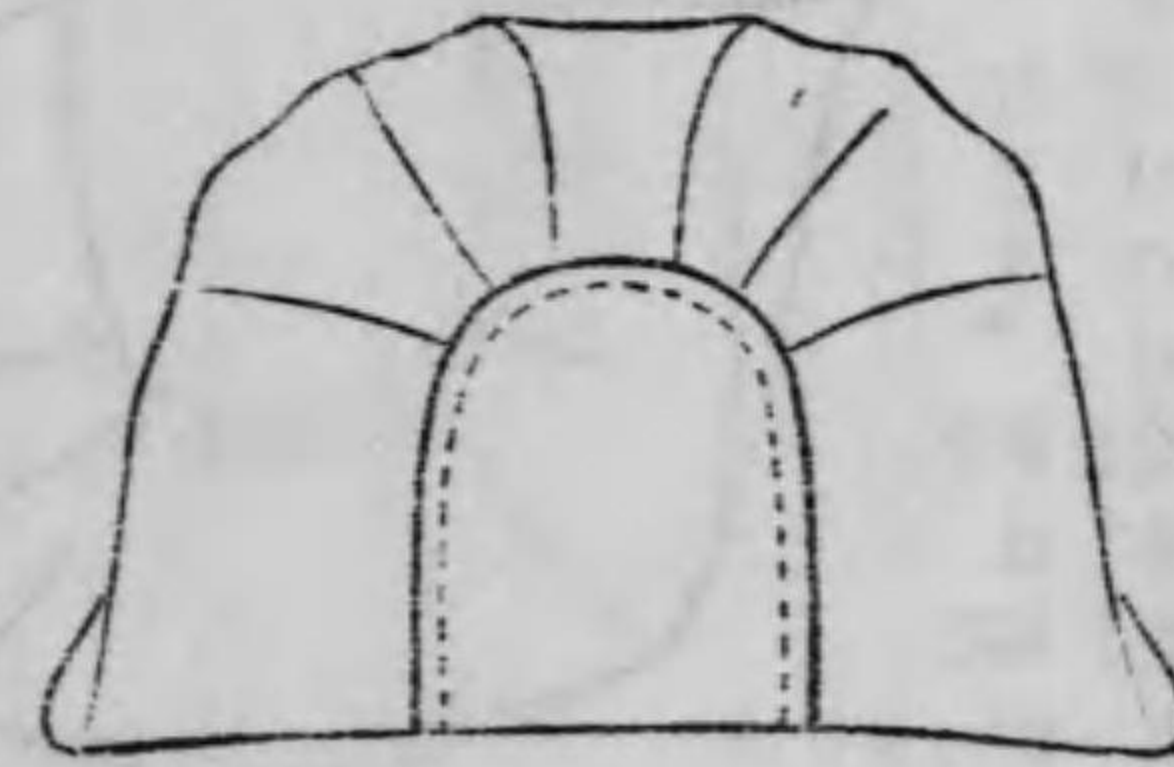
第一圖 身頃に裏を寄せる圖



次に身頃に裏が寄りましたら襦の周囲
に縫ひつけます。折は襦の方へ折つて表へ返します。そして表身頃と
表襦とを縫ひつけ裏身頃と裏襦とを縫ひ合せます。(第二圖参照)

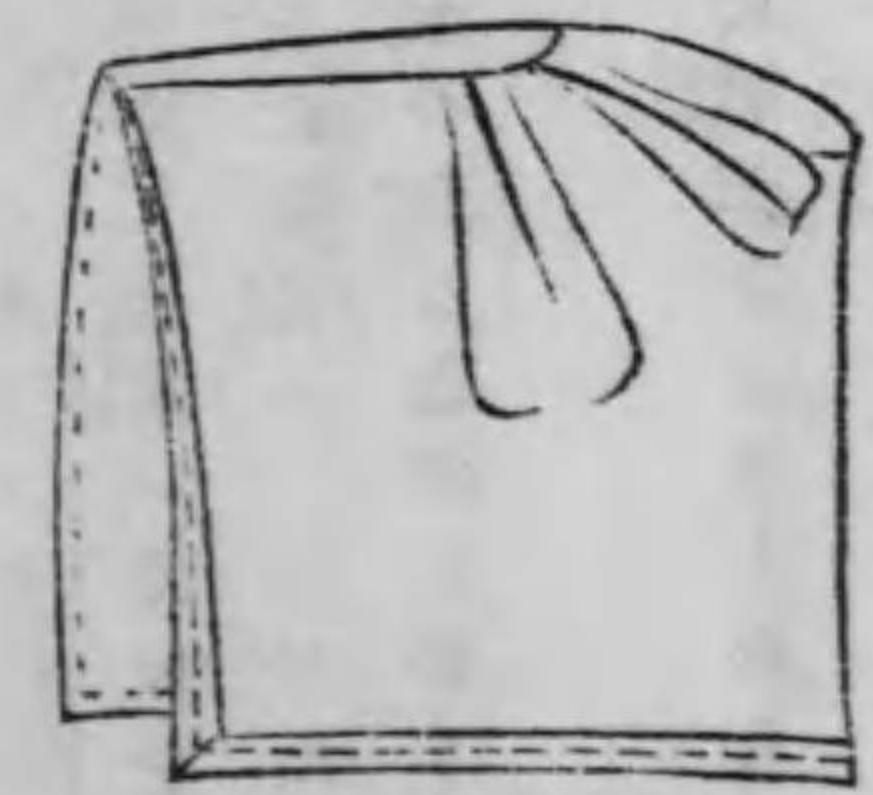
圖参照

圖二第
圖たつ入這の襦



雪帽子

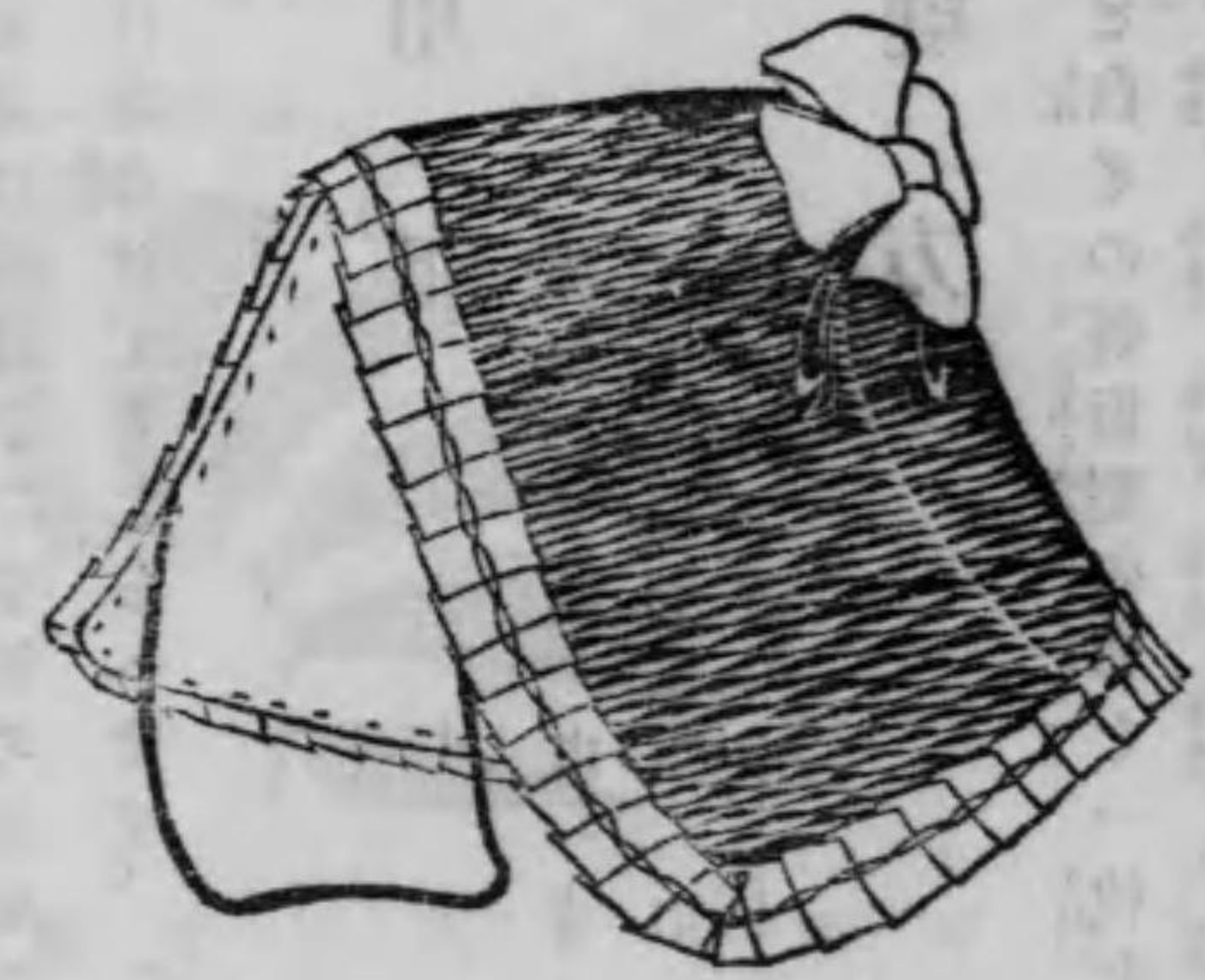
圖三第
圖たし返へ表を裏



三三

裏へ襦か這入りましたら裏の裏一面に綿を覆ひ其上に表の布をのせて重ねます。裏は表より丈も巾も長くなつて居りますから重なつた表の極く端を駁で押へて置きます。そして裏の布を表に折り返し、三つ折り拵けにいたします。角は單衣の裾を拵けた時と同じく額縁にいたして置きます。(第三圖参照)

圖四第
圖り上來出



雪帽子

ギヤダ
一寸五分巾の布を三つ折巾にし、まして、折り端の外に出ないやうに少し狭くして置きます。それを三分巾の片襷に寄せて中央を駁で押へて置きます。それを一分裏へはみ出させて帽子のふちの廻り、三折拵けの上のせ中央を手みしんで押へます。
出來上りましたら縁ちのギヤダと同じ色の羽二重でリボン結をこしらへ出來上り圖のやうに裾頭へつけます。前には紐六寸兩端へ渡して下から二寸位の高さにつけて置きます。

三三

澁掛

この澁掛は縮緬羽二重等の無地の短冊型の布を黒と赤と白と青とか云ふ風にはぎ合せてこしらへます。これは縫方は簡單で見た目は奇麗で御座います。

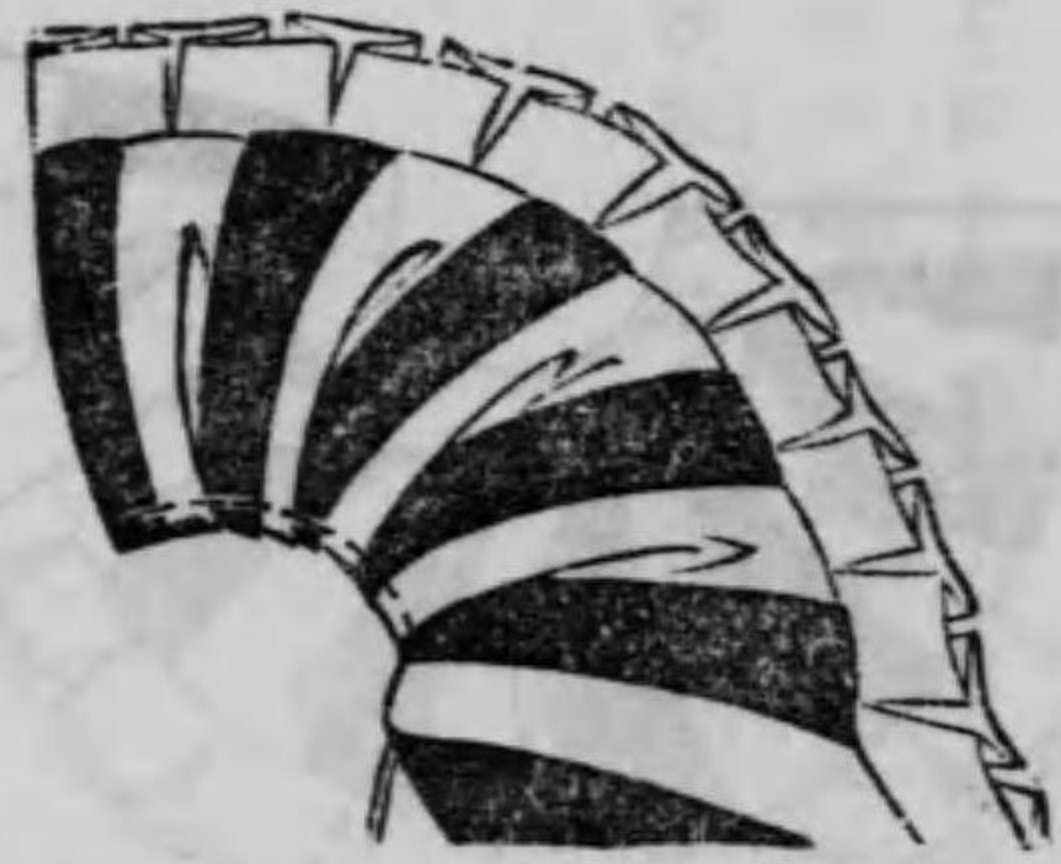
一、用布

赤白の縮緬 巾一寸一分、丈三寸五分十五本（赤八本、白七本）
 ギヤダ白羽二重 巾一寸五分、丈二尺七八寸
 紐白羽二重 巾一寸四分、丈一尺四寸

二、縫方

赤と白との短冊型の布を一枚をきに赤と白とを十五枚ともはぎ合せます。折は皆一方の方へ揃へて折ります。次に十五枚のはぎ合せた布と巾及び長さの同じ布（白絹でもよし）を裁ち

第一圖
胸明襷寄せの圖



澁掛

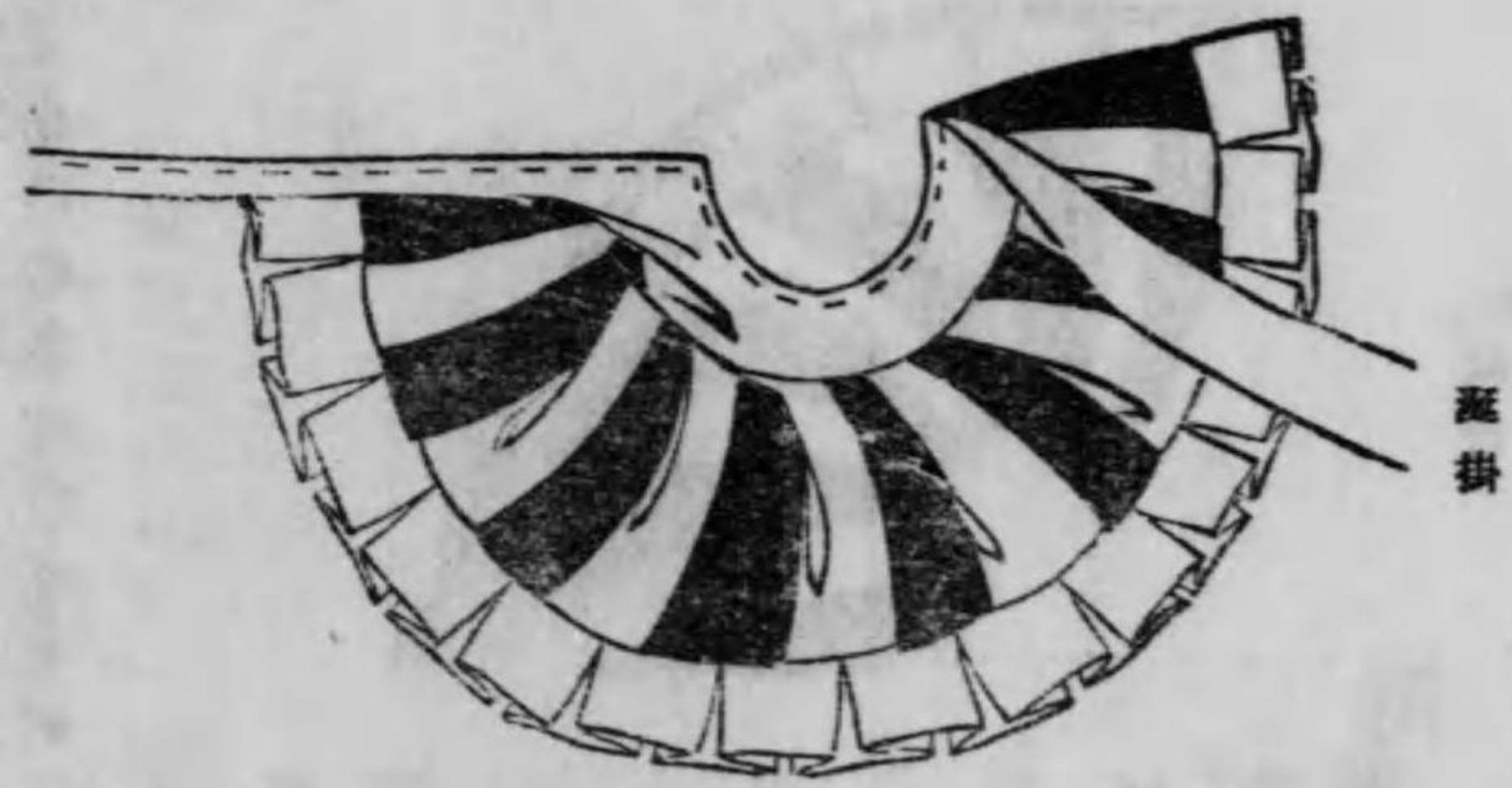
二枚合せて兩端を縫つて折は裏へ返します。次にギヤダを取り、中央から二つに折つて縫代一ばいに假襷を掛けて置き、一寸巾の兩寄せのギヤダを取ります。

はぎ合せの表布と裏布との間へ出来上つたギヤダを挟んで、表布裏布ギヤダの三枚を一所に端から端へ縫ひつけましたら、表へ折をつけて、一方の開いた口から表へ返します。そして開いた口は裏でとちて置きます。次に表赤の布を一枚づゝ裏も共に二つ折りにしまして、片返しに襷を取り、五寸五分に寄せ縮めます。（第一圖参照）

紐附

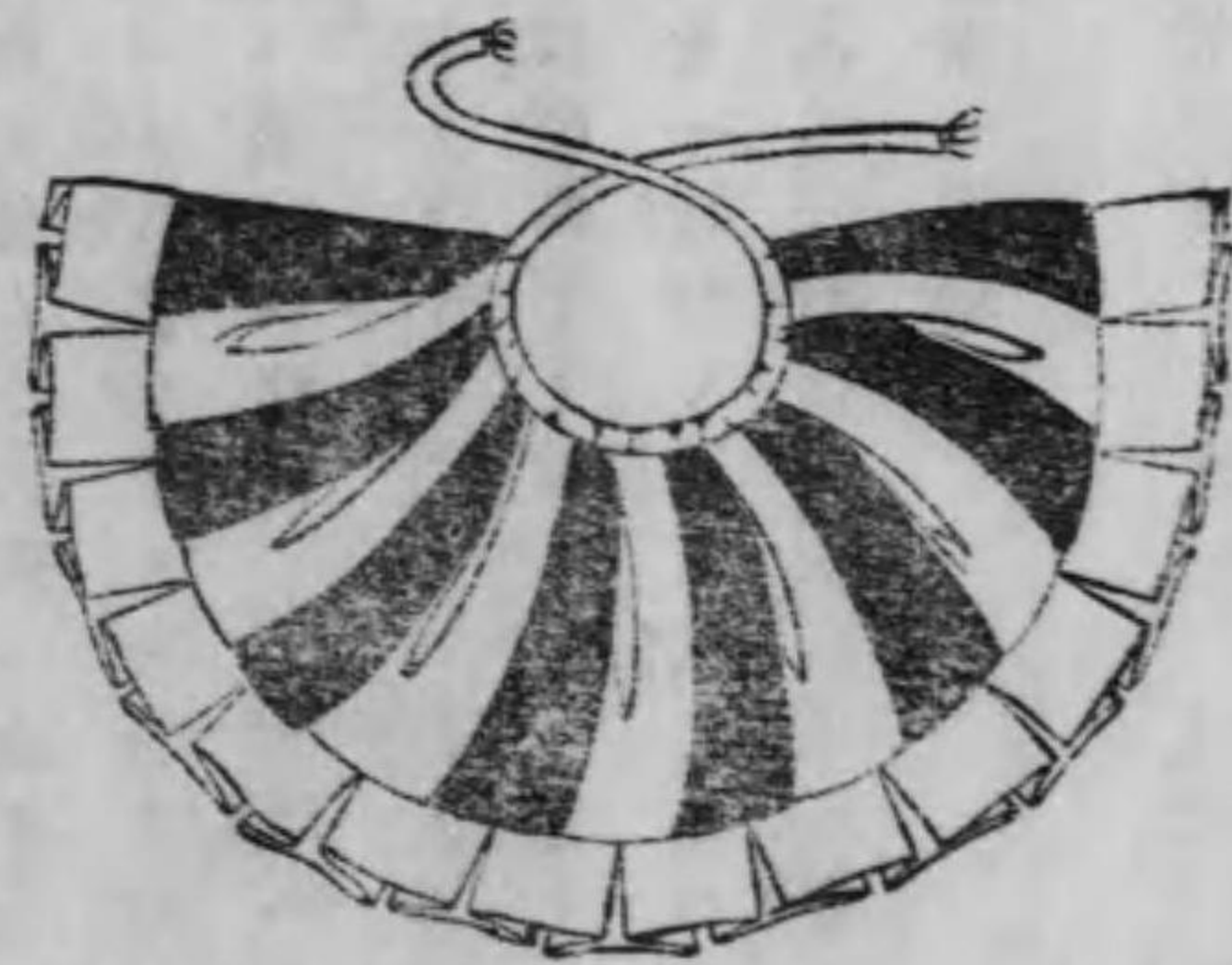
紐布と身頃胸明中央とを合せて待針を打ち、胸明の端から端へ縫代一ばいに縫ひつけま

第 二 圖
紐 附 け の 圖



したら、端をかたく止め其糸を切らずに第二圖のやうに紐を結びます。
 兩方の紐を結びましたら紐の端の開いてる處を中央で一針ぬひまして

第 三 圖
出 來 上 り の 圖



其穴へ中から針を通して胸明きの處へ出しますと糸につながつて
 紐先の胸明の處へ出て自然表へ返ります。兩方をこの通りにして表へ
 返します。

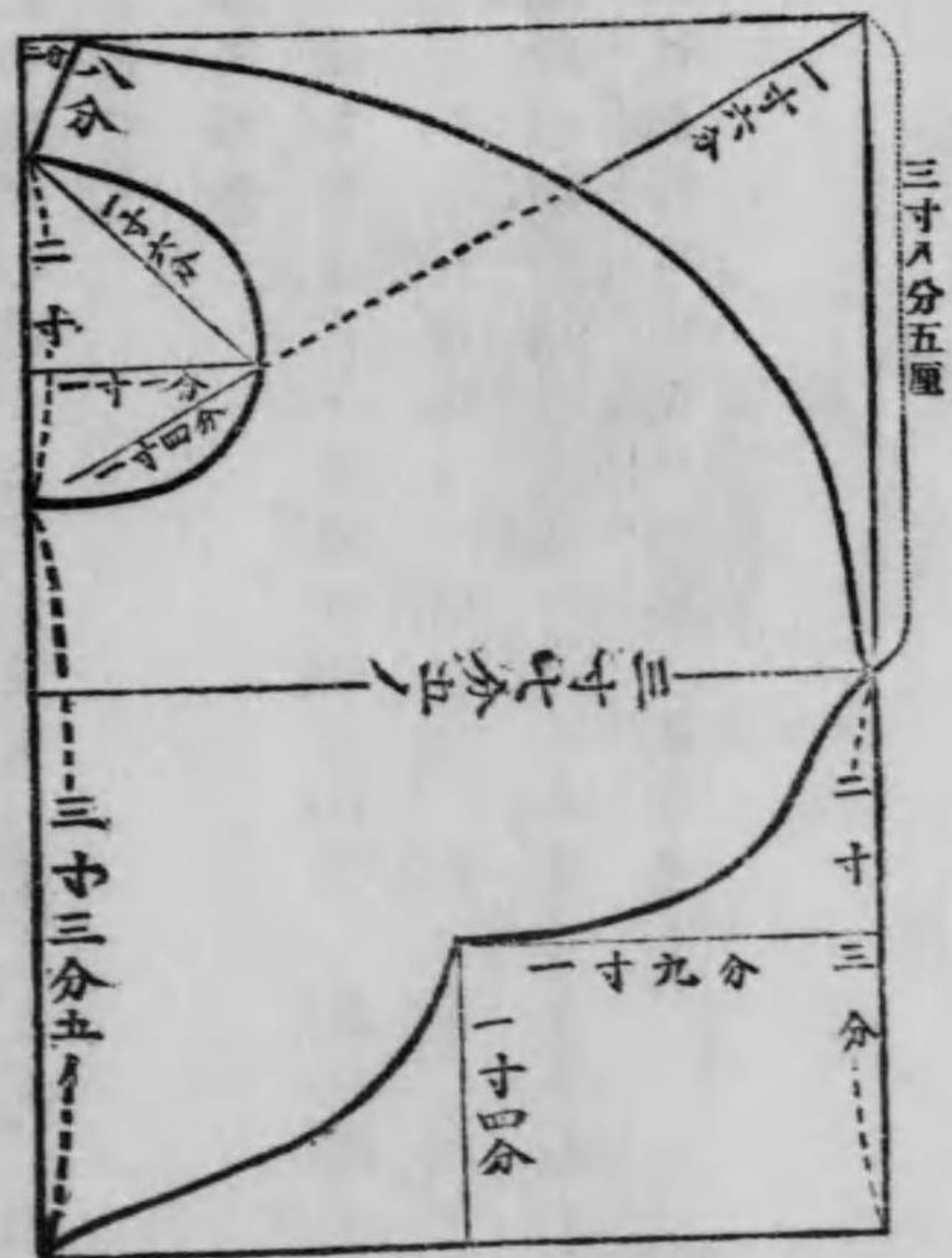
綿の入れ方

これは、ちやんくの紐の時と同じく紐の長さに綿をこしらへて置きま
 して、それを真綿でくるみます。針に糸を通し其糸の先に真綿を引つか
 け、紐の一端から胸明きへ通し胸明から紐先へ通しますそして胸明の處
 を折れ、紐先は桔梗に止めて置きます。

桔梗型及び梅型涎掛

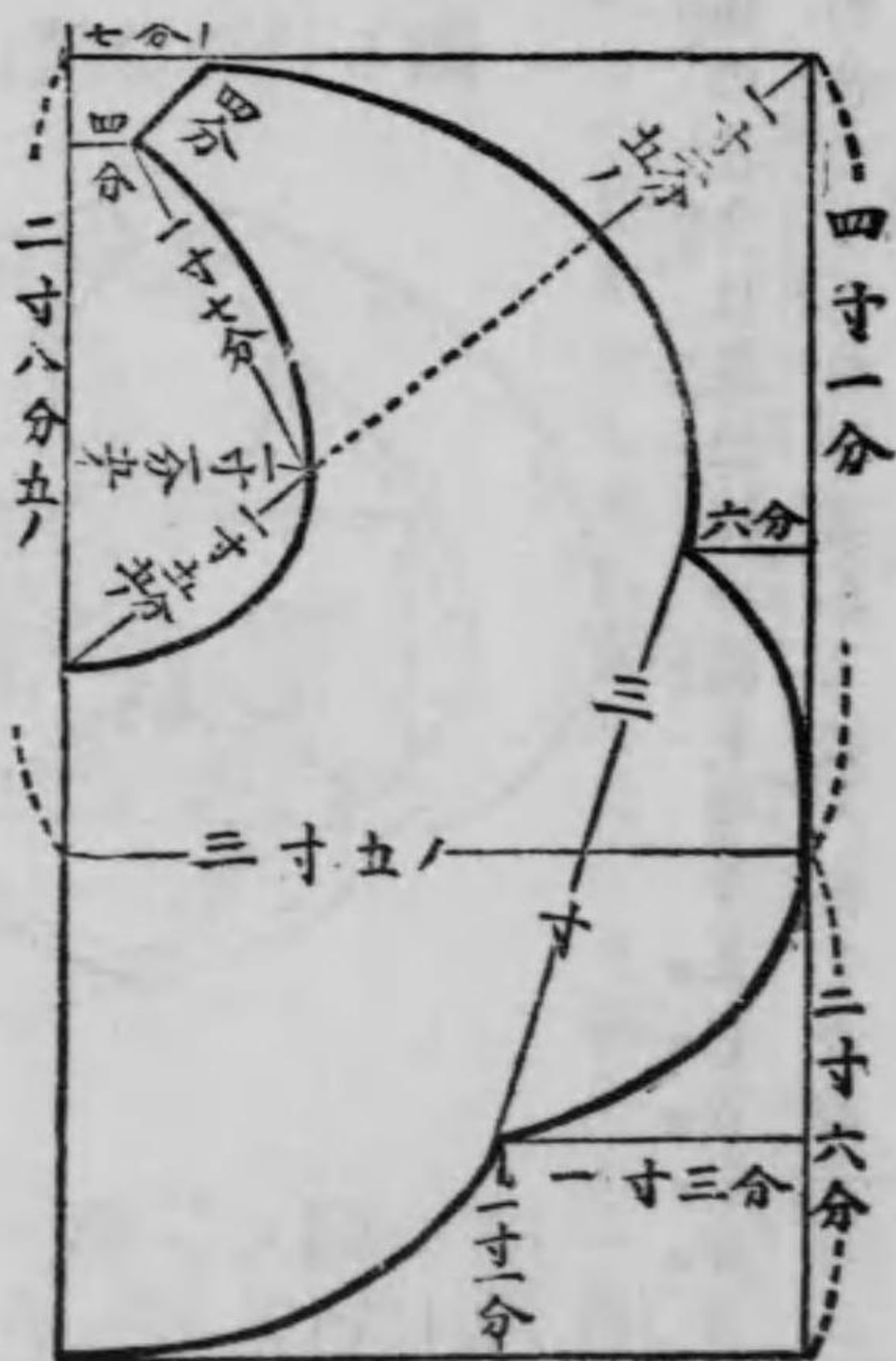
一、裁方

第一圖 桔梗型



用布
表、めりんす
裏、ネル裏打さらし
一圖のやうにして型紙
を裁ちましたら裏も表
も裏打布も型紙に合せ
て裁ちます。

第二圖 梅型に紙型の方裁



梅型
梅型は桔梗型と形が違
ふばかりで縫方其他は
すべて桔梗と變りませ
んから、裁方だけに止め
て置きます。

二、縫方

桔梗型を型紙通りに裁ちましたら裏表、表當布三枚を裁ちまして表の布裏に當布をいたします(これは表へ刺繻をしない場合は必要ありません)そして、まはりを賤て押へて置きます。次に模様を表布へ縫ひ取ります。

桔梗型及び梅型涎掛

これは紙に梅なり櫻なりを書きまして、其紙を裏打ちしました表布の表へ第一圖のやうに縫ひつけます。そして其周圍及び繪と繪との間は縁

けで、ごちて置きます。

第一圖
刺繡の繪下の縫
ひつける圖



第二圖
ふじみしんの仕
方



刺繡の仕方は第二圖で示しますふじみしんで縫ひ取ります。ふじみしんの仕方は針目を裏から表へ出した根元へ一分ばかりの布をすくひ其針先に糸を引つかけてしめます。これをくり返して繪の上を縫つて行

第三圖
出上り圖



きます。花の芯になりまます處は針を出した根元へ又針を通す前に糸を輪にして針にかけて置きます。そして其針を根元へ通して糸をしめま

すどポツポツと結び玉見た様なものが出来まます。これが芯になります。縫取りが出来ましたら、紙をはぐり裏から一面に鍔を掛けまます。中表に裏表を一分五厘の縫代で縫ひ合せまます。角々が崩れないやうにきつかりと折をつけて表へ返しまして、縁の方は手モンを掛けて置きます。胸明きに假簾を掛けましたら四分巾一尺二寸のテップを二つ折にしまして、胸明きを其間へ挟んで本返しに縫ひ紐の部分は其まゝにして置きます。

一、普通よだれかけ

1、用布 丈三寸四分幅、一尺二寸五分裏表、

ギヤダ丈三尺七寸五分幅の三倍幅三寸五分、
頸紐丈一尺七寸幅一寸四分。

2、地質は

外出用日常用とそれと違ひますし氣候に依つても替へますし、ネル等を用ひます時は、ギヤダ(襷)を略しましても差支へございません。

3、縫ひ方

上出き紐
り來の先



イ、紐を出來上り五分幅位に頸の處五寸中央から計つて二寸五分づゝを殘して縫ひます表へ返しましたら心は、木綿綿を一寸幅位に切つて巻きましたものを真綿で包んで針へ糸を二重につけまして、心の端を一針す

方り括くじ同
代縫通普



小針大針

ので、大針の数が括りの数になり、桔梗の時は五ツづゝ大針を造る様に縫ひます、糸は二本で色は好みに依つて何んでも宜ろしうございしますが、多くは其糸で致します、しつかりこのに結びまして、八分程長くして切ります、此の場合糸の澤山のを望みますれば、めめます前に、よい加減の太さだけ糸を九分程に揃へて片方の先きを一緒にして玉に結びます、その玉を括ります時中へ入れてしまひますれば、決してとれませんが、

ロ、表地と裏地を表中に合せまして、ギヤダは五分づゝの兩襷にして、其幅

の間にはさんで、丈から幅次に他の丈と云ふ順に本返し縫に致します、縫ひ終りましたら表へ返して襷の附いて無い幅の方で裏表一緒に一寸五分おきに五分位の片襷を取りますが是れは頸廻りと同じ長さになる爲めにとりますので何寸と正確な定めはございません、頸紐の縫はずに置きました處の一方を表の方に半返しで縫ひつけ他の一方を裏にて極くこまかに拵けつきます。

ハ、ギヤダはつけます前に表を外に真中から二つ折りにして五分づゝの兩襷にして押へて置きます。

守袋

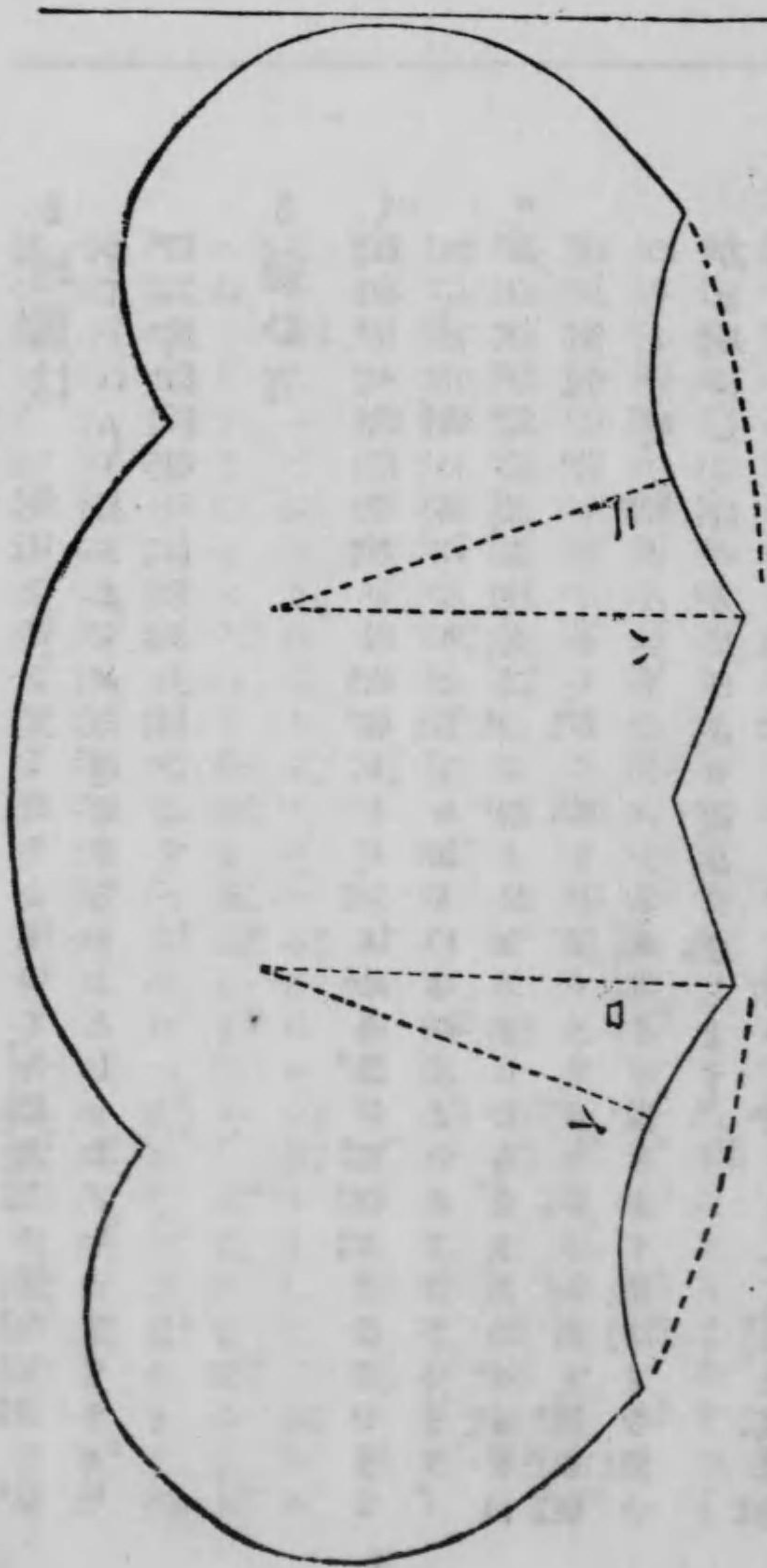
守袋は腰巾着とも申しまして、帯に着けて中へ守り札を入れて置きます、形は種々ございまして一口には申しませんが、お宮参り等に用ひます、馬鹿げて高價なものは何れかと考へさせられます。

一、松形巾着

1、用布 四寸五分四方の表布一枚と同形の裏布一枚。

ギヤダ幅二寸にて丈は三倍二尺五寸、紐絹の太いのを鯨で一尺六寸。

守袋の形



2. 地質は

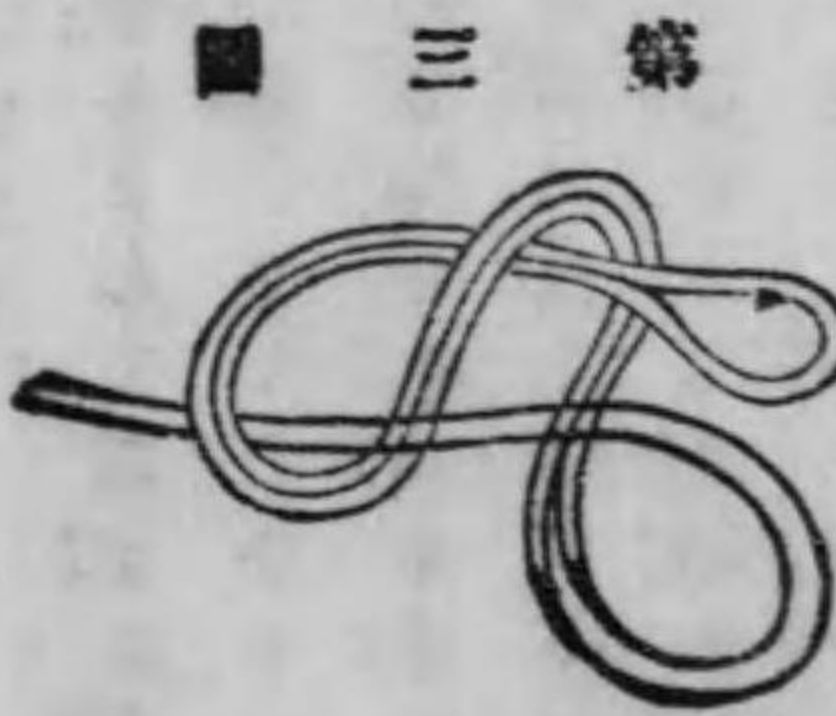
毎日つけさせて置きますのと、外出用又は進物用等に依つてそれ／＼異なりますが、縮緬、縮紬、縮珍等がよろしうございます。ギヤダは、羽二重、縮緬等の白を多く用ひます。

3. 縫ひ方

イ、最初日本紙にて形を四枚取ります。形は此の圖が實物大でございますからその儘お寫になりましてお切りになればよいのでございます。ロ、其の形を當て表二枚、裏二枚お切りになりましたら、先き程の日本紙四枚を皆布に張りつけます。布と紙とを張ります様な時は、矢張り御飯粒のそくいが一番よろしうございます。表布とを張ります裏布とを紙の方を外にして、口の方だけ合せ縫ひに致します。ハ、次にはよだれかけの時の様にギヤダを造つて置きまして、表と裏と合せました間へ狭んで本返して全部一度に縫ひつけます。ニ、縫ひ上りましたら圖にございます口の點線をイの上、ロをニの上に

ハを重ねて二つ襷をとりまして、其の上へ圖の様に結びまします。襷は申すまでも無く両面へとりまします。

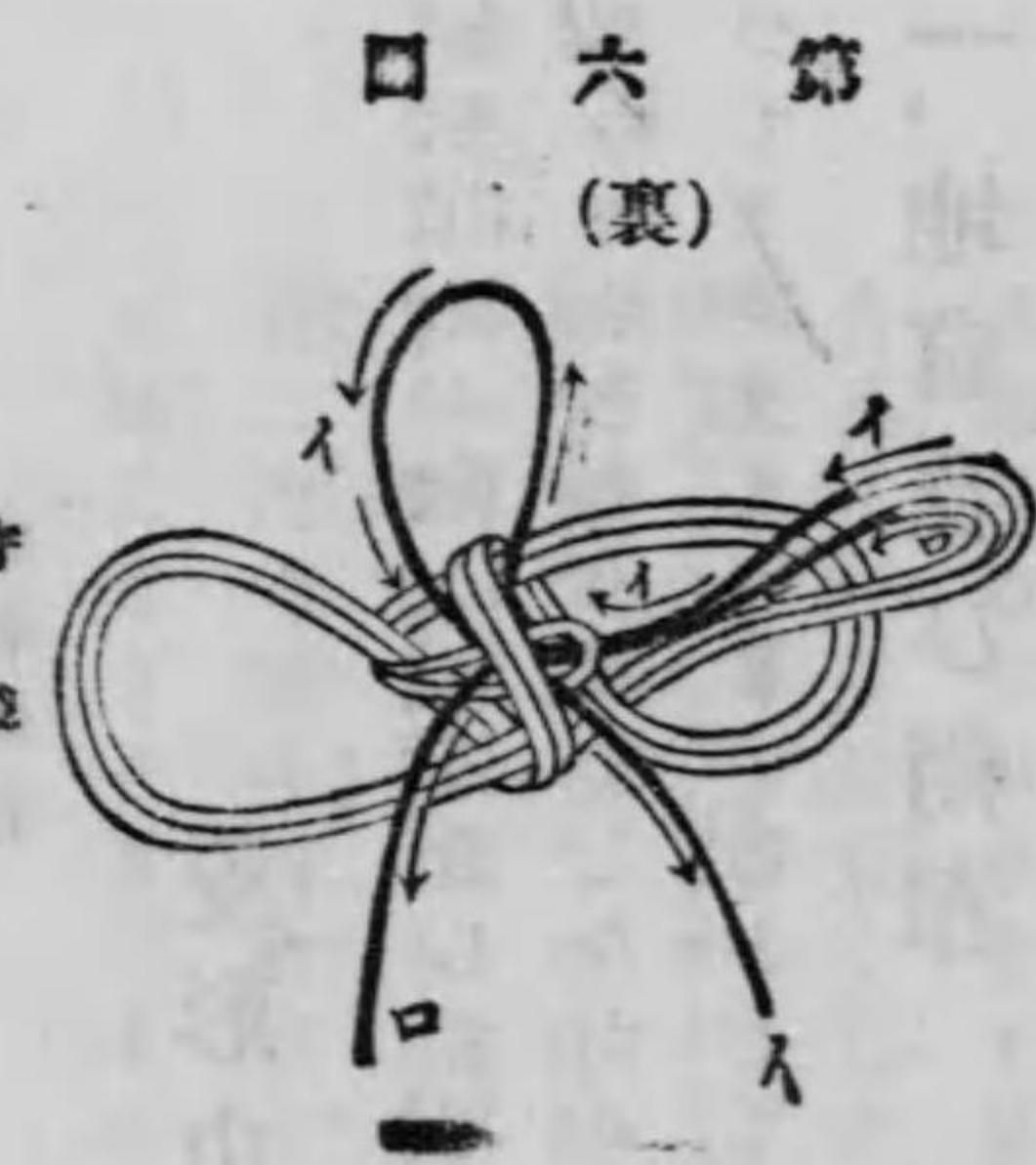
紐の結び方は圖にございます通り、初め四寸を残しまして二本に致しましたら、にてわの先きを上にして左へ一つ二本のまゝでわをつります。左の親指と人指し指と中指と三本で交叉點を親指を前にして持ちましたら、前へ返して二本の指の上になる様に致します。右の親指は何處迄も揃へて次には右の人指し指と中指を上にて親指を下にして残された二本の紐を持ち、一本のわと向ひ合せて二本のわを造り紐の先きを最初造りました左のわへ入れまして、其の二本の紐を下になる様に一とねちりねちります。一本のわを今造りました二本のわへねちらずそのまゝ入れて全體を裏返します。一本のわを縦の二本の紐の下を通して出しましたその一本のわへ表から來て居ります。四寸違ひの二本の紐を入れます。ついで二本の紐の短い方を一本のわの通つて來ました處へ通します。丁度一分位残つて結び切れます。



紐を通しますには四寸長くなつてます方を點線と點線とを重ねて作りました襷の上の兩端へ通しまして結び目の處へ歸つて參りましたら一分残つてます短い紐の通つた縦の紐の下を一邊通しまして一分のと先きと先きとを合せて縫ひ合せて置きます。この結び目は申すまでも無く表の方へ出します。

守

四八



四九

菱形巾着

菱形巾着は重に守袋として用ひられて居りますが小物料で守袋としては松形のお話を申上げましたから菱形は一般の袋物つまり守袋に限らず何に使つても差支えのない物として此の科で申上げる事に致しました。

一、地質及び用布

1、地質

何品にても差支え有りませぬ。唯用ひ方に依つて高價な布とか丈夫な布を撰べば宜敷いのです。

2、用布

表 丈三寸 巾五寸
裏 丈二寸九分 巾五寸

3、縫方

用布全部を裁切らずに其のまゝ、筧もつけずに縫へば宜しいのですから裁方とか積り方とか云ふものは御座いませぬ。

1、袋の縫方

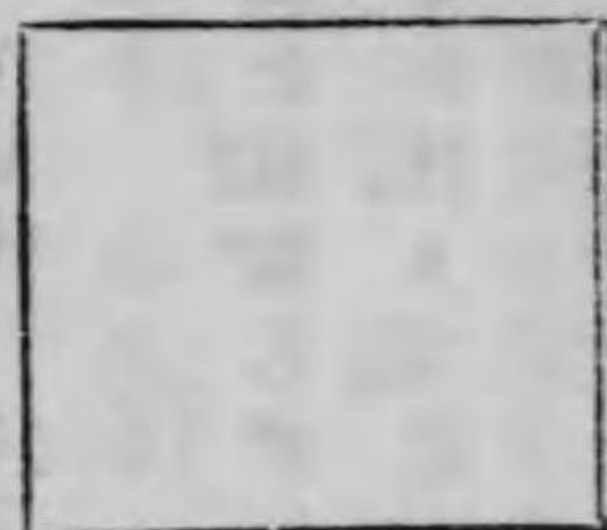
先づ最初に裏と表の布の巾と丈を合せまして巾の片方を合せ縫にして裏へ折りを返へし丈を揃へますと表の方が縫目の先きへ五厘のわが出来ます是れが見返しと云つて其の爲に用布を始めから裏丈け一分短くして置いた譯けなので口になる處です。(同じ丈け込んで差支へ有りませぬが、小さい物ですから成る可く)次には布を揃けて縫目を真中から二つに折つて合せますと裏は裏表は表で重なりますから表二枚が口を右にわを手前にして上に重なる様に乘せて裏と表二枚で都合四枚の丈を揃へますと口の方は見返しから折れる様になります。そのまゝ一緒に見返しから五分まで丈を縫

第一圖(四縫ひ) け丈



ひましたら、一寸五分の間は裏一枚、残して三枚だけを一緒に縫ひ、又四枚一緒に丈けから巾を(一)圖の様に縫ひます。ロ、ハの間は一寸五分で裏を一枚残します。處此の様に四枚一緒に縫ひます事を、四つ縫ひと申します。

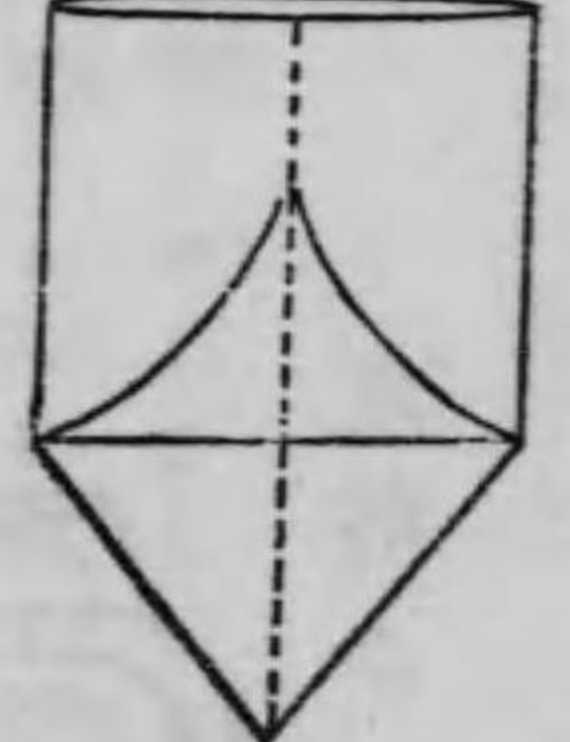
第二圖 目縫のけた



一寸五分の裏一枚残して有ります處から表に返へしまして、縫ひ残された裏は折けて了ひますと(二)圖の様に(三)圖の様に丈けの縫目が真中へ行く様に置き直ほして底の縫目の上になつてます角を口から四分下つた縫目の上に重ねて表の布だけへ綴ちつけて置きます。

りまして襜の頭と兩方の折り目との間を二分位明く様に手加減致します。

第三圖 口

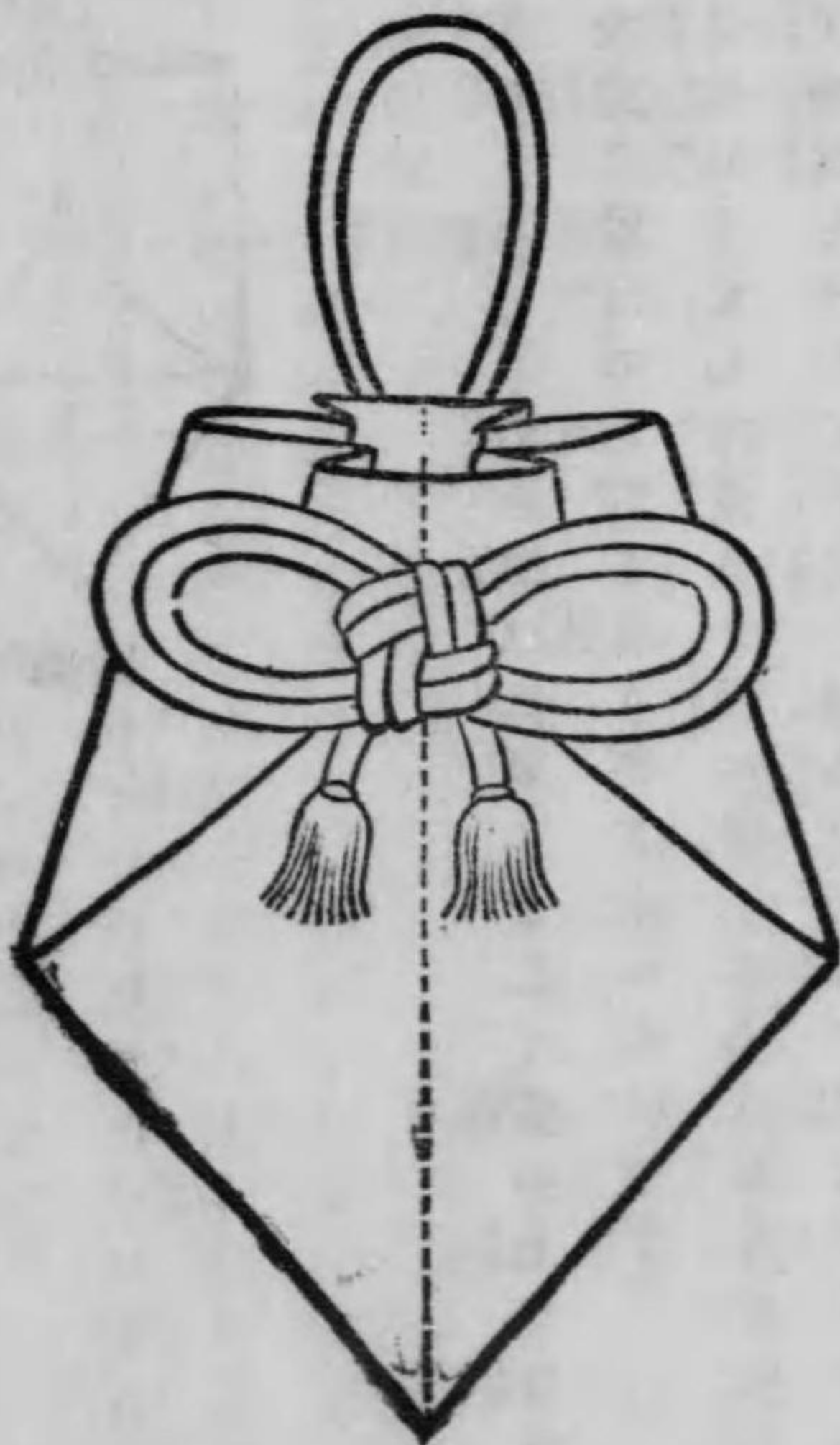


目縫

ハ、紐のつけ方

紐も松形と同じく畳み結びに致しまして、襜の上で口から四分下りました底の縫目のとちて有ります上へつけます。紐の結び切りました先きを袋へ通してから、綴ちずに二分程結び目から下へ出しまして、其色の絹糸で、時計の紐につけました房と同じ造り方で七分位の丈けに房をつけますと、大層立派に見えます。(出来上りの圖参照)

圖のり上來出



女持ち巻煙草入

小物袋物細工物と申しましても判然とした區別の有る譯では有ませぬ。唯大物に必ず附随する物を細工物袋物に入れても差支え無い場合も無論あります。小物と申しまます様に細工物と袋物も何がどちらへ入るものだと云ふ厳しい定めは有りませぬ。此處で申上げます袋物も袋の形の物と云ふ位の分け方に過ぎ無いのであります。

一、単衣巻煙草入(女物)

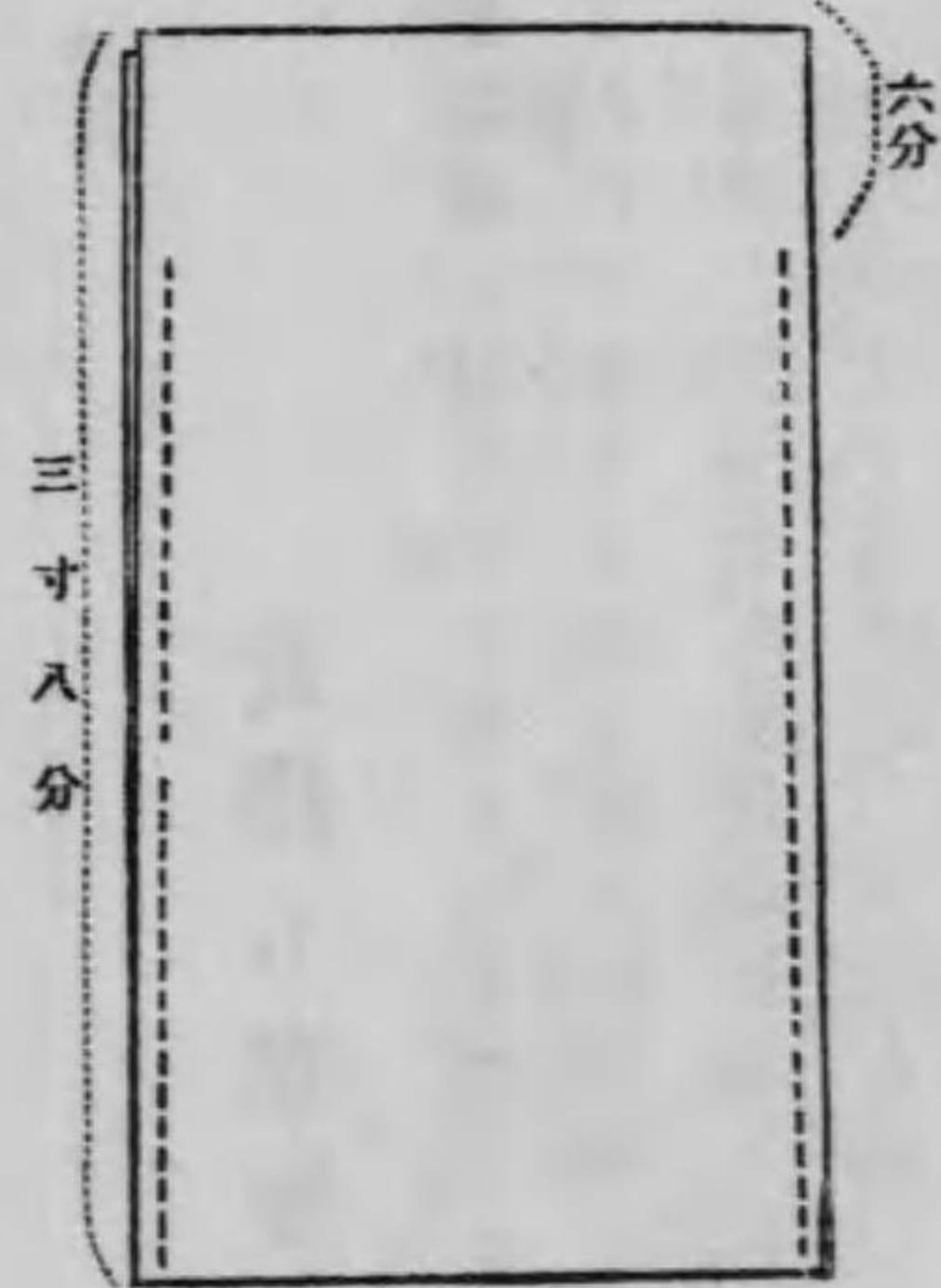
- 1 用布 丈七寸六分 幅二寸五分
- 2 地質 何品にても差支有りませぬ。
- 3 縫ひ方

女持ち巻煙草入

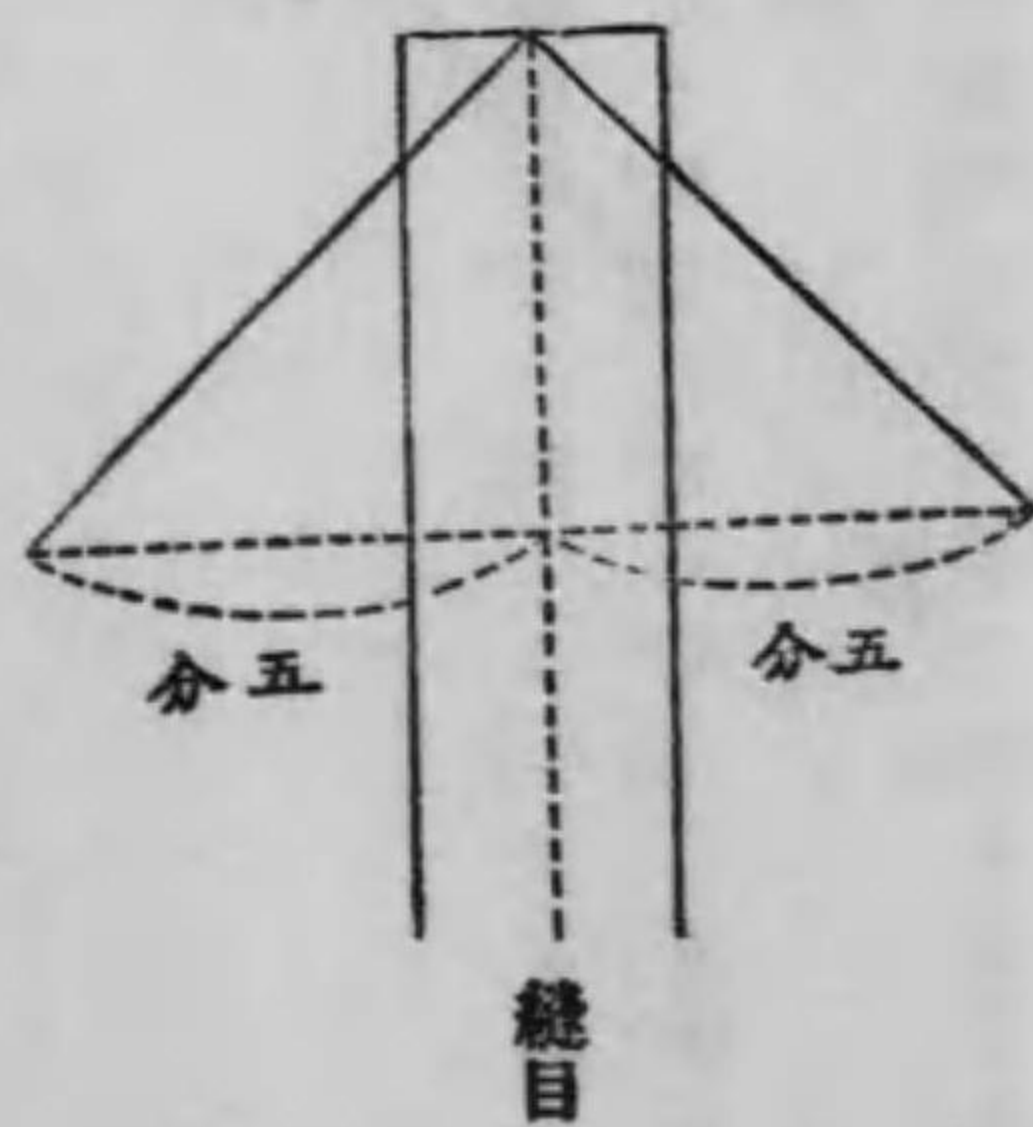
此の袋は、凡て半返し縫に致します。最初第一圖にありますが、通り返し縫の中に、丈の真中から二つ折りに致します。裁目の方から、六分あけて、わの處まで、兩端を一分の縫代にし、先に申上げました通り、半返し縫ひに致しましたら、縫目を兩方に割つて、ソクイで離れない様に着けて了ひます。

第一圖

(分五寸三)



第二圖

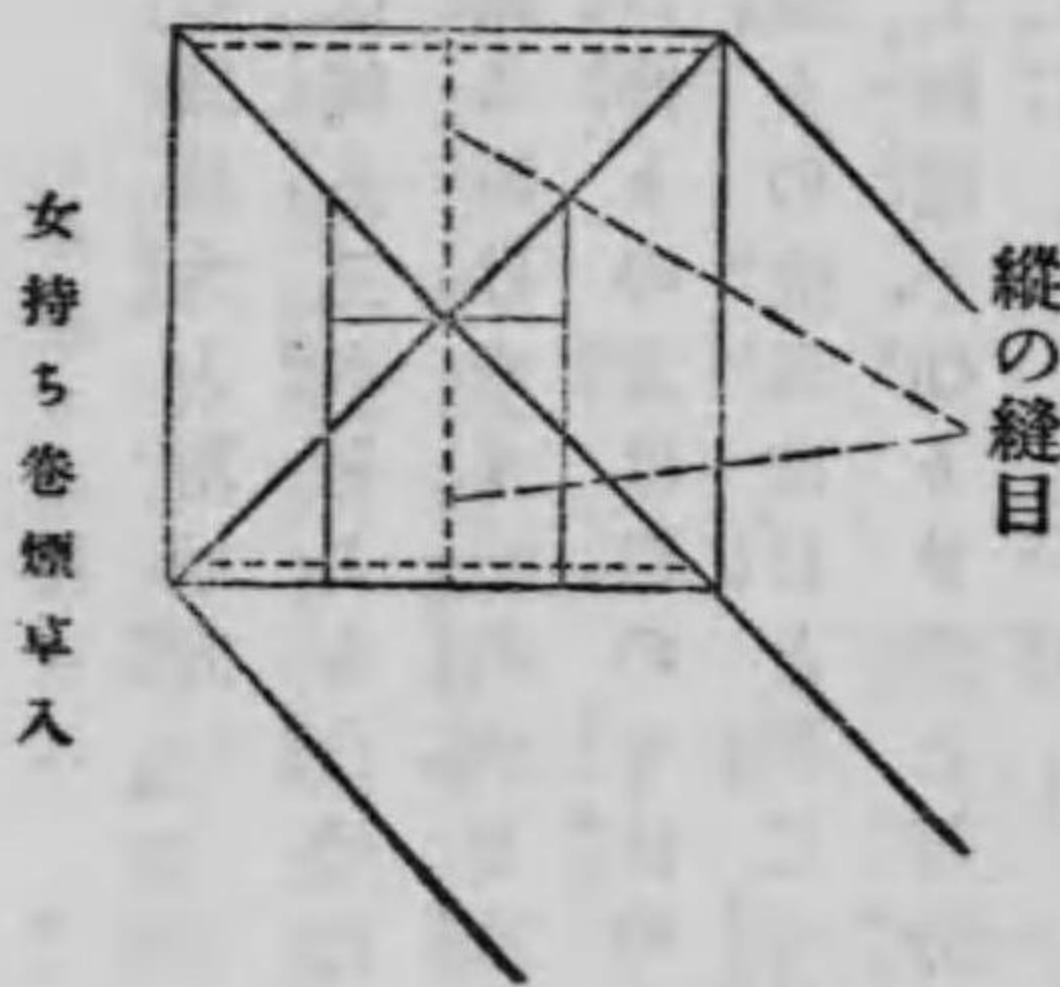


第二圖は、只今縫つた縦の縫目を底にした所です。わの折りと重ねて、縫目から

計つて、左右へ五分づゝ都合一寸縫目が十の字形になる様に縫ひます。第三圖は、底の出来上りを裏から見た圖で、一寸づゝ縫ひました縫目を、向ひ合ふ様に折りました。先きを矢張り、ソクイで着けて了ひます。次には、其口から六分の縫ひ残して有り、ます處と、口廻りを縫込みだけに折りました。表から手ミシン(本返縫)を掛けます。袋の方の縫ひ方は、是れで全部終りました。それから後は、紐を造りまして、口へ紐の通る處を造れば、宜敷のでございます。

第三圖

(底)



女持ち巻煙草入

第四圖

(紐とり飾口)



向ふ側 手前側 向ふ側 手前側 向ふ側 手前側 向ふ側 手前側

紐 五七

4 紐の造り方と附け方

紐は絹糸三本をより合せた物を又二本により合せるので、全體で六本に成る譯けです。共色を丈八寸の物二本造ります。是れは通す方の紐で、口飾りの方は口の寸法の三倍位に丈を見積れば宜敷うございます。口飾りの位置は口と同じ寸法(二寸三分)に紙を切りまして、六つ折りにして、兩端を切りますと等分に六つの位置が出来ますから、其處を第四圖の様に向ふと手前と、からげて参ります。八寸の紐を一廻り通しましたら二本一緒に切れ目から五分位の處で、一つこめに結びまして、先きに時計紐の時と同じ房をつけます。此様に細い糸で造らへた紐は、房が中心になります様に紐の先へ玉を造しらへて置きますと房を一度結へまして、どちつけます、手敷だけ略けて、其の上落ちる氣遣へもありません。(細い紐ではどちつける場所も有りませんから、斯う致します。

朝日巻煙草入れ

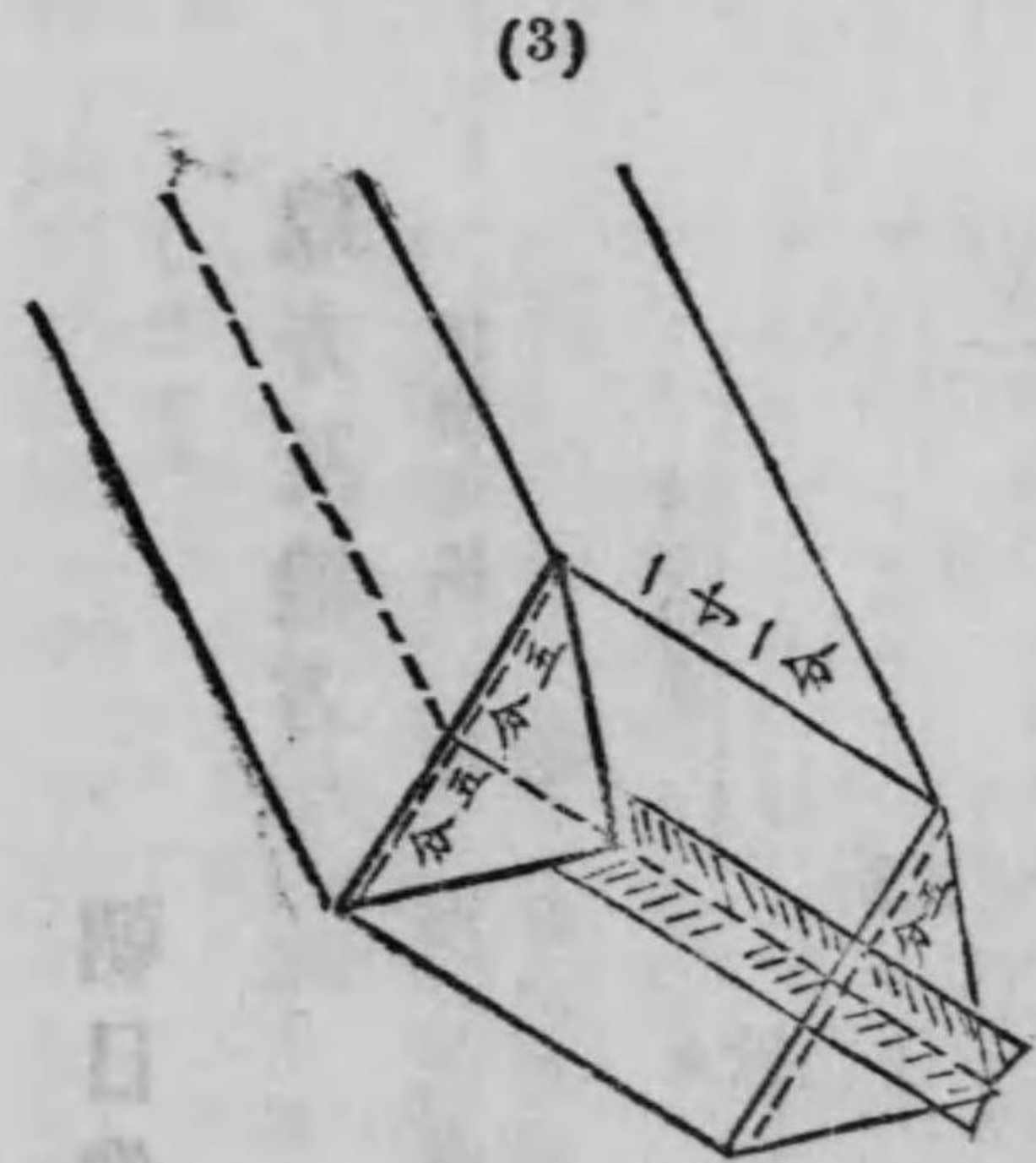
裁方及縫方

裁切寸法 巾 四寸六分
丈 四寸四分



一圖のやうに布を裁ちましたら、先づ中を二つに折りまして、わの方から二寸一分巾に上寬を附けまして、又底になる方も同じ二分巾で、二圖の通り、イ、口と縫ひましたら、底のわの方二分の縫込みの方を、二分の切り込

みを入れます。
 脇底とも縫ひましたら、鏡をもつて、縫目を分ちます。
 底になる、兩端を五分づゝ、即ち一寸の厚みに三圖のやうに本返し縫ひにし、鏡をもつて兩方向ひ合せに折りをつけます。そして兩方の三角の角が張りつけられて、即ち底が出来上るのです。



一分巾を三つ折にして、本返し縫ひをいたします。
 口のかゞり糸は、共色の絹糸を二本斜に通して、四本にてよぢり千鳥がけにして紐を付けます。
 紐
 共糸三本を斜に通しまして、六本にこれをよぢります。八寸のが二本い

ります。是は端を三分残して、結び玉を作つて、玉先の三分を六本にほつらし、房の替りにして置きます。そして口の千鳥掛の處へ兩端から通し、玉先から二分明けて石疊に結んで置きます。(田來上り口掛及夏物草入参照)

小學校子供用カバン

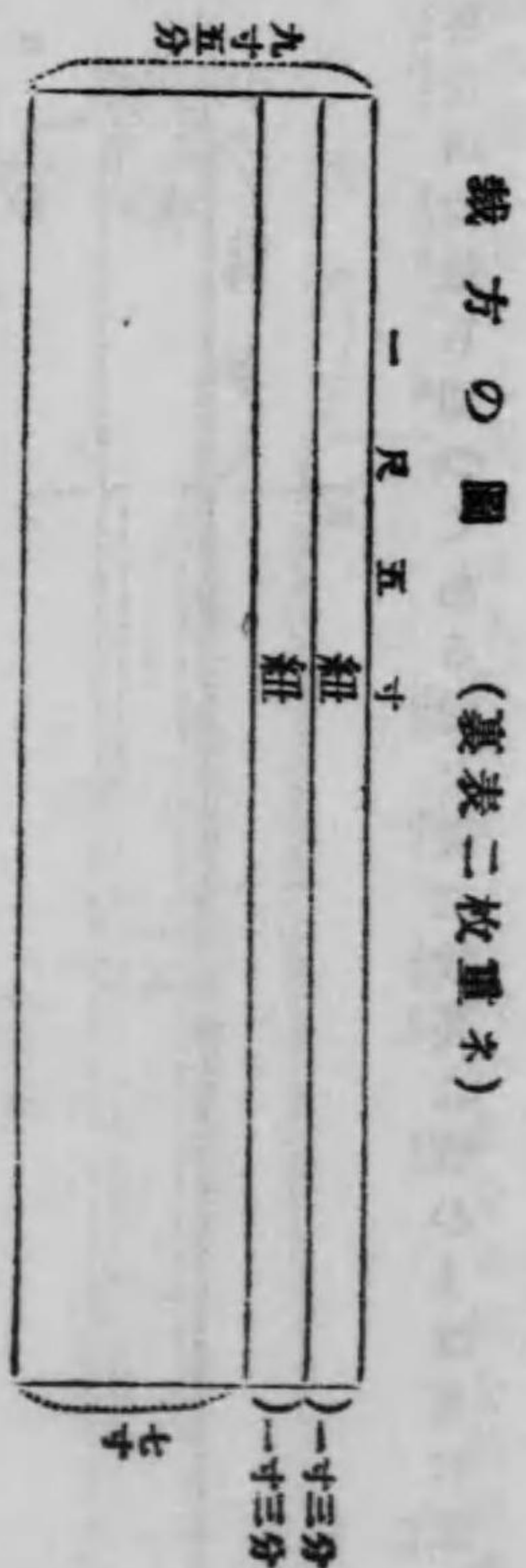
七八歳から十四五歳位迄小學校へ通ふ子供さん方の教科書や筆紙墨及び辨當箱等一切の物を入れて學校通ひに毎日肩に掛けて用ふる物で御座いますから成るべく實用向な丈夫な布で拵へた方がよろしうございます。男子女子に適した柄及び色合で拵へた方がよろしうございます。

一、裁方

用布 一尺五寸

並巾 九寸五分

裏表二枚入ります。



裁方の圖 (裏表二枚重ネ)

二、縫ひ方及標附

縫ひ方の圖

(1)

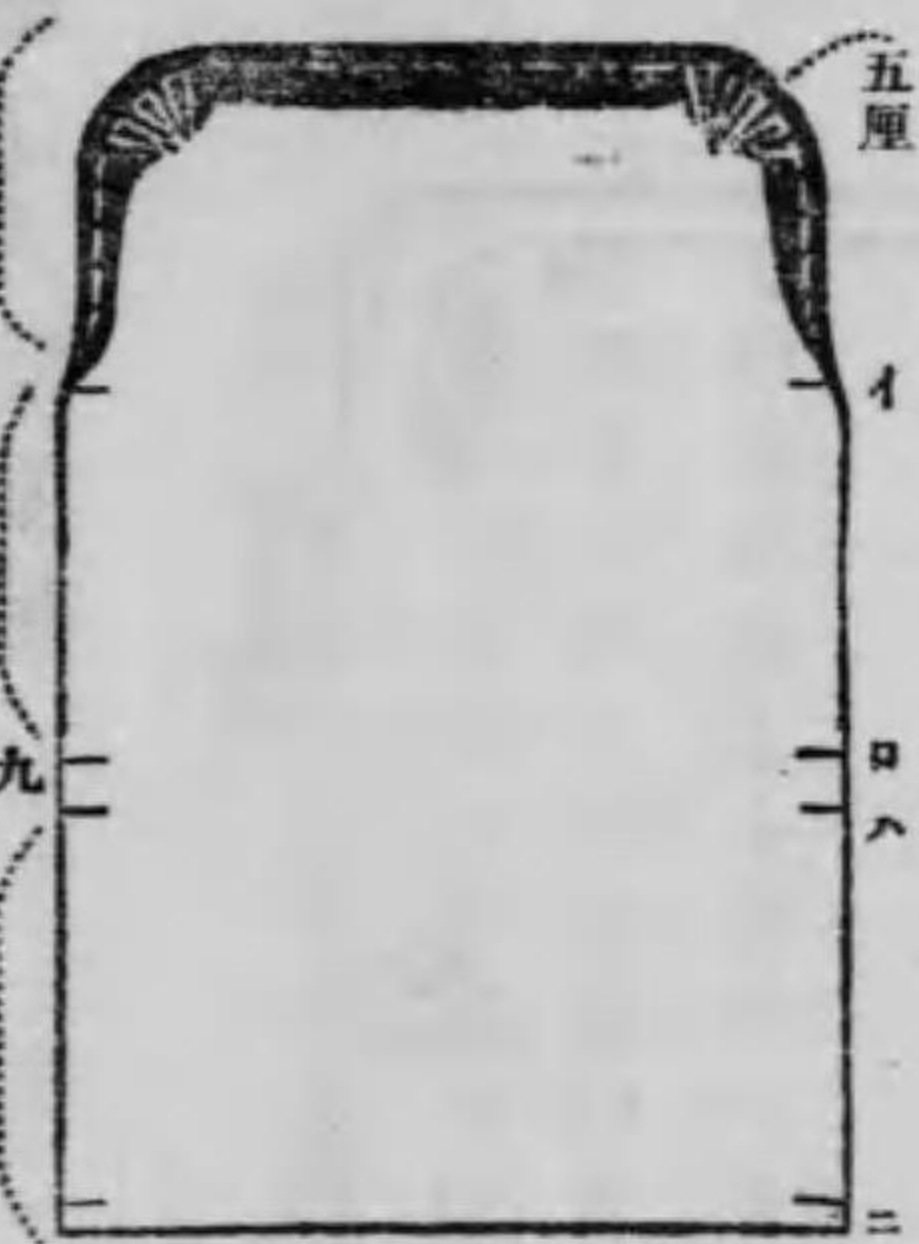


小學校子供用カバン

イ、二枚の布裏表を合せて標を付けて出来ましたら、イ圖のやうに上の左右の
端から端まで、角に一寸五分の丸味を付け、袖の丸味のように縫ひます。

圖の方ひ縫

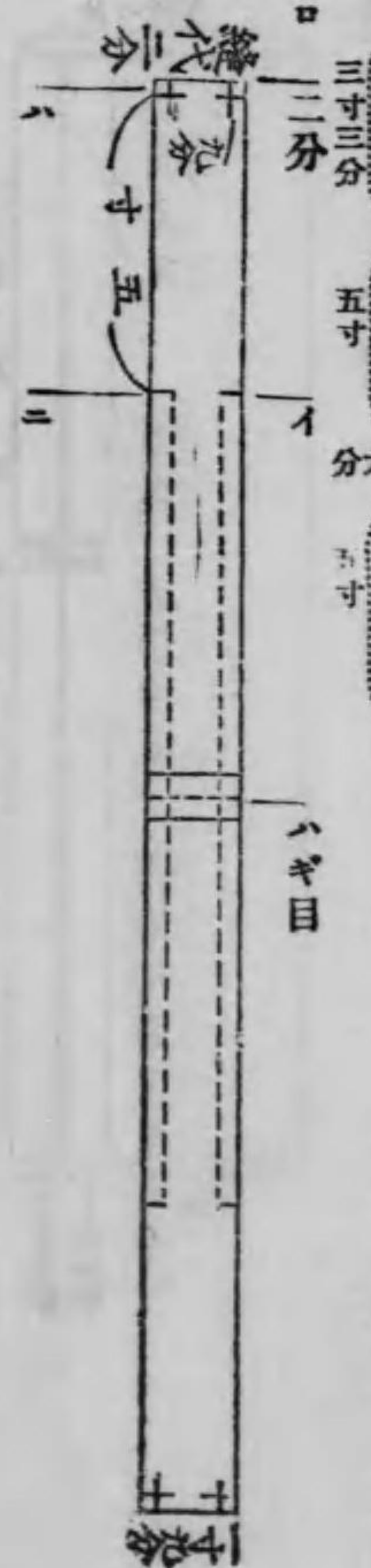
(ロ)



イ圖のやうに縫ひあげましたら
縫目を裏の方へ折りまして角を
袖の丸味をよせるやうに寄せま
して寄せ糸から五厘残して切り
捨て、そして鏡で押へて置きます。
次に紐ハ、ニ、ホ圖の様に拵へます。

圖の紐

(ハ)



裏表四枚裁ち切つてある紐を表二枚裏二枚わりはぎに致しまして、ハの

圖の様に重ねて露付をし、露付から露付の間を兩端を縫ひます。

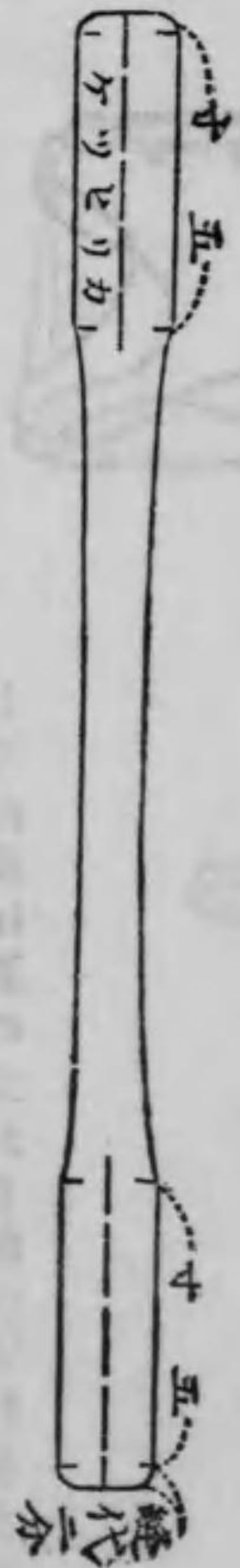
圖の紐

(ニ)



圖の紐

(ホ)



縫目をニ圖のやうに裏の方へ折りましたら、それをひつくりかへして鏡
で押へ、ホの圖のやうに中部に腺を掛けて置きます。
先づ紐が縫ひ上りましたら、ロ圖のイの箇の裏表の間に紐のイの標の箇
とを合せ、袖の如くに、四つ止めに致します。そして、ロとホの箇を合
せ、その箇迄四つ縫ひにいたします。ロまで縫ひ下つてまゐりましたら
表と裏と、ロとホの處へ切り込みを入れて紐の角に添ふて、布を廻はし

縫つて行きます。つまり九分と九分との隙を合して待針を打つて、口からハまで縫つて、ハ、ニの方へ縫ひ上ります。そして縫込み二分の隙の表は開いたまま、縫込みの隙まで縫ひ裏は内部に折つて縫います。そしてよく返し針をして四つ止めに致します。

そして表へ縫目の折をつけます。

今一端も残つて居る一方の紐と袋の一端とをイ、ロの隙の通りに合せませして、此度は裏の方から縫つて行きます。

■り上來出 (へ)



び結橋新 (ト)



そして表へかへし、ロの部分の明いてる處とくけつきます。出来上りましたら、(へ)圖参照、ロの處には新橋結びト圖で紐を挿へて、かぶせを中心として、一寸上り、一寸下りの二方に紐をつけます。

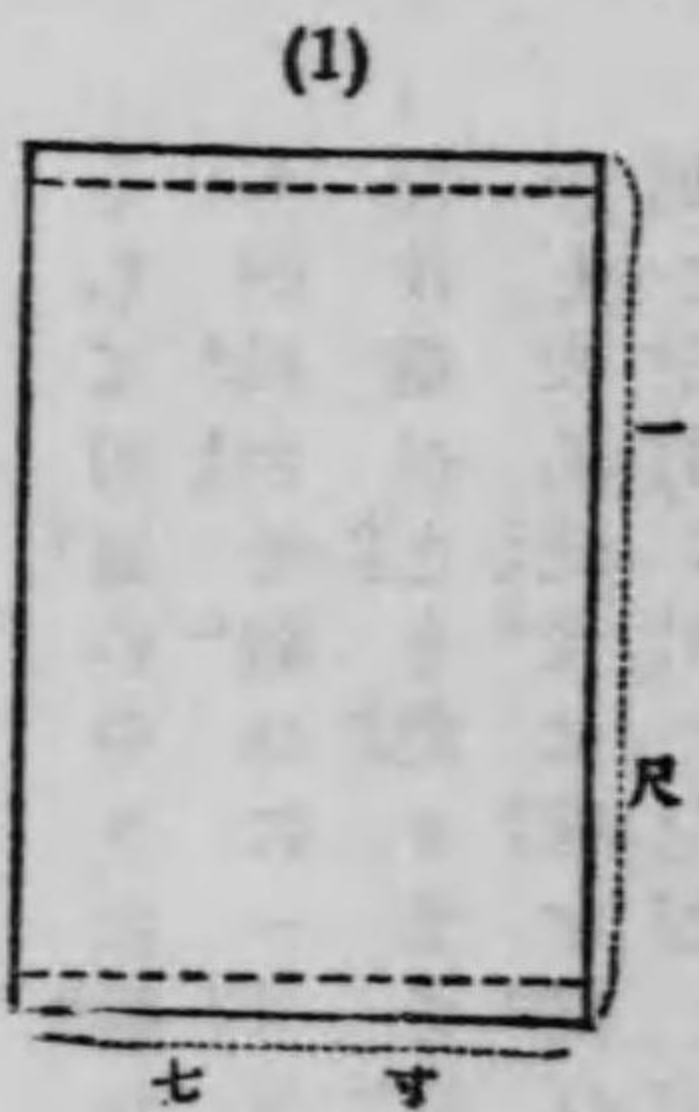
手提袋

手提袋は色々な種類が御座います。口に金具の附いたものや、打紐を用ふるもの同じ拵へ方でも横が長くて縦の短きもの、又其反對に縦が長くて横のみじかきもの、其格好も千差萬別で御座います。普通一般に用ひられて居るのは、只今御紹介する拵へ方で御座います。大人持小供持は重に用ふる布地の派手地味によつて別たれるので縫ひ方に變りは御座いません。

用布 表—丈一尺 巾—七寸

裏—丈九寸八分 巾—六寸九分

縫ひ方



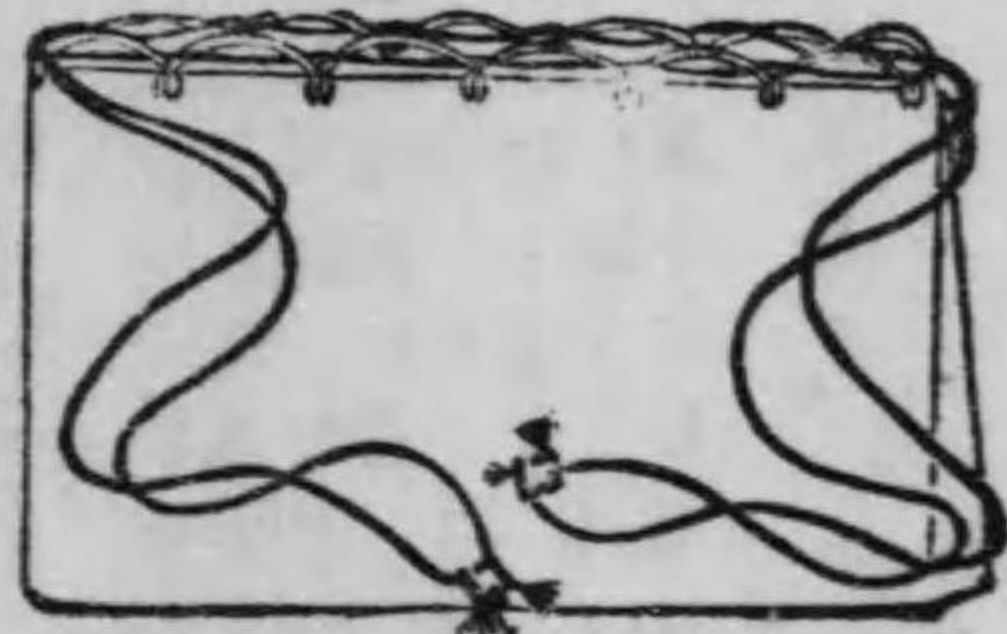
裏表の二枚の布を一圖のやうに重ねて上と下とを縫ひ合せます。縫ひ上りましたら裏の方へ五厘の折を着せて折ります。即ち二圖のやうに………
 として其上下を横にして縫目を真中にし
 て上下の縫目を合し待ち針を打ちます。
 即ち三圖のやうに………



(5)



出来上り



紐先結方



そして四圍のやうに縫ひ目の處から二つに折りましてまち針を打ち直し四枚合せ縫ひに一吋三分の處まで縫ひまして、あと一寸五分だけ二枚だけ縫ひとを終りまで縫ひます、一方の方は皆しまひまで縫ひ終へます。そしたら此度は底を縫ひます。五圍のやうに各々縫ひ合されたる底の切を三角に開き、二枚を向ひ合せにしまして六分の角の底の厚みを縫ひましたら一枚縫ひ残してある處から返してあとはくけて置きます。

口の紐は婦人持煙草入れの口と同じやうに打紐でかゝります。紐は打紐三尺を二つにして兩方から通しまして紐先は石ダ、ミに圖の様に結んで、先を三分長くして房の様にホッラして置きます。
(前號學校圖出来上り
 裏面にて示す)

さくら袋

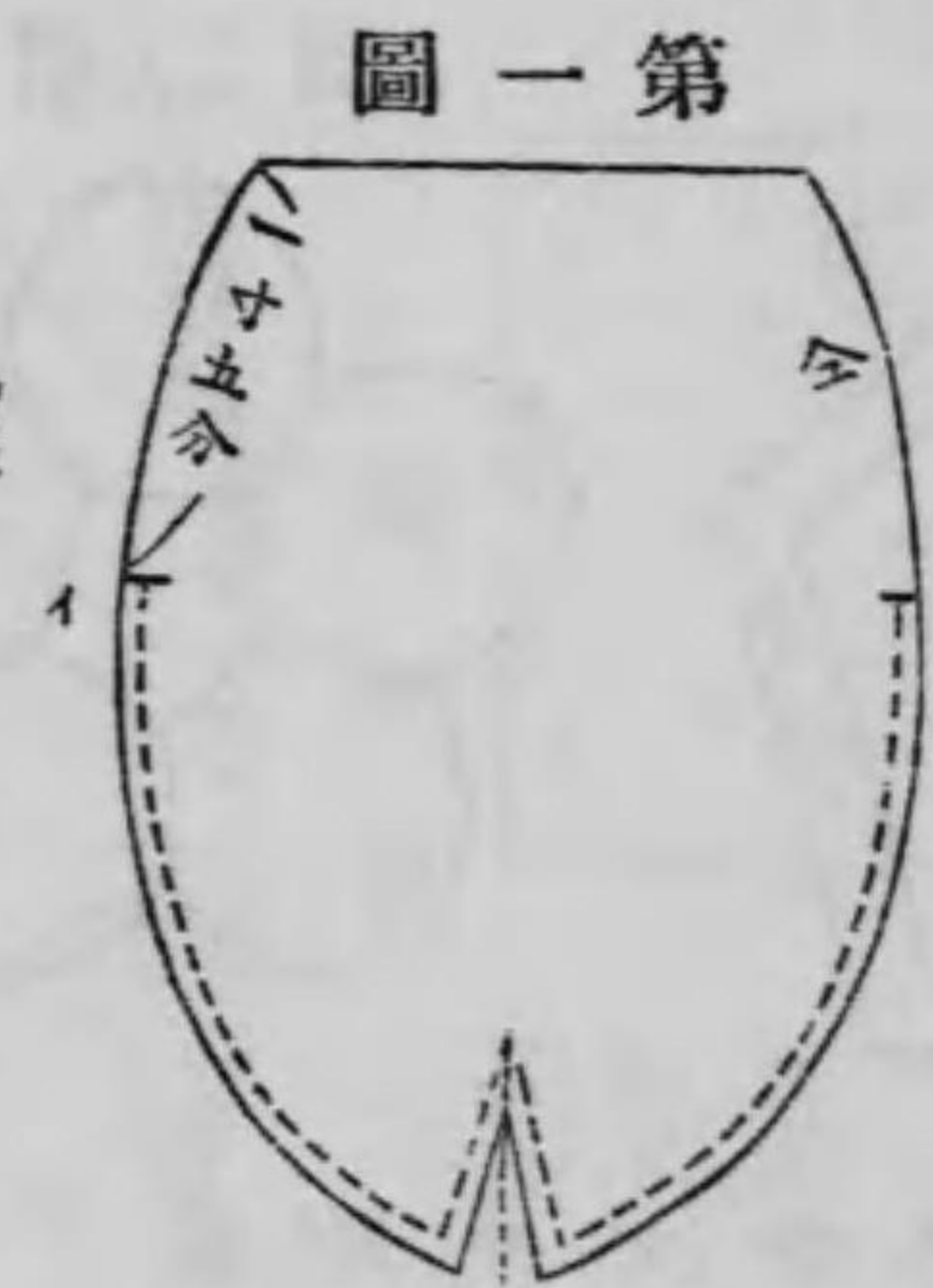
この手提げは名の通り櫻の花にかたどつてこしらへたもので御座います。これは普通の手提げにも使用いたします。又小學校や幼稚園通ひの小さい方の辨當袋にも用ひられます。五つの花瓣を赤白の縮緬で取り口の布を黄金縮緬等を使用してこしらへますと大變美麗でございます。

一、裁方

實物大の形紙が出て居りますからそれをあて、花瓣十枚と底一枚をとりまします。用布。縮緬でもお召でもよし並巾一尺の布なれば花瓣十枚とれます。外に裏布として巾三寸長さ一尺二寸の布と打紐一尺五寸いります。

二、縫方

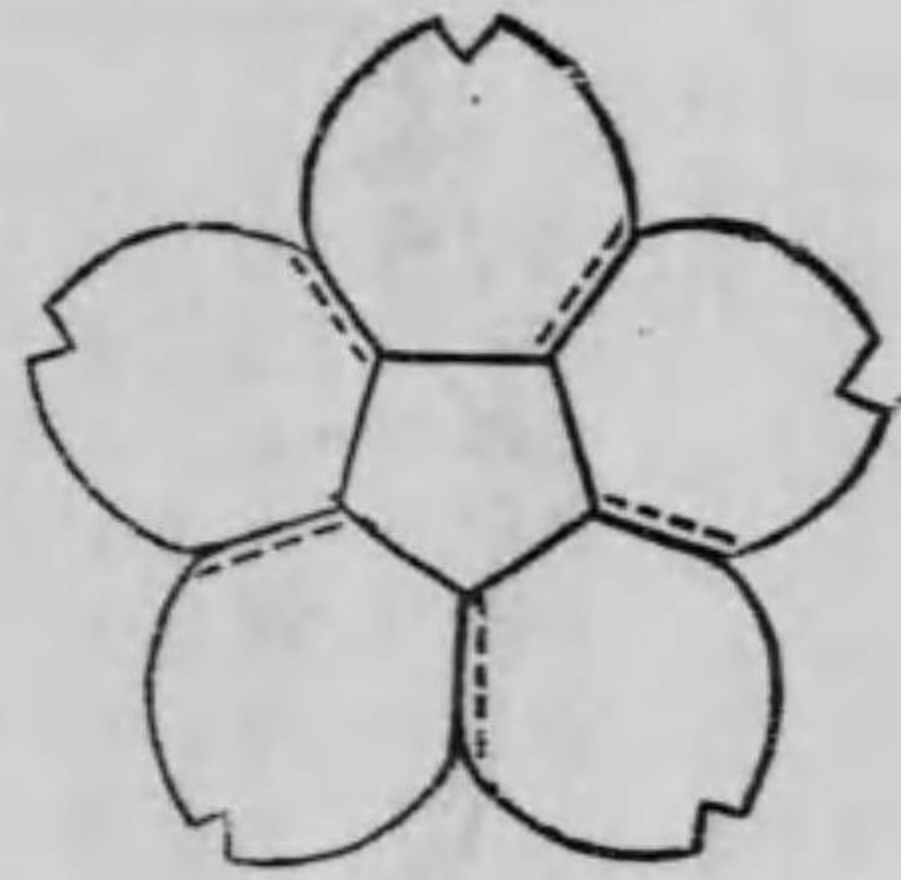
はじめ形紙で花瓣を取りましたら紙で同じく十枚花瓣を取り、其の一枚一枚を布の花瓣に裏打ちにいたします。裏打ちします時には紙の花瓣の周圍にだけ糊を付けて置きます。



裏打ちが出来ましたら花瓣の下から一寸五分の處兩方に切り込みを入れまして、第一圖のやうに、二枚の花瓣を合せ表を内にして、切り込みから切り込みまで縫ひます。十枚の花瓣を二枚づゝ縫ひますから五つの花瓣が出来上つたわけです。そうしましたら、五枚とも口の處にも切り込みを入

れて表へかへします。次に切り込みから下一寸五分の處を隣り同志表は表だけ裏は裏だけ

圖二第



のやうに縫ひつけてしまひます。すると一方が口となり一方が底につく部分となります。

(三圖参照)

底の拵へ方

厚紙を形紙で切りましたら其の紙一面に糊をつけまして底となる布の上へのせよく手で布をのばして厚紙の外二分だけ底布を残して切つてしまひます。内側の方にも同じく布を張りまして厚紙外二分だけ布を残して切り取つて置きます。(三圖参照)

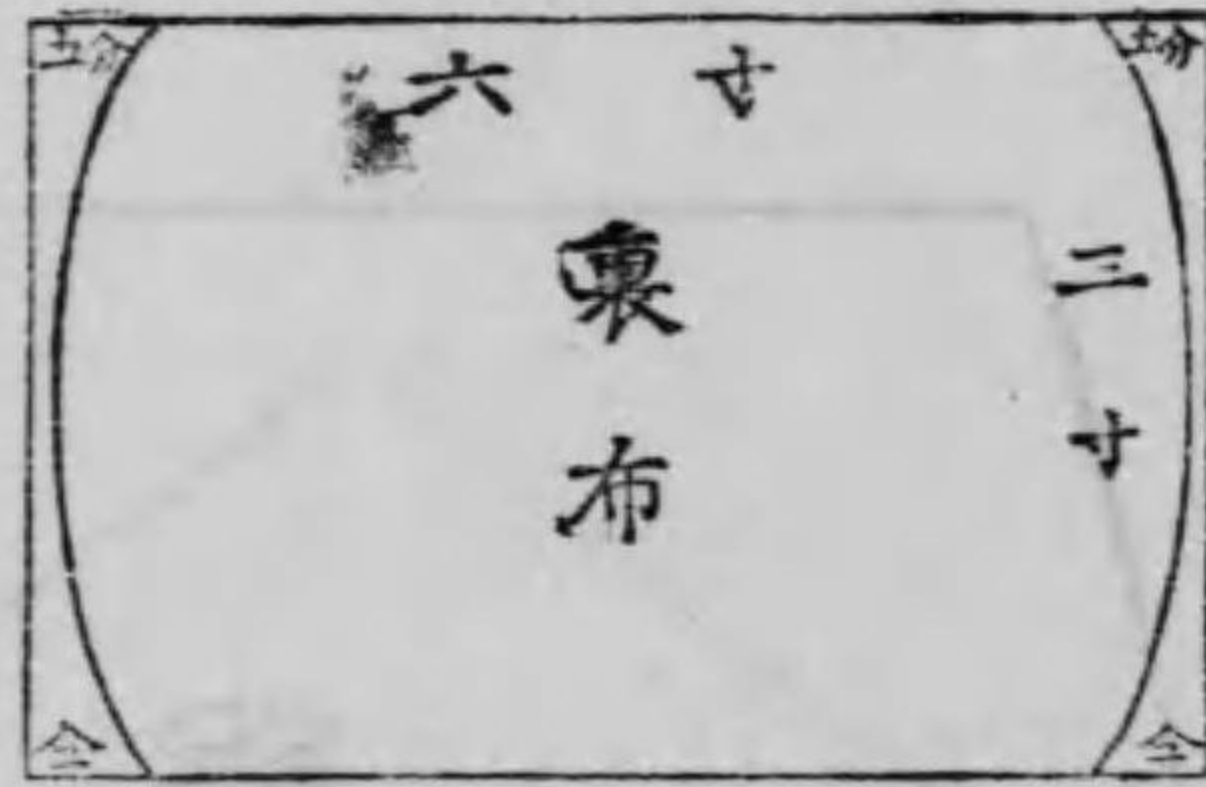
裏布

一尺二寸を二つに折りまして其端の上下ともに五分寬をつけ中央は一分位にして圖のやうにまるく寬をつけ其上を縫ひます。

圖三第



圖四第



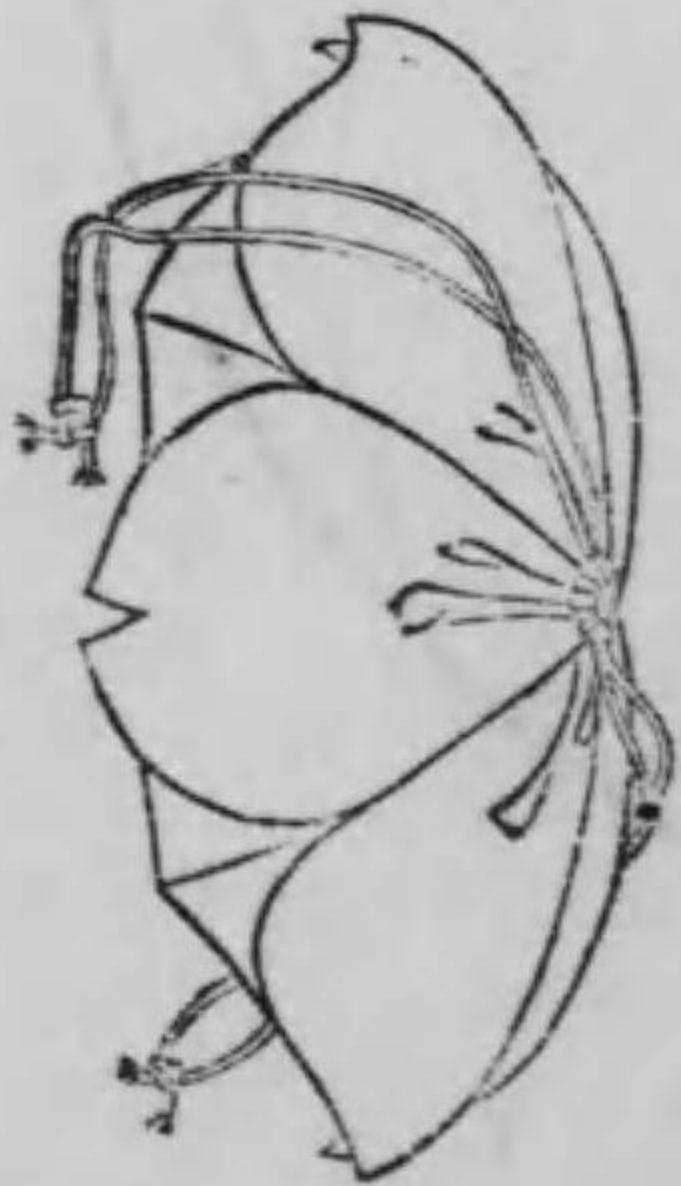
圖五第

底のつけ方
先に縫ひ上げた花紙の一方の口とこの裏布との中に底を挟みまして二分残してある布だけに裏表の布を縫ひつけます。

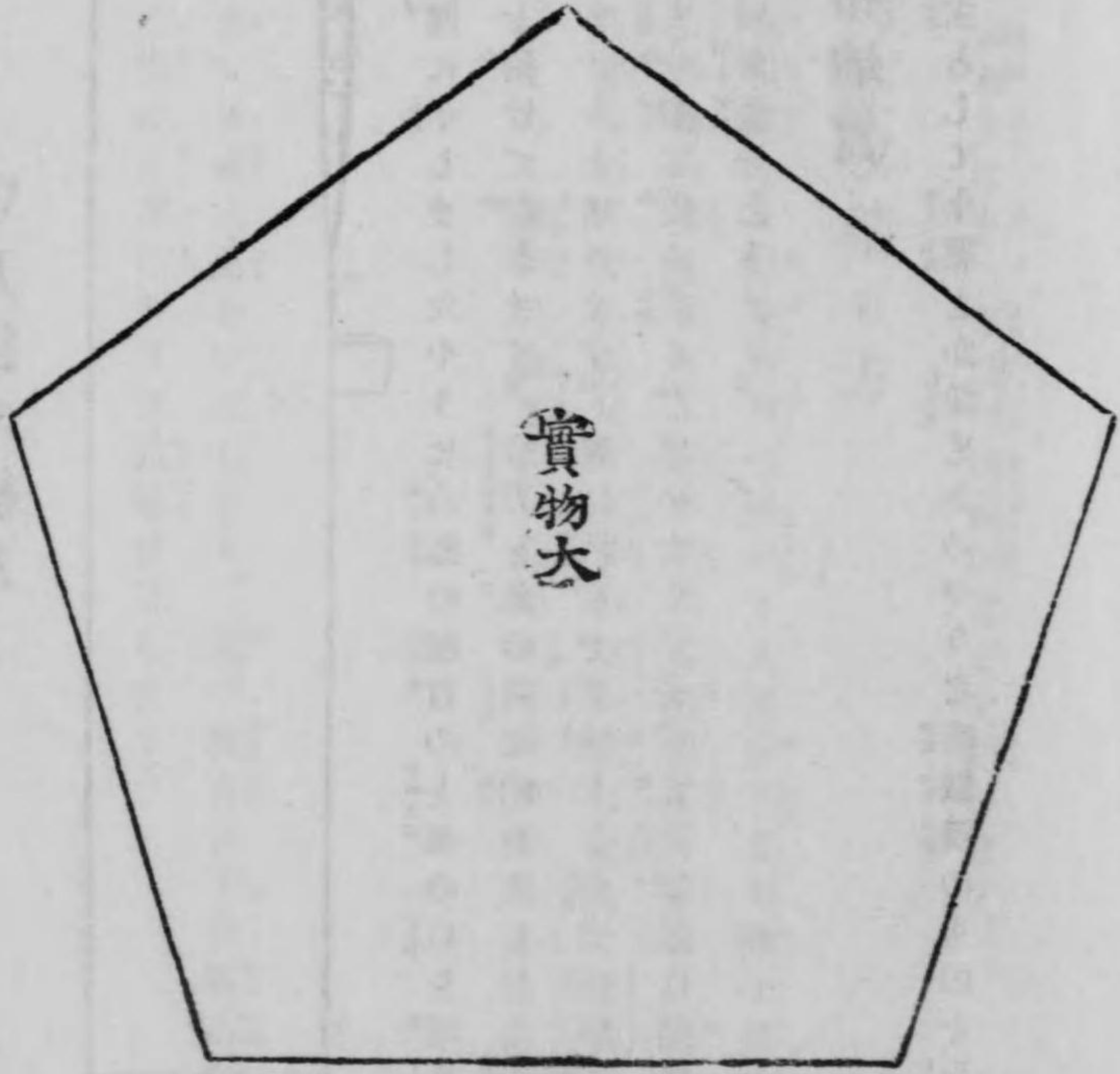
口附け

次に口布は巾一寸四分長さ四寸七分のもの二枚を兩端二分折り返し三拵けにしまして最初二枚とも表の布に縫つけ次に二つに中央から折つて裏表の中に挟んでくけつけ紐を通して置きます。

圖六第
圖り上來出



さくら



實物大

七七

さくら

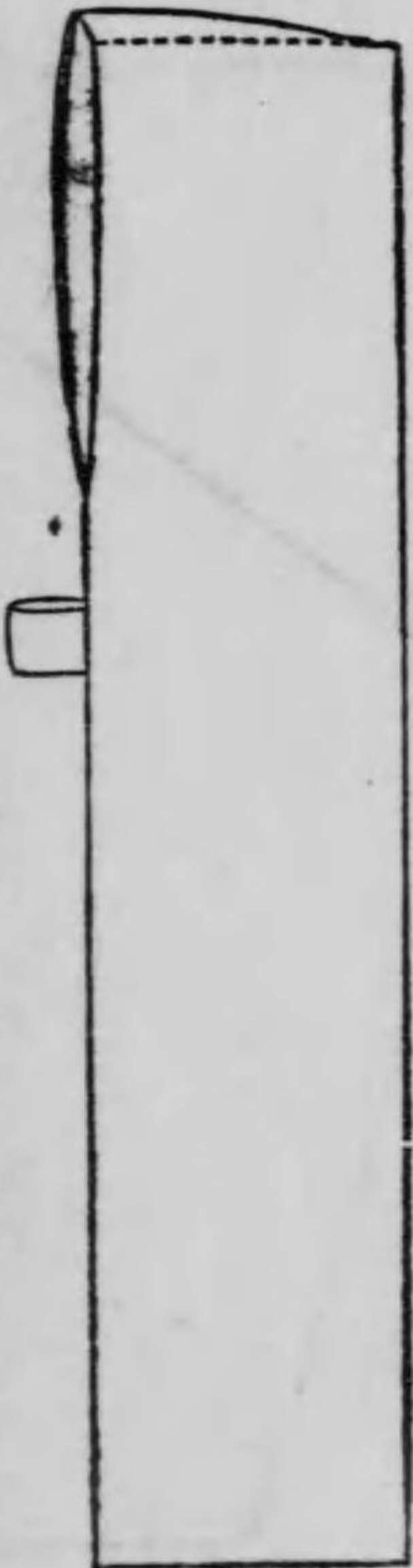


實物大

七六

守刀袋の縫方

出上り縫



出来上り圖に示しましたやうに右脇の縫目の上部の口を明け、其の下に紐通しの乳裂を附けて置きます。守刀を此の袋に納めましたら上部を下に折返し紐できりくくと巻きます。帯に挟んで所持する時の便宜上裾を四角にせず、大きく丸味型に縫ふ式もございませうが先づ世間普通に用ひられて居るものは此の四角型であります。

一、用布地質

表地は主として金縷とか錦とかのやうな唐織風のものを用ひます。

裏地は鹽瀾又は羽二重、琥珀織、精好などを用ひます。

二、裁方及び積り方

袋の上部折返しの部分が刀の鯉口より五分下まで来るだけの丈けにして、巾は刀の鞘の太さより二倍の廣さに出来上るやうに見積ります。裁方は四角なものですから、たゞ上下の地の目を通して真直に裁てばよいのです。そして裏布は表布より巾も丈も一分づゝ小さく裁つて置きます。

三、縫方

縫ひにかゝる前に篋をいたします。先づ表布を下に裏布を上に乗せ、中にして重ね、次ぎのやうに篋附けをします。

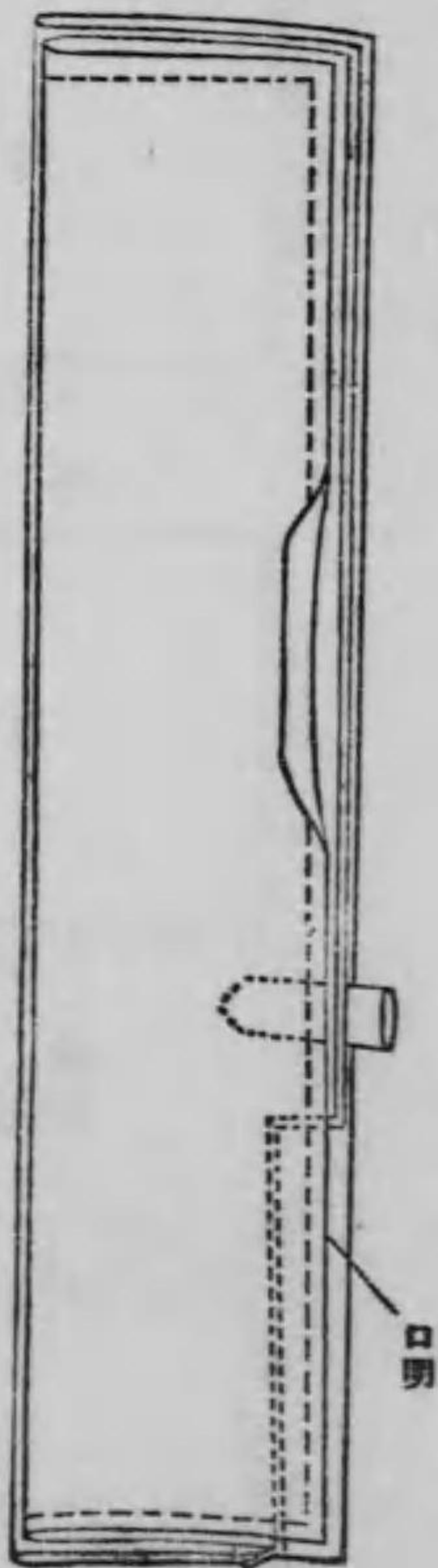


篋を附けましたら裏表頭の裁切りを揃へ、ハからイまでを此の間が口明
 きになりませす裏表合せ縫ひにし裏の方へ折をかけ表を二厘五毛ほど見
 返りにして仕上げ鍍をかけ口明きの縫ひ終りに縫ひ代いつばいに切り
 込みを入れて置きます。次に裏表別々にめい／＼布表を中側にし
 眞二つに折り四枚で頭を本返し斜に縫ひます。其の糸で續いて一方の
 口明きを表裏合せ縫ひにし、ニからイまでの間縫ひ終りの所を四枚で
 つかりど四つ留めをします。

四つ留をしましたらすぐ口下から裾までぐるりと四枚で縫ふのですが
 其の前に巾二分程で打紐が通る位の大きさの羽織の乳のやうなもの作

つて置き、それを口の標の所に挟み四五針突き立て針にて留め、其儘四枚
 にて五分ばかり縫ひ下りましたら手前の裏布を一枚はねて三枚で二寸
 程縫ひ、此の穴から表へ返します。又四枚で裾までぐるりと縫ひます。(縫
 ひ方の圖参照)

縫ひ方の圖



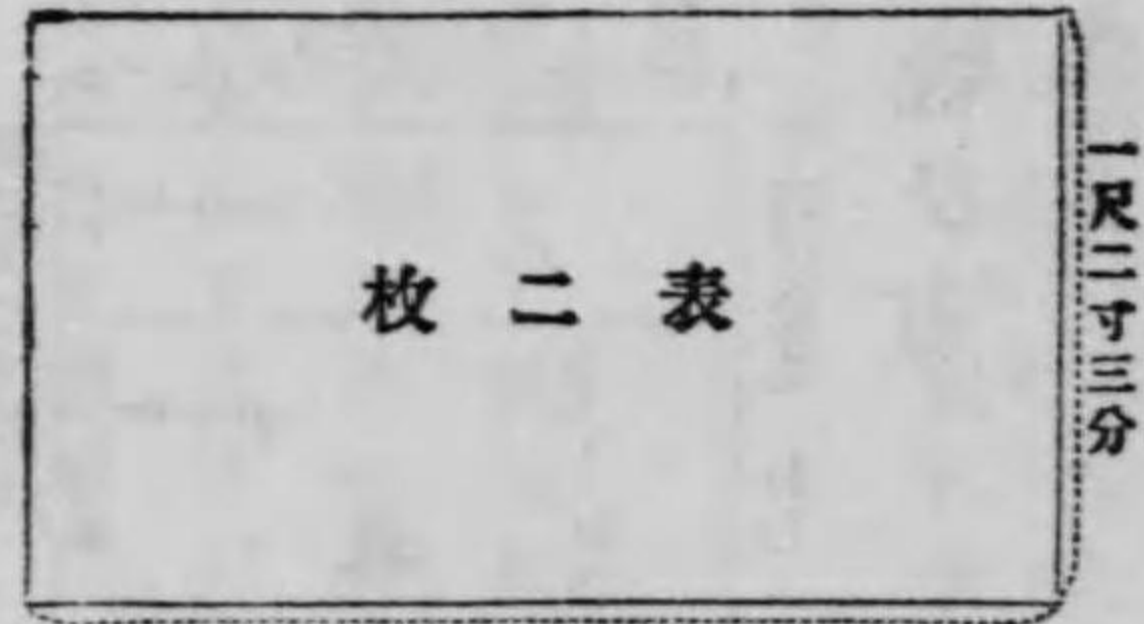
縫ひ終りましたらば、きせを極く／＼少くして手前側裏布の方へ折をか
 け前に明けて置いた穴から表へ返し、其の縫ひ目を拾つて拵けて置きま
 す。

これで全部出来ましたが、後に縫つた口明は未だ仕上げ鍍がかゝつて居
 りませんから、前に縫つた口明同様二厘五毛表へ見返しをつけて平鍍を

旅行用信玄袋

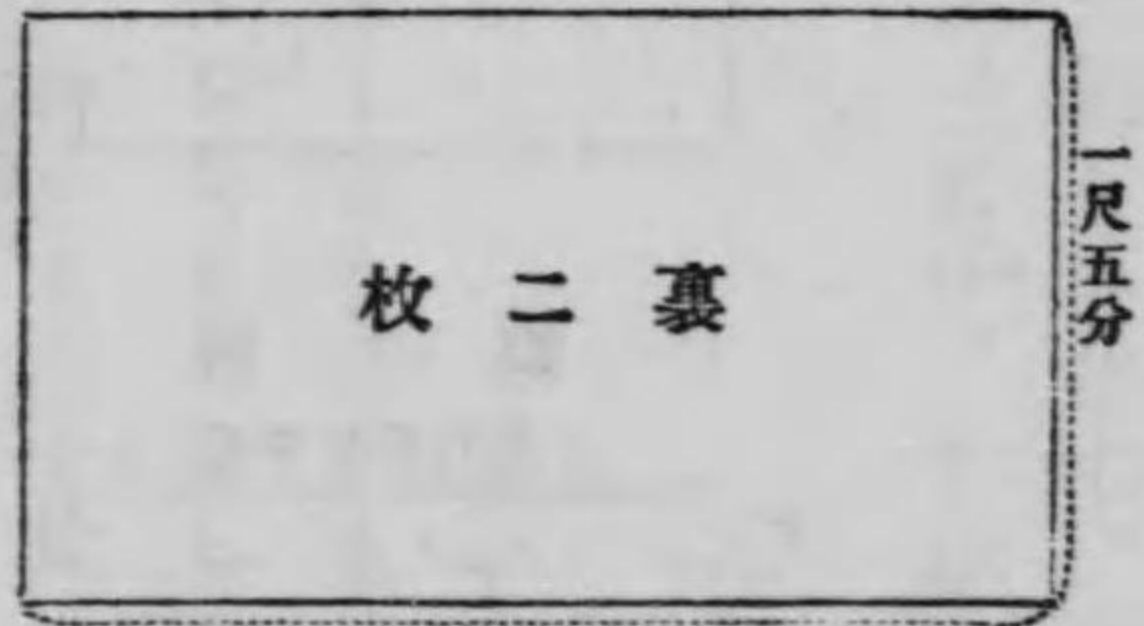
一 裁ち方及び篋付

圖 一 第



一尺一寸七分

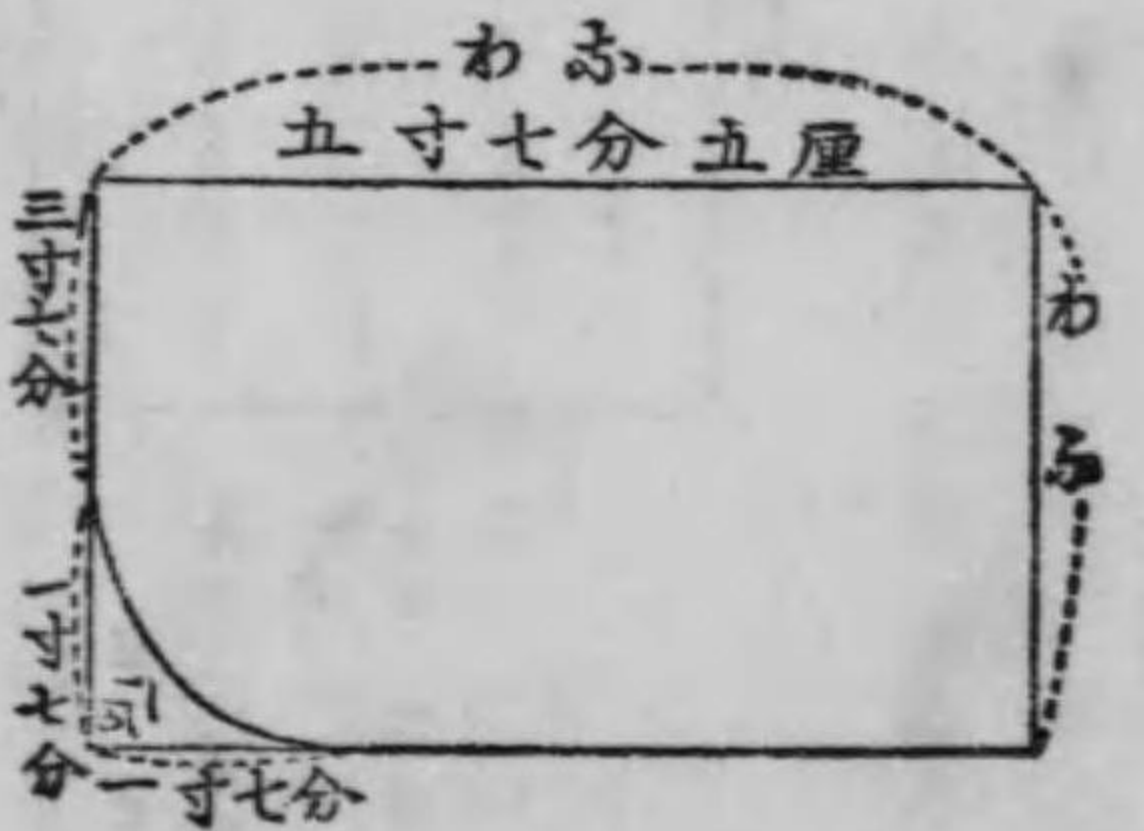
圖 二 第



一尺一寸七分

圖 三 第

四つ折りにして縫う



旅行用信玄袋

八三

人形の着物の割出し方
 八二
 當ります。最初裁た時裏を表より一分狭くしてありますから裏表の裁切を合せて縫へば自然二厘五毛ほどづゝ見返りがつく譯です。此の外縫ひ目の角々へは糸を突き通して帯の角を仕上げるやうに薄く霧を吹いて鍔をかけて置きます。

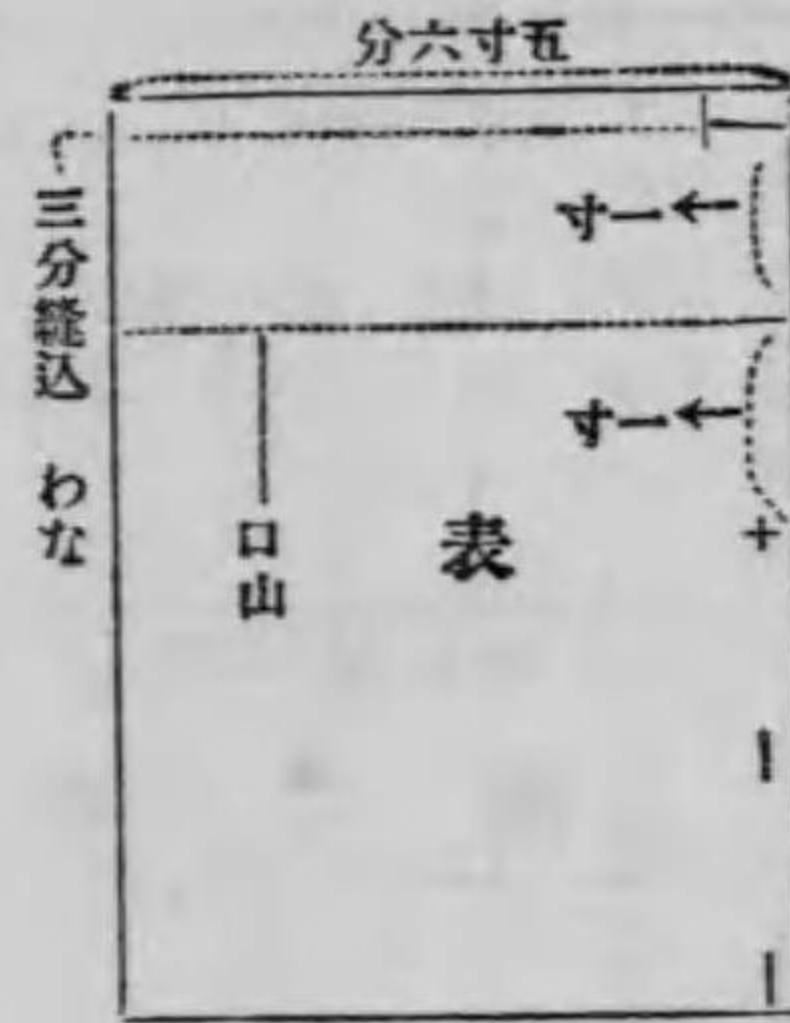
二つ折りにして笥にする

紐口明二寸三分

二分五厘縫込

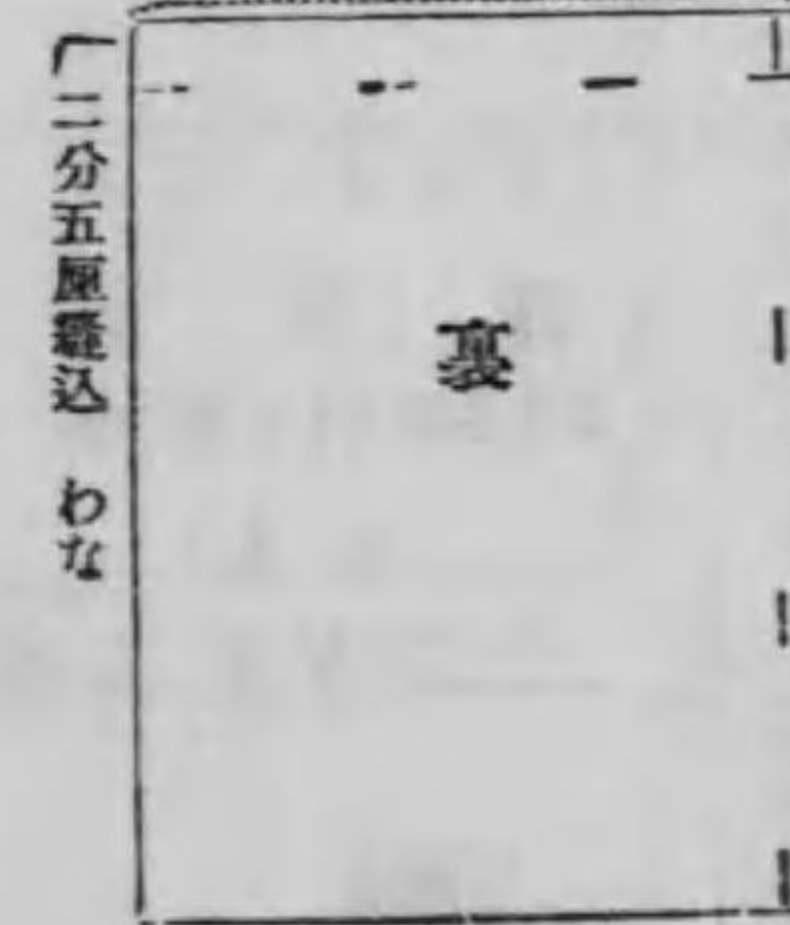
圖四第

分六寸五



圖五第

厘五分五寸五



紐 丈
長さ 二尺五寸
二本
太き 二分位

二 縫ひ方

底 初めに底を第三圖のやうに、新聞紙で形をとつてから、厚紙(ボール紙)などの上へのせ、それに形をうつしてから、紙をさります。底にはボール紙の厚いのを二枚入れます。それには糊を全體に引いて、くるはぬように、二枚をよく合せて貼りつけておきます。それから布を裁ちます。其間に、貼りつけた底紙の糊が乾きます。

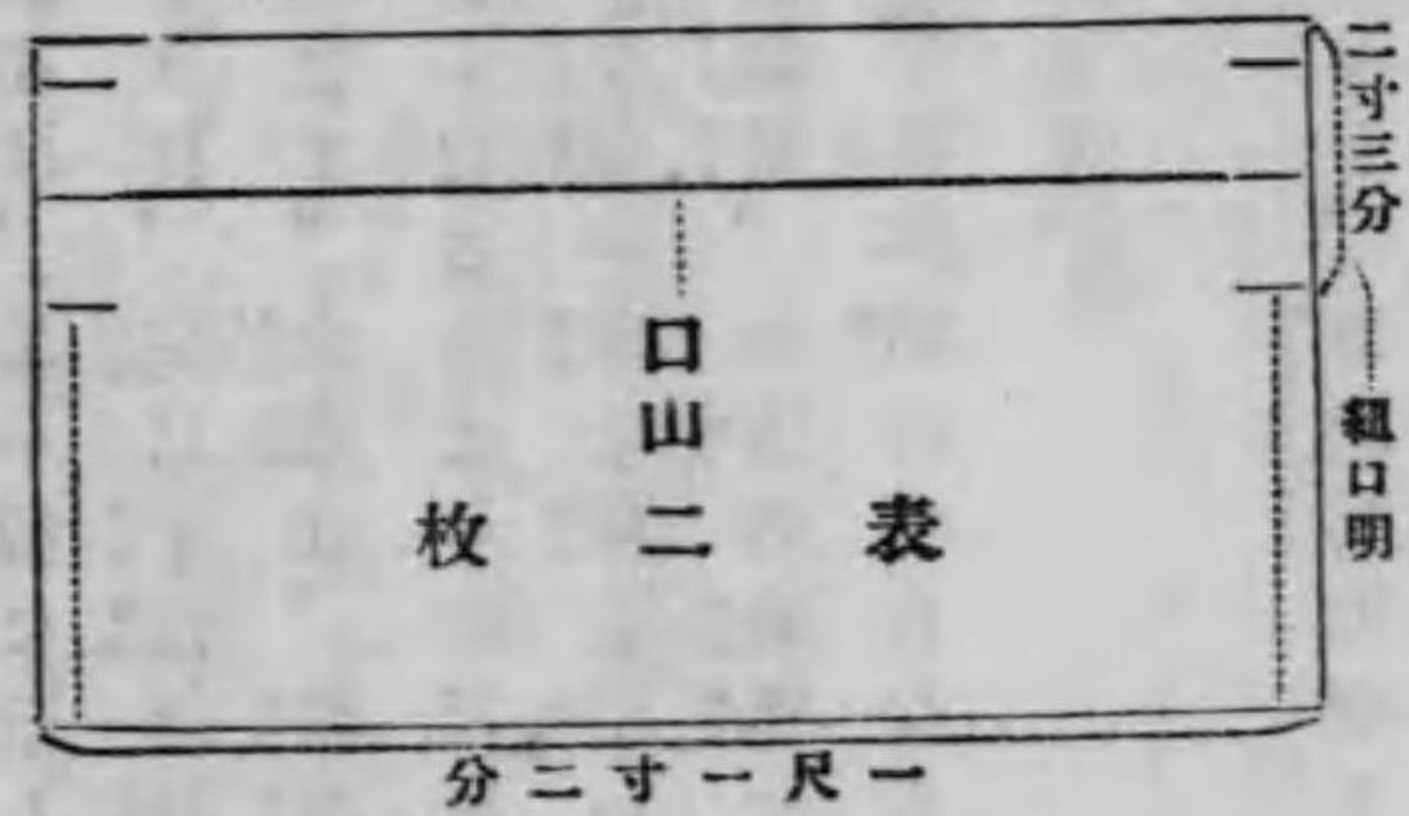
表布は、第一圖に示した寸法だけの物を二枚とつて、裏布も第二圖のやうに、同じ寸法の物を二枚裁ちます。底布は、裏表とも一枚づゝ裁ちます。底布は、厚紙の大きさをより三分周り大きく裁ちます。(三分大きく取るのはそれだけが縫代になるのです。)布を裁ちましたら、底紙の片側一面に糊を引いて、其上に、先づ底布の表を貼りつけ、次に前と同様、一方の底紙に糊をつけて、裏布を、貼りつけます。底の両面に、布が貼れましたら、三分、まわりに出てゐる布に假縁をかけておきます。

表 表布を、第四圖のやうに、二つ折にして笥をします。布巾一尺一寸七分の物を二つ折にしましたから、五寸八分五厘になります。それを、上から下まで、五寸六分に巾の筧をします。さうすると縫代が五分五厘になります。次は、上から二寸三分に、圖の様に筧をつけます。こゝは、紐口明になります。其の内を、上から一寸三分に、又筧をし

す。こゝは口山になるのです。そして、三分は裏に折返してからの縫ひ込になるのです。この筧をするときは、表布を、二枚重ねてします。筧ができたならば、それをひろげて、第六圖のやうに、上から二寸三分下がったところから、両端を下まで半返しで縫ひます。さうして、

第六圖

表布二枚合せ縫つた圖



第七圖

裏布二枚合せ縫つた圖



鏡で割つておきます。上の方の、二寸三分の紐口明きは、筧通り巾を折つて、そこを、本返しで縫つておきます。さうして上から一寸三分の、口山の筧を、ぐるりと裏の方に折り、その中に紐を入れて、

そこに、假駮をかけておさへておきます。

裏は、表と同様第七圖にある通りに、裏布を二枚合せて、上から下まで、両端を半返しで縫つて、鏡で割つておきます。そして、上の方をぐるりと三分通り折ります。次は第八圖のやうに、表と裏とを合せます。さうして、表布の、紐口明のところ、表と裏との、縫ひ目を兩方とも合せて間あひだには三寸おき位に待針をうち、本返しでぐるりと裏表を合せます。

第八圖

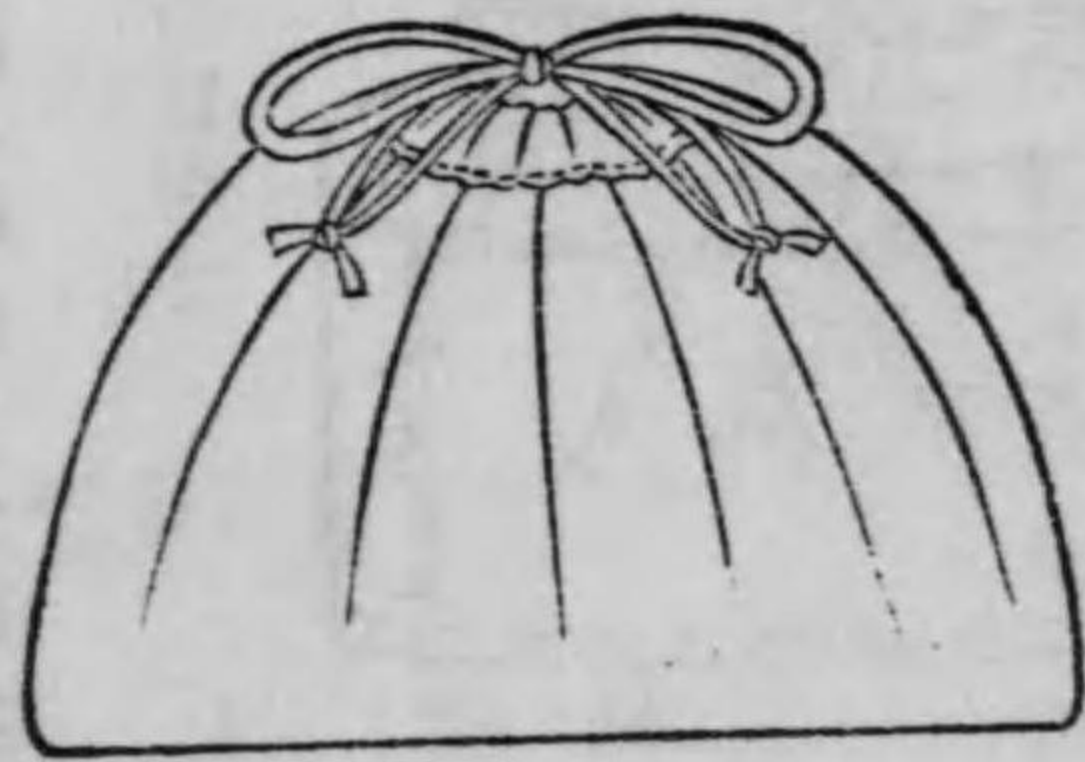
裏表合せた圖



底付

底は横巾の中心と、袋のまわりの両端の

出 來 上 り 圖

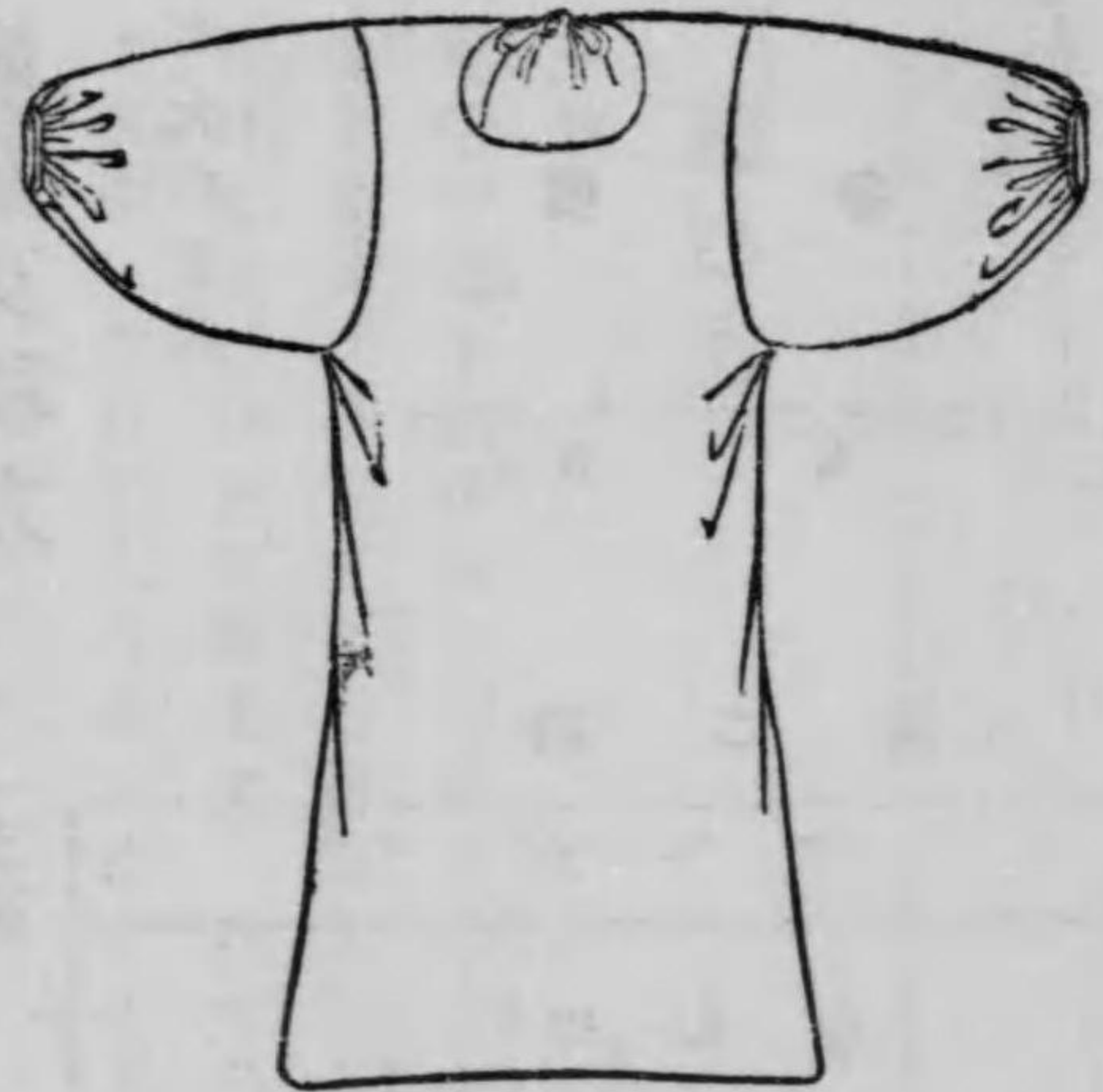


縫ひ目とを合せて、底のまわりに待針をうち、一と針ぬきにして、本返しで縫ひつけます。縫ひつけるときは、底のすぐ際を縫つてゆきませんと、縫ひ上げてからさつちりしませんから、こゝはとりわけて氣をつけないといけません。底がつきますとそれで出來上ります。

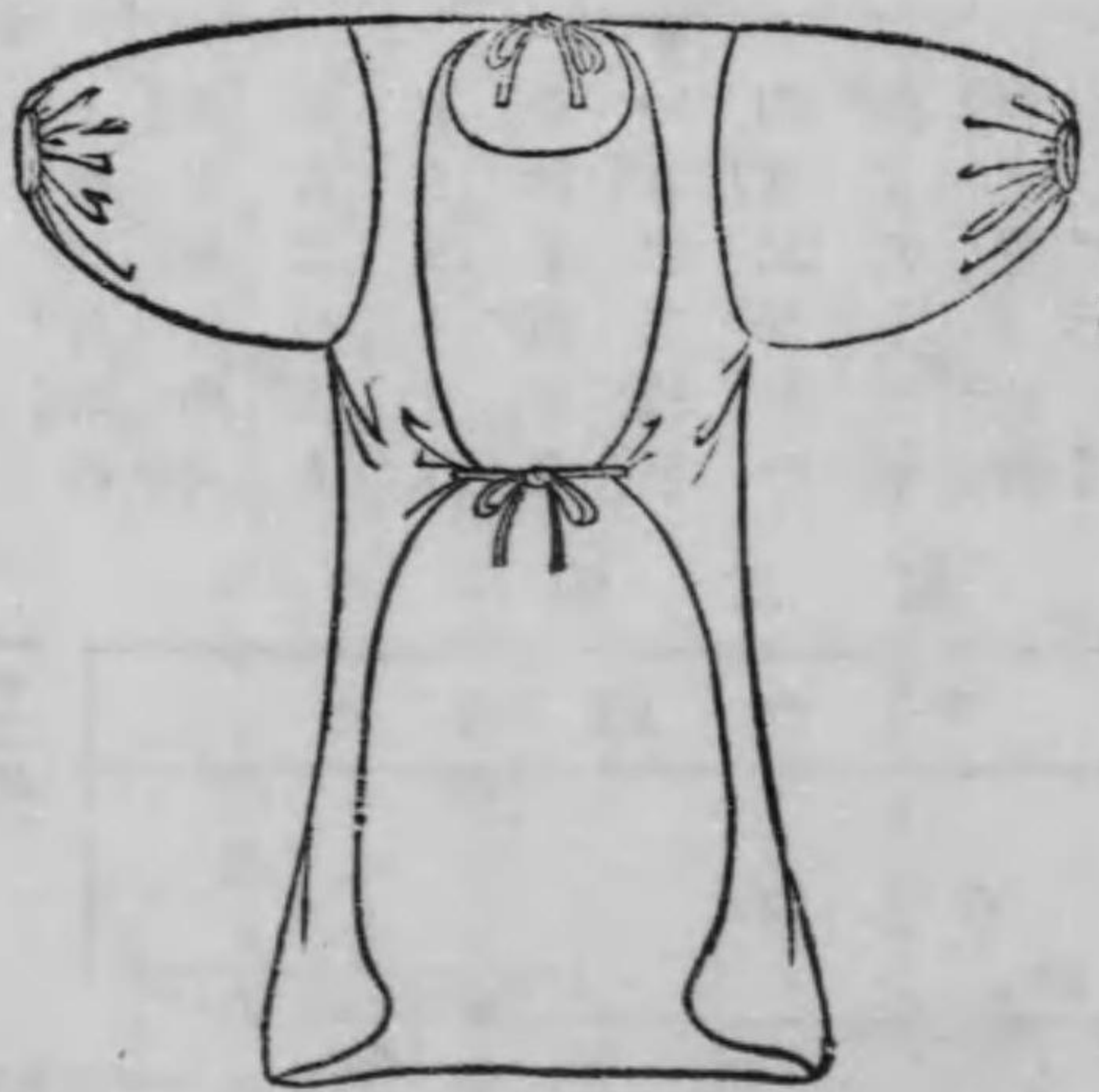
(信玄袋おはり)

割烹前掛
出 來 上 り 圖

割烹前掛



後

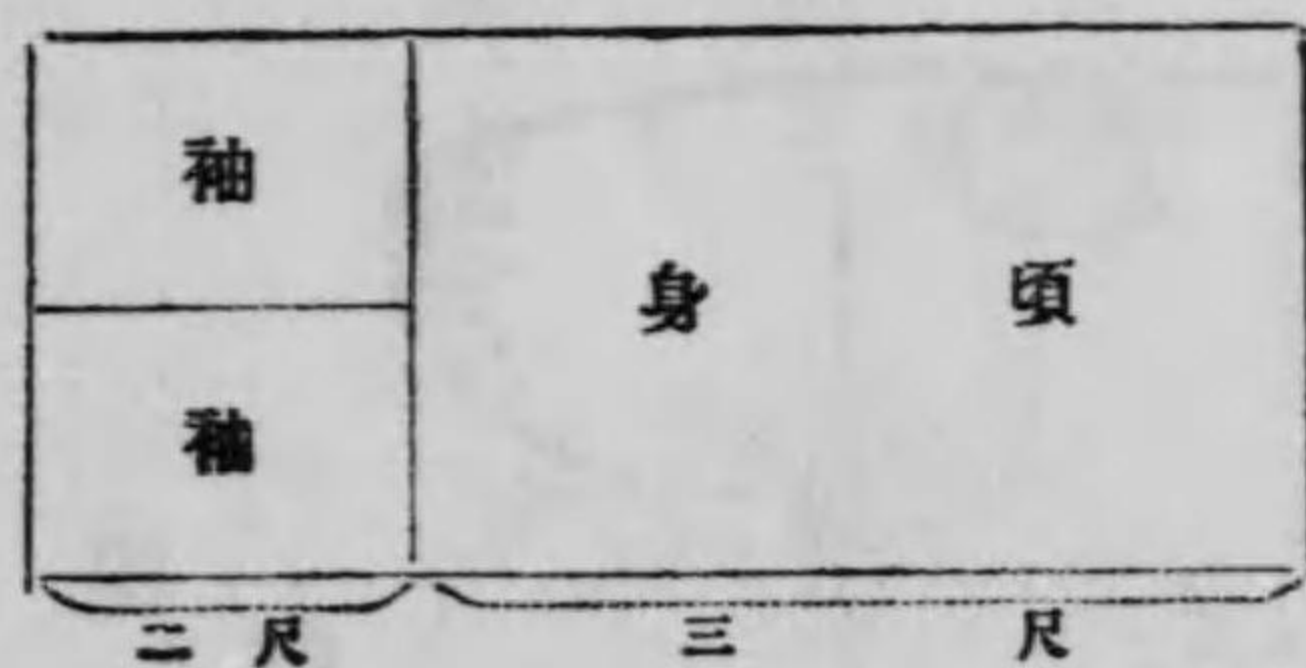


一、裁方及積方

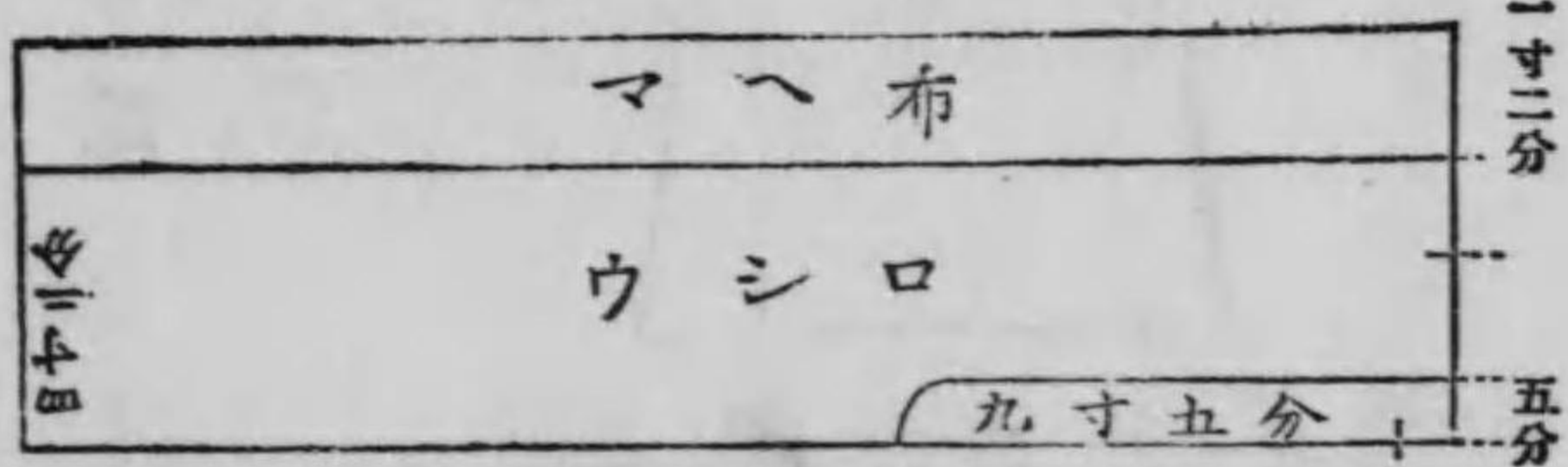
制衣前掛

用布大巾五尺

圖一第

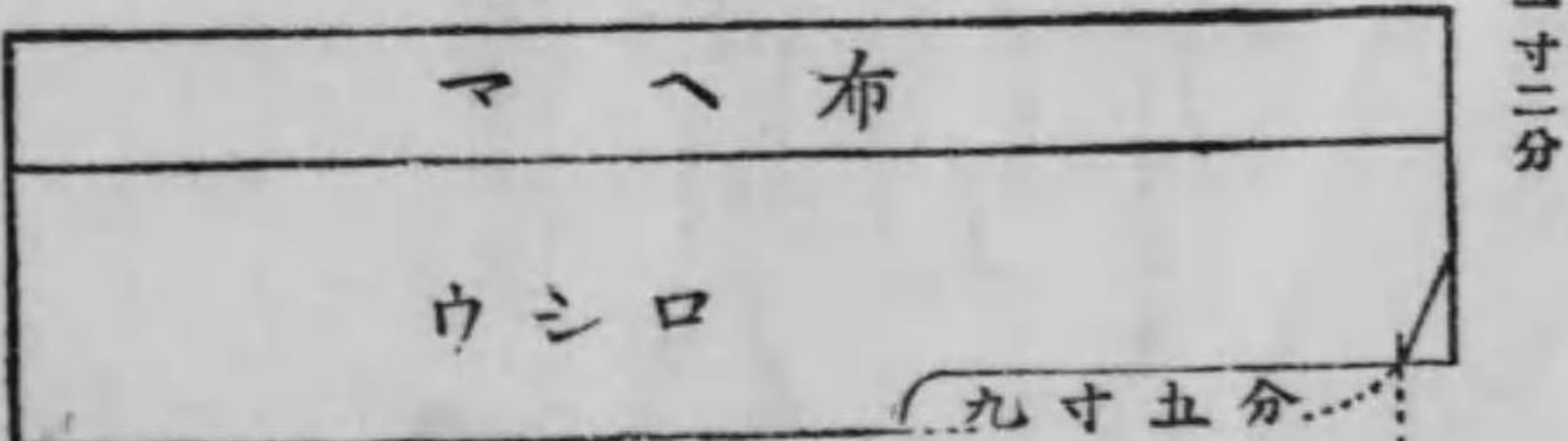


圖二第



上圖は身頃の
布を縦に中央
から二つ折り
にし、また
それを輪でな
い方の二枚を
四寸二分だけ
折りまして、袖
明となる部分
を五分巾九寸
五分だけ切り
落します。

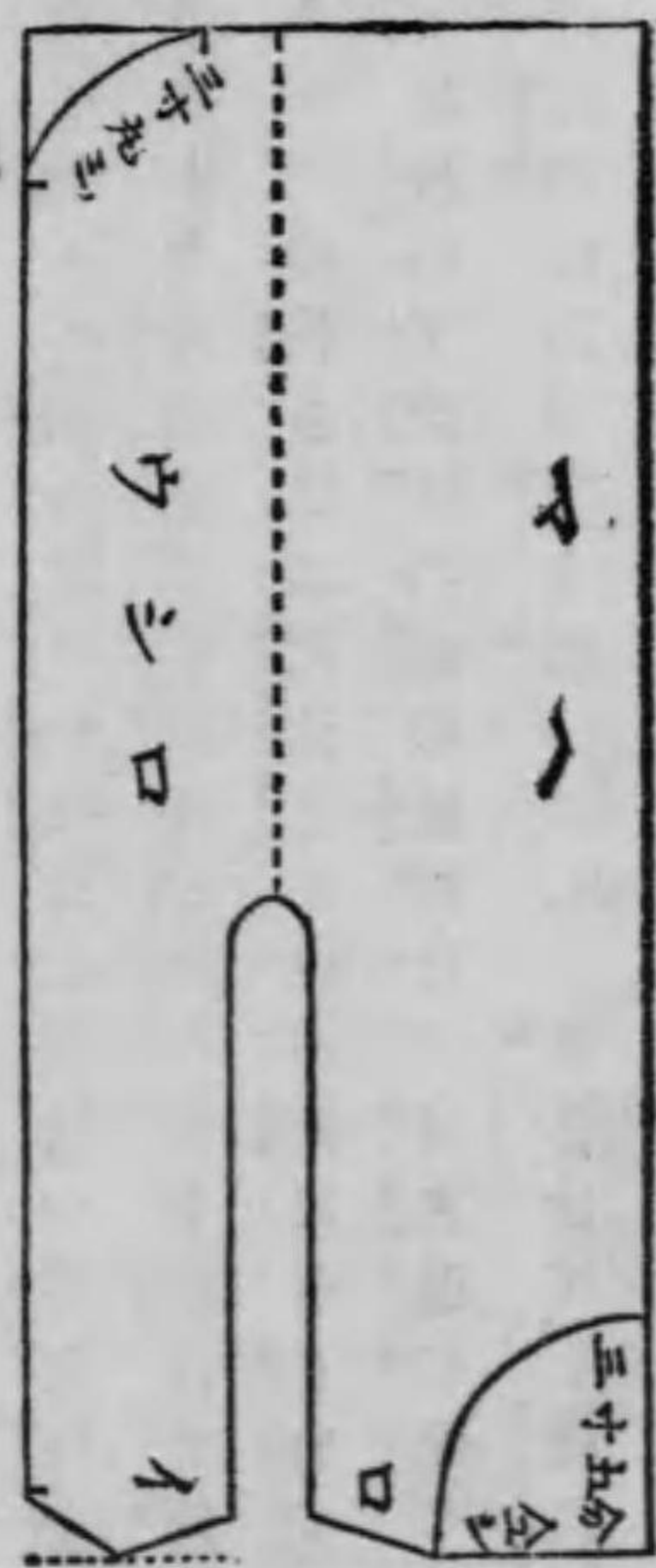
圖三第



一寸二分 九〇

五分切

圖四第



圖五第



二、縫ひ方

イ袖

寬附の通りに縫ひましたら袖下の縫ひ込みを一枚だけ一分残して切り取ります。そして表へ針目を小さく出して三つ折りにいたします。袖口にはごひを入れます。六寸のごひをつき合せ袖口を三つ折りにして其間にごひを入れ、つばり、折けてゆきます。

□身頃

制衣前掛

後の方を一分だけ短かくして肩はぎをいたします。縫代は後の方へ折りを折つて三折ぐけといたします。

ハ袖附

二分の縫代で袖をつけまして折は身頃の方へ返します。袖下の五分だけ丸く切り取つてあります處は、其まゝ丸くつけます。これは身頃の下も丸く切り取つてありますから。附け上つた袖の身頃の方へ丸く食み入る格好になります。

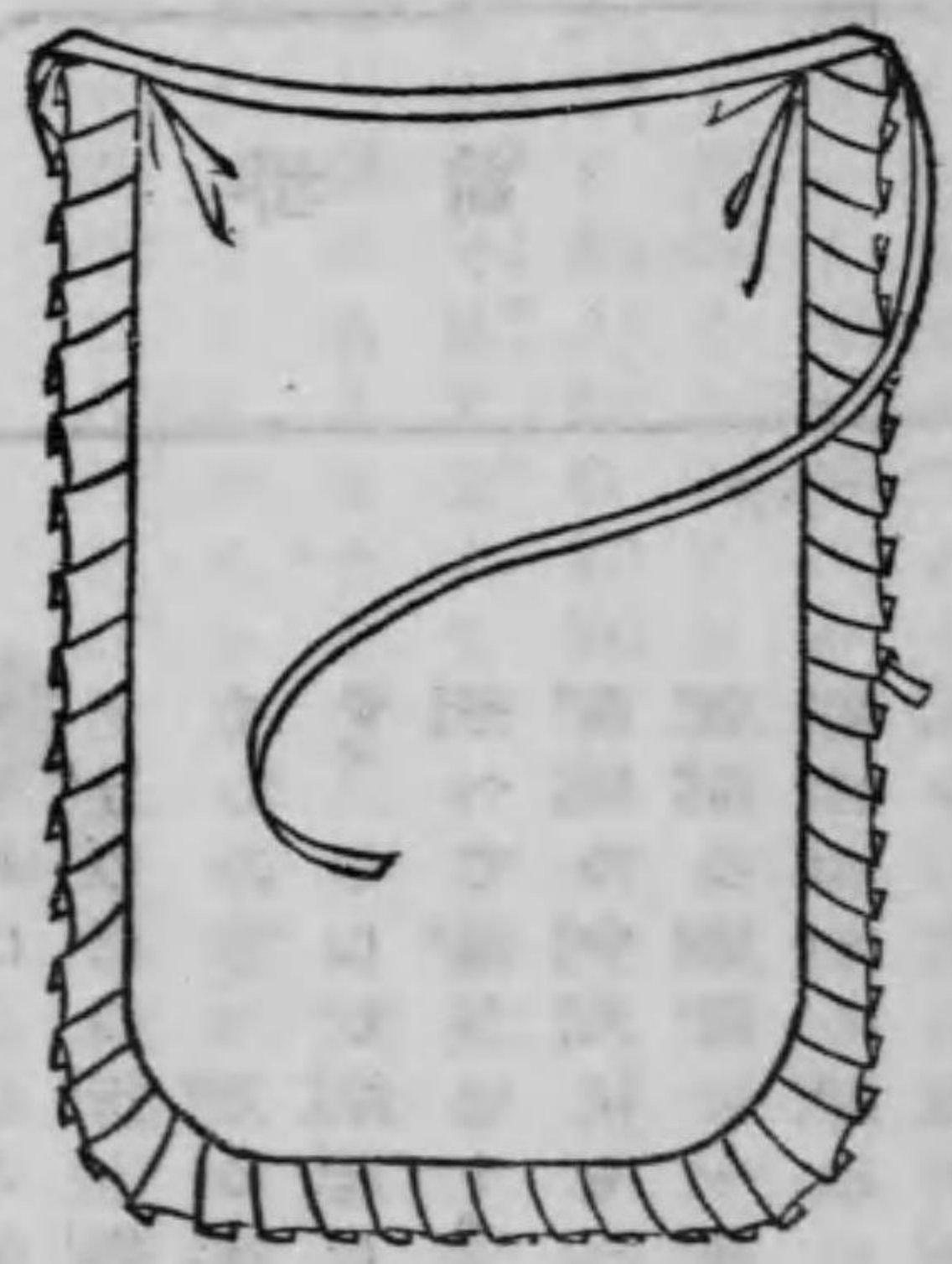
ニ胸明

丸く落してあります中央に二つ三つ襷を寄せてもよいのです。トップの間に此の胸明きの裁ち目を挟んで縫つて行きます。

トップの長さは二尺位でこれが紐になります。

次に後の下裁目の處の兩端は二寸丸味になつて居ります處へ、以前の下の裁目は三つ折り縫ひにして置きます。後に紐をつけます。七寸位の長さのトップ二本つけます。

出 來 上 圖



ギヤダ附前掛

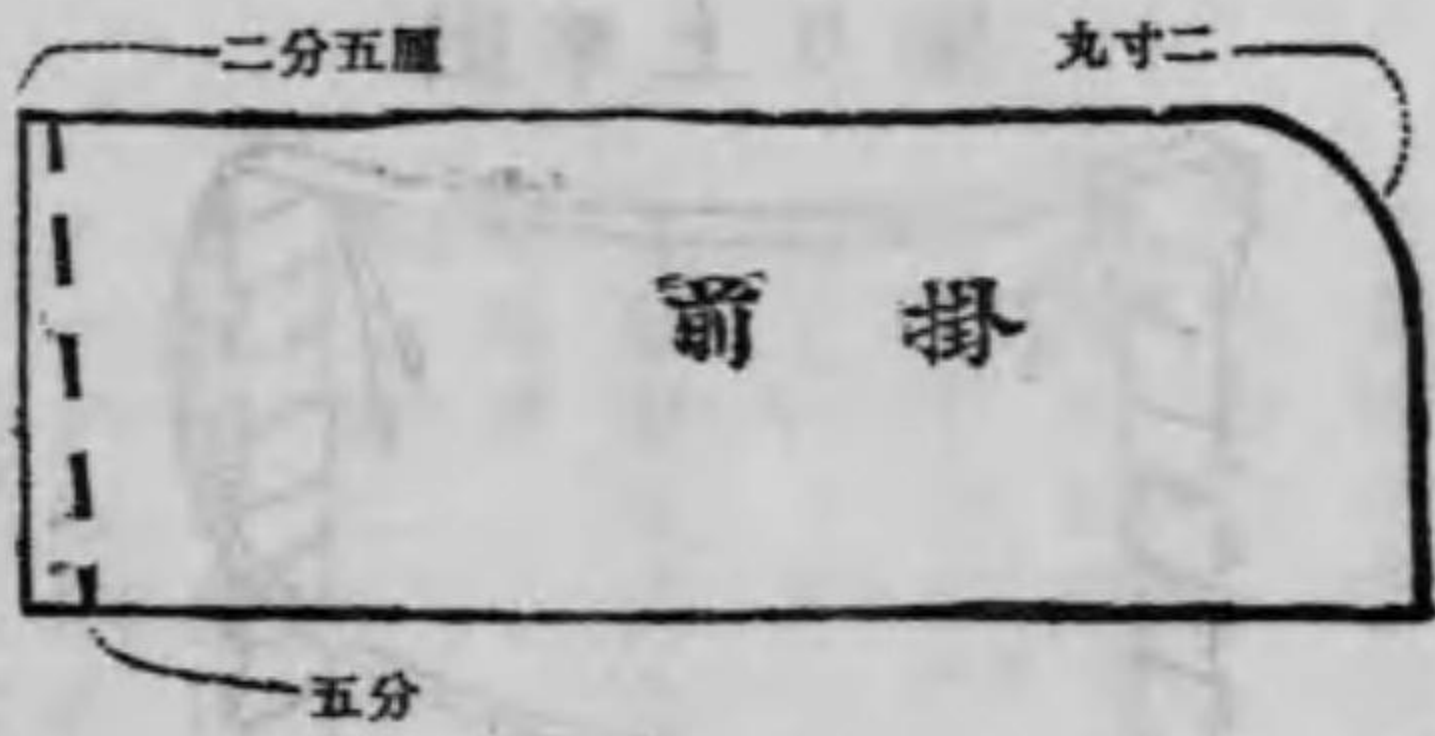
一、裁方

用布大巾二尺二寸五分



大巾半分が前掛となります。二本半紐であとがギヤダ。

ギヤダ附前掛



分兩端二分五厘の縫代に縫ひつけ後でくけつけます。

二、縫ひ方

ギヤダは、二分の縫ひ代ではぎ兩割にしちして、兩方を一分の三つ折り拵けにいたします。五本半どもはぎましたら、一方の裁目を三つ折りにして細かく縫ひます。そして片返しにギヤダを取ります。そして縁で押へて置きます。

前掛の中央にも三つ計りギヤダを寄せて置きます。前掛の周圍に一分の縫代で縫ひつけましたら、折りを身頃の方に返して二分位の隠し縁を掛けます。

紐は半分の布を中央につき、前掛の中より兩方へ五分廣くして兩方の紐を拵けて置きまして、前掛の中央五分兩端二分五厘の縫代に縫ひつけ後でくけつけます。

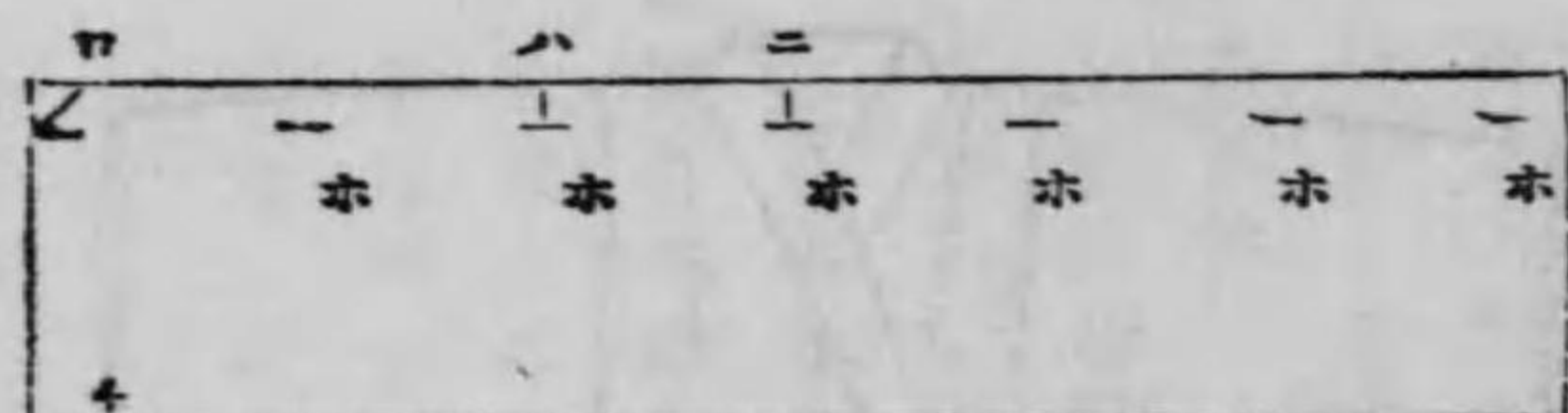
人形の着物の割出し方

人形の着物は、商賈人の手になりましたものは、其の人形によく合ふやうに肩揚げや腰揚の工合から袖と身頃の釣合も至つて格好よく出来て居るもので御座います。素人の手で縫ひましたものは、どんなに仕立がうまく出来て居ても、着物と人形とが別々に離れて居りまして、じつくり合ひません。これは人形と其の人形の着物が寸法が上手に行かないからで御座います。人形の着物の寸法と云ふものが、普通我々の着物のやうに、年齢に應じて、一定して居ると譯がありませんが、人形は其の大きさによつて勝手に寸法を割り出して行かねばなりませんから、一寸見當がつかかぬるので御座います。こゝに寸法八寸五分の人形を持ちまして、其寸法裁方を申しあげます。

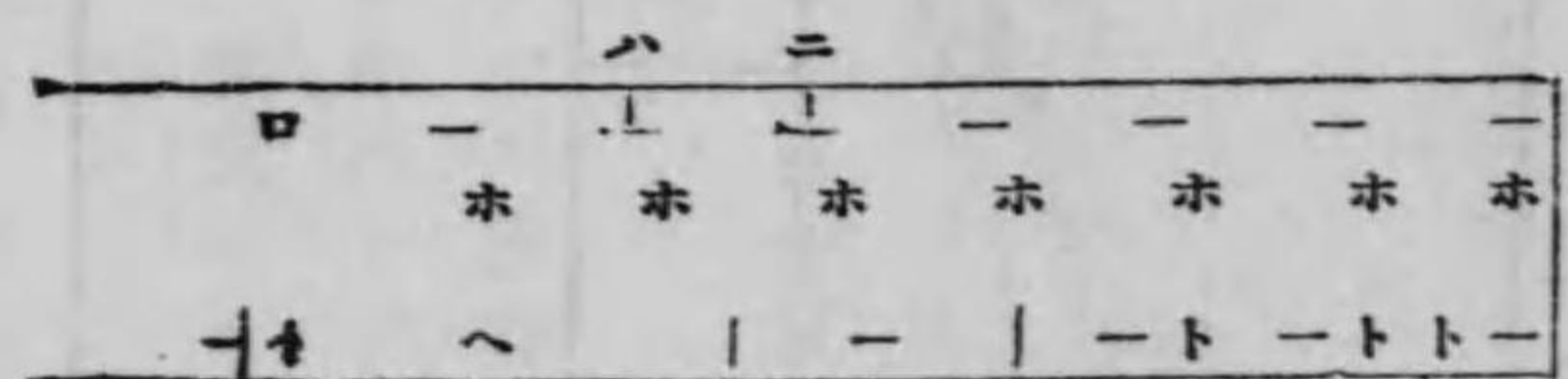
一、裁方

二、標付

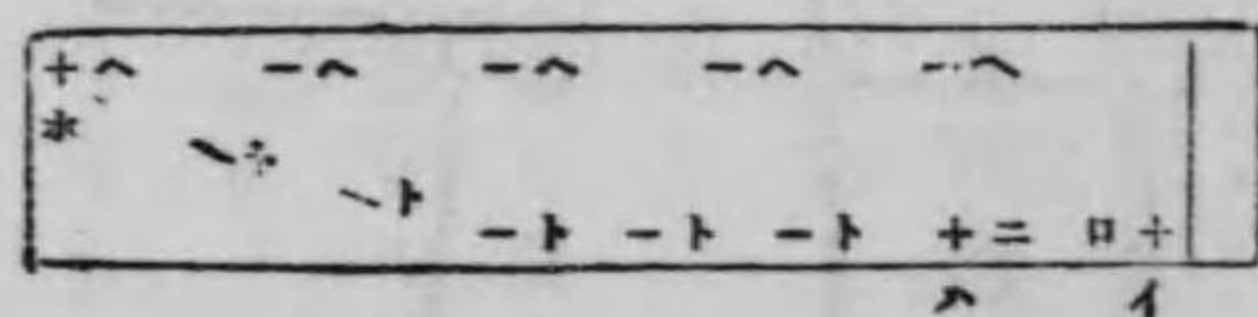
頃 身 後 (1)



頃 身 前 (2)

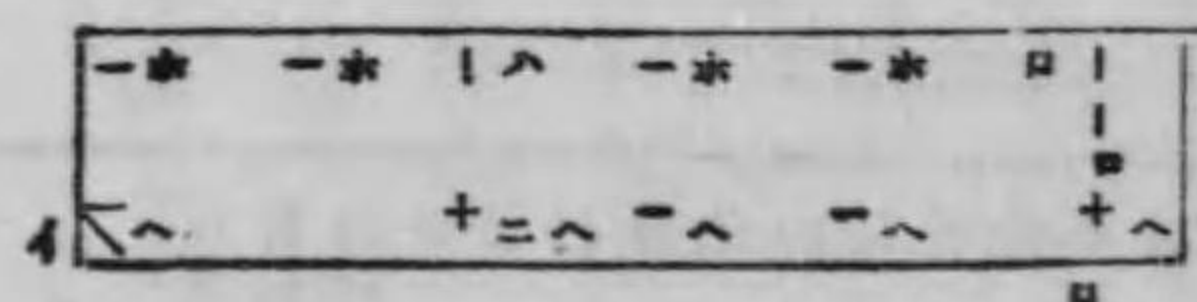


衿 (3)



(1) 後身頃
イ 背山
ロ 袖山
ハ 袖付
ニ 身中
ホ 身巾

袖 (4)



(2) 前身頃
イ 下衿
ハ 衿巾

(4) 袖

イ 山
ロ 袖下
ハ 付
ニ 付
ホ 袖巾

(3) 衿

イ 揚
ロ 先
ハ 下
ニ 合
ホ 下
ト 衿付

人形の着物の割出し方

分四寸四尺二布表 (1)

三寸五分	後	三分 コシク	前 頃身
			同上
一寸七分	衿		衿
一寸二分	エ		リ
二寸八分	袖		袖

人形の着物の割出し方

。すまろく分三へ頃身後りよ心中は明肩衿
尺二布裏 (2)

衿	残
先	前
後	前
袖	袖

寸五廻裾 (3)

袖	
口	
	前
	前
	後
	襦立
	襦立

八、衤下り

首廻りの三分の一で、一寸一分で御座います。

二袖付

首廻りの三分の一で、一寸一分で御座います。

ホ袖口

人形の袖口は、せまいと何となく見栄えがしないもので御座いますから付よりも二三分多くして置きます。

へ身頃

身頃の中は前後とも同じ巾にしまして、乳の廻りの寸法の四分の一にいたします。つまり五寸五分の四分の一ですから、一寸四分で御座います。

ト衤巾

前身巾の三分の二が、普通で御座いますが、人形の着物はすべし前を廣くした方が見栄えがよいやうで御座いますから、三分の二より二三分廣くして置きます。

チ袴下

着丈の三分の一で御座いますから、この人形でなら六寸六分の三分の一、二寸二分になるわけで御座います。

リ袖巾

身巾よりも七分だけ廣くいたします。丈は身丈の三分の二で御座います。人形の着物は袖巾の廣い方が格好がよいやうです。

又衤

衤巾は、ごこの寸法を標準にして割り出すといふわけには行きませんが、只着物の割合には、廣くして置きます。

四、縫方

普通吾々の着物と縫方にをいては、變りありません。たゞ衤を附けます時に、衤下りの寬から前身巾の寬まで、真直ぐにつけます。衤付けは寬付けで示してあります通り、四つ身の衤付けと同じく衤流れ

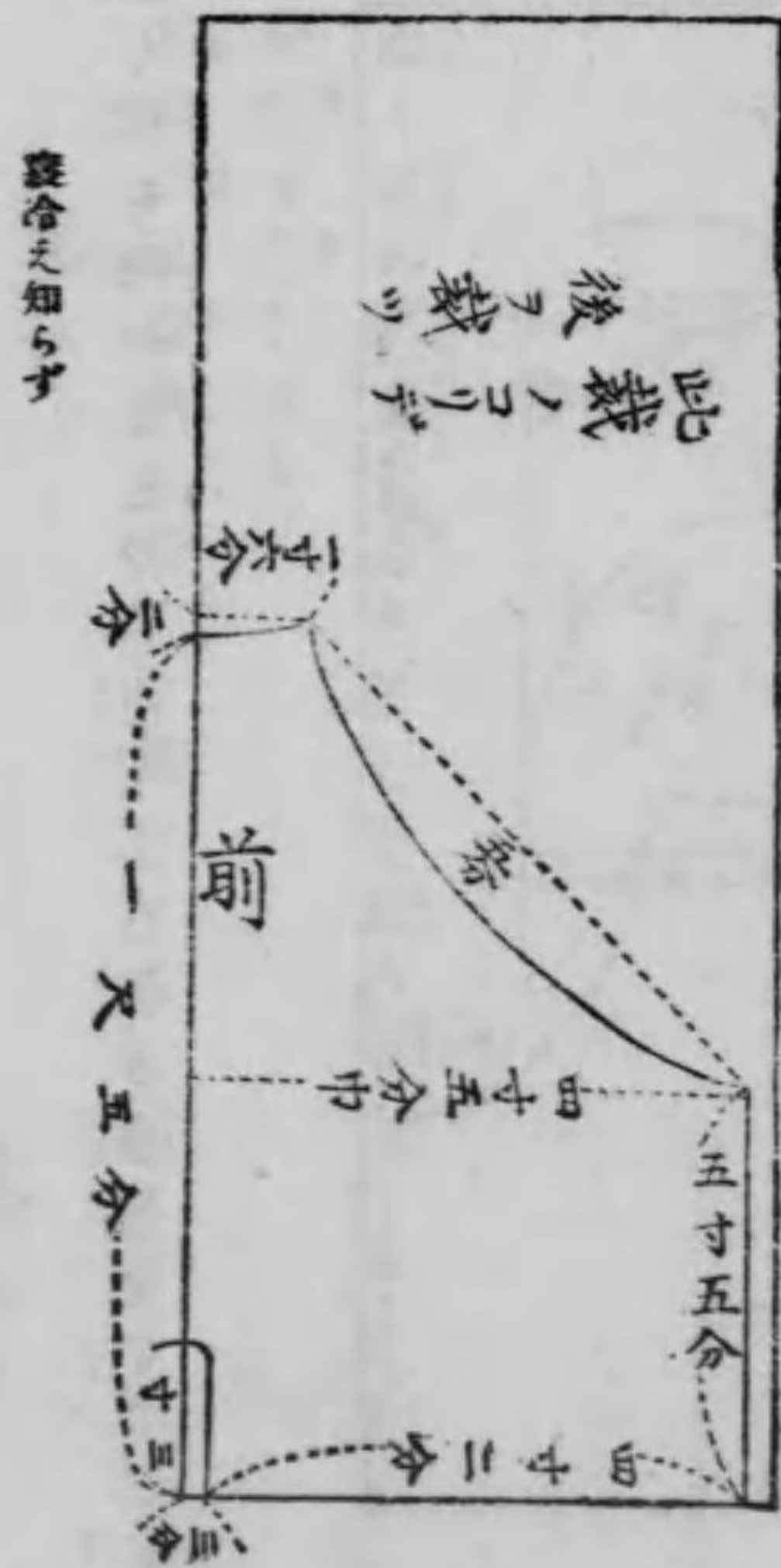
を充分に孕ませて袴をつけませす。
 人形の胸は高くなつて居りますから胸の巾をよほど廣くして置きませ
 んど前の袴と袴どが充分に重ならないでみつともないもので御座いま
 す。ですから袴でも袴でも胸巾でも充分に廣くして置くので御座いま
 す。
 すべてこの人形の寸法これを標準に割り出して行きますれば着せて見
 て格好のいゝ着物が出来ませす。

寝冷知らず

四五歳の子供の寝冷知らずの拵へ方をお話いたしませう。最も經濟的に
 と考案致したもので御座いますから布を立切れと横布と使ひませすから無地
 か友禪等なら何でも宜う御座います。編物だけは使はれません(自家用の時
 は見場をかまひませんから用つても差支へありません)

用布 丈一尺六寸五分 並巾裏表二枚入りませす。

(1) 圖の方裁

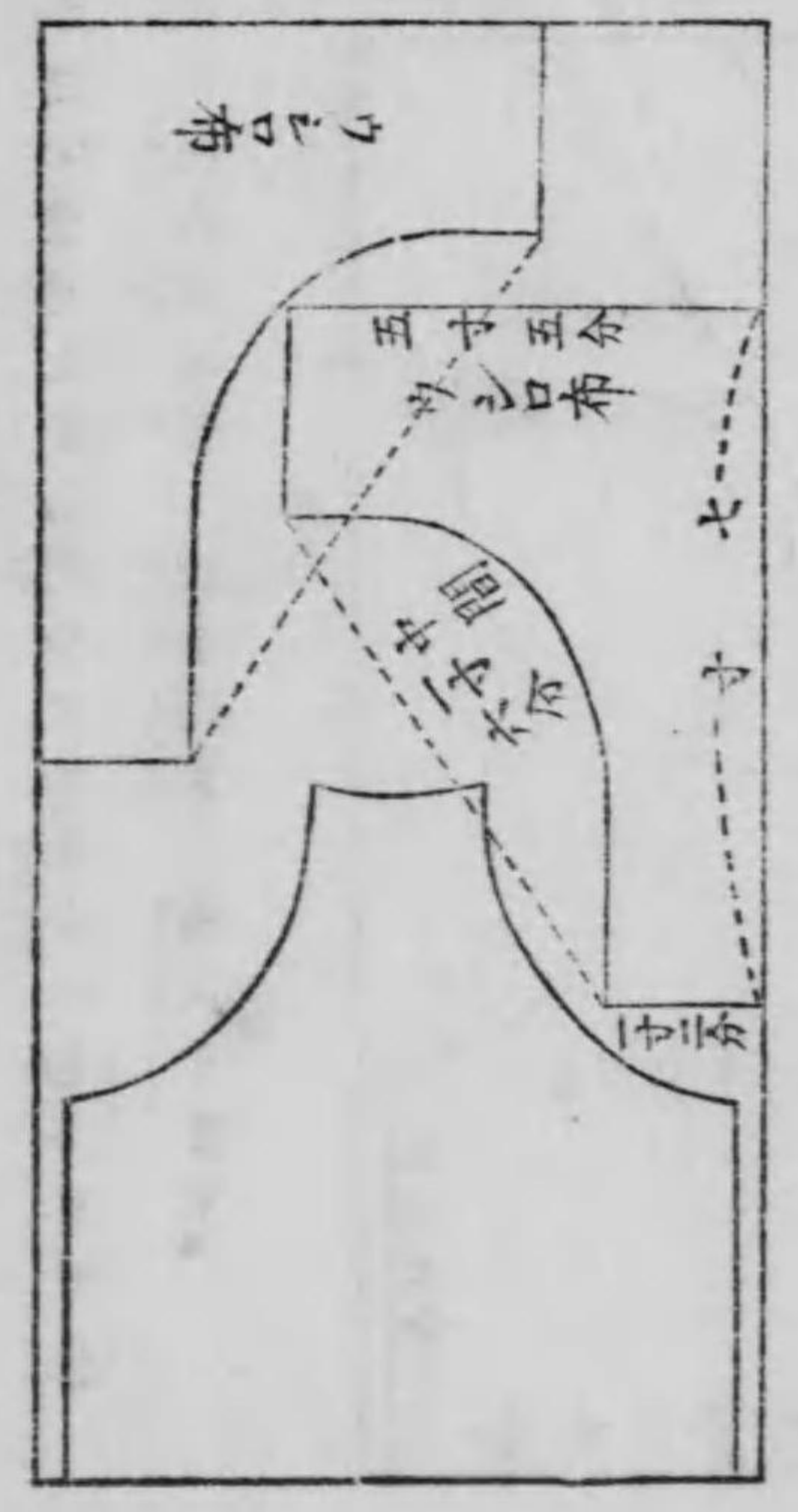


寝冷知らず

(1)圖の如く標を附けましたら用布から切り離します。

寝冷え知らず

(2) 圖の方裁

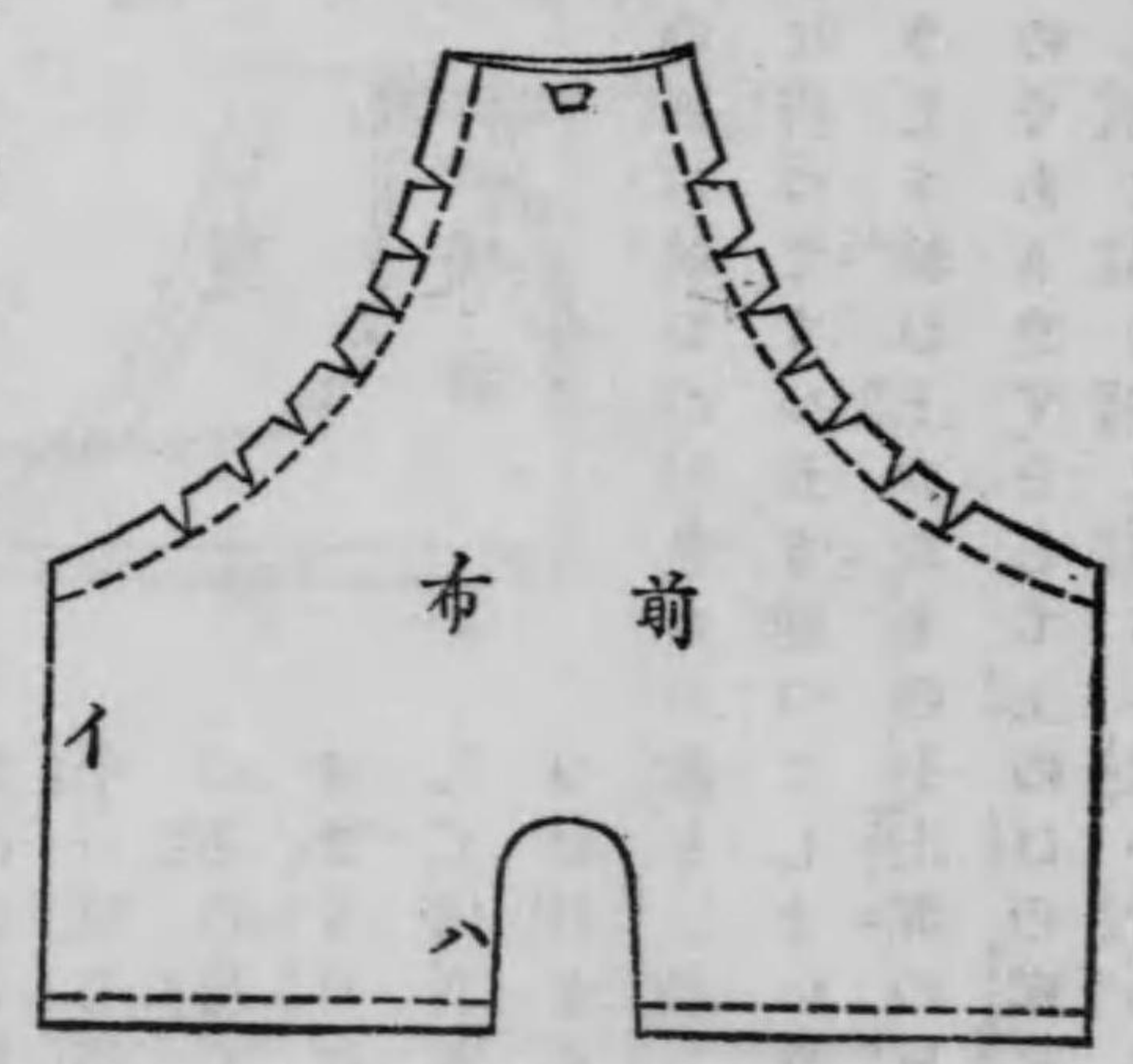


寝冷え知らずの前を裁ち切つた残りの布で(2)の圖の如くに後の布二枚取ります。

以上の裁ち方を、はじめ新聞紙にて前と後の形紙を取つて置きますれば、それを用布にのせて裁てば、其方が便利であります。裏表で前二枚、後四枚、いるわ

けで御座います。

(1) 圖の方ひ縫



(2) 方縫の布後



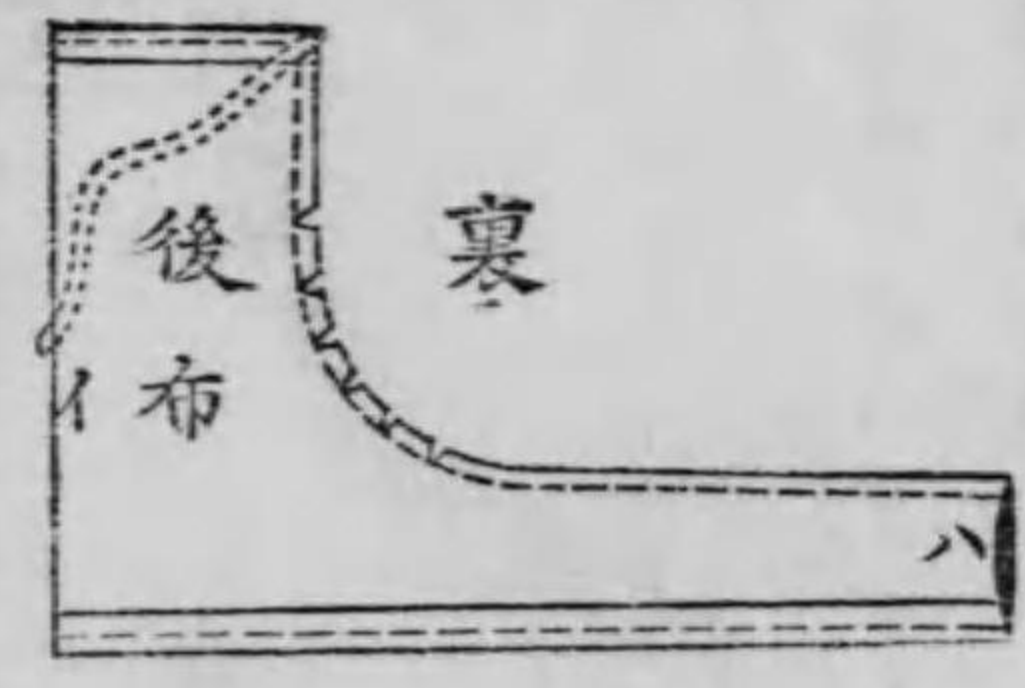
一圖の如く前の裏表を合せまして胸の兩側と下の方だけ縫ひ合せまして縫目を裏に折り返します。

(二)圖後布の方は、最初上の方を縫ひまして裏に折りつけ、そして、其縫合せた

寝冷え知らず

裏表の間に紐を挟みます。そして其儘にして胸から脇についてある處を縫ひ合せます。そして紐を入れ裏に折ります。

(3) 圖の方縫



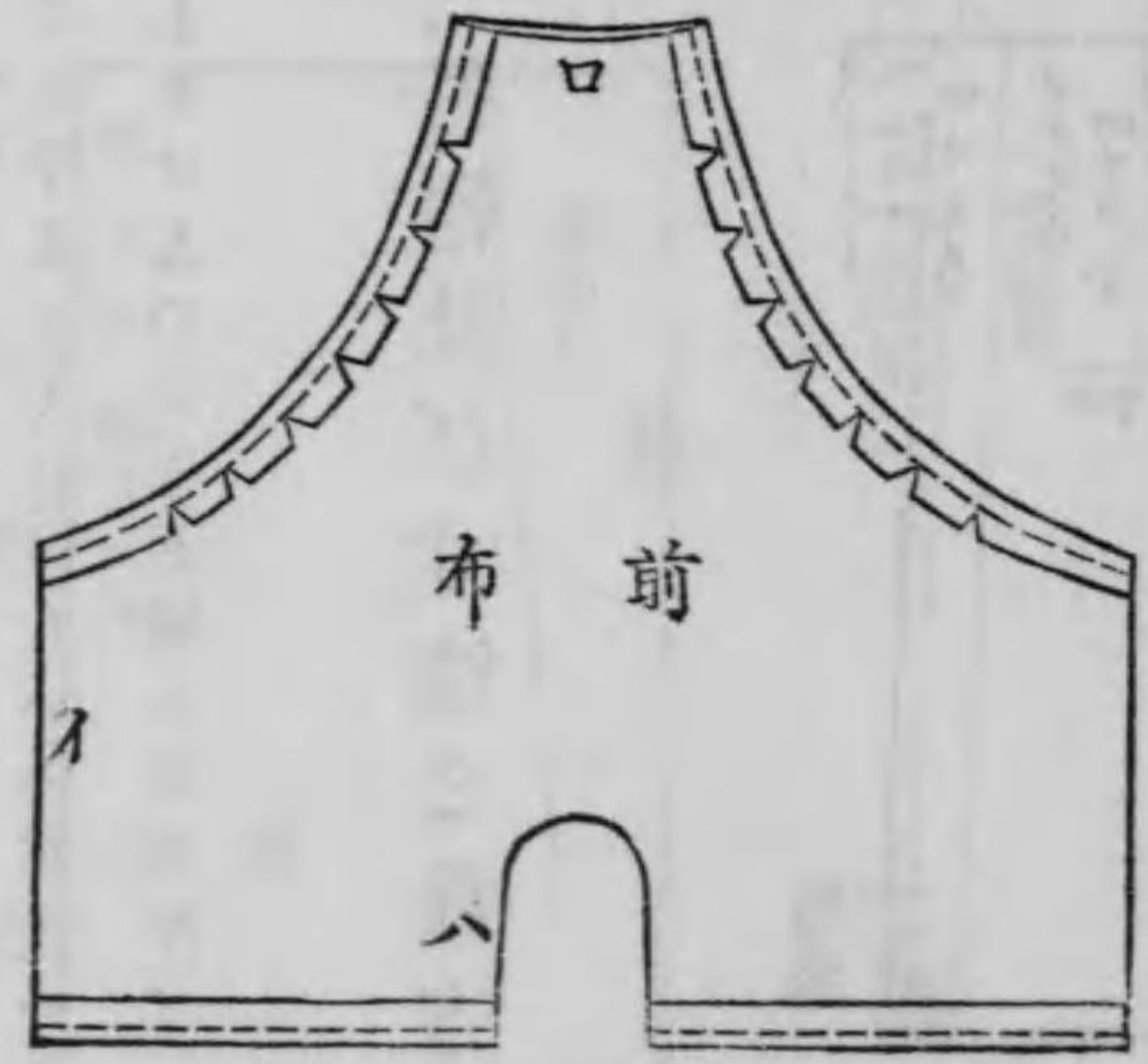
て前の脇に縫ひつけ、他の一端を裏に折つて、すつかり縫つてしまひます。かうして縫ひ上つたものを、上部の只一方の縫ひどびでない口から表へかへすのであります。そして上の口の處には紐をつけるのです。但し紐は脇の紐は、長さ一尺一寸巾三分のを二本、首一尺一寸の紐一本い

(三圖)は裏の方へ折り目を附けて、縫目を中にして表に返します。

今一枚の後の布も同じ様に縫ひ上りましたら、前の布の脇と後の布の脇とを縫ひ合せます。縫ひ合せます時には、前の布の裏と表との間に表を上にしてはさみ、兩端の縫目を裏に折り、そして四つ縫ひに致します。そして後の布の二枚とも斯うし

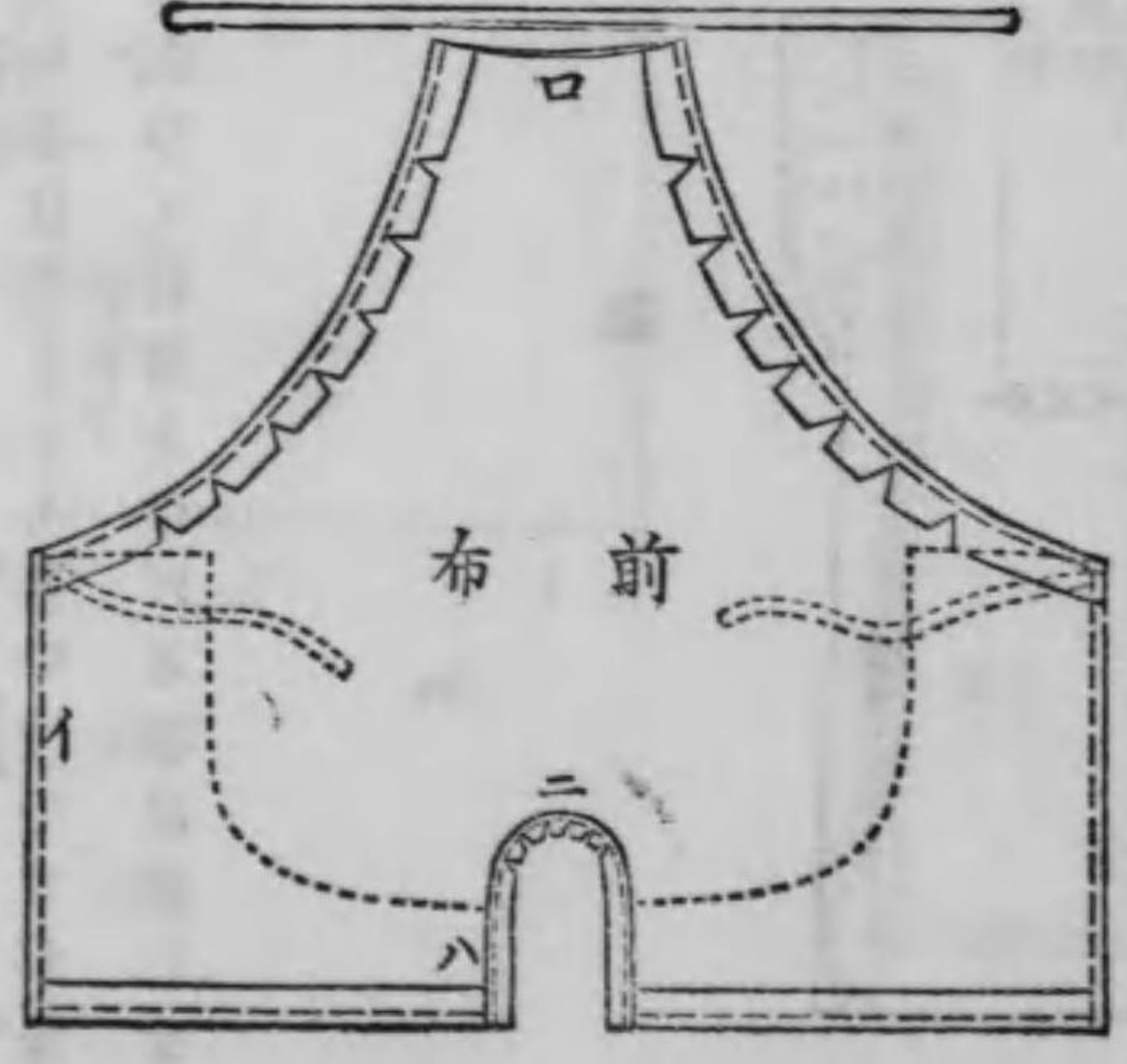
ります。

圖のり上來出



縫冷え知らず

圖るせ合と後ご前

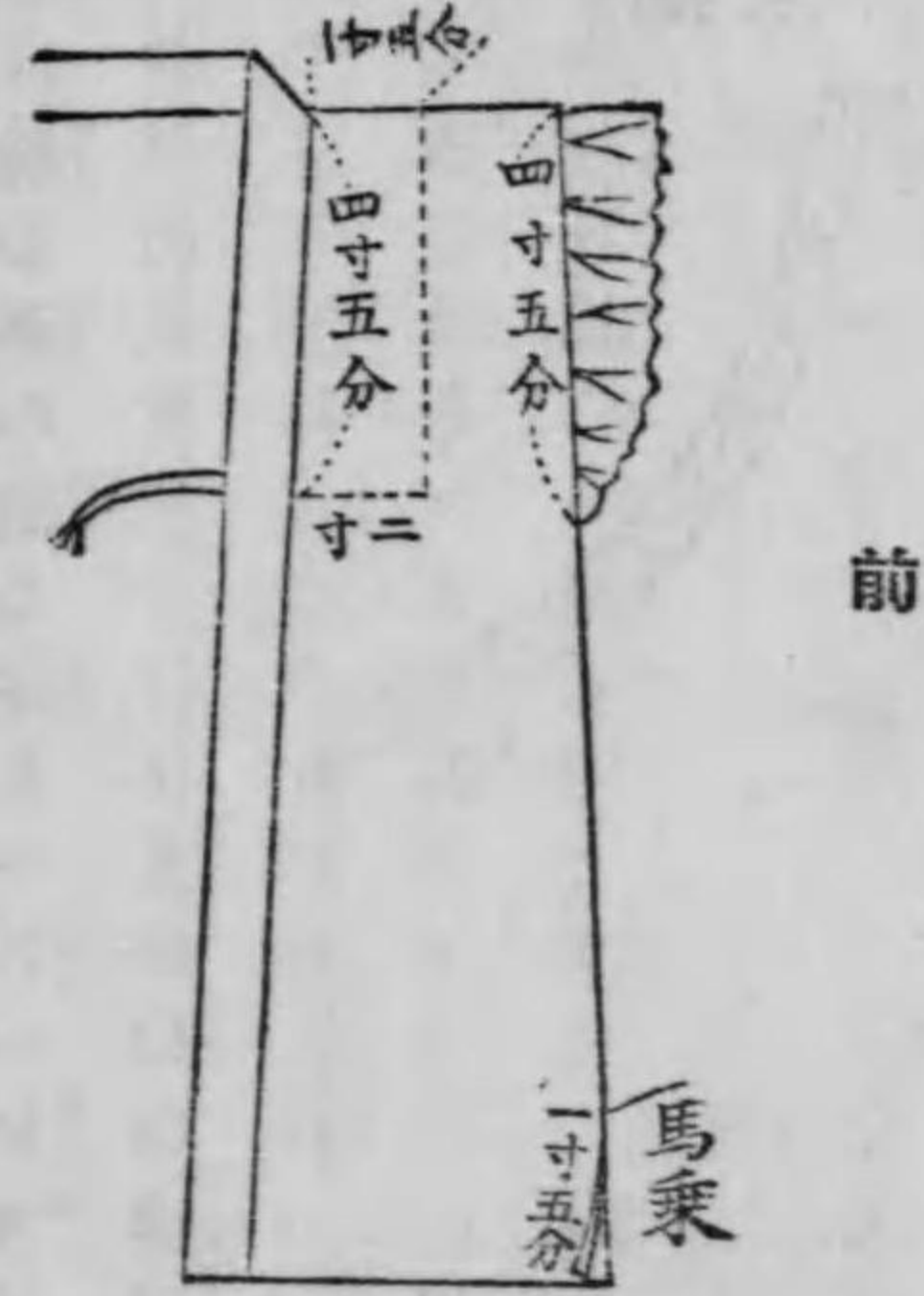


一ツ身の夏ちやんく

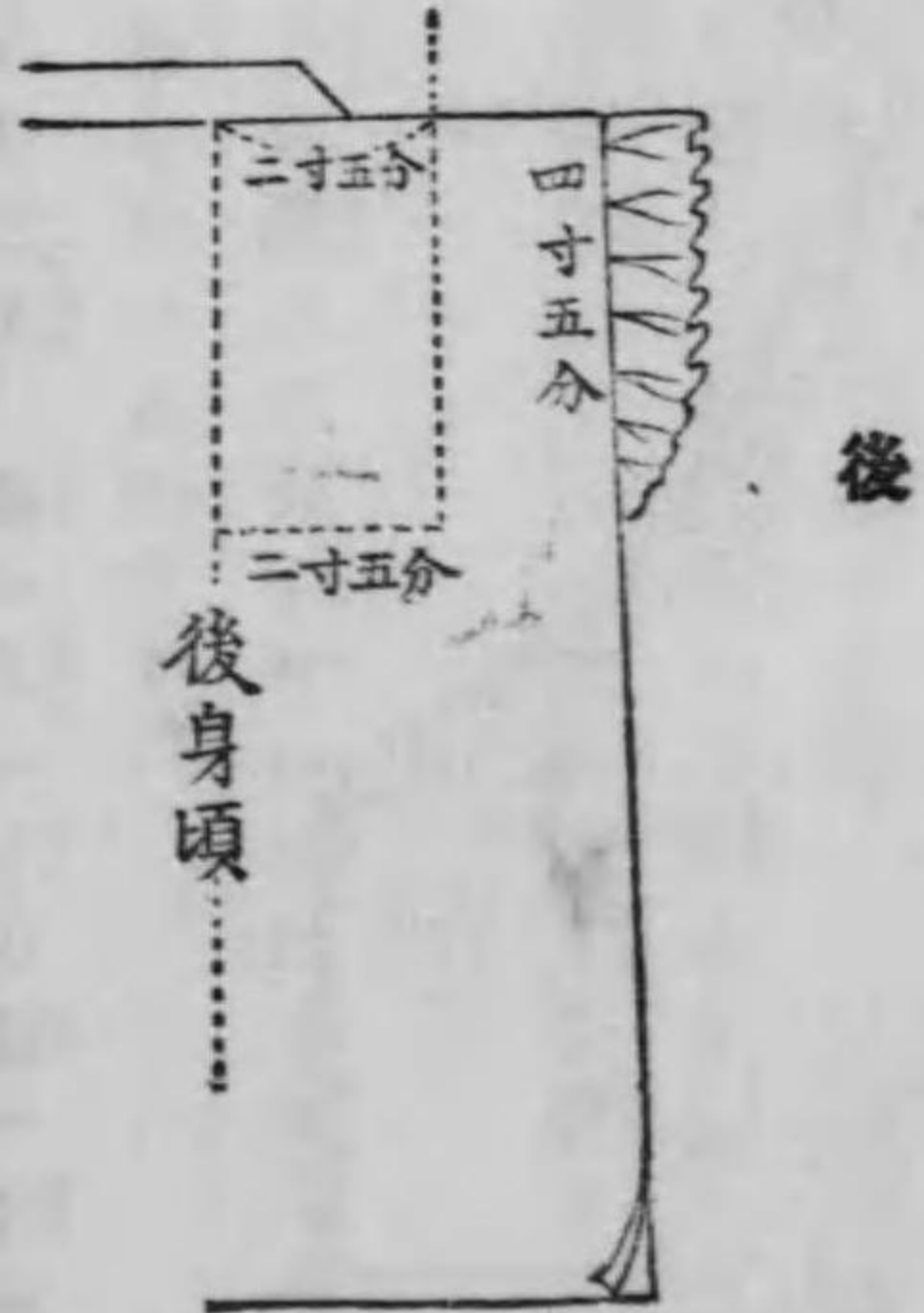
夏のちやんくは涼しいのが主ですから袖等は無くても好い位ですが、身榮がしませんので形を變へた袖やギャダに依つて格好をつける事に致します。

一、名稱及び寸法と裁方

んやちんやちの附タヤギ

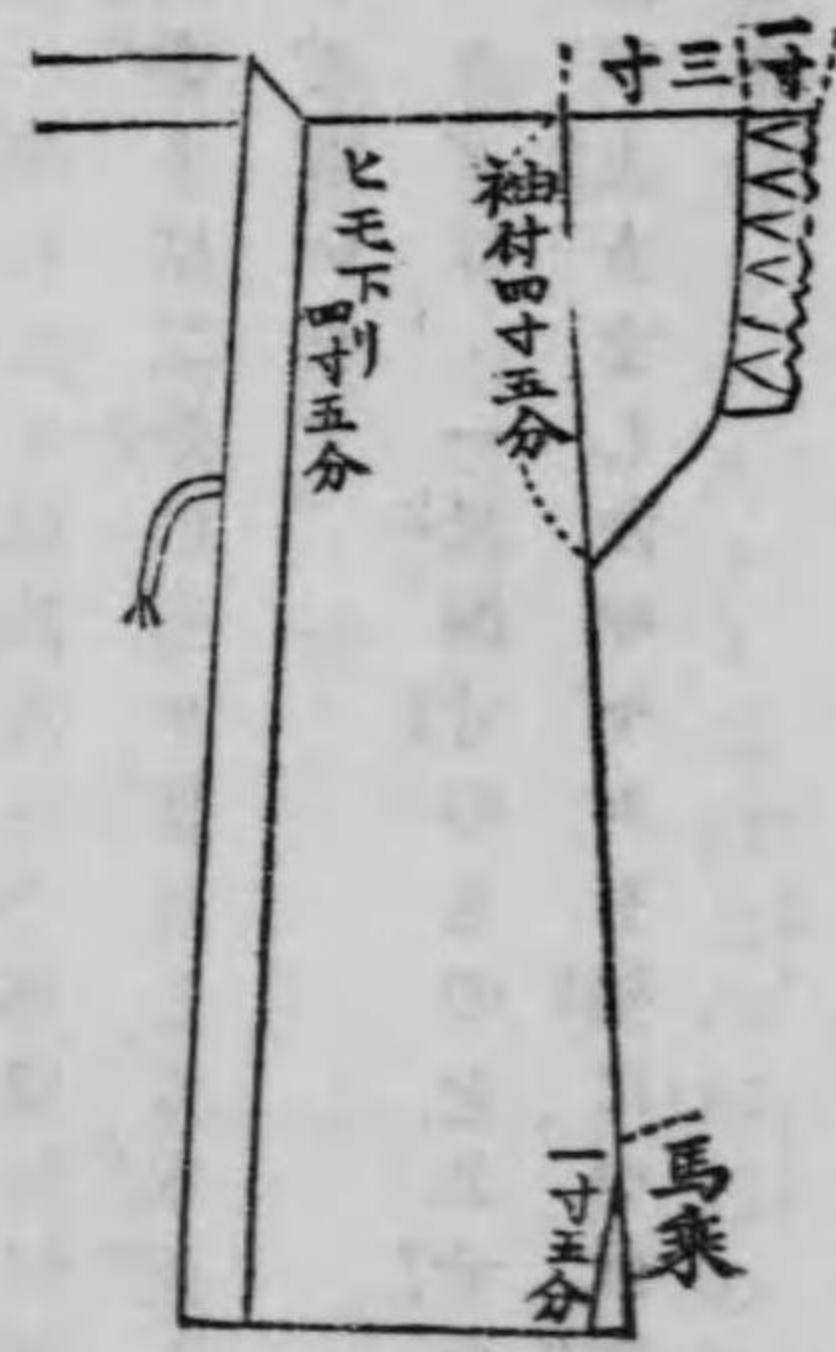


前

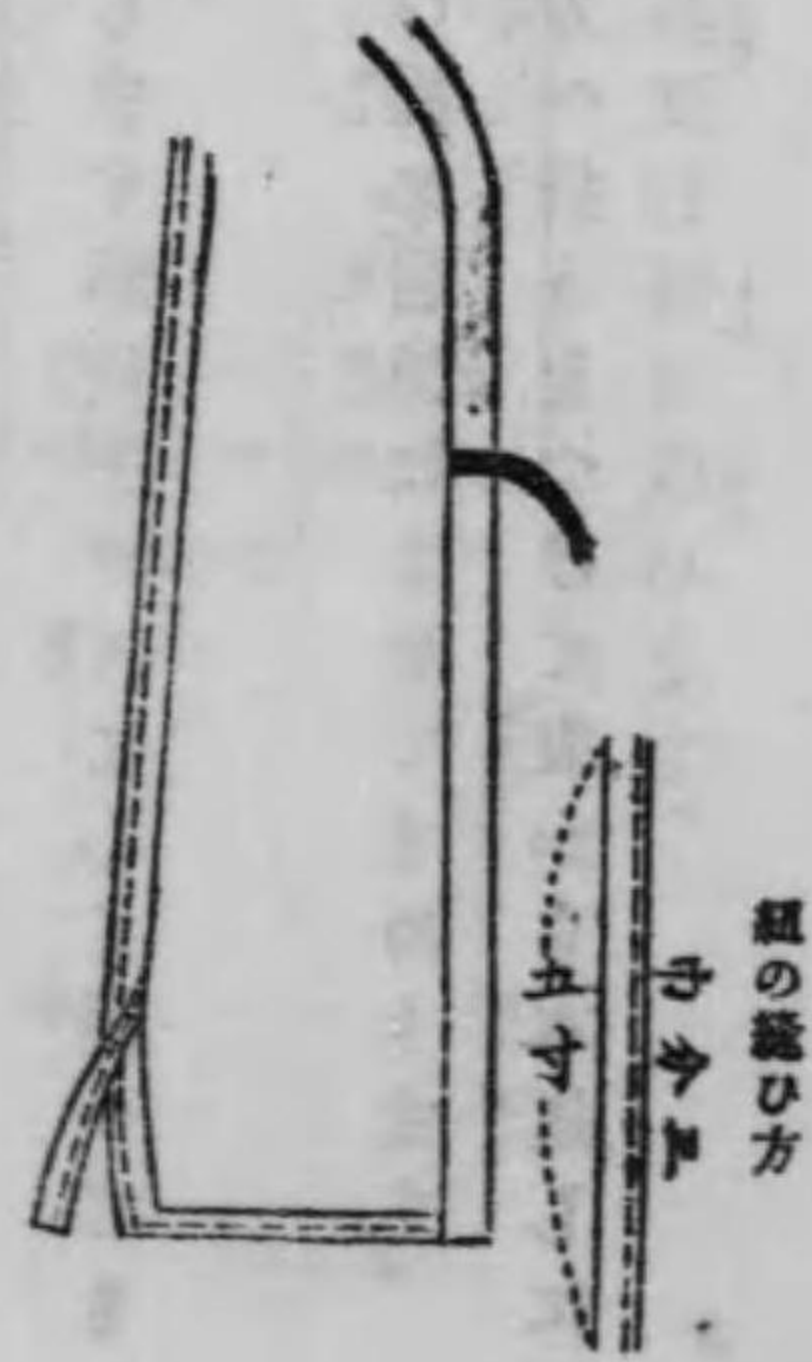


後

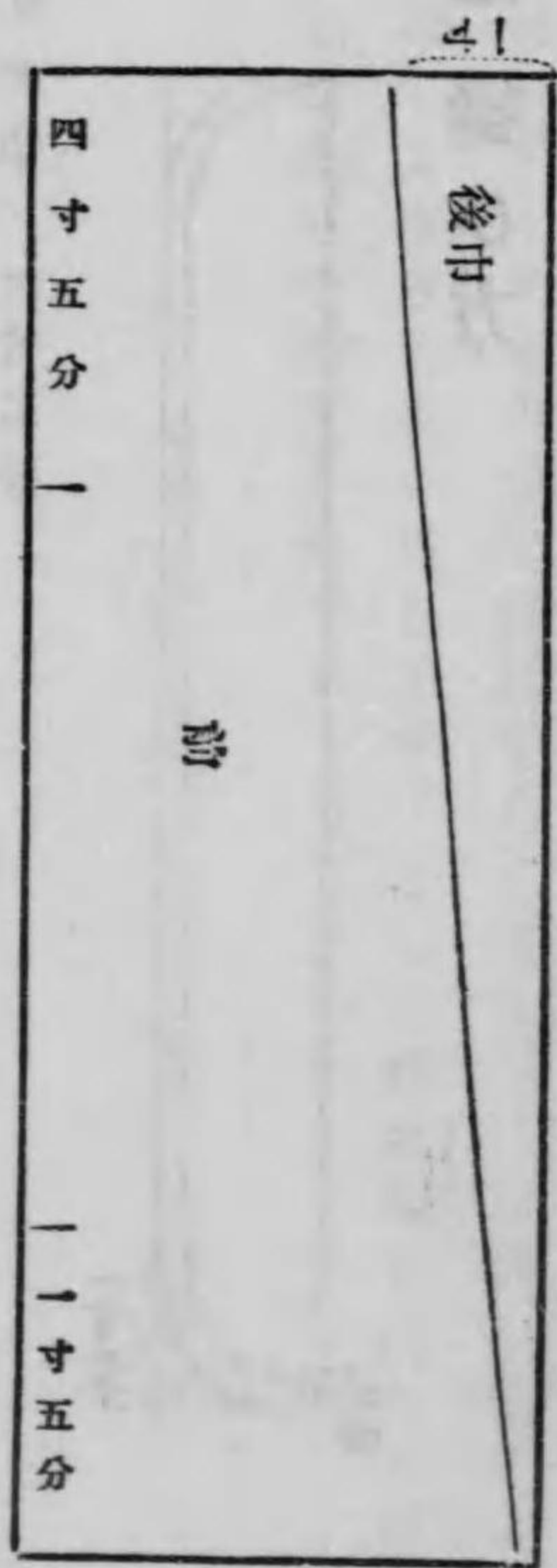
んやちんやちの附袖



圖の附紐



紐の縫ひ方



同上 一ツ身

袖付 四寸五分

襟明 一寸

馬乗 一寸五分

一ツ身ちやんちやん

襟明の一寸の處から下杯に切り取つてしまひます。
 ギヤダ 一尺四寸を九寸に縮めます。
 ギヤダ巾 一寸二分



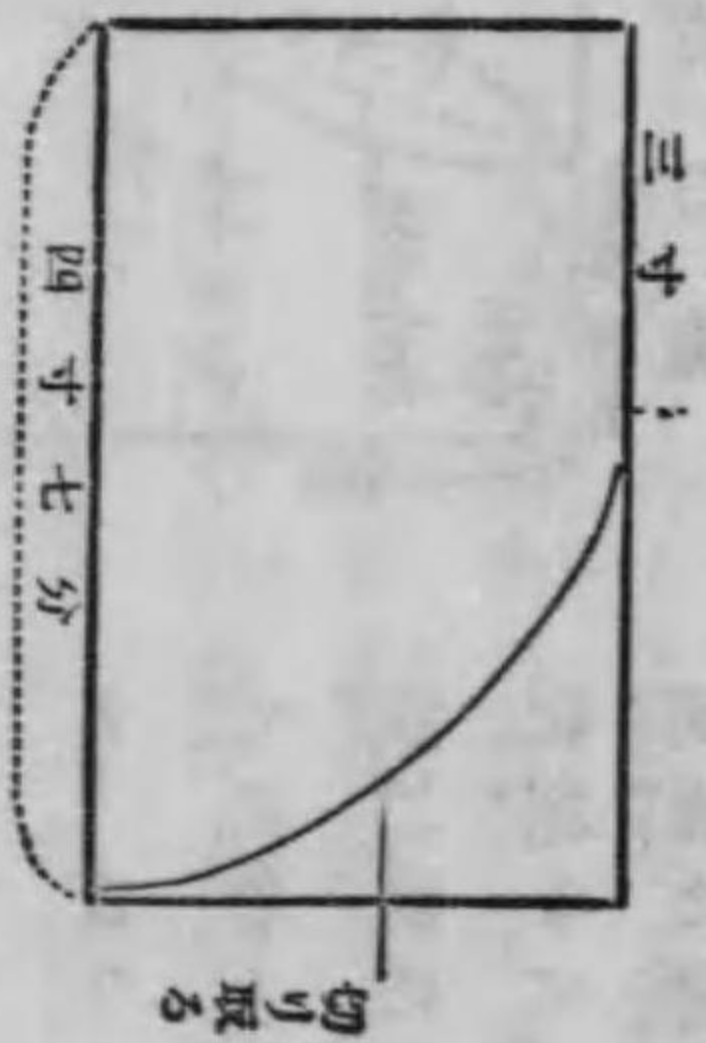
二、縫ひ方

幅一杯にして袖附から下馬乗まで縫ひます。
 馬乗りは二分の三ツ折にして本返しにしますが、只三ツ折にして縫つても
 ようございます。

ギヤダは 一尺四寸のものを九寸に縫ひ縮め、自然によせてまゐります。
 出来上りましたギヤダを袖につけ袖の方へ折りをつけて表から本返しに
 致します。

袖附夏ちやんくは以上の用布の外に袖だけ別に用ひます。

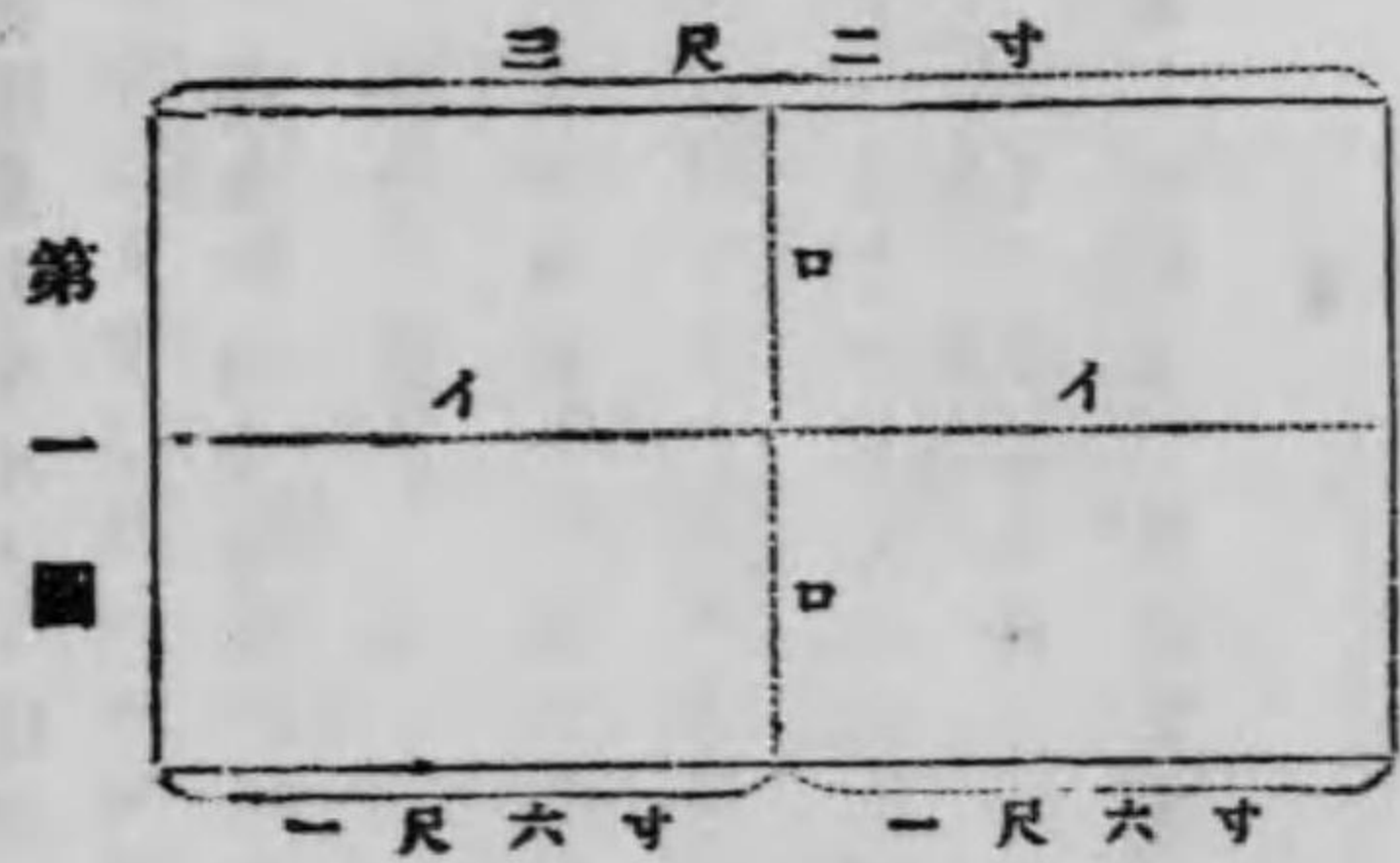
袖丈 四寸七分
 袖巾 三寸
 ギヤダ 八寸



八寸のギヤダを六寸に縮めまして袖口三寸の處に附けます。あとは三ツ
 折りにして本返しにいたします。そして普通袖を附ける様にして袖をつ
 本返しに致して置きます。

夏ちゃんく代用服及び帽子

1 洋服 (五六歳標準) 一裁ち方



地質は白モスリン又は白麻用布は大巾三尺二寸のこと
 総布の巾をイで二つに折つてから、ロを二つに折ります。さうすると丈が一尺六寸になります。
 第二圖のやうにわなを手前を据えて、きもの身頃と同様に肩肩明を一寸七分五

厘に寛をします。そこから肩巾を二寸に寛をして、袖付の明は山から六寸に寛をします。抱巾はわなのところから四寸五分に寛をつけて、山と袖付との間を三寸六分に胸巾の寛をします。さうして山から袖付まで太刀形に寛をします。また肩山から五分の寛をつけて、肩肩の寛から其の五分のところまで斜めに通し寛をします。裾は布一ばいに寛をつけて、袖付から裾まで斜めに通し寛をします。さうして、肩から袖付のあきと裾の通し寛のところとをすべて裁ちあわします。裾はそのまゝ巾を四つに折つて、両端の折目のところに四分の寛をして、その寛から寛までに丸味をつけて裾を裁ちあわしま



夏ちゃんく代用服及び帽子

す。ひろげると第三圖のやうになります。布の真中から右を前身に、左を後身にします。それで、真中からわなのところで後に一寸の寛をつけて、袴肩の寛から一寸の寛のところまで月形に通し寛をします。前の方も真中からわなのところで六寸に寛をして、袴肩の寛から斜めに通し寛をします。さうして袴肩から胸あきの通し寛のところを裁ちおとしますと、後前別々になつて裁ちをばります。

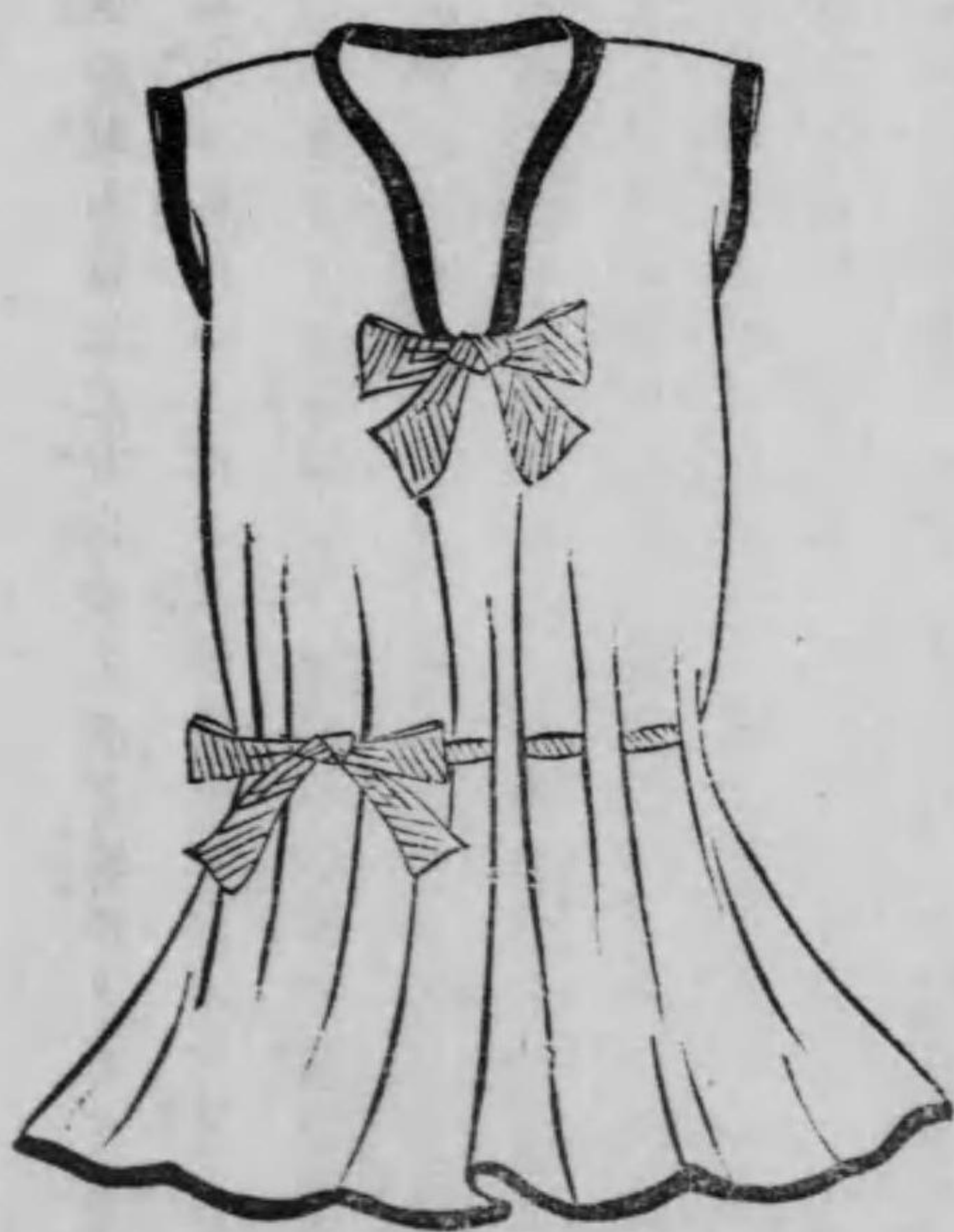
二縫ひ方

後身を下にして、前身を後より一分さげて、二分の縫代でこまかく縫つて肩はぎをします。折は前の方にします。前身が一分ずらしてあるから、後身の一分だけを折つて、縫目を折ると、三つ折ができます。その三つ折を折けるか、又はかゝり縫ひにします。両肩同様です。次は、兩脇をぬひます。袖付と裾どに待針をうつて、袖付の方からこまかく裾までぬひます。折は前の方にします。さうして表へ返して、脇の折目から、一分の深さに手ミシン(本返し)をかけます。

それから胸の裁ち目に三分巾のテップ或はリボンを縁につけます。つける前に、へりになるリボン又はテップを二つ折にしておきます。さうして、布をリボン又はテップの二つ折の間にはさんで本返し針でぐるりと縫ひつけるのです。縫ひをばりは二分程折つて合せて止めます。それから、飾りかた、縫ひ合せをかくすために、巾の廣いリボンを、リボン結びにして胸につけておきます。また、袖付のあきにも三分巾のリボン又はテップを二つ折にして布を中にはさんで本返し針でへらをつけます。これだけできたら、後にひだをどります。袴肩から三寸さがつて五寸程を、一分五厘の深さに、脊につまみぬひします。その兩脇に二分程あけて同様につまみぬひするのです。この時の折は、真中のは袴肩を右にして手前に折り、兩脇のは袖の方にむけて折ります。裾にも胸あきと同じ様に、三分巾のリボンかテップをつけます。やはり、裾布を二つ折の中にはさんで本返し針でぬひつけて、をはりを二分程折つて止めます。裾のへりが

ついたら裾から六寸あがつたところに、太い針に三分巾のリボンを通して、一寸と二分との割合で二た目おとしにぐるりとぬひます。さうして子供の胸の太さに合せてリボンを引きしめて、出来上り圖のやうに脇でリボン結びに結びます。着るのも、脱ぐのもリボンをほどけば樂にできます。

出 來 上 り 圖



2 夏帽子

地質 表は白モスリン又は白麻、裏はかんれいしや
用布 一尺二寸四方

第 一 圖



第 二 圖

(四つ折にしたところ)



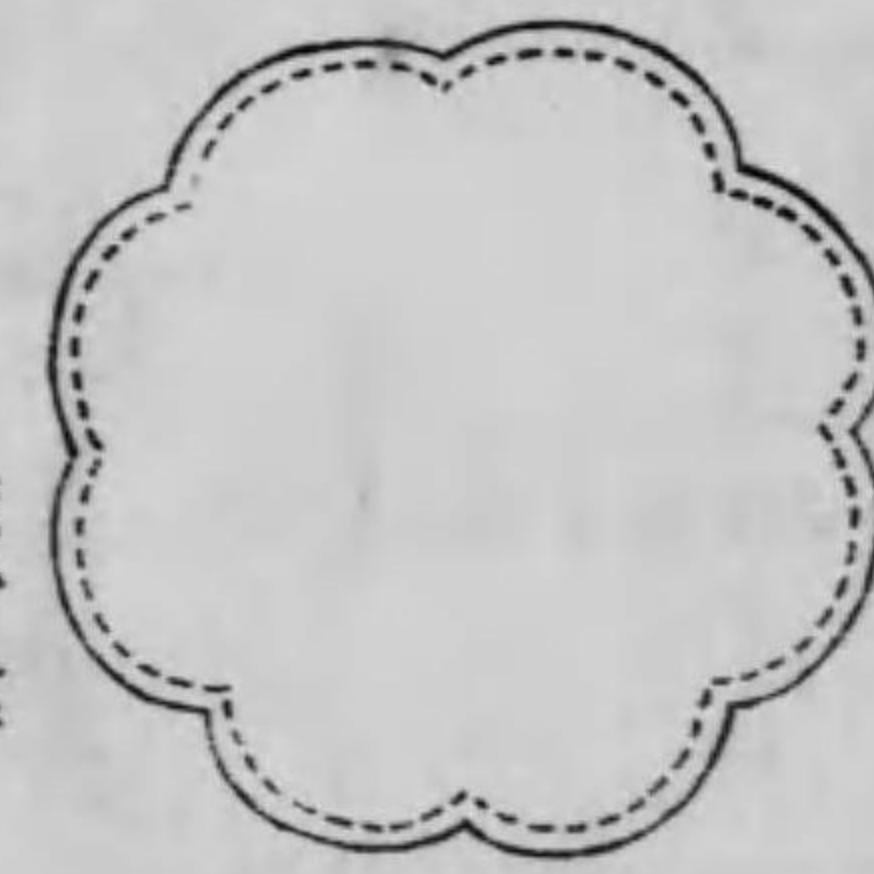
第一圖の一尺二寸四方の布を二つ折にして、第二圖のやうに四つ折にします。さうすると折目の端が六寸になります。さうして三角の尖から兩端に五寸六分に寬をして、あまりの四分に寬で丸味をつけ

夏ちゃんく代用服及び帽子

ます。その裾通りに切り落として裏表同様にします。それをひろげると第三圖で見るとほり梅形になります。そこで裏表合せて周を縁で押へておきます。縁には三分巾のリボン又はテップを二つ折にして、裏表合せた布を二つ折の中にはさ

(裏表合せて縫をかけたところ)

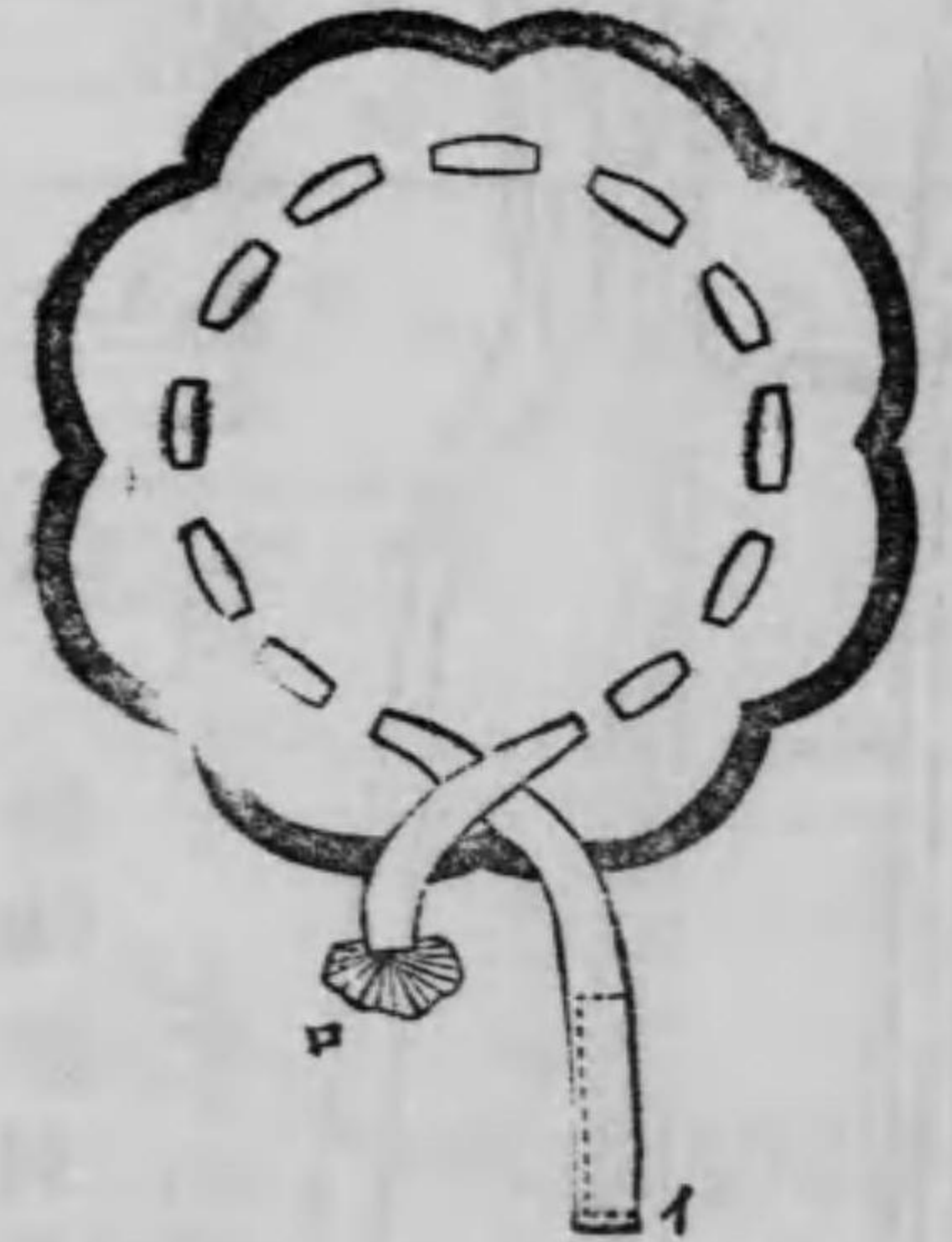
第三圖



二分程折つて合せて止めます。へりがついたなら元の様に四つ折にして、今度は三角のさきから四寸に兩端に寬で丸味をつけます。それを擴げると、第四圖のやうに梅形の中に八寸の丸味が太い針に三分巾のリボンをとほして、

のさきをこまかく縫つて、それを開くちぢめますと、口のやうにぐいりが出来まます。これででき上ります。

第四圖



出來上り圖



(布を裁つ前に新聞紙のやうな紙を折り方などためして見た上でしみますとわかり易くできます)

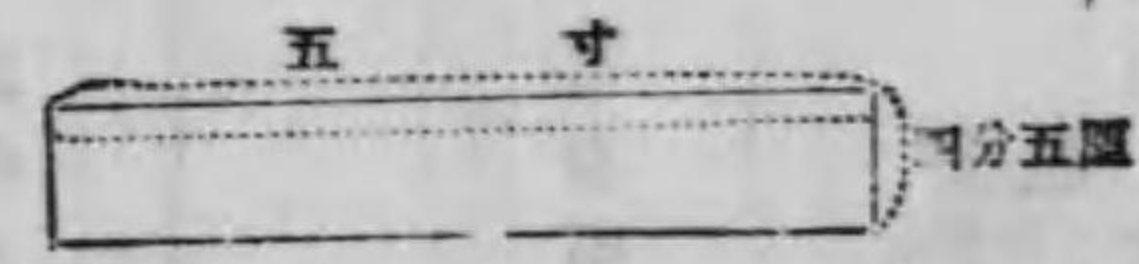
表身頃巾の標付



裏身頃巾の標付



紐



標付けます時、圖の通りの通りの位置に
してあつけなさい。
襷は前につける方が二分多く縫
込をまげます。

4. 胴はぎ

裏に折をつけて表は筧通りに待
針を打ちまして裏を見て、そして
前後の身頃の胴はぎをします。
糸は裏糸をつかつた方がようご
ざいます。

口襷つけ

襷の山を合せて附けの筧どお
と襷とよく合せて前後へ縫との

八. 袖明き

けます。附けましたら身の方へ折を折りましたして平縫を當てます。そし
て襷上を羽織の止めと同じく四つ止めに致します。
袖明きの裏の方へ折をつけて表は筧通り縫合せます。縫ひ上りました
ら裏へ鏡で裏の方へ折を折ります。綿を一寸巾に切りましてそれを若
し薄い綿なら三枚袖明きの丈だけにつくる。表の方へ其綿をのせまし
て裏の方から今縫ひました縫目の上を三分の針目で押へて行きます。
そしてかへしますと表が一分五厘吹き出るわけになります。襷上八分
も矢張り三枚の厚さの綿を表へのせて綿と一所に八分の處を縫ひ乍ら
綿を押へます。右も左もこの通りに縫ひ上げます。

二. 綿入

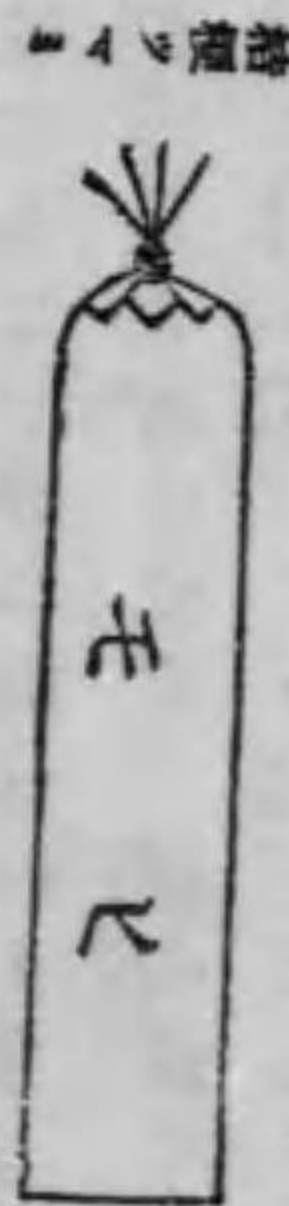
綿は縫ひあげたされ裏返しにしまして後身頃の表へ綿をのせます。襷
は襷八分の處から三枚の厚さに襷から四寸の長さに切りまして外に後身
前身襷全部の巾だけの丈に綿を切つてそれを一方一寸長く二つに折り

まして其中間を脊の真中に合せて裾の方へ輪の方をのせ先に四寸長くして置きましたのを其上に被ぶせてころくしないうやう手さぐりして鹽梅を見まして兩端にはみ出して居る綿は前身及び裾の方へ這入るべき綿で御座いますから折り返して下になつて居ります裾と裾との間へ折り込んで置きます。

裾から上の脊中の處へは二枚厚さの綿をのせまして次に左右の袖明から二寸づゝ脊中の方へ這入つた處から(川ち脊中の處だけ)尙二枚厚さの綿を入れます、これは綿が多く這入つて居りますと肩上げが仕にくう御座いますからそれをさけるため肩の綿を薄くするので御座います。綿が這入りましたら表裏の處が手を入れて返します。そして折れまがつて来て居ります綿とつぎ目を上手にして平に前に綿を入れます。(やつぱり三枚の厚さで……)又返しましてよく綿をふくませて裾から一寸三分上つた處前後の裾を十文字に止めます。その針ですぐと後をとぢます。

前の紐付を合せまして腰を掛けます。
袖口明は綿をよくふくめて飾腰を掛けます。

紐の出来上り圖



紐の布を縫ひましたらそれを返して置いて芯の綿を入れます、芯の綿は普通袖口へ綿を入れるよゝに一寸巾の綿を丸めて紐の倍の長さど大きさに拵へ外を真綿を薄くはがしてそれをつゝみ先を糸で結へ紐へ通して二つに切ります。そして先を結梗にします(五ヶ所をつまんでそれに絹糸二本通して飾り糸のやうに作り入分の長さに切ります。

裏の方へ附けます。男子なれば紐目を下に向け女なれば上に向けます。

ト、袴は山はさが出来ましたらそれを割ります一方裁目を三分の二に

しまして折の處から袴巾が二倍(二寸)に寬をしまして裏の方へ繰折りに
 します。若し袴芯をつけます時は表の裏の方へ袴芯をのせて片がはを
 縫ひ駈けで付けて置きまして、縫代三分を取り、三分の折目から袴巾二倍
 ををります。

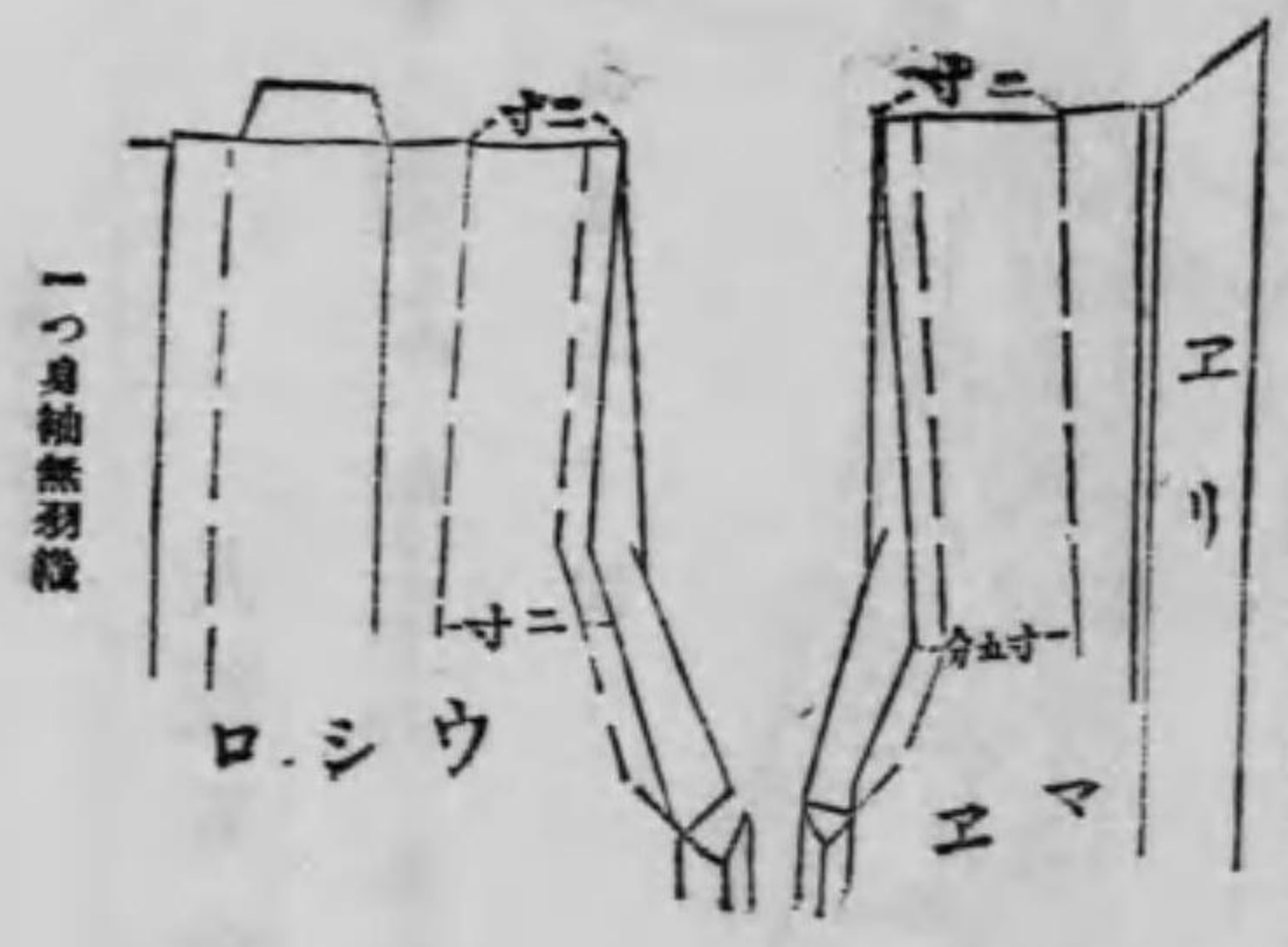
手袴つけ

はぎ目を中心として脊から袴つけのやうに待針を打つて羽織のやうに
 つけて行きます。

袴は同じ平かさ位にして三分の折目の七厘上を前袴先から縫ひはじめ
 袴先一寸位を半返にして縫ひます。紐の處で返針にしまして肩の廻し
 は廻し乍ら縫ひます片身頃もこの通りにします。三分の折を消さない
 やうに繰をあて、袴先を羽織のやうに縫つて、綿を二枚袴巾二倍丈に二枚
 切つて其中間に又一寸巾に切つたのをのせて入れ、袴ははじめには裏の
 袴先にぼちを出し、袴け終りに又ぼちを出して止めます。

注意

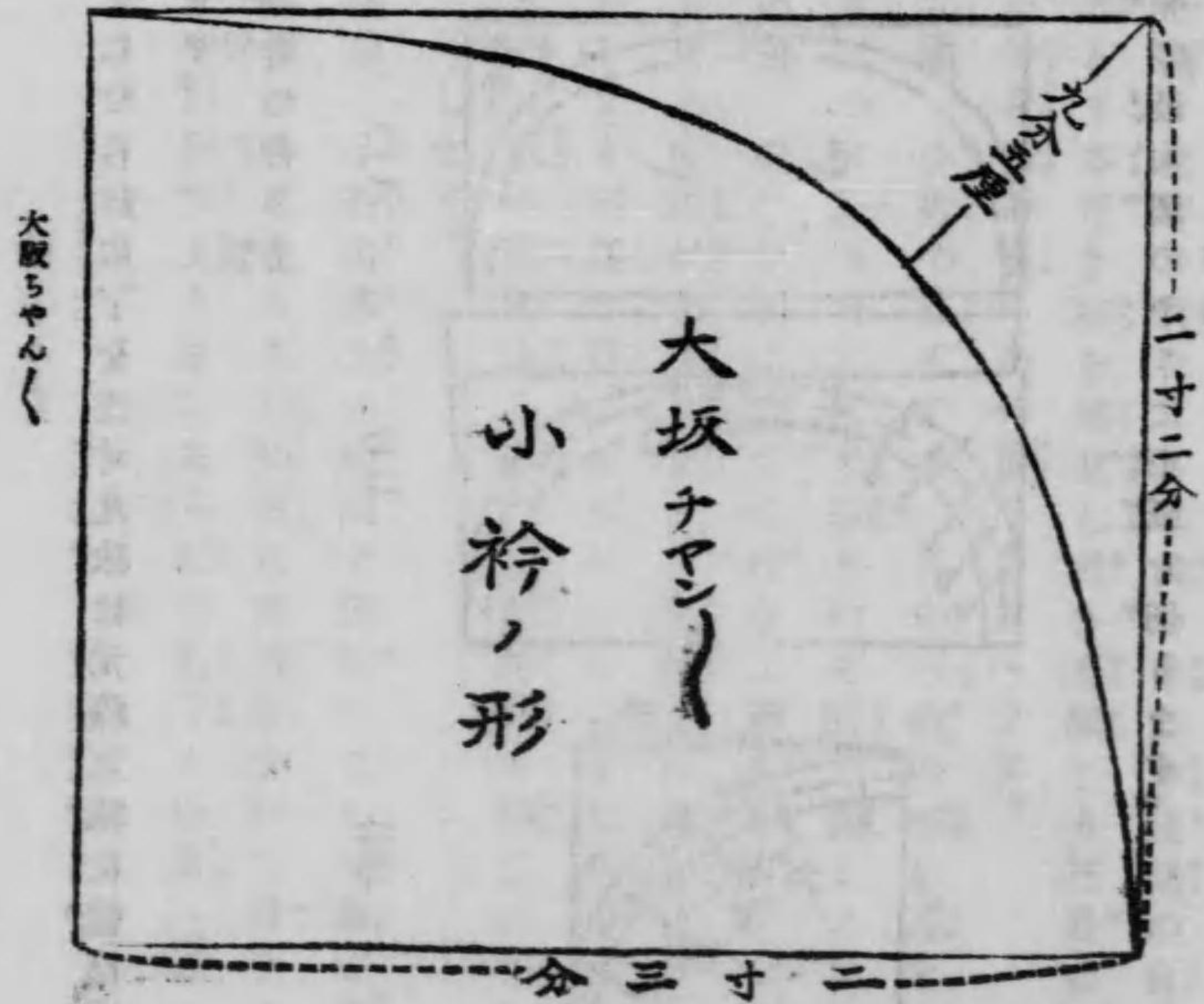
肩の上の圖



ぼちを出すは裏の袴が表へ飛び出さないやうにする爲めでござります。
 袴け上りしましたなら袴を返して出来上りの圖のよふに飾眼を掛けます。
 袴肩は袴巾半分折つてこまかに袴け付けて置きます。
 肩の袴は二つに折りまして肩から細かく袴けつけて置きます。
 出来上りましたら肩上げをします。

(前) 下り四寸五分
 口明から上巾二寸 下巾二寸
 (後) 下り四寸五分
 口明から上巾二寸 下巾一寸五分
 この寸法を山にして五分つまみます。

小衿の作り方 二つ折りの図



大坂チャシ

二寸二分

大坂チャシ
小衿ノ形

二寸三分

縫方

寛付や寸法は被布ちやんくと同じやうにいたします。縫ひ方も大分は同じやうで御座います。只異なるた點は普通の衿をつけません。肩明きに小衿をつけまして前巾下を元祿丸味にするのであります。丁度被布ちやんくと同じ縫方で綿を入れるまでに縫ひあげ

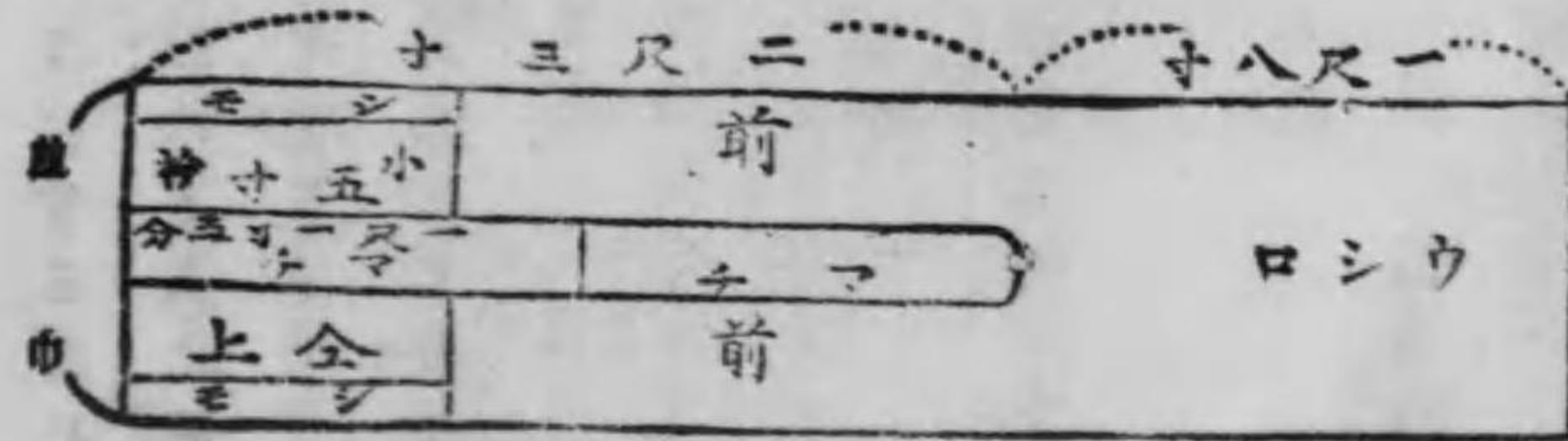
大坂チャシ

大坂チャシ

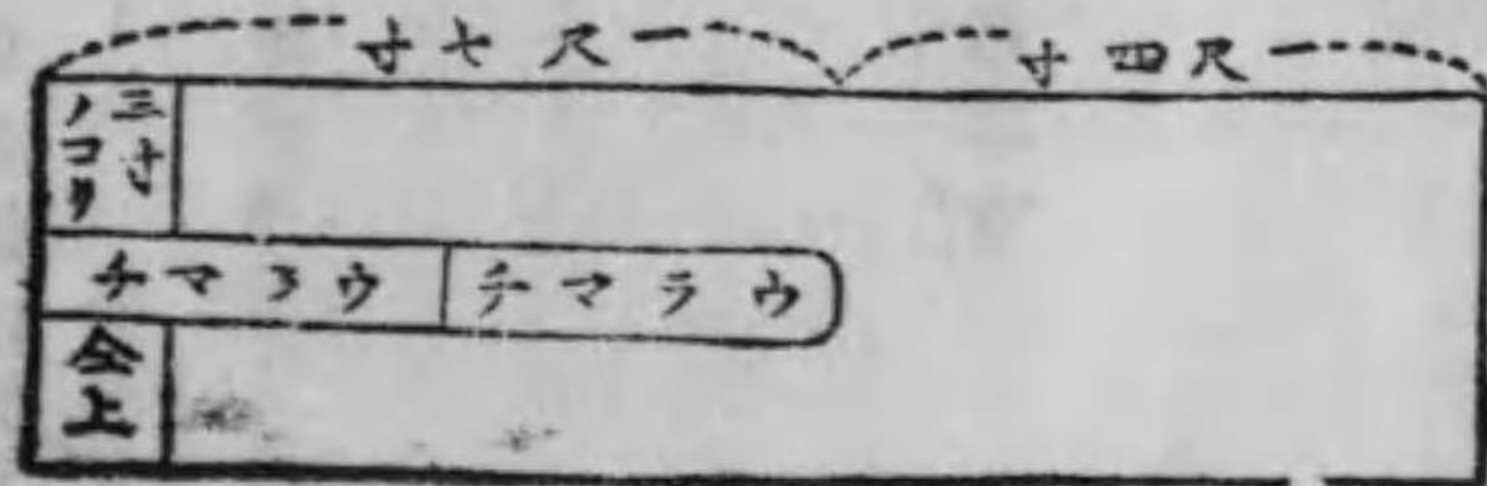
用布 並巾もの 表四尺一寸 裏三尺一寸
出来上り圖



縫方(表)



(裏)



ましたら前巾下を三寸丸味に元祿丸味に縫ひ寄せて裏へ返し綿を入れ
ます。

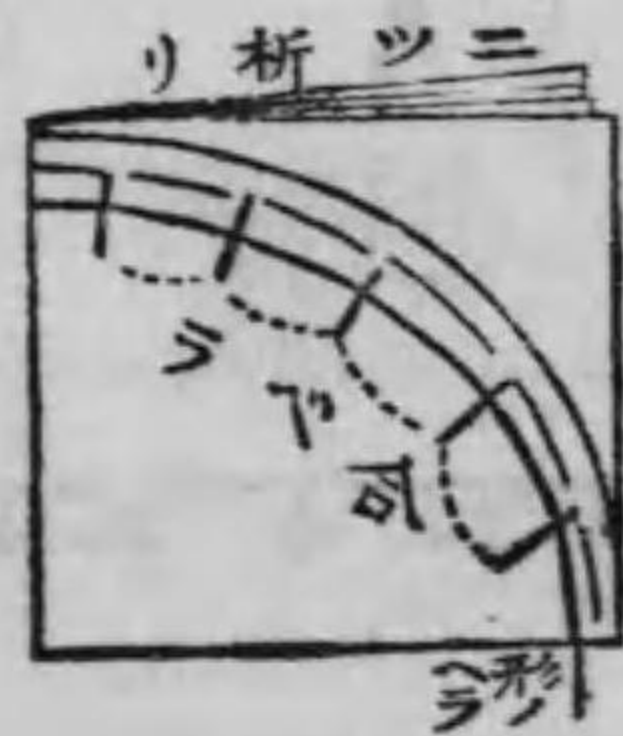
イ、小袴の作り方



(一)



(二)



(三)

小袴出上り
裏



(四) 表一分吹

先づ最初圖のやうに形紙を切ります。

一、まづ小袴にする二枚の布の中模様の良方を表として別に小袴の
芯とする可き布を用意し置き形紙より三分の廣さに切つて置きまして、
小袴表布の裏へのせ縁でをさへます。

二、小袴の裏とするべき今一枚の布を芯を縫ひ附た表布の下に重ね
て二つに折りまして形紙をのせ通し篋をいたします。

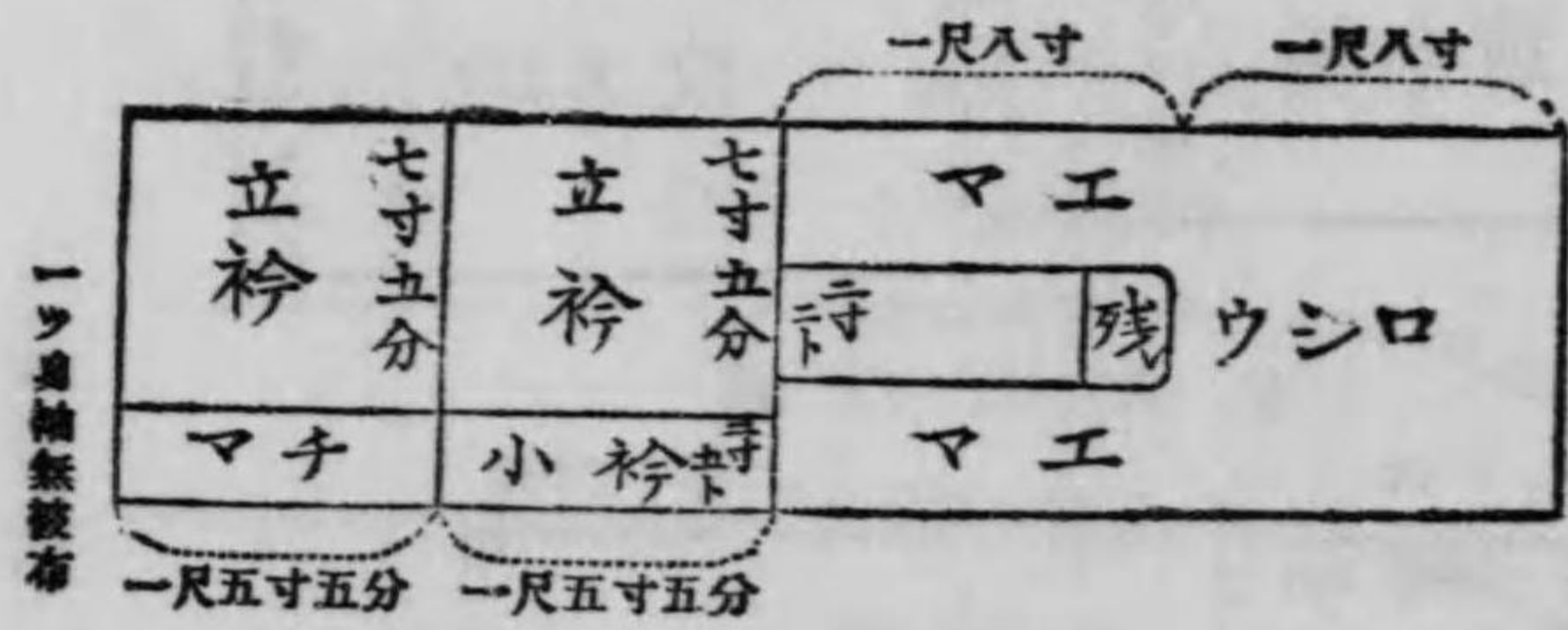
三、圖のやうに二つに折つた小袴を擴げて通し篋の上に合篋をいた
しまして待針をうちます。待針をいたします時に表は通し篋通りにい
たしますが裏は篋よりもおくに二分五厘這入つて待針をいたします。
そして表の篋の上を縫つて元祿袖と同じに布をよせ一枚の綿を入れ裏
へ返します。

四、小袴出来上りの圖で御座いまして裏は表より一分だけ控へて居
るわけになります口の處には縁をかけて置きます。

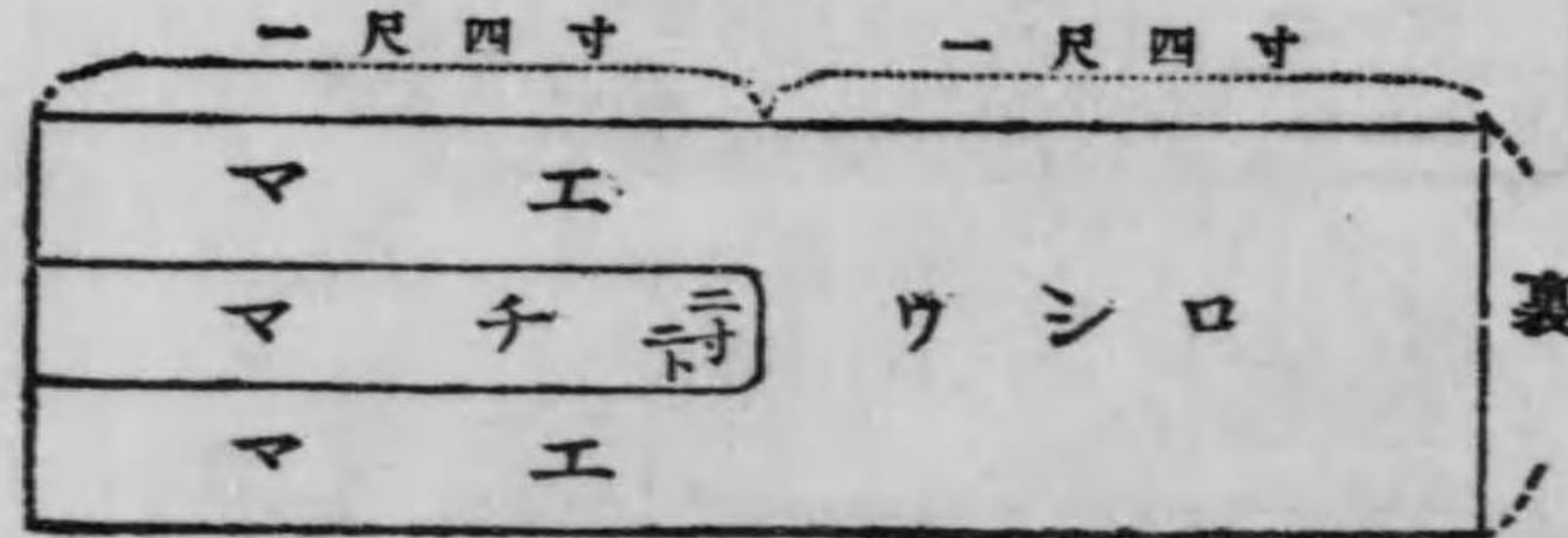
小袴が出来上りましたら紐を乳下りの處へ裏へ小袴を裏身頃の肩明へ
縫ひつけます。そしてよく綿をふくめまして下の丸味の處から裏布を

裁方及標付

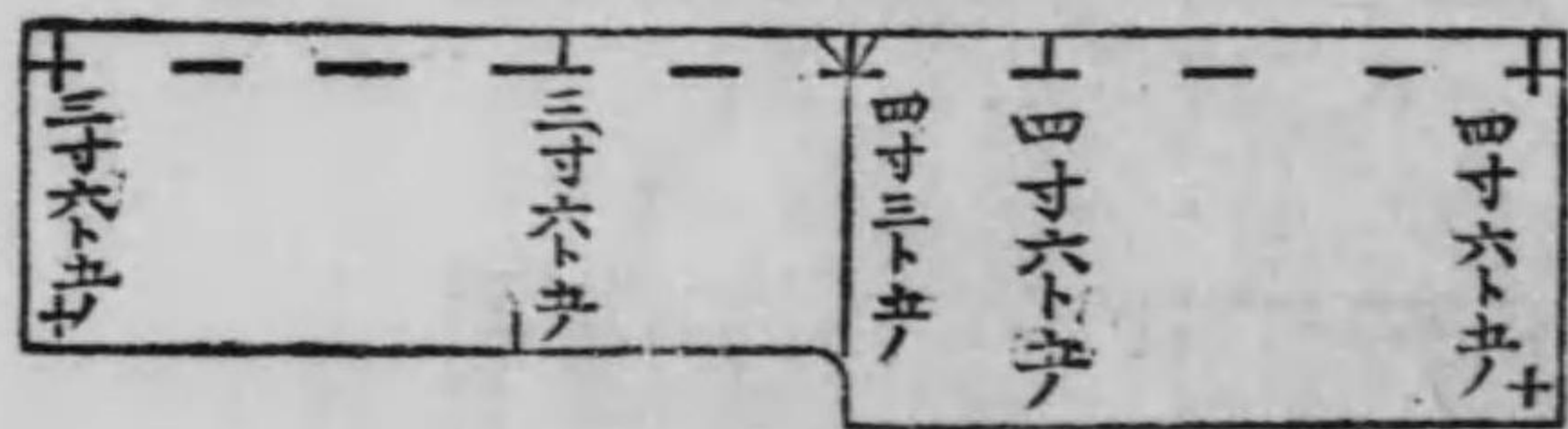
(一) 表 裁 方



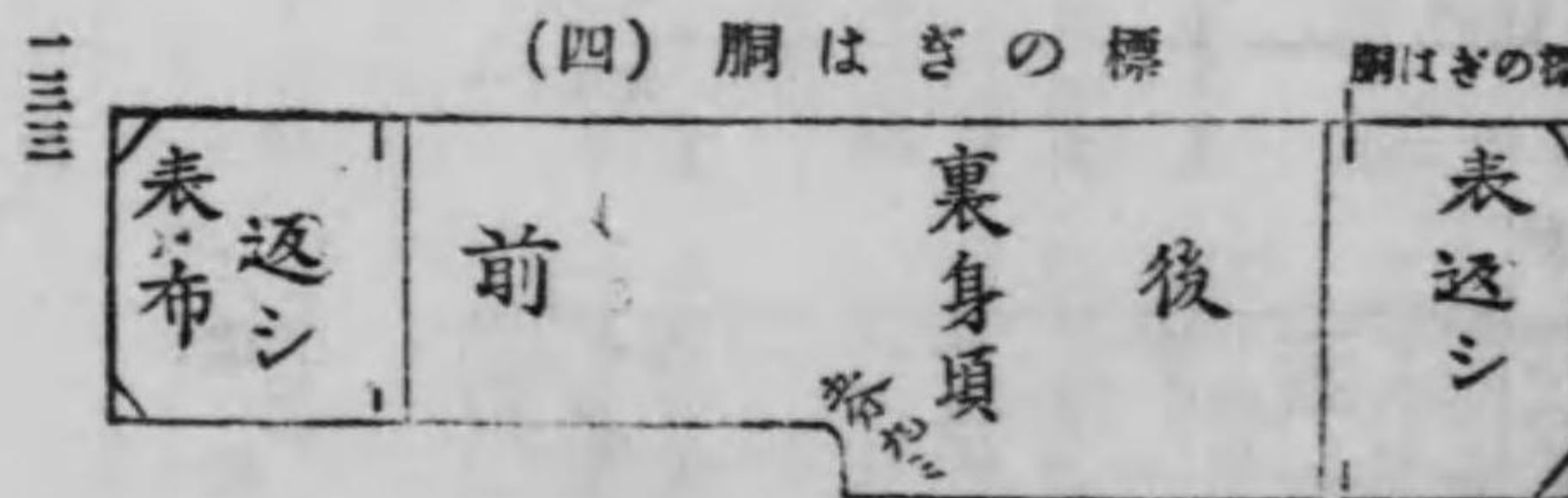
(二) 裏 の 裁 方



(三) 表身頃標付



(四) 胴はぎの標

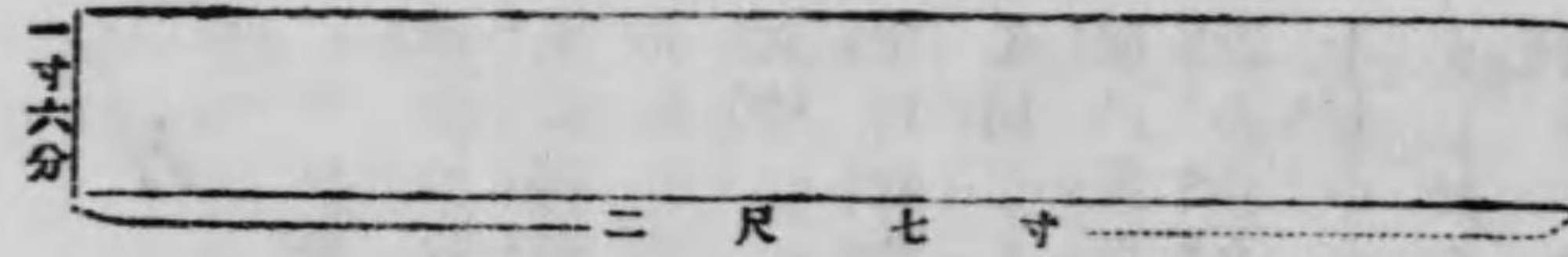


用布表並巾 六尺七寸 裏二尺八寸を要します。

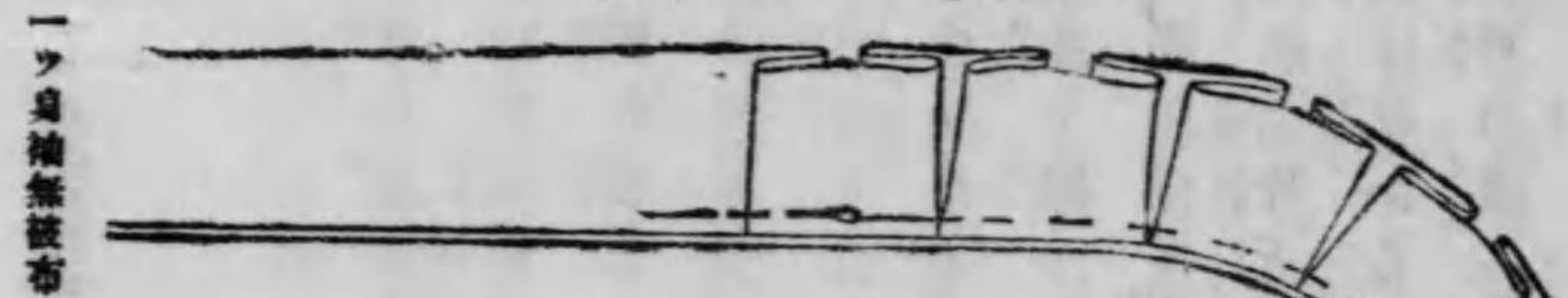
一ツ身袖無被布

大阪ちゃんく
ひかへ加減によく表へ綿をふくめてくけつけます。
出来上りましたら袖無ちゃんくと同じく肩揚をいたします。
小衿は後へ返してくけつけておきます。

(一) ギヤダの取方



(二) ギヤダを取る

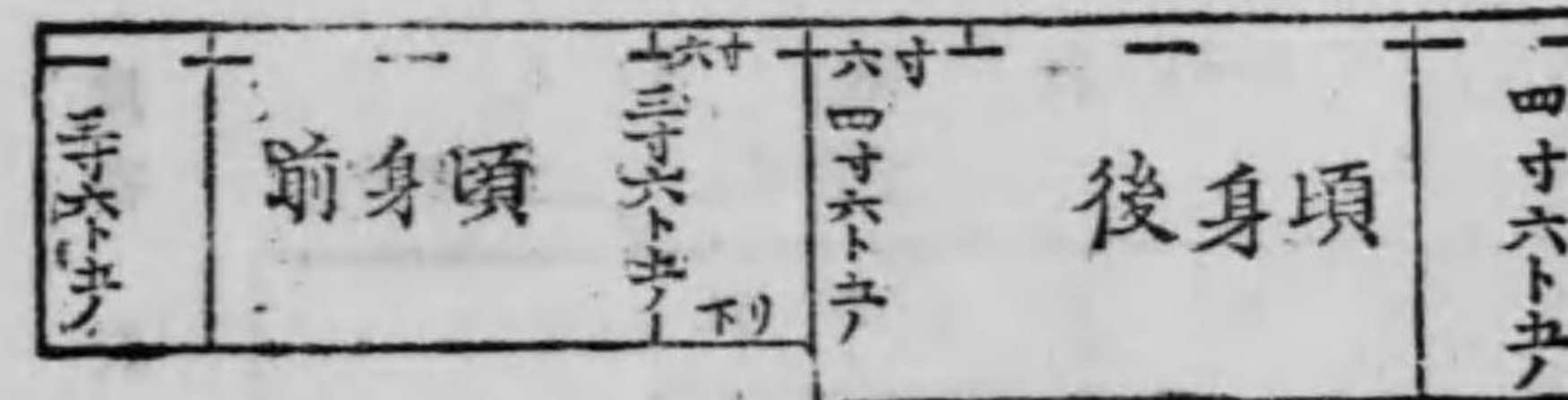


(一) ギヤダを小衿に縫附ける圖

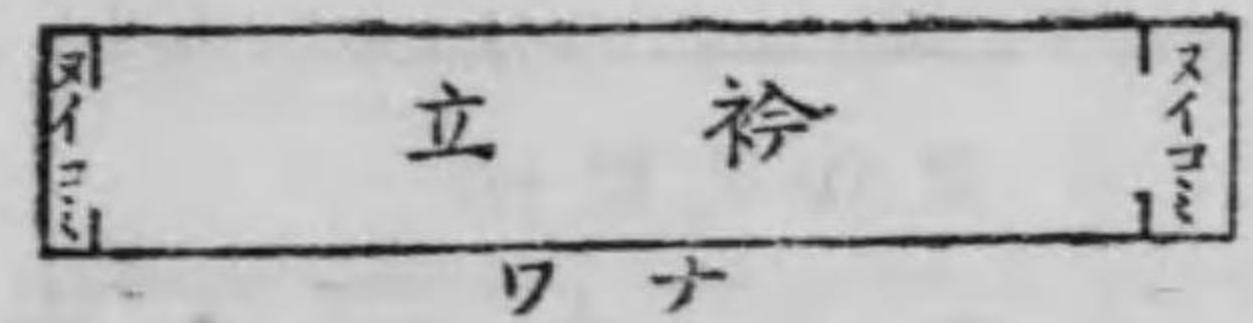
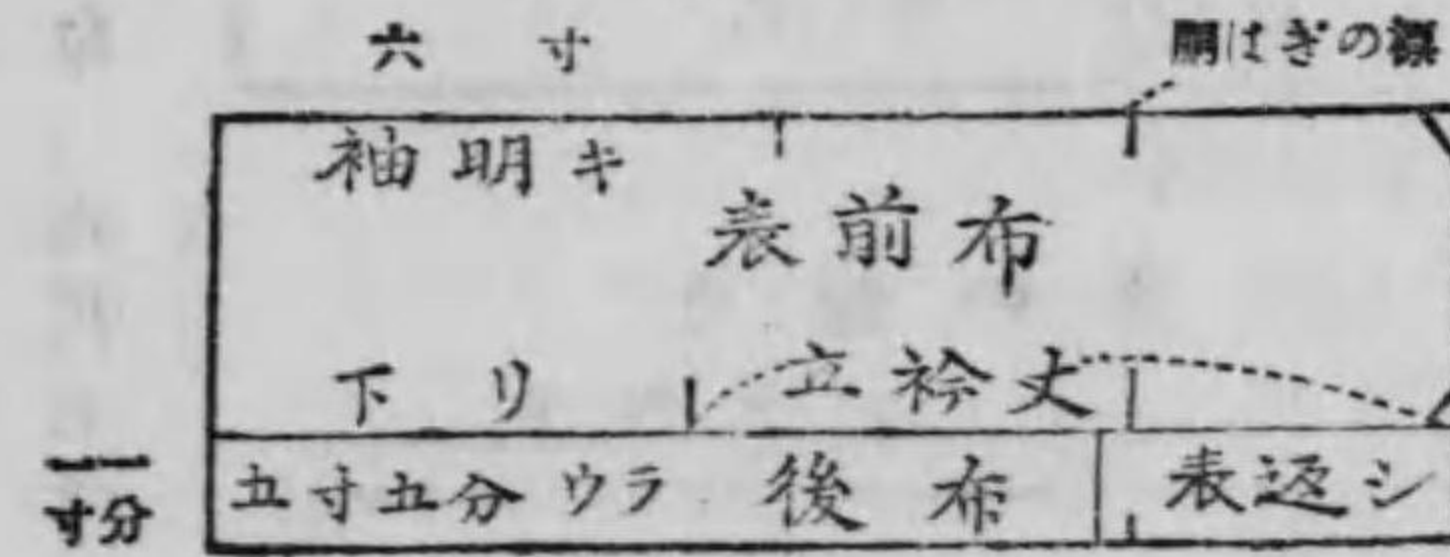


		衿巾		立衿下		肩巾裏		肩巾表		前巾		後巾		袖明	
下	上	一寸一分	一寸一分	三寸五分	三寸五分	四寸三分	四寸三分	四寸四分	五厘	三寸六分	三寸六分	四寸六分	四寸六分	六寸	六寸

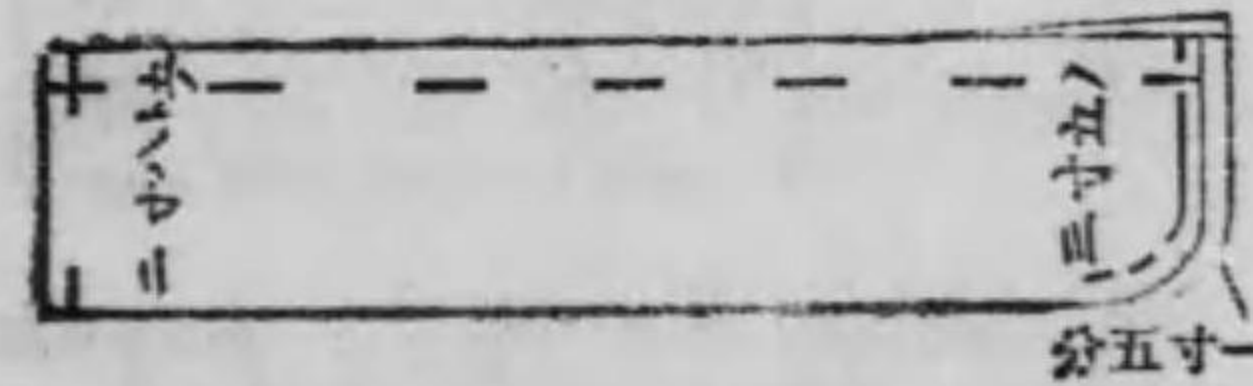
裏身頃の標



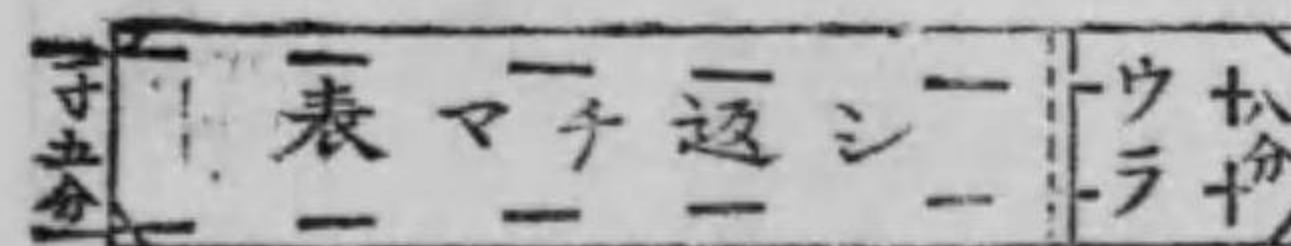
前身頃の標



立衿標 (一)



(二)



衿標 (三)

縫方

一ツ身袖無し被布は大體の縫方は、一ツ身袖無羽織と大差ありません、只
 衿をつけないうで、立衿と小衿をつけるると云ふ丈けが異なつて居ります。
 先づ袖無羽織と同じく、胴はぎとしまして、裾をつけ、そして袖明きを縫つて
 置きます。これまでは袖無羽織と同じ縫方でございます。

立衿

次に立衿をつけます。立衿寛付の圖の通り下裾の方へ一寸五分の元祿袖
 と同じく丸味を縫つて立衿寛付寸法の通り下裾三寸五厘 上二寸八分五
 厘の寛標に随がつて表の前身頃へ立衿を縫ひつけます。
 表の前身頃は立衿下りの寛標の處から二分の縫代で立衿は標通りに待針
 を打つて裏は裾から三寸五分程の處まで縫ひつけて置きます。縫ひ上り
 ましたら立衿の處へ鍔を當て折をつけます。かうして上前下前ともに立
 衿をつけます。

綿入

綿の入れ方は前の袖無羽織と同じやうにして入れます。立衿の處は身頃
 の綿の厚みに應じて適宜にのせ身頃の綿に縫ぎ合せます。立衿裾の丸味
 の處は綿も丸形に造つて入れた方が恰好よく這入ります。かうして綿が
 入りましたら前身頃をひつくり返します。

綿が這入りましたら裾によく綿を行きつかせて背の中程まで脊をどぢま
 す。立衿は裏の方の裾から三寸五分上は明いて居りますから裏前身頃二
 分の縫代で標通りに立衿下の處まで縫ひまして鍔で立衿の方へ折をつけ、
 立衿上の縫込みを四つ止めにして、裾より一分上を表になる方へ綿をつけ
 て縫つて返します。

立衿の裏上前下前ともに縫ひ終りましたら後前裾一寸三分上へ十文字に
 ホチ止めをして後裾全部前裾裾から五寸上までとぢを入れます。
 袖明きは表を一分五厘吹き出して飾り縁をつけて置きます。
 小衿。

小衿は 大阪ちやんちやんの時と同じですが、只この一つ身袖無被布に用ふるものにはギヤダが附くだけが異なつて居ります。

ギヤダの縫ひ方。

圖で示してあります通りに布を二つ折にしまして裁目の方へ一分の深さに縫縁を掛けたら、二圖のやうに三分幅六分巾にギヤダを十二三程寄せて綾糸で押へて置きます。

ギヤダが出来ましたら小衿の表の布へ一圖のやうにギヤダをつけ、兩方とも裁目を揃へて丸味なりに縁を押へて置きまして大阪ちやんちやん小衿の時と同じやうにして縫ひます。

縫ひ上りましたら二枚の厚みに綿を入れ口から表へ返して口に縁を掛けて置きます。

注意 ギヤダの布は無地又は小衿の共切れがよろこびます。

小衿のつけ方。

小衿の中間を見て裏の脊折と合せて待針を打ち、小衿の端から端まで二分

の縫込みを付けましたら平鏡を當て、身頃の方へ返して表身頃を二分折込んで下りの明即ち立衿の上から立衿上まで拵けます。そして小衿を後へ折り少し拵けつけて置きます。
肩上げは、袖無羽織の時と同じやうな寸法で五分幅みます。そして裝束をつけます。

出来上り圖



一ツ身掻捲

一ツ身掻捲は、お産をする時には一番必要なものでございまして、男の子供が生まれましても女の子供が生まれましても、まづ産湯を使つたら着物を着せたい上から掻捲についで寝かして置きます。又抱き歩くにも用ひます。

一、地質及び寸法

1、地質

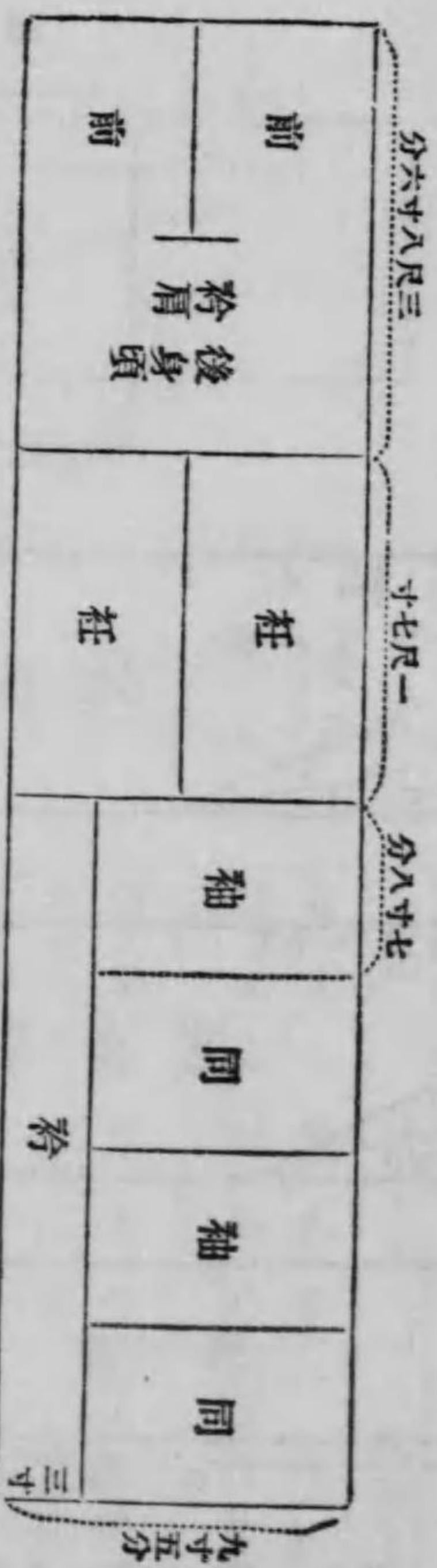
別の何の布を遣つても差支へはありませんが、普通一般に重に用ひられて居りますのはメリンスでございます。

2、用布及び寸法

並巾で表布八尺七寸裏布一丈一尺七寸

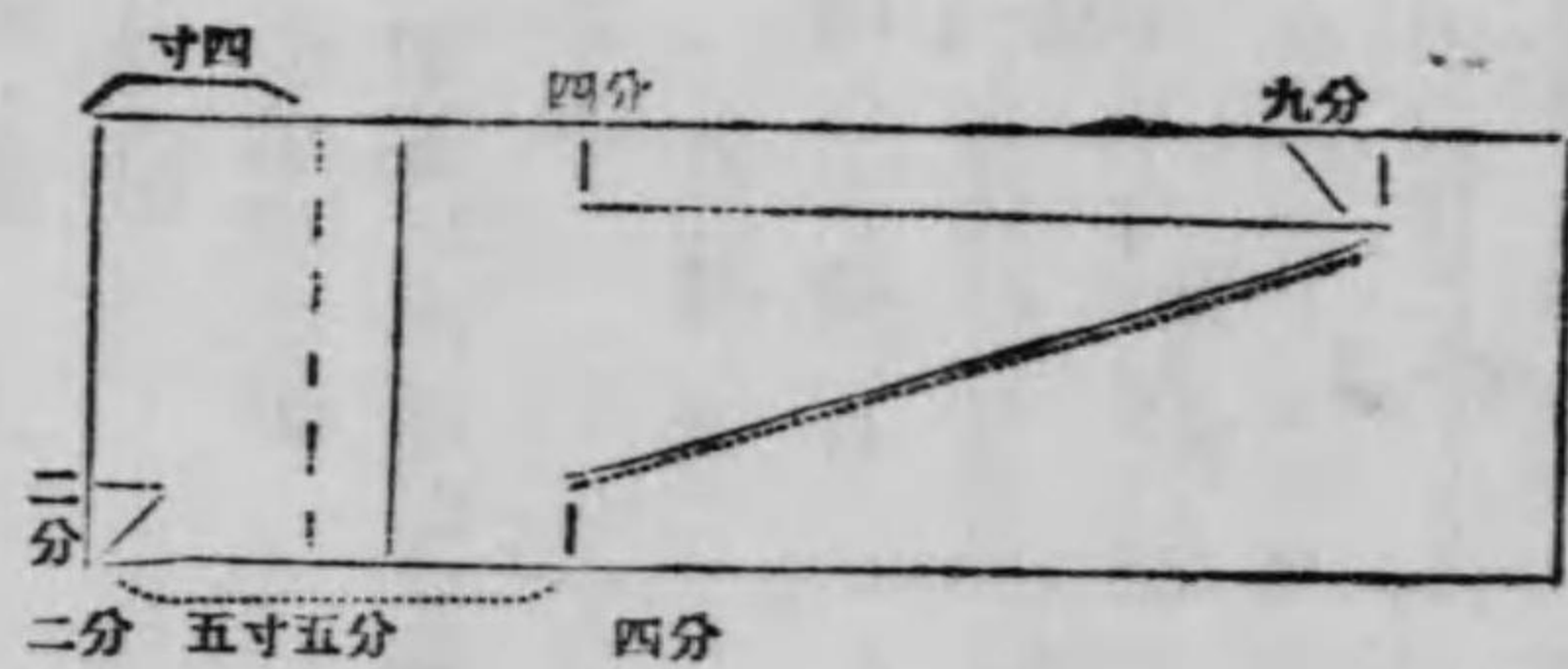
二、裁方及び積り方

1、表布裁方



2、裏布裁方





(注意)

- 1 衿は最初裏表の胸はぎをしましてそれから笥付にかゝります。
- 2 衿の衿付流れの處は圖の如に袂の先から襦下までに幾らか丸味をもたせて笥をして置きます。

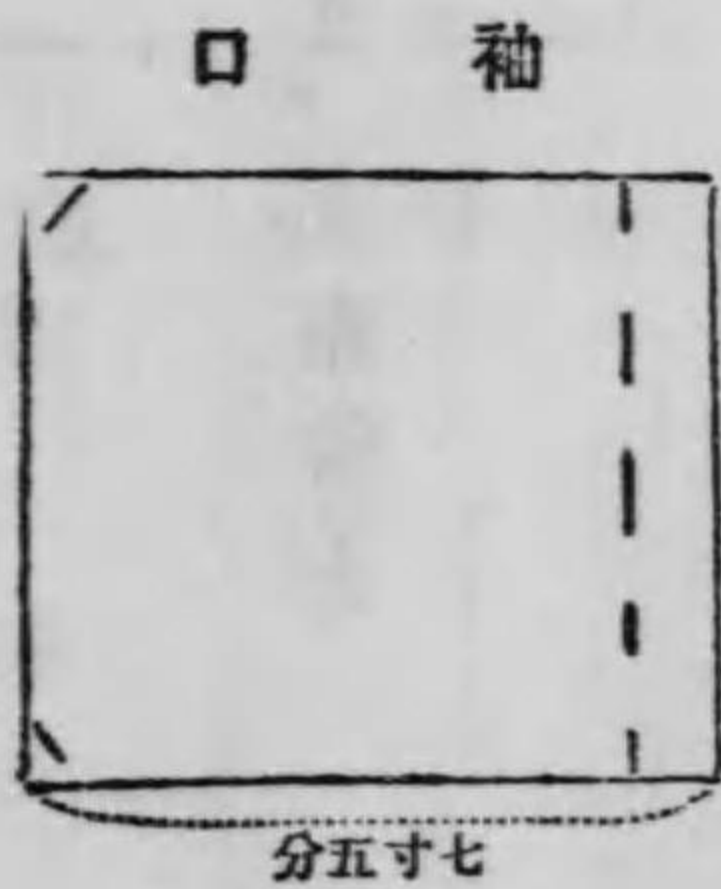
名稱	出來上り	裁切寸法
身丈	七尺一寸	七尺九寸
袖丈	五尺一寸	五尺五分
袖口	一尺一寸	一尺三分
袖吹	五寸	五寸五分
後巾	四寸	四寸五分
前巾	四寸	四寸五分
ダキ巾	三寸	三寸五分
衿相	四寸	四寸五分
衿下	三寸	三寸五分
衿肩	二寸	二寸五分
衿吹	四寸	四寸五分

衿

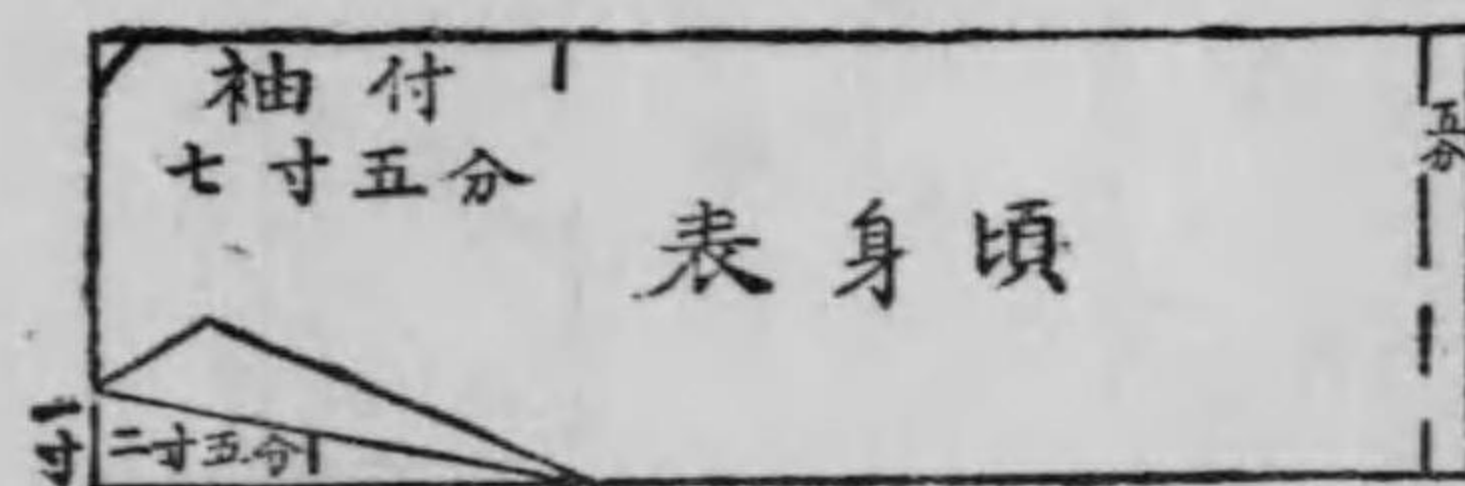
四、寸法表

三、標付

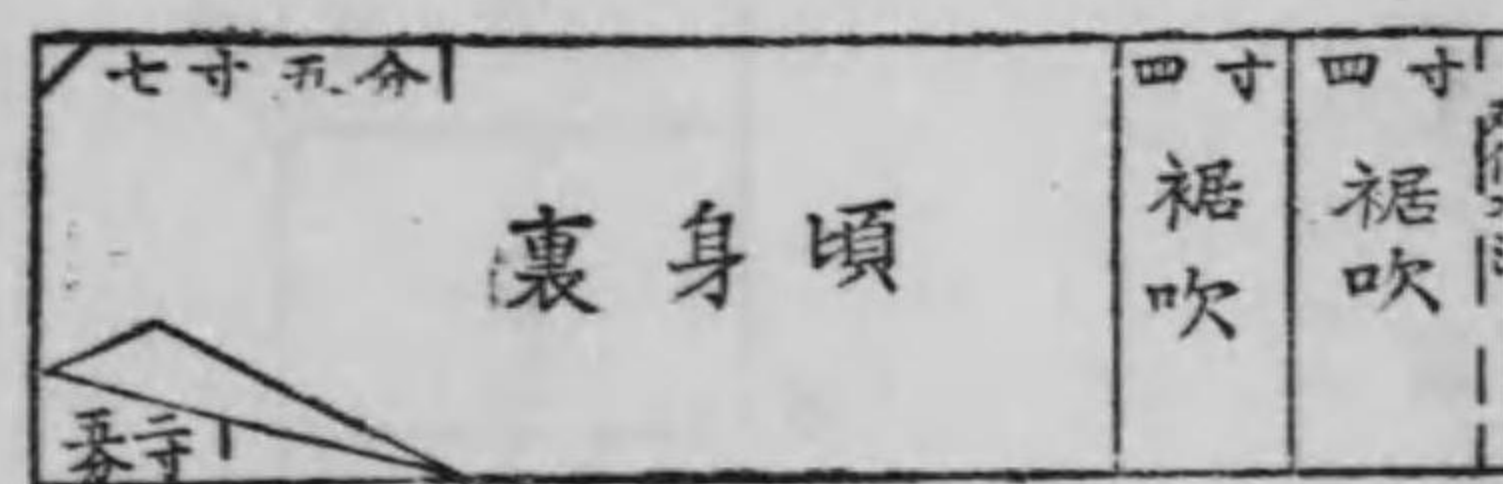
イ、袖



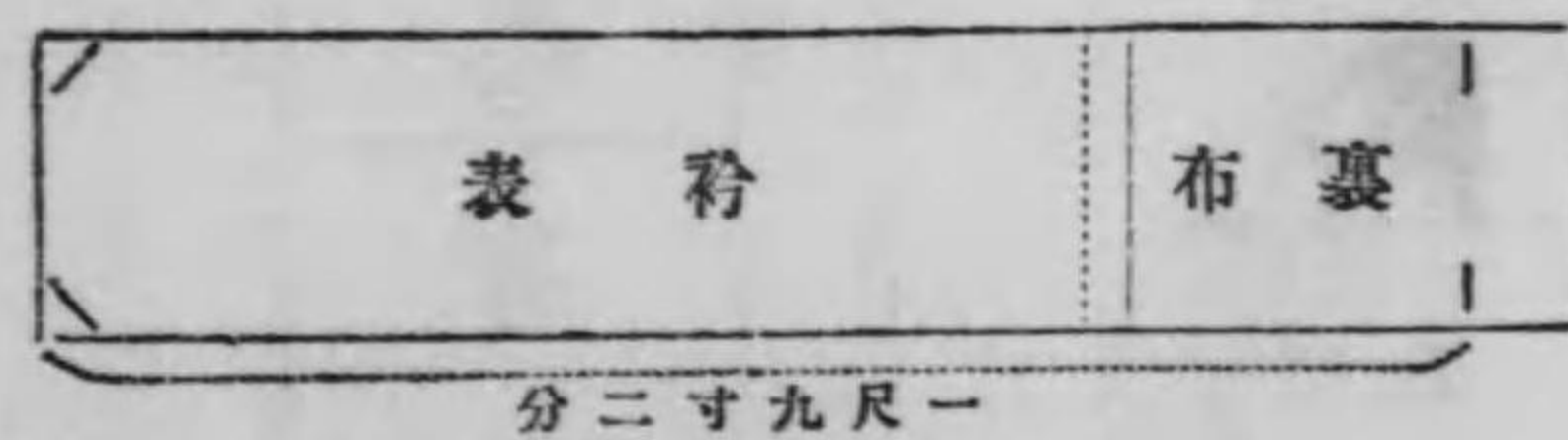
ロ、表身頃



ハ裏身頃



ニ、衿



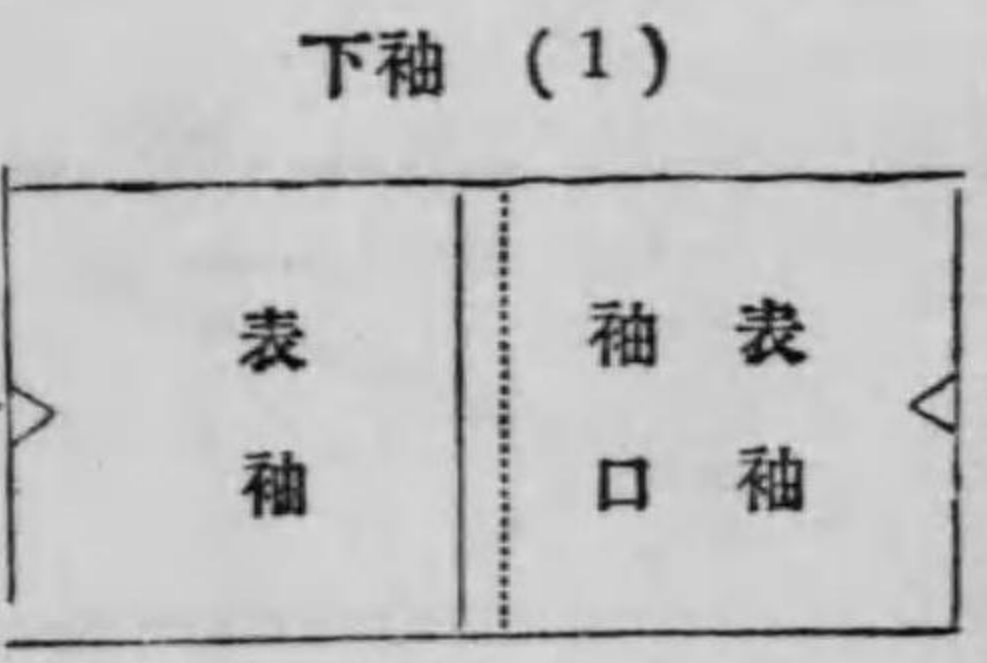
すまき置てけ付を先衿に前るけ付を笥

四、縫方

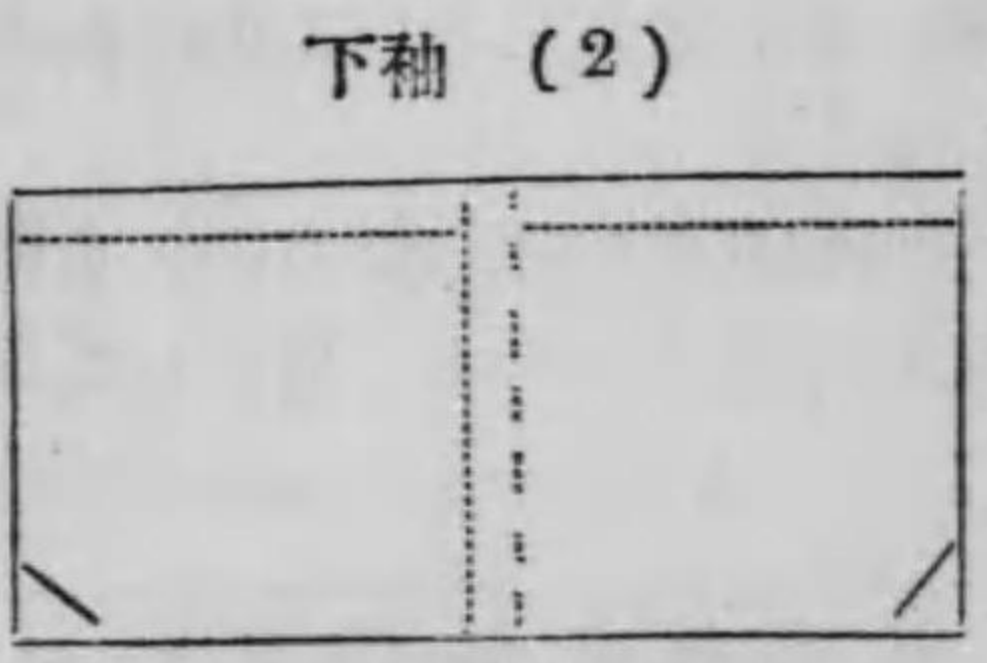
1、袖

イ、袖縫方の圖

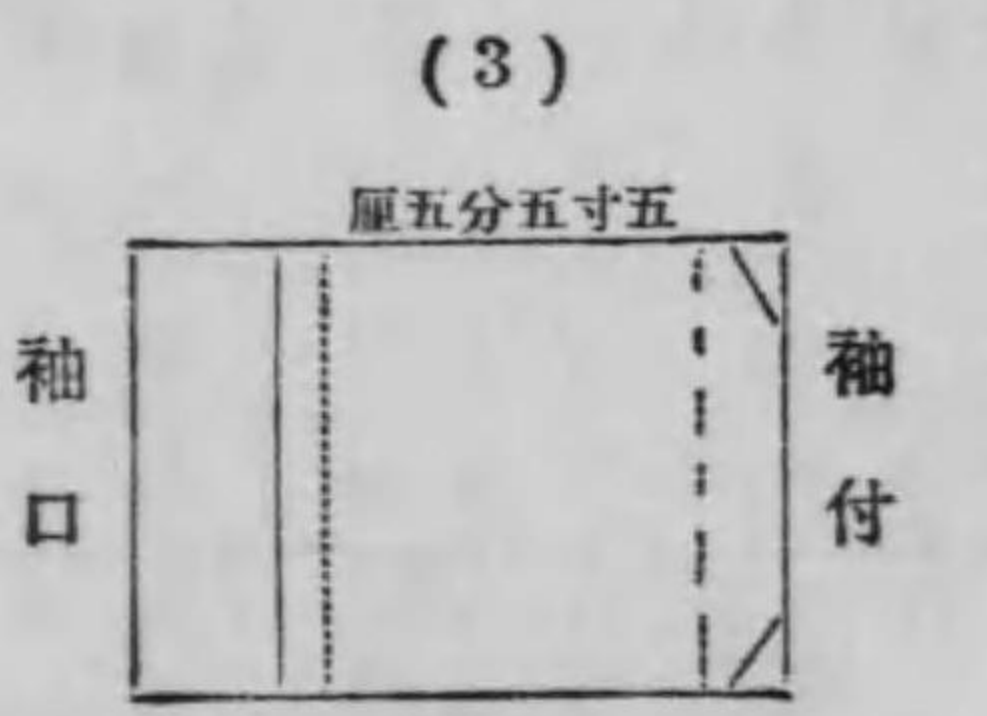
裏袖と表袖とを袖口の處で縫ひ合せたる圖であります。



下袖



圖るたつ縫を下袖



下袖

ロ、袖

1 圖で示してあります通り裏袖と表袖との筧を台せて待針を打ちまして、二分五厘の縫代で袖口を縫ひます。そして其縫込みを表袖の方へ手

折りに致しまして圖のやうに飾り縁を掛けて置きます。

縫合せました表裏の袖を中表にいたしまして巾を二つ折りに折りまして、2 圖のやうに表袖の端から裏袖の端まで袖下の筧を合せて縫ひ合

せします。かうして兩袖が縫ひ上りましたら、左と右との袖が間違はぬやうに鏡で折をつけ表へ返し裏袖へ飾り縁を掛けます。そして口吹一寸三分を表

袖の先へ出しまして、あとの裏袖は表袖の中へ入れ、それから袖巾の筧を

2、身頃

イ、脇縫

表身頃裏身頃の脇巾を當りましたら、袖下の筧から裾筧迄を合せて脇縫を致します。そして袖付のつれない加減に脇を割りまして、縁で押へて置きます。

ロ、胴はぎ

次に裏と表との胴はぎをいたします。縫込みの折りは表へ返しにして、三分足に隠し袷を掛けます。

八 衿

衿は標付で示してあります通り、はじめに裏衿と表衿とをはひで置き、す、そして、前身頃の抱巾前巾を寸法通りに極めまして表肩明から裏肩明まで寛通りに折を折りまして衿をつけます。衿は表劔先と衿下りを合せて待針を打ち衿の寛通りに身頃の折とを合せて裏の劔先まで縫つて行きます。

二 衿付

衿は寛附の圖で示してあります通り裏布を衿先に縫ひつけ、二分五厘の縫代で普通の着物の通りに上前の襟下から下前の襟下まで縫ひつけます。

注意 衿の寛付で示してありますが衿の劔先から襟下まで衿の丸味通りに衿をつけます。

出 來 上 り 圖



一ツ身振巻

ホ 袖付

袖下を最初四ツ止めにしたしまして、肩巾一分の縫代で筒袖の時と同じ縫ひ方で裏表の袖をつけます。

へ 襟下

裏表の寛を合せて表に綿をのせ裏から見て縫ひます。

ト 綿入

綿の分量は、其人の好みによつて厚くも薄くも適宜でございます。入れ方は夜着と變りはありません。只夜着は袖裏中央で綿を入れてから縫

ひつけますが、一ツ身襦巻は袖は裏表縫ひ上つて居りますから其まゝに綿でくるみまして表へ返します時は袴の處がくけてありませんからそこから返します。そして夜着と同じでそこを拵けます。

3、綴ち方

夜着と同じく袴衽脇袖付と夜着と同じ敷だけに、どちを入れて置きます。

一ツ身抱着

一ツ身抱着には袖はありません一寸見た處小供のマントと云つた風な格向をして居ります。袖の無い故に小供を寝かして置く時又は外を抱き歩く場合に風が這入る隙がないので大變暖たかでございます。それに袖がいらぬい爲に、自然布地も多くいりませんので、經濟と重寶とをかねて居りますが冬になれば小さい小供ある家では大概用ひられて居ります。

一、地質及び寸法

1、地質

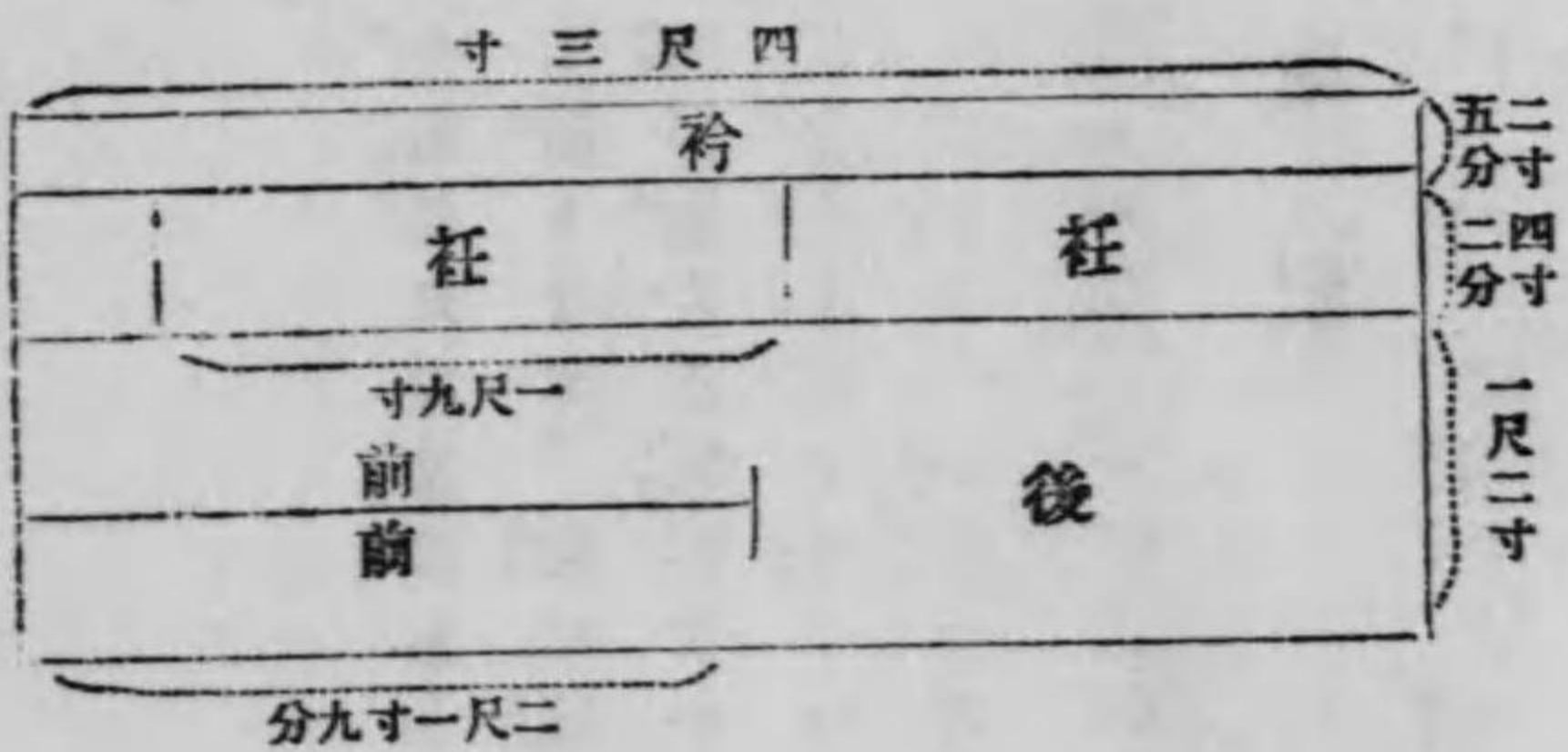
これも一ツ身襦巻と同じく重にメリンスが用ひられます。

2、用布及寸法

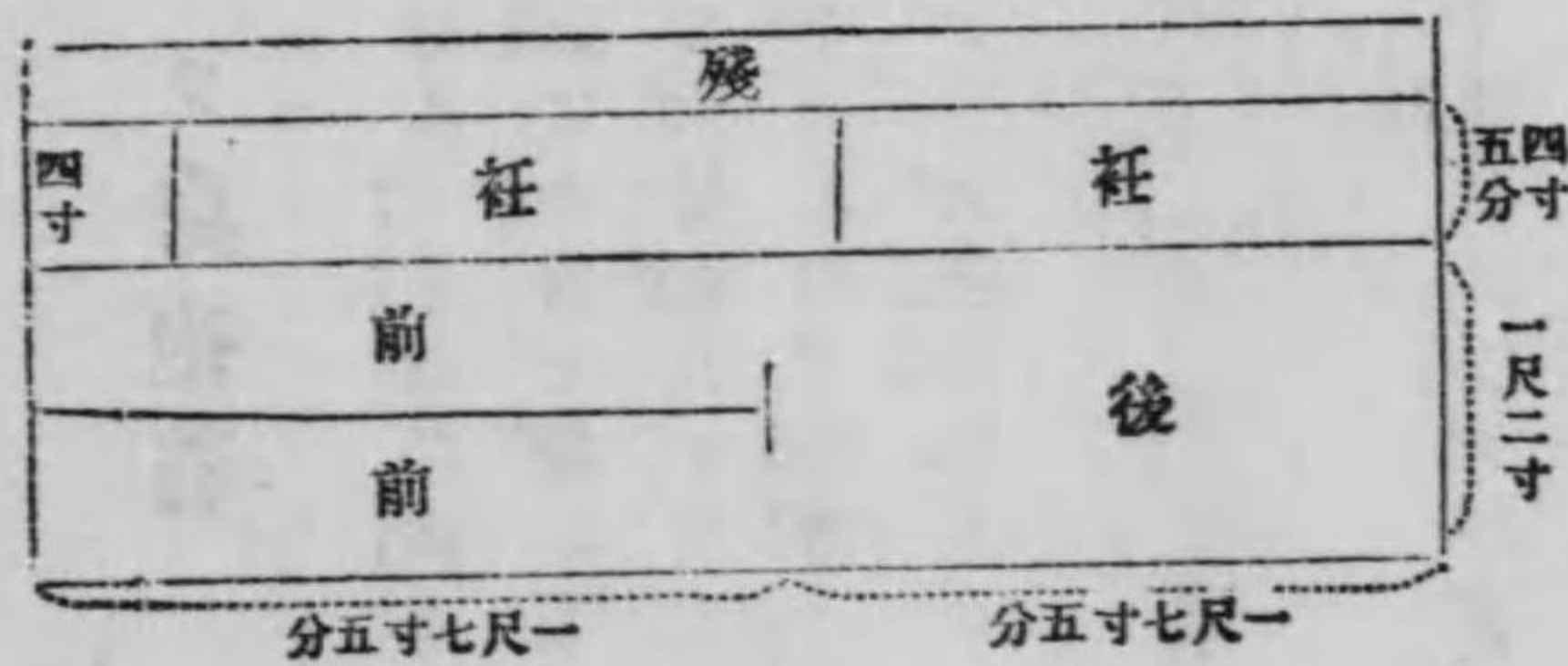
大巾物を用ひます表布四尺三寸、裏布三尺五寸。

一、裁方及積り方

1、表布の裁方



2、裏布裁方



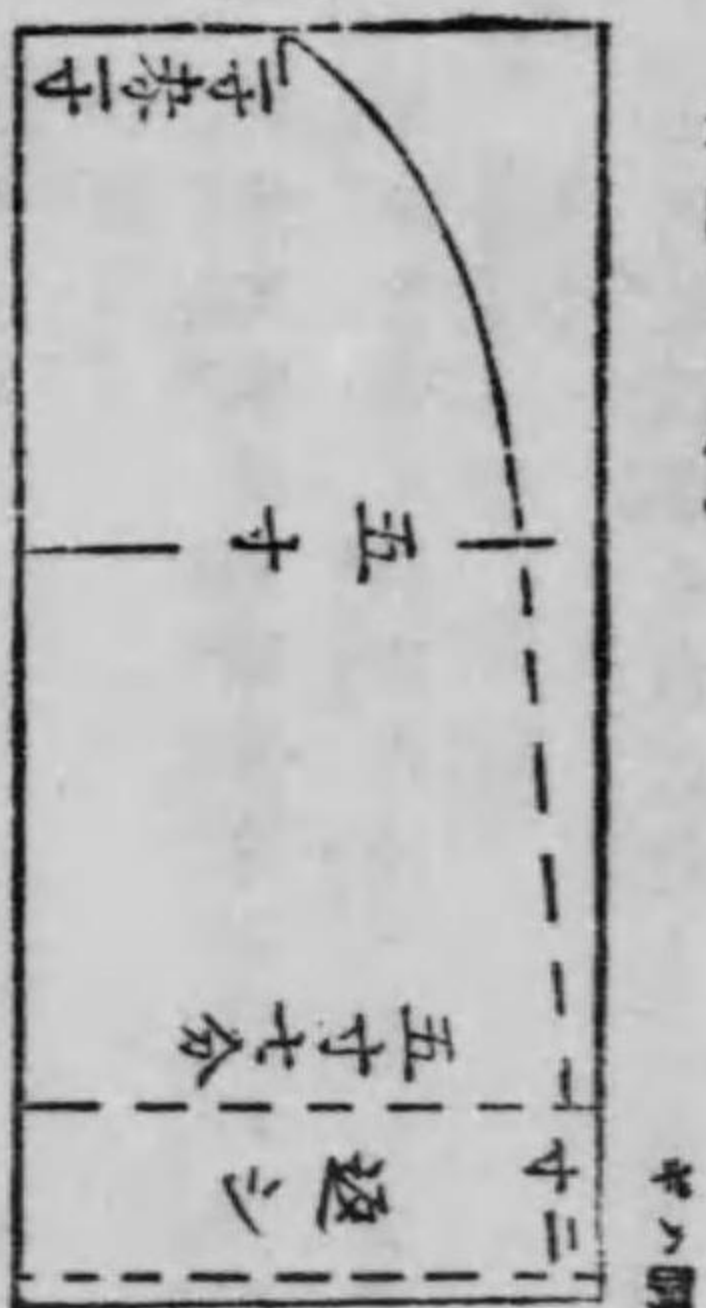
表法寸

衿	衿	抱巾	前巾	身丈
巾、四寸	下二寸五分	五寸一分	五寸七分	一尺九寸

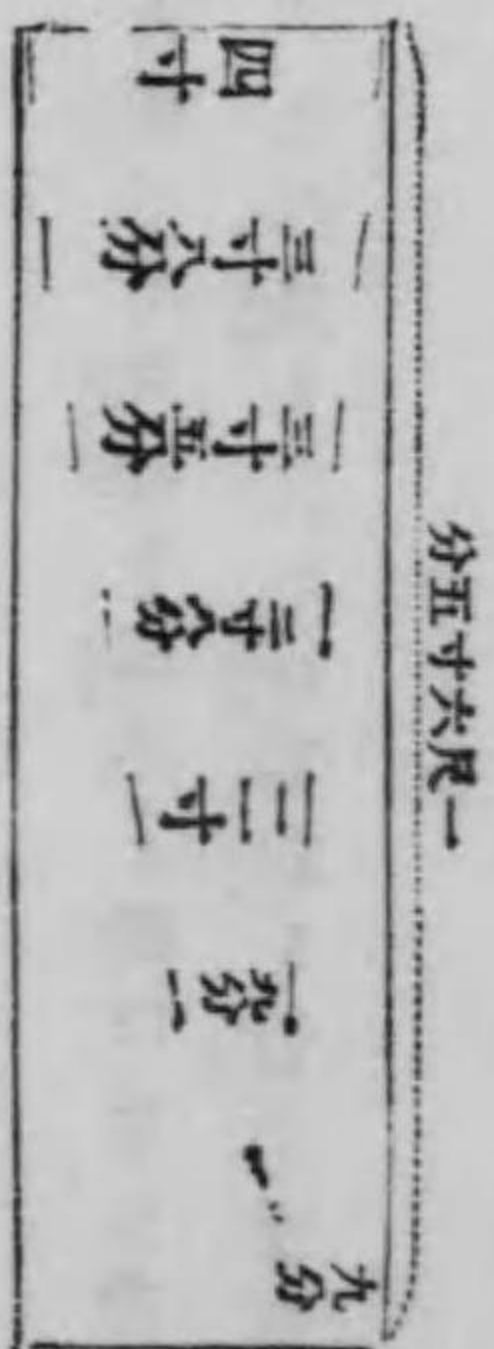
二、標付

最初裏表の身頃を重ねまして胸はぎの筧をして置いて、そして身頃の筧をいたします。

1、身頃の筧



2、衿の筧



三、縫方

1、身頃

1、胸はぎ

最初に裏表の身頃の胸はぎをいたします。

ロ、脇縫

この抱替は袖がありませんから、脇縫は寛付の圖で示してあります。肩先丸味から一寸五分の處から肩下七寸迄の肩先丸味を、脇通りに縫ひまして、其糸で肩下の縫込みの筈から脇縫をしまして、表身頃から裏身頃と肩下の筈まで縫ひ廻しましたら、裏の肩先丸味も表と同じく縫ひます。

ハ、衽付

一ツ身掻捲と別に變りはありません。

ニ、衽

衽は裏下がありませんから、裾山までつけます。

2、綿入

綿の入れ方は、普通の着物と變りはありませんが、只袖がありませんから、

3、ごぢ方

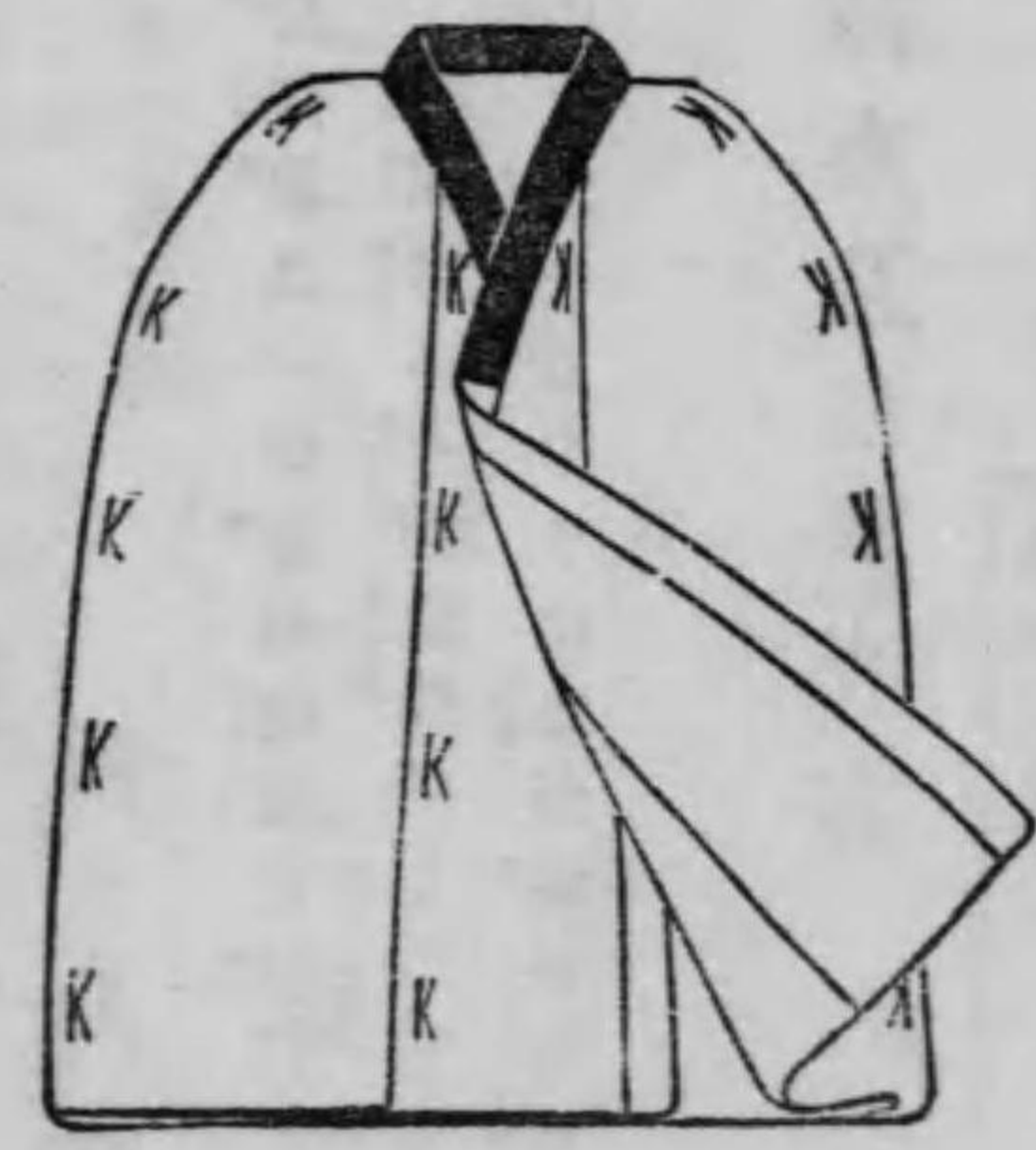
先は丸味が崩れないで、格向よく出来るやうに、綿も丸く造つて入れます。裾の方は一ツ身袖無羽織位の厚味に入れます。

綿か這入つたら衽を綴ちて衽けます。

出来上りましたら野綴ちにしないで、夜着と同じく綴ちます。

四、出来上りの圖

出来上り圖



一ツ身抱替

四ツ身抱着、釣鐘型と分銅型

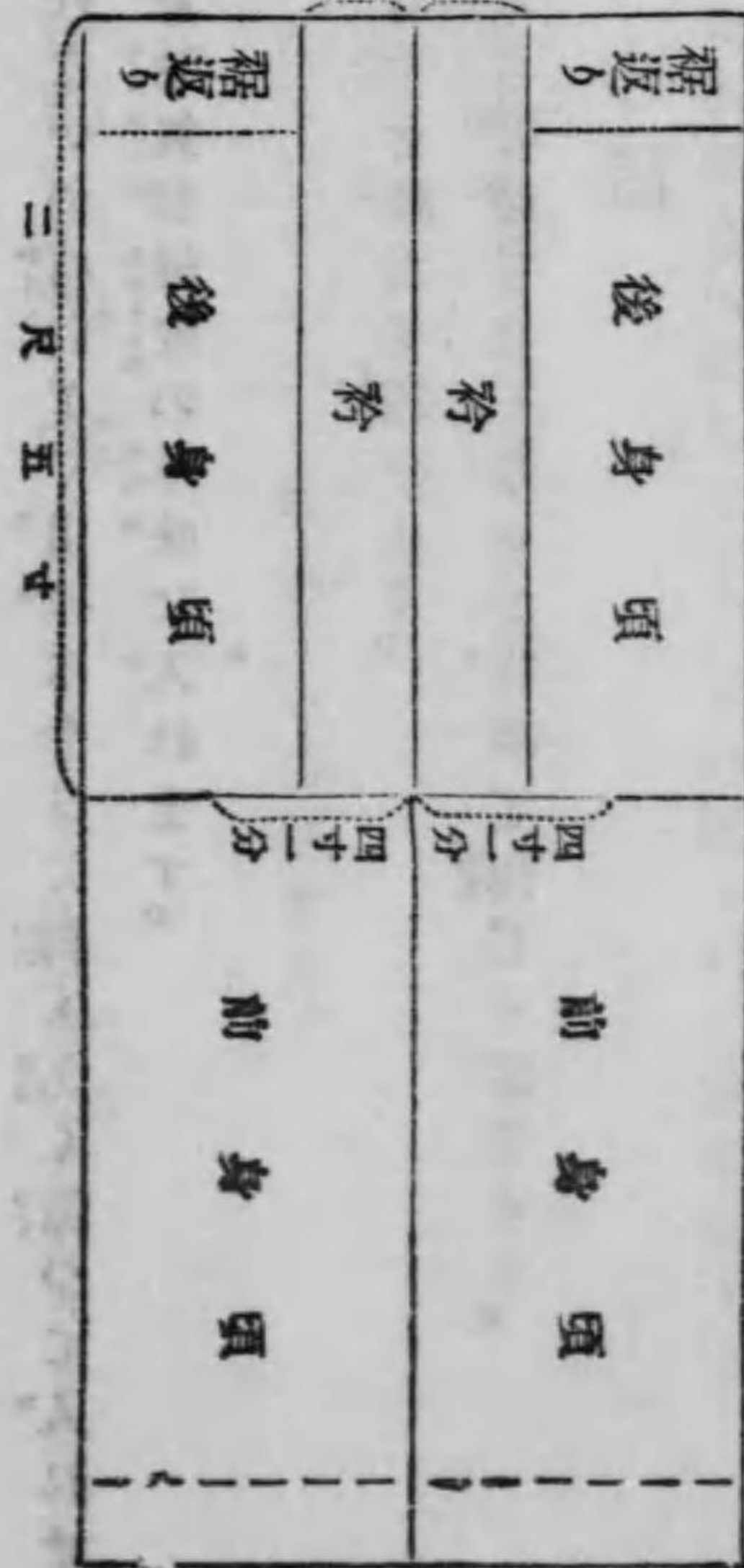
四ツ身抱着は、一つ身の抱着と同じく釣鐘型と外に分銅形との二種が御座います。釣鐘型は身體全部がくるまるやうに出来て居りまして、分銅形は兩手が自由に出せるやうに脇が明いて居るだけの造りでございます。

一、裁方及び積り方

裁方の様子

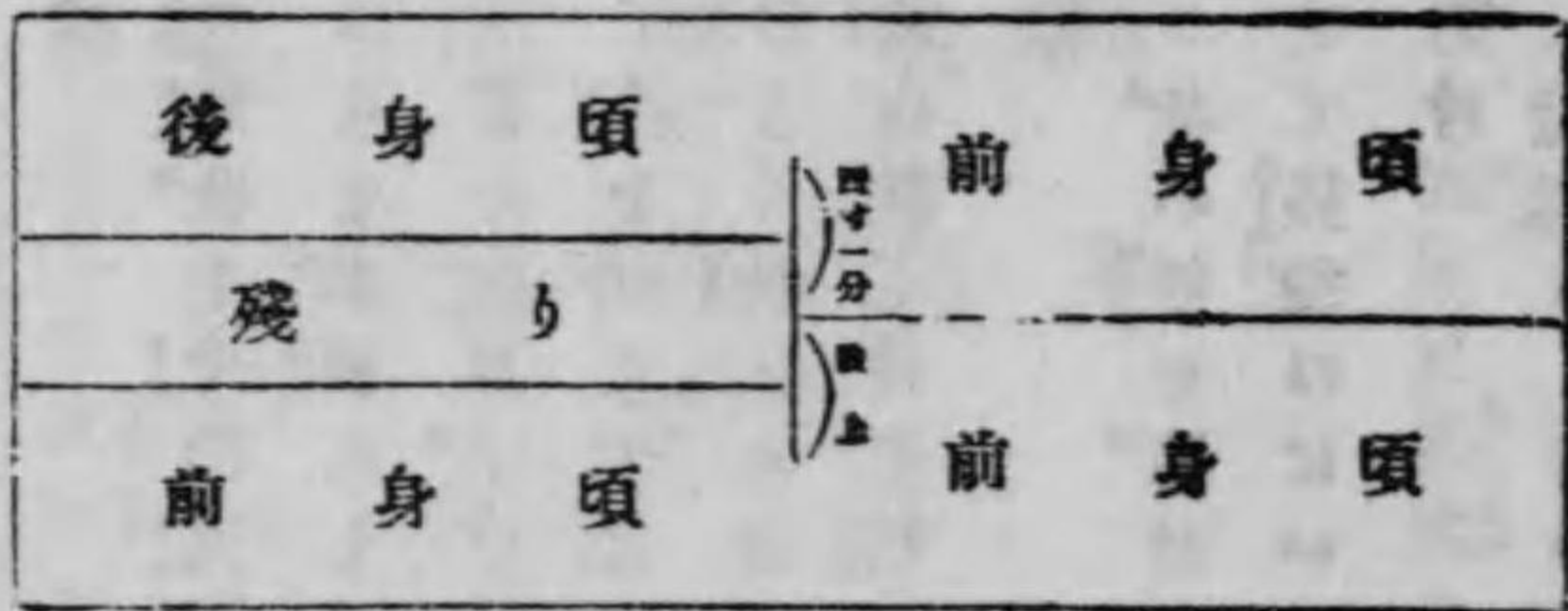
用布

大巾五尺

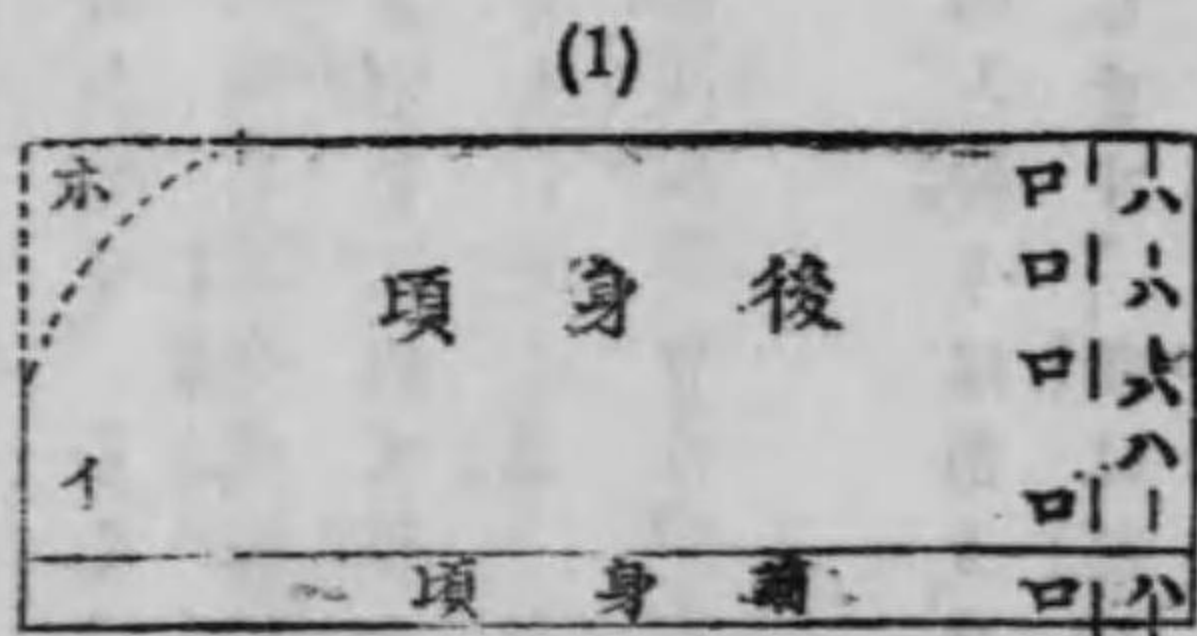


裏布大巾三尺九寸

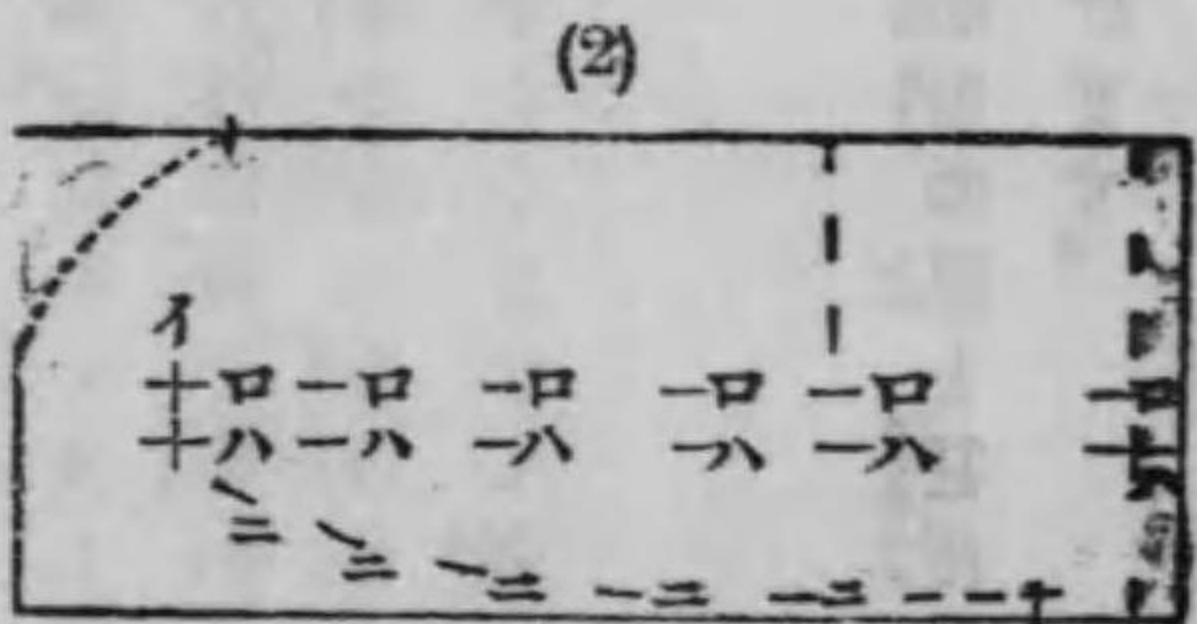
裏布の裁方



二、標附



一 背縫 口 身丈 ハ 裾返り
 二 肩下り ホ 肩丸味



一 衤下り 口 前巾 ハ 衤巾
 二 衤附流れ

三、縫ひ方

一、肩はぎ及背縫

胸裏丈の寛と表身頃裾返りの寛とを合せて後頃ともに各々はぎにし

四ツ身抱着、釣鐘型と分銅型

したら表身頃から脊縫ひをいたします。胴はぎの處で裏地と同じ糸ど取りかへ裏の脊の山まで縫ひ合せます。

■脇縫

肩先丸味(七寸の丸味による)元祿袖と同じく丸味を筧通り縫つて糸を少しつらせ加減にして置きます。そして其糸で脇縫ひをいたします。裏も同じく縫ひ上げましたら肩先丸味の外二分五厘の處を細かく縫ひ寄せて糸を切らずに置き形を入れて縫ひ込みを前の方へ折り糸を引いて格好よく縫込みを寄せましたら筧で押へて糸をよく止めて切ります。脇縫の折は前身頃の方へ折ります。

■八衤附

四つ身の衤を附けるのと變りはありません。前巾の筧と衤附の筧とを合せて袋縫ひにいたします。折は衤の方にかけてます。

■二衤附け

衤を真中から二つ折にしまして衤下りまで待針をして縫ひつけます。

衤下りから下流れの處は衤地が丸味を帯びて居りますから従つて衤をゆるみ加減に衤丈の山まで縫ひます。衤がつかましたら半衤をかけます。

四、綿入

綿の入れ方は一つ身の時と變りはありません。

五、綴り合せ

綿が這入りましたら上前下前どもに衤下りまで裏表の身頃をとち合せます。

衤の裾から五分上つた處に裏から表折目のきわ元へ一針ぶつくり小さく出しまして其糸で三寸ばかり野とぢをいたします。それから上は衤下りまで裏表の衤付けを揃えてすくひ駈をして置きます。衤流れは裏衤を下に表衤の上に置き表衤附根きわまですくひ駈のやうに裏表の身

頃をどちつけます

六、衿付け方

衿

三つ衿の處は、綿がありませんから、別に足し綿をいたしまして、外の處と平になるやうに、上前衿先を縫つて、襦袢の衿を衿けるやうに、下前の衿先から、上前の衿先まで衿けて行きます。衿け上りましたら、衿け目と衿の峯とを平にして、鍛仕上げをいたします。

七、野綴ち

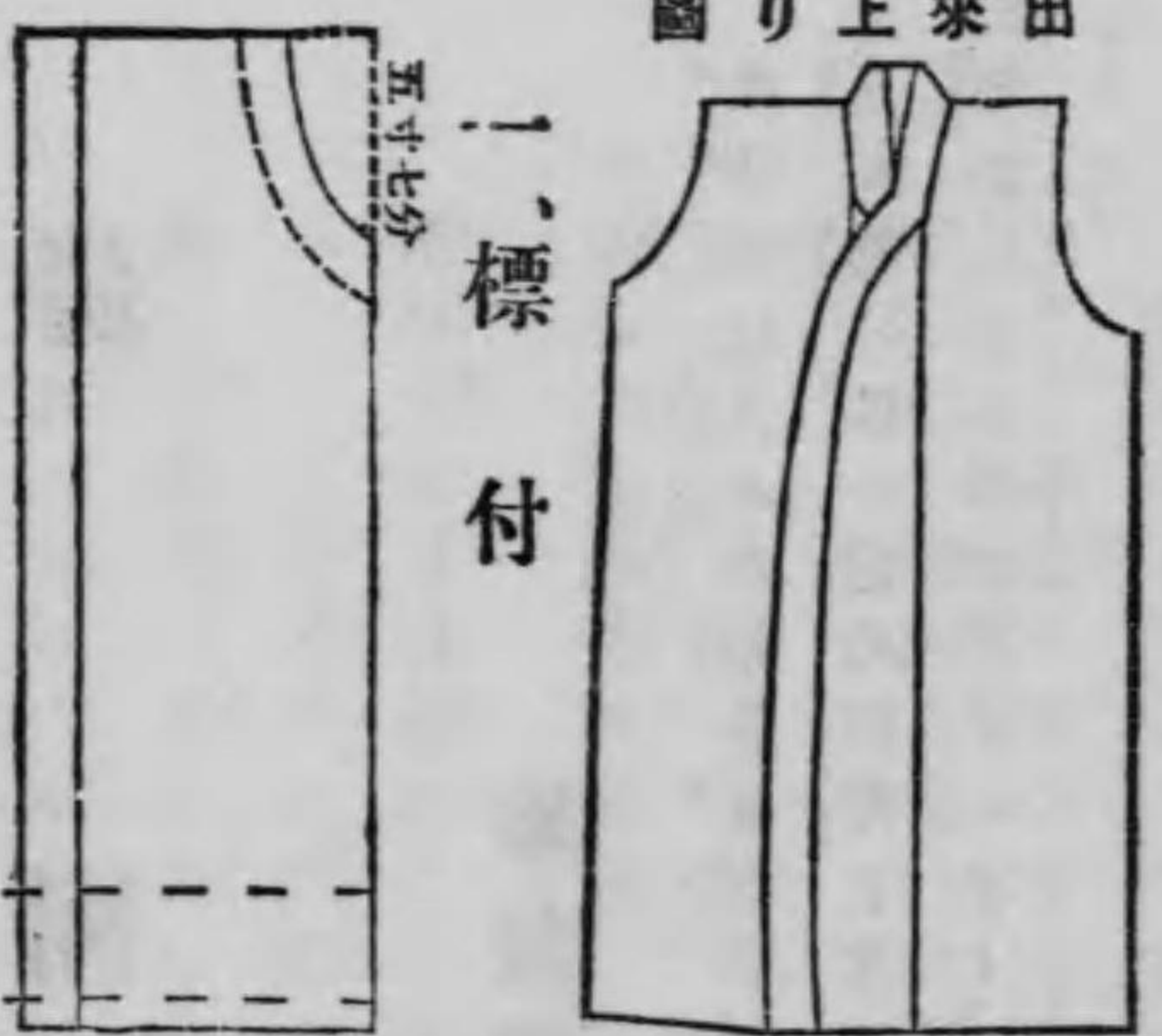
脇の縫目に習つて、裾から五分上つた處に、表から一針どめて丸味のきわまで綴ちましたら、肩先丸味は裏表を平に据へて四ヶ所ばかり待針を打ち細かく丸味全體に野綴ちをいたします。(待針をして置くことは丸味は崩れ易いため裏表の平に据はりませんと丸味の形が崩れますからそれを避けるためでございます)

八、仕上げ

縫ひ上りましたら仕上げをいたします。

分銅型

圖り上來出



二、縫方

最初、肩巾から二寸肩から下つた處五寸七分位弓形に切り落して置きます。そして裏表を揃へて四ヶ所に合標しをして置き、それを縫ひ合せまして表の方へ折を折つて裏の方へ振り八つと同じやうに綿を縫ひつけます。こゝは綿が離れたがりますから、こゝ云ふ注意が必要であります。外は全部釣鐘型と變りはありません。

蒲團

座蒲團

座蒲團は、人々の好み、家庭の風習に依つて、随分様々な形がありますけれども、凡て物には一定の標準となる形があるもので、座蒲團にも普通一般に定つた形があるものでございます。此には夏座蒲團の裁縫を申上げる事にいたします。

一、夏座蒲團

1 地質 麻

2 用布 巾一尺六七寸 丈三尺六七寸外に大判綿三百匁。

3 裁方と積り方

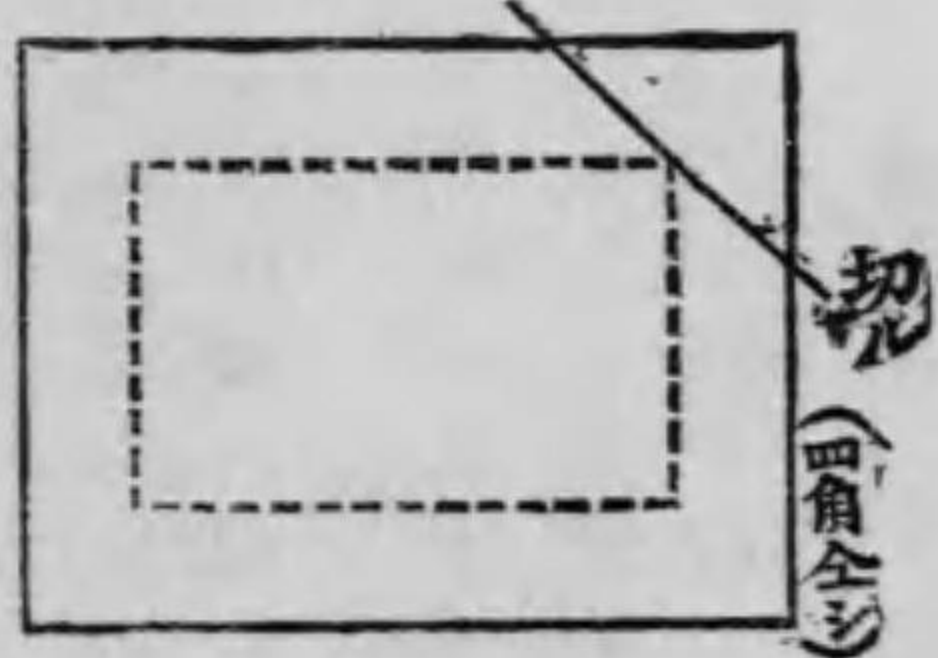
蒲團地の物は、一枚の模様が大低定つて居ますから、模様の位置を見て、一枚分づゝ裁つて行けば宜敷うございます。

寸法は凡て出来上りが、丈の方が一寸三分から五分長く出来れば結構です。模様の附け方に依りまして、何寸長く縫ひたいと思ひましても出来ない場合もありますから、大凡の處を覚えて居れば宜敷うございます。

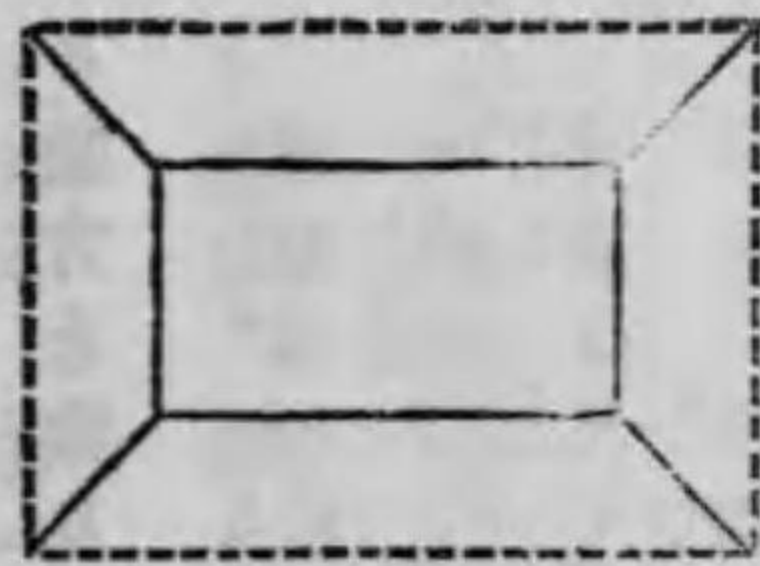
4 縫ひ方と綿の入れ方

縫ひ方は普通縫代にて合せ縫ひに致しましたら折目を表布の方に返へして三分足位に隠篋を掛けます。一方は必ずわになりすから他の三方の内、一方を残して、二方を只今申上げた様に仕立てます。残しました一方は、両端から三四寸だけ縫つて、四角を縫目と縫目と合せて

方り切の角の綿



圖たつ折を綿たつ切



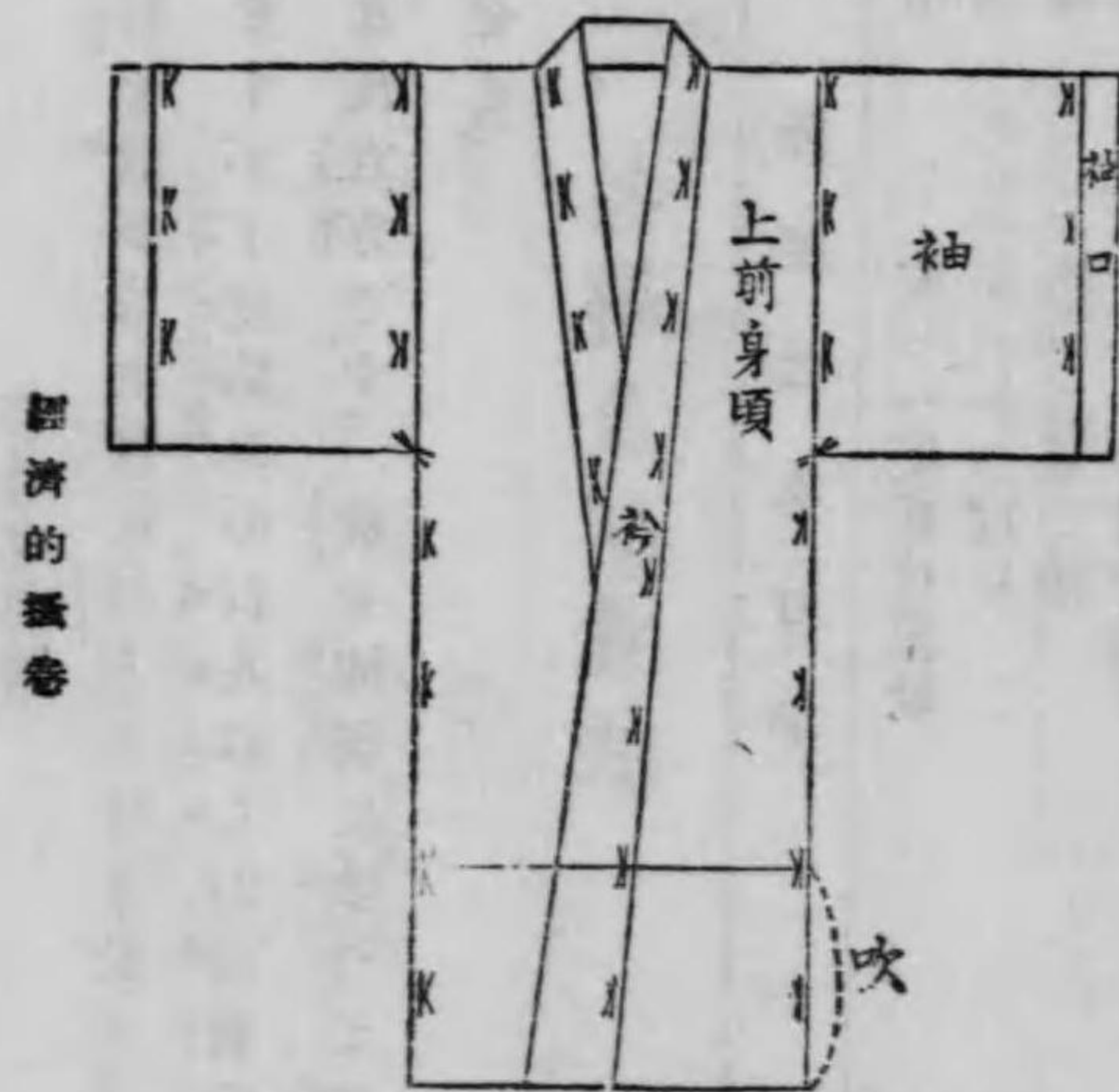
縫目から左右へ三分五厘づゝ、總體で七分縫つて丈と、
 丈とが向ひ合ふ様に折り返へします。縫ひ残してあ
 る處は表になる布の方だけ縫込みの折りをつけて、先
 きへ隠裏をかけて押へて置きますと、後で紘ける時、樂
 でございます。綿は大判綿三百匁と云ひますと、ちよ
 うご四枚位になります。厚さは此の位が、宜敷うござ
 います。眞綿は用ひませんが、綿造りの致し方一つで
 決して切れる様な事は有りません。綿の入れ方は、縫
 ひ上りました座蒲團を裏を出して四角に置き、其の上
 へ綿を、巾は、綿巾いつばいに、丈は前後五寸位長して
 一枚、次には其の綿と同じ大きさの物を、ぶつちがへに
 置きます。三枚目は、一枚目と同じ、四枚目は、二枚目に
 同じ、と云ふ様にして幾枚でも重ねて行きます。三百
 匁でしたら、四枚重ねまして、五寸位の巾に切りました

綿を丈と同じ長さに二つ巾と同じ長さに二つ、中央が座蒲團の端に重
 なります様に、一週りずつと入れます。次には四角を圖の様に切り取
 りまして、(點線の處が出来上りの大きさです)から、其の處から折ります
 と、圖の様に額縁の様な形になつて、角の斜の處は、二三分重なる様にな
 ります。中央の綿の薄い處は、四角で切りました綿を使ひますと、ちよ
 うご同じ厚さになります。上へ一枚出来上りの大きさの綿を入れて
 小さい綿の押へに致します。

5. 仕上げ(綴ち方)

四角に出来ました綿を巻いて表に返へし、またした座蒲團の中へ入れま
 したら、入れた口を細かに紘つけます。其色の絹糸を五本針へ通し
 て、中央を十文字に一寸足で綴ち表へ糸を出して、五本の糸を四つ都合
 二十本を一度に布から結び目の離れさせん様に、こま結びを一つして
 置きます。糸の長さは結び目から一寸五分にして切ります。四角も

(前) 圖のち綴げ上立仕



経済的搔卷

圖のち綴縫背と肩袷



一六五

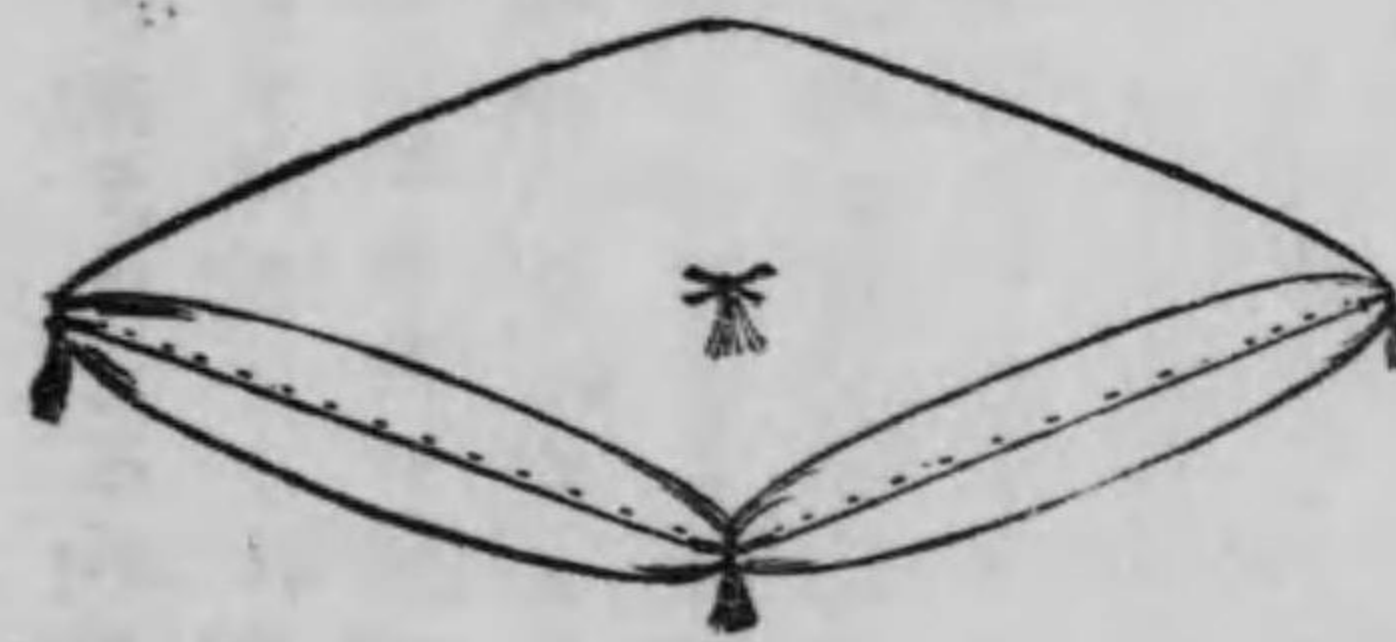
経済的搔卷

搔卷は多く夏用ひます物ですから薄くて軽いのが喜ばれます。地質も其れ故麻等を用ひますが斯う云ふ反物は尺の短い物ですから裁方も其れに従つて経済的に考へ無くてはなりません。此處に申上げますのは、衿を廣くし

圖の方ち綴



圖のり上來出



同じ糸を此度は十本通しまして、七分の厚味の真中から縫目の處五分づゝ左右を一緒にすくつて真中と同じ様に、こまに一つ際で結んで一寸五分の長さにして切りますと、矢張り二十本の房が出来ます。

座蒲團

一六四

て衿を兼ねさせ、別に衿をつけません。仕立上の圖を御覽になれば直ぐわかりますが、丁度關西のねんねこが脊負半天(廣衿にして衿をつけないのと同じ様な仕立方です。最も地質に依つては綿を多くして冬用ひても差支えありません。

一、名稱及び寸法

袖丈	一尺五寸五分
同袖丈	二寸二分
袖口、附吹	二寸二分
同身丈	四尺二寸
裾吹	六寸
身巾	二寸八分
肩巾	二寸八分
衿巾	四寸八分

振卷仕上寸法

裁切衿巾は、

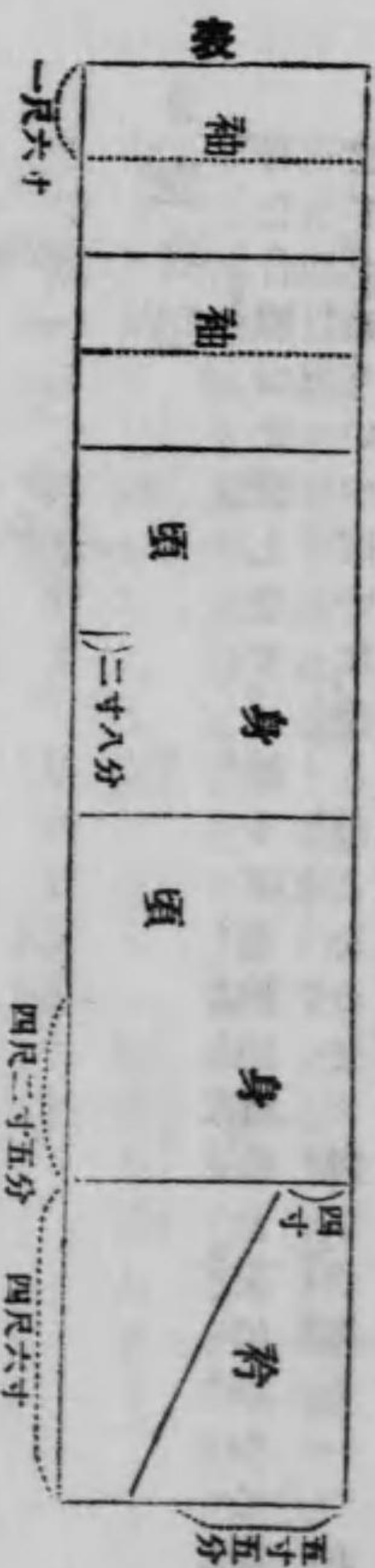
圓、五寸五分

山、四寸

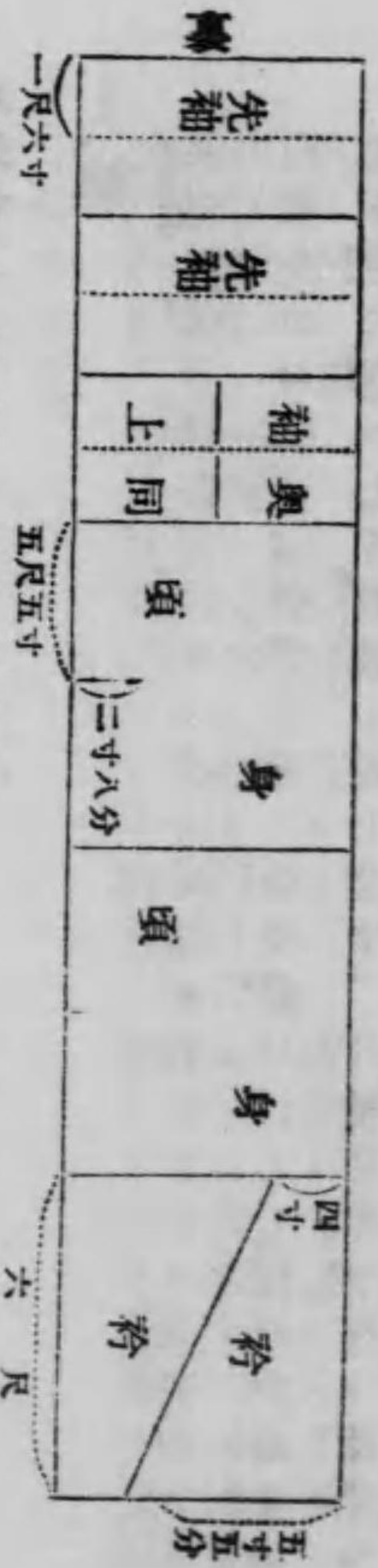
此の寸法は、冬物の時も用ひられますが地質に依りましては、尺が深山有りますから、袖丈いや身丈けを充分にとる事が出来ます。

二、縫方と積り方

1 用布 表二丈八尺。裏三丈七尺六寸。



縫方



積り方

表 { 16寸×4 + 42.5寸×46寸 = 280寸 } 總尺の出し方
裏 { 16寸×6 + 55寸×4 + 60寸 = 376寸 } 總尺の出し方

三、縫方

蒲團類は、凡べて篋を致しません事になつて居ますから直ぐ縫ひ方に移ります。

1、袖

表袖と先き袖とを巾いっぱいに合せ縫ひにして表袖の方へ返へして隠裏をかけ袖下は袋縫で無く合せ縫ひにして附けた時前身頃の方になる様に返へして隠裏を致します。奥袖は袖下を一度縫つて前へ折りを返へして置きます。是れは裏袖です。

2、表身頃

脊を合縫ひに致します。折りは着物同様裾を左に以つて前へ返へします。脇もいっぱいに後と前とを合せて縫ひ表袖を一つ身の筒袖の時の様に附け初めと終りを一寸位身頃の縫込みを折つてつけ半返縫にして置きます。袴つけは下前を巾いっぱいにして袴肩まで斜に折

3、裏身頃と裾合せ

表と同じ様に脊背縫は表と反対の方に折ります(脇袖つけと縫ひ上げましたら裾を表の縫目と合せて上前の袴から下前の袴の先きまで裏の方を見て合縫ひにして表に返へし隠裏を致します。

4、衿峰の合せ方

表の袴と裏の袴とを巾の標を合せて衿山から左右へ二尺五寸づゝ明けて裾迄で合縫ひにして折りを表に返へし隠裏をかけて置きます。明けて有ります處は表へだけ縫代の折りをつけて先きに隠裏をかけて置きます。

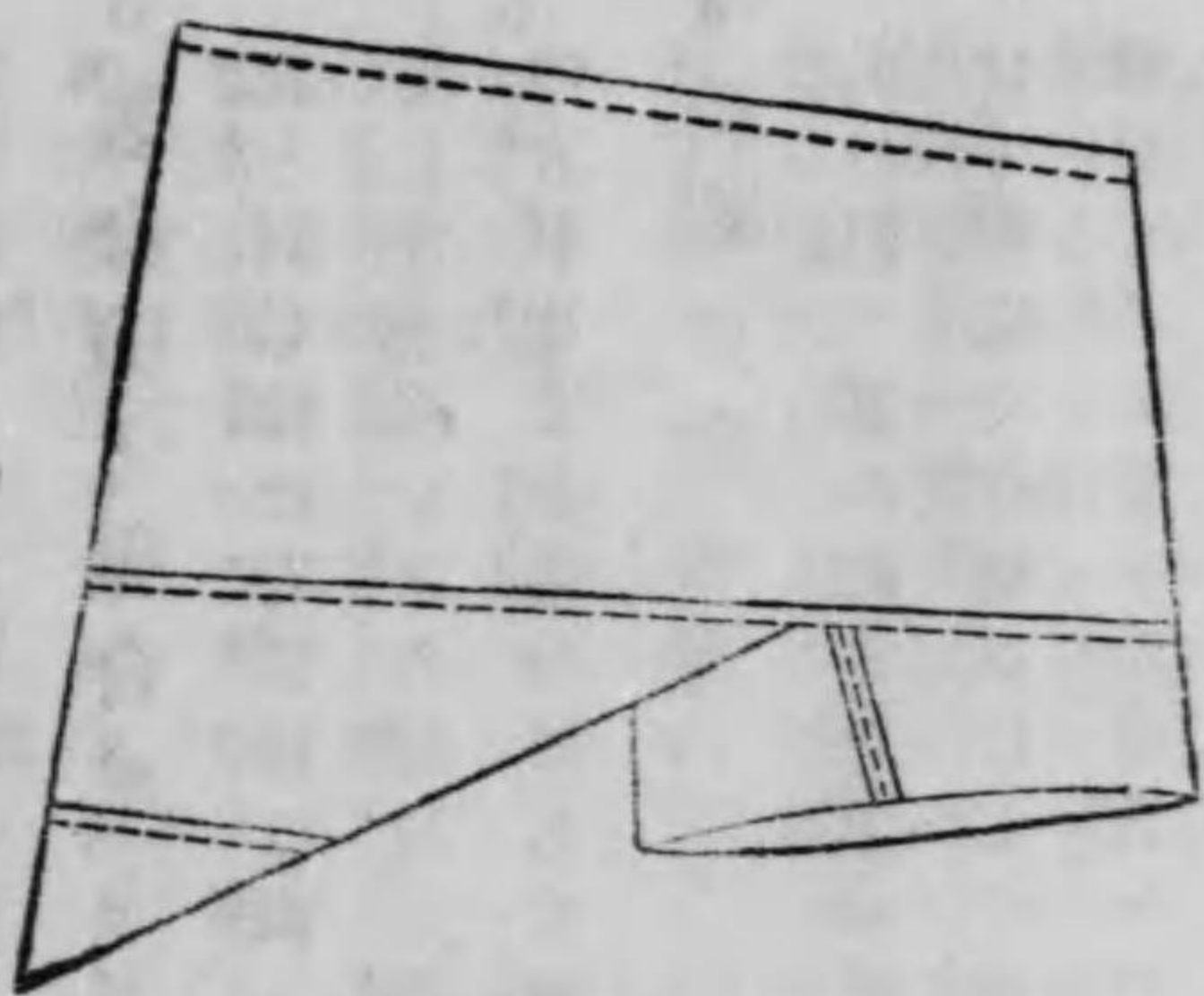
四、綿の入れ方

綿は大判綿六百匁敷にして六枚程入れます。真綿は一切用ひません。

1、疊み方

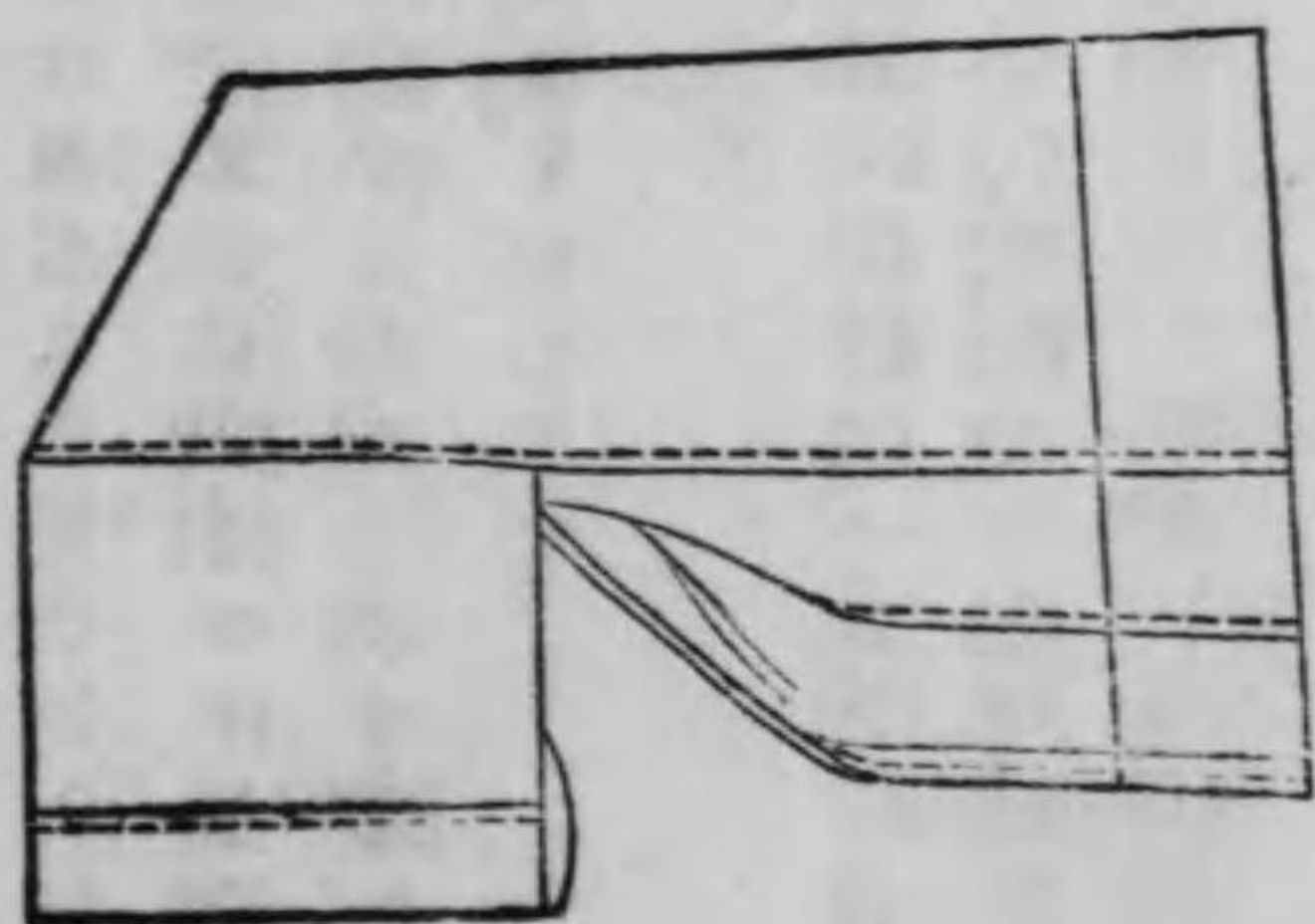
縫ひ上りました振卷を裏を出して裏布の疊み方の圖に在ります通り
荷肩を後身頃に寄つた處から折つて袖下を真中になる様に袖を疊み

圖の方み疊の布裏



圖の方み疊の頃身後

(表)



吹き先の後身頃の折つた先の處へ行く様に二つに折つて其の上へ後身頃の疊み方の圖表の様に表の後身頃を疊みましたら其の上
に縫を造ります。

2、後身頃

大判綿一枚を肩の方から擴げて參りますと裾の方で丈けが少し足
りなくなりますが他一枚で足して出來上りの丈けより一二寸長
くして切つて了ひます。

3、前身頃と袖

後の時の様に上から下まで綿を敷きまして肩の處は後から來ました
上へ重ねてつぎます。裾は眞無しにして長い丈けを折り返へします
から二枚になる譯けです。
袖は身頃から來て居る綿を入れます足り無い時は別に足して入りま
したら吹きの方から最初疊みました裏布を出して上にのせ表に附い

て無い方の先き袖の耳を裏袖とに合縫にして、奥袖の方へ折り返へして置きます。袖口も別に眞を入れずに裾の時同様長い丈けを折つて二枚にして置きます。

4、衿と衿峰の衿け方

前身頃から續けて衿に綿を入れましたら、二尺五寸づゝ、上前下前に縫ひ残して有ります處から表へ返へして、衿峯を隠裏のかけてある方の上に乗せて下の布の筧と合せて衿けます。

五、仕上げ

振卷には、仕上と云つても別に火熨斗をかけるのでも有りませんから直ぐに綴ちをして肩當をつけます。綴ち糸は絹の共色のを四本にして用ひます。

1、綴ち方

綴ちとは仕上の圖の通り、後は衿肩明に三つ、脊縫に五つ、袖附と袖口とは山に一つ、股がらせて後前に二つ、宛前は脇に四つ、下から二つ目のを吹き縫目に股がせませす衿は上前にも下前にも九つ、下から二つ目のは脇の時と同様に縫目に懸けます、一寸位の針目にすくつて、四本の糸を二つ合せて一束に、ごめに一つ結び、一寸餘の長さにして切りませ、房が八本になつてなかく解かせせん。

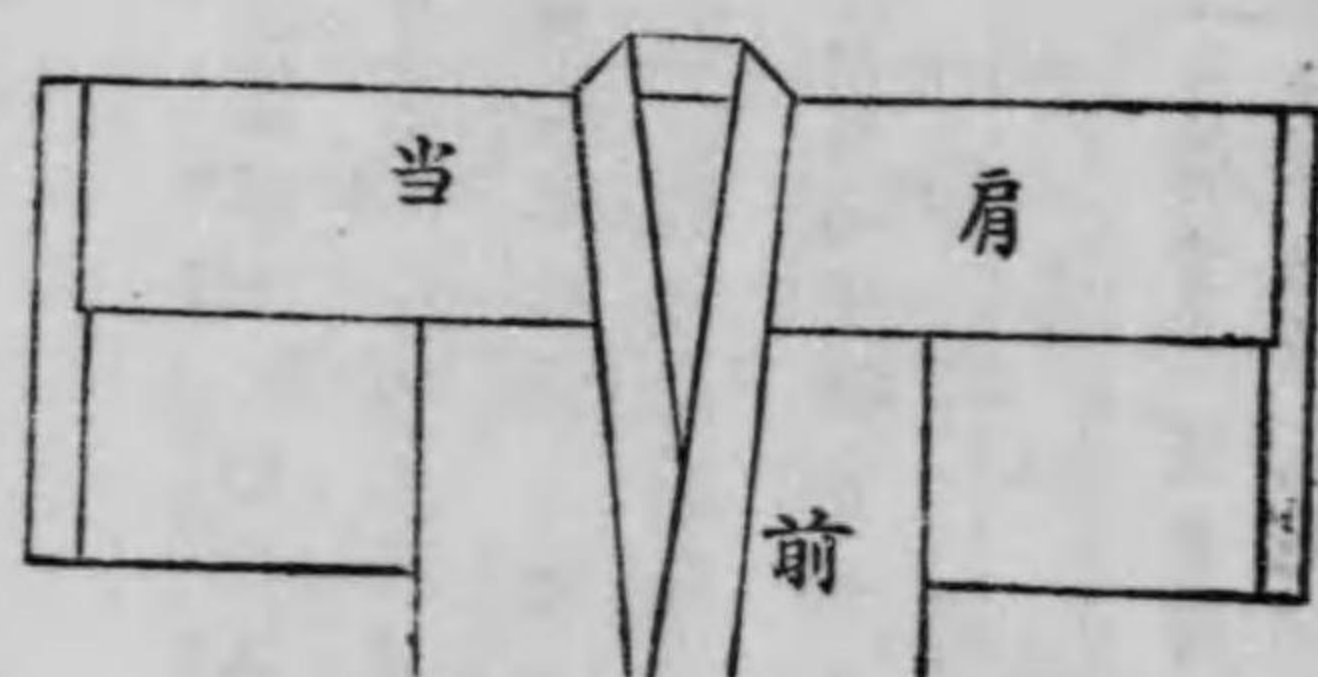
2、肩當附け方

イ、地質 絹物縮緬メリンス

ロ、用布 巾一尺、丈三尺五寸

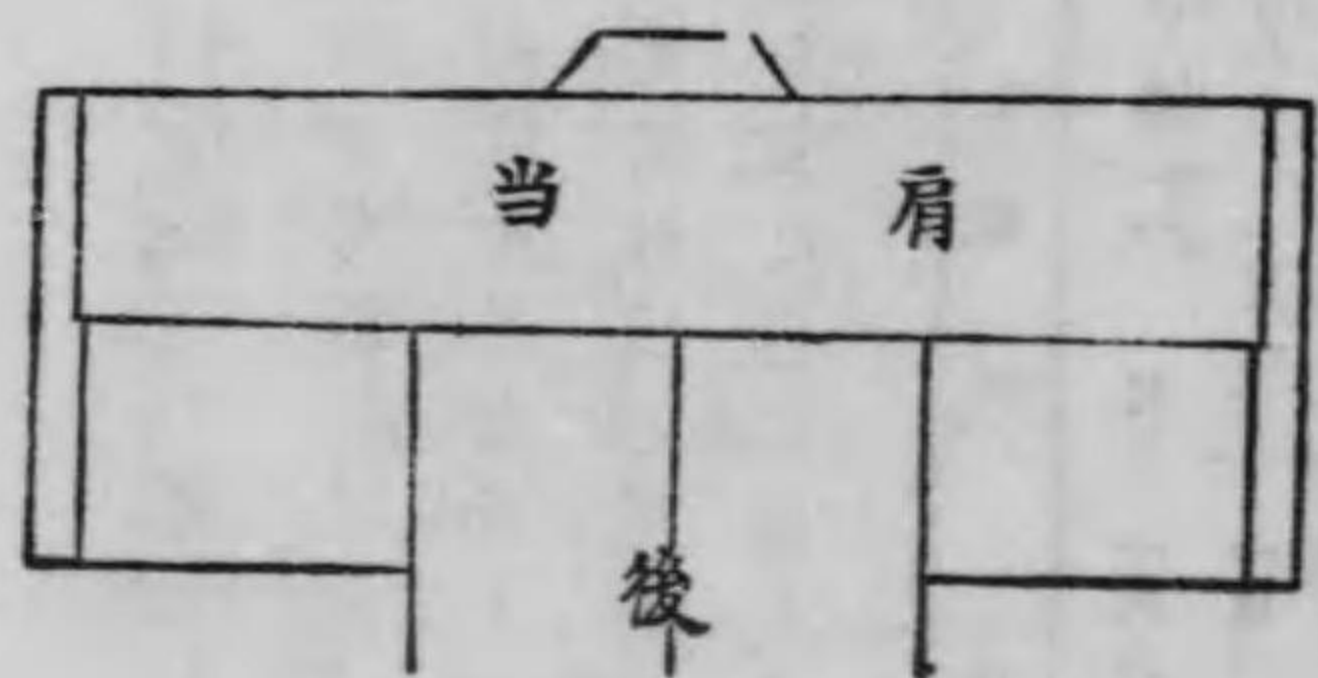
ハ、肩當 丈けを半分折つて、其れを二枚のまゝ、一寸五分違へて巾を二つに折つて、先きに折つた丈けの折りから衿肩明を圖の様に計つて二枚一緒に裁切ります。次に一寸五分巾の少い方のわの處へ鉄を入れませすと、丁度着物の肩當の様に裁つので有ります。

(前) 圖の當肩前



經濟的振卷

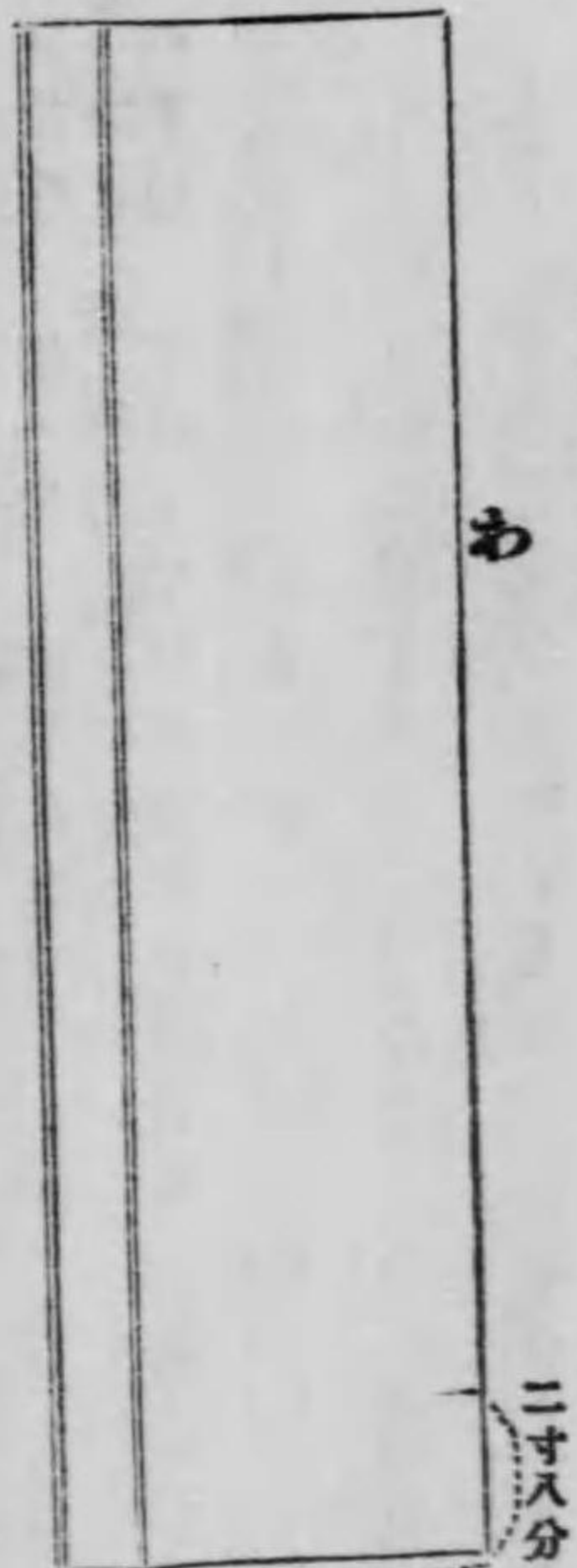
(後) 圖の當肩後



一七五

つけの方へ先きに折つけ次裏衿のつけ目へ折つけ附けるので有りませす。

明肩衿に當肩
圖るけ明を



經濟的振卷

(わ二枚の上のわを切る)

一七四

二半衿のかけ方

附け方は耳も裁目も凡べて二分程に折り伏せ縫をして肩當の圖の様に當てしすくひ伏せにして後前だけつけませす。横は袖口の吹き縫目から一寸先さへ出る位に折りが重なれば好い格好になりませす。

地質は大抵天鵝絨と定つて居ります着物で申しましたら共衿で巾は一尺丈は三尺五寸を用ひまして掛け方は着物の時の様に半衿丈の兩端を衿に縫ひつけずに兩端は折り伏せ縫にしたまゝ表の衿

夜具

夜具とは、掻巻に燧を入れて、袖丈身丈を長くし、従つて裏地を多く用ひ袖裾の出吹きを多く致します(綿を澤山入れたもので御座います)。未だ掻巻のお話も申上げては有りませんが、経済的掻巻と云ふのを前章に申上げましたから、此處で夜具をお話し致しますれば、普通の掻巻は自然と、おわかりになる筈で御座います。左に其の差を表にして示します。

夜具	袖丈(木綿)	同	(絹)	裏の用布	袖吹	裾吹	綿	燧
一尺六寸以上	一尺七寸以上	一反と二丈	半巾	一尺	一尺	一貫六七百匁	有	
一尺五寸五分迄	一尺六寸迄	一反半(絹製丈五尺)	四分一巾	一尺以下	一貫三百匁迄	無		

但シ大判一枚は百匁とします

最も家風や土地の習慣上、掻巻に燧を入れる人も夜具に燧を入れ無い人も有りますが、右に載せましたのは、一般的に定めて御座います。

一、名稱及寸法

名稱は、着物と變り御座いませぬが、たゞ袖口や裾の出吹きが多く在りますのど、袖附の處へ燧と申します物が入りまますとの違ひです。大體は經濟的掻巻へ、衤と燧を入たものと思へば宜敷御座います。

夜具仕上寸法					
袖丈	總丈	行巾	身巾	袖巾	衤下(表)巾
一尺七寸五分	五尺二寸	いつぱい	いつぱい	五寸五分	五寸
同下	同巾	衤肩明	裾吹	袖吹	燧
四寸	三寸二分	三寸三分	一尺二寸	半巾	四寸四方

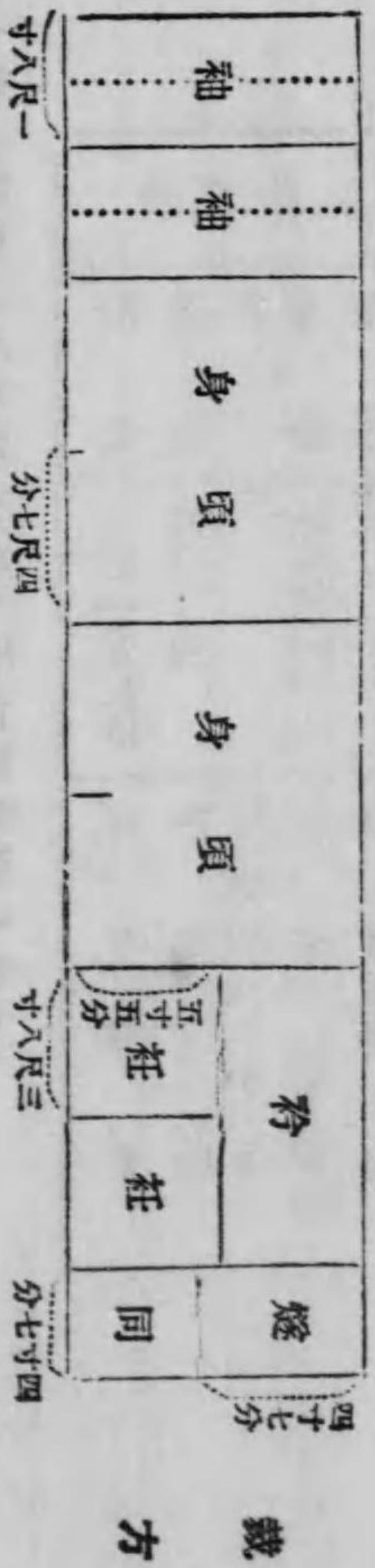
二、裁方と積り方 (標附)

1、地質 絹類 木綿類

2、用布(絹)

表 三丈一尺五寸五分(一反) 裏 五丈三尺(一反と二丈三尺)

裁



$(18\text{寸} \times 4) + (40.7\text{寸} \times 4) + (38\text{寸} \times 2) + 4.7\text{寸} = 315.5\text{寸}$
 $(\text{袖丈} \times 4) + (\text{身丈} \times 4) + (\text{衽丈} \times 2) + \text{襪} = \text{總尺}$

衽丈は

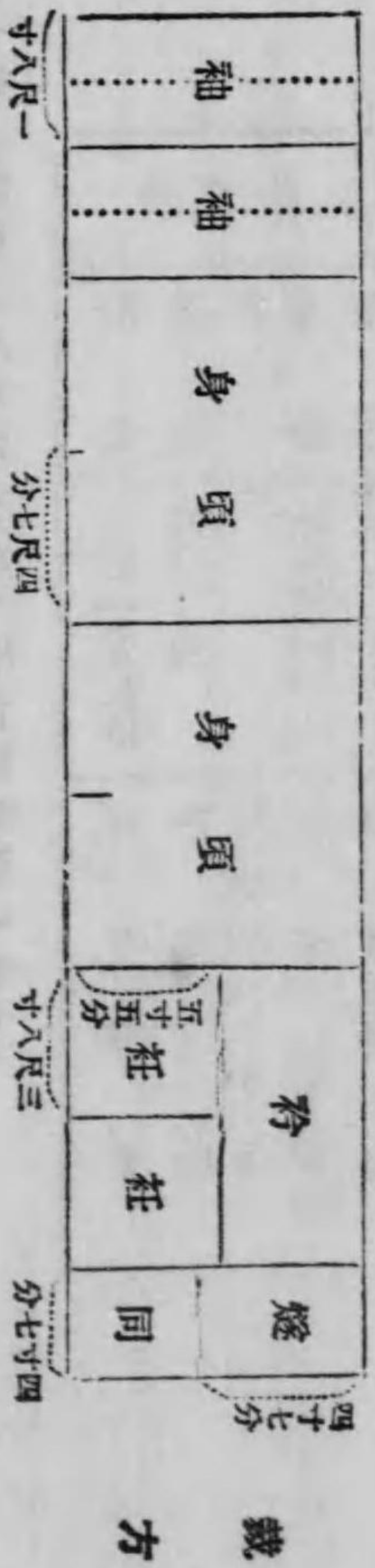
身頭一衽下 = 衽丈

1、地質 絹類 木綿類

2、用布(絹)

表 三丈一尺五寸五分(一反) 裏 五丈三尺(一反と二丈三尺)

裁

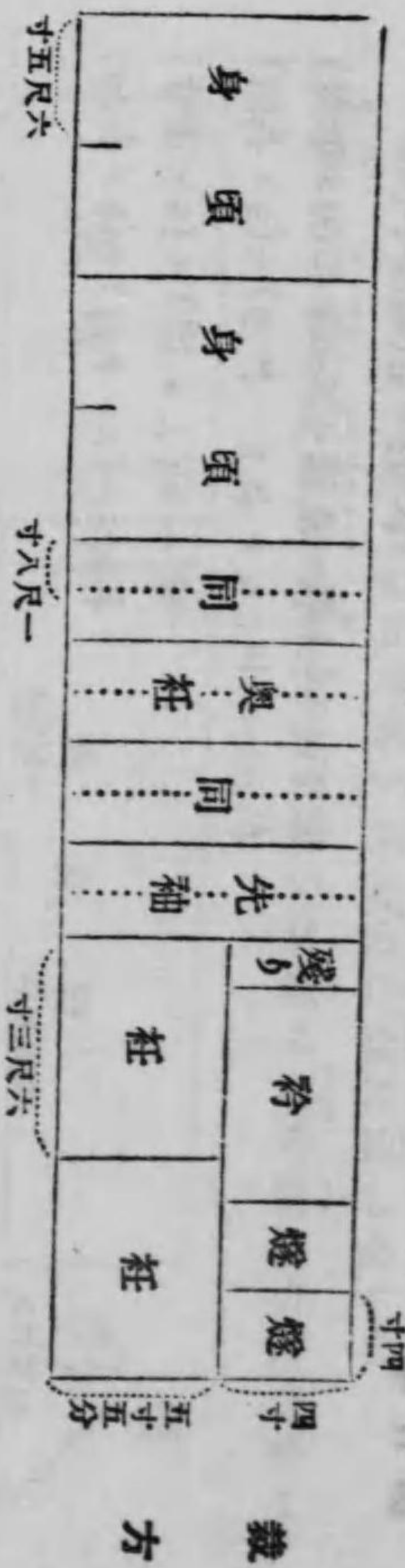


$(18\text{寸} \times 4) + (40.7\text{寸} \times 4) + (38\text{寸} \times 2) + 4.7\text{寸} = 315.5\text{寸}$
 $(\text{袖丈} \times 4) + (\text{身丈} \times 4) + (\text{衽丈} \times 2) + \text{襪} = \text{總尺}$

衽丈は

身頭一衽下 = 衽丈

裏



$(65\text{寸} \times 4) + (18\text{寸} \times 8) + (63\text{寸} \times 2) = 530\text{寸}$
 $(\text{身丈} \times 4) + (\text{袖丈} \times 8) + (\text{衽丈} \times 2) = \text{總尺}$

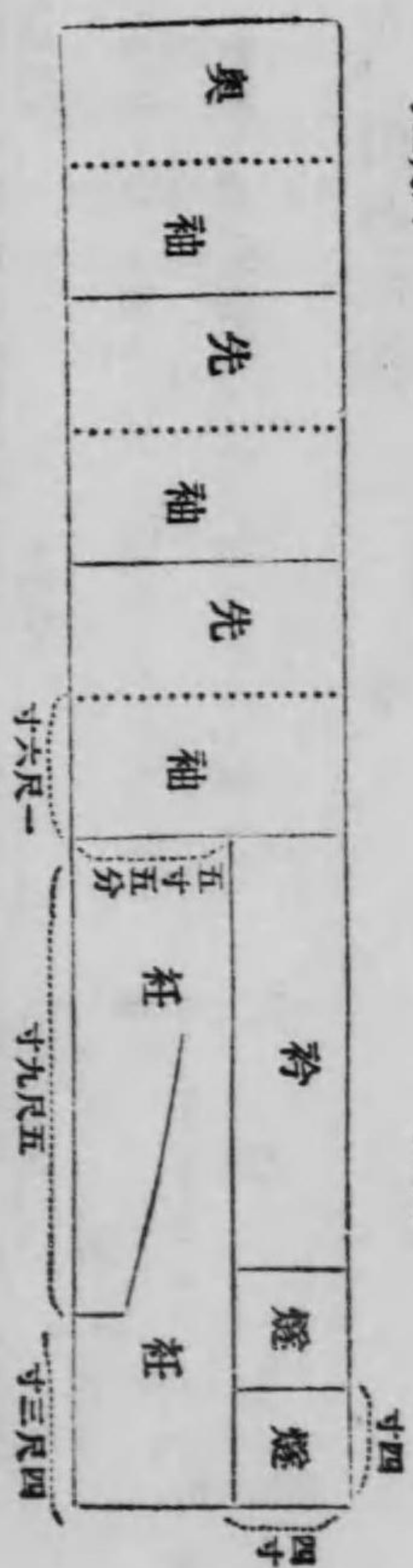
3、用布(木綿)

表 三丈(一反) 裏 四丈八尺(一反と二丈)

表は寸法が違ふ丈けで絹の時と同様ですが裏は鍵になりますから裁方を左に記します。



裁方

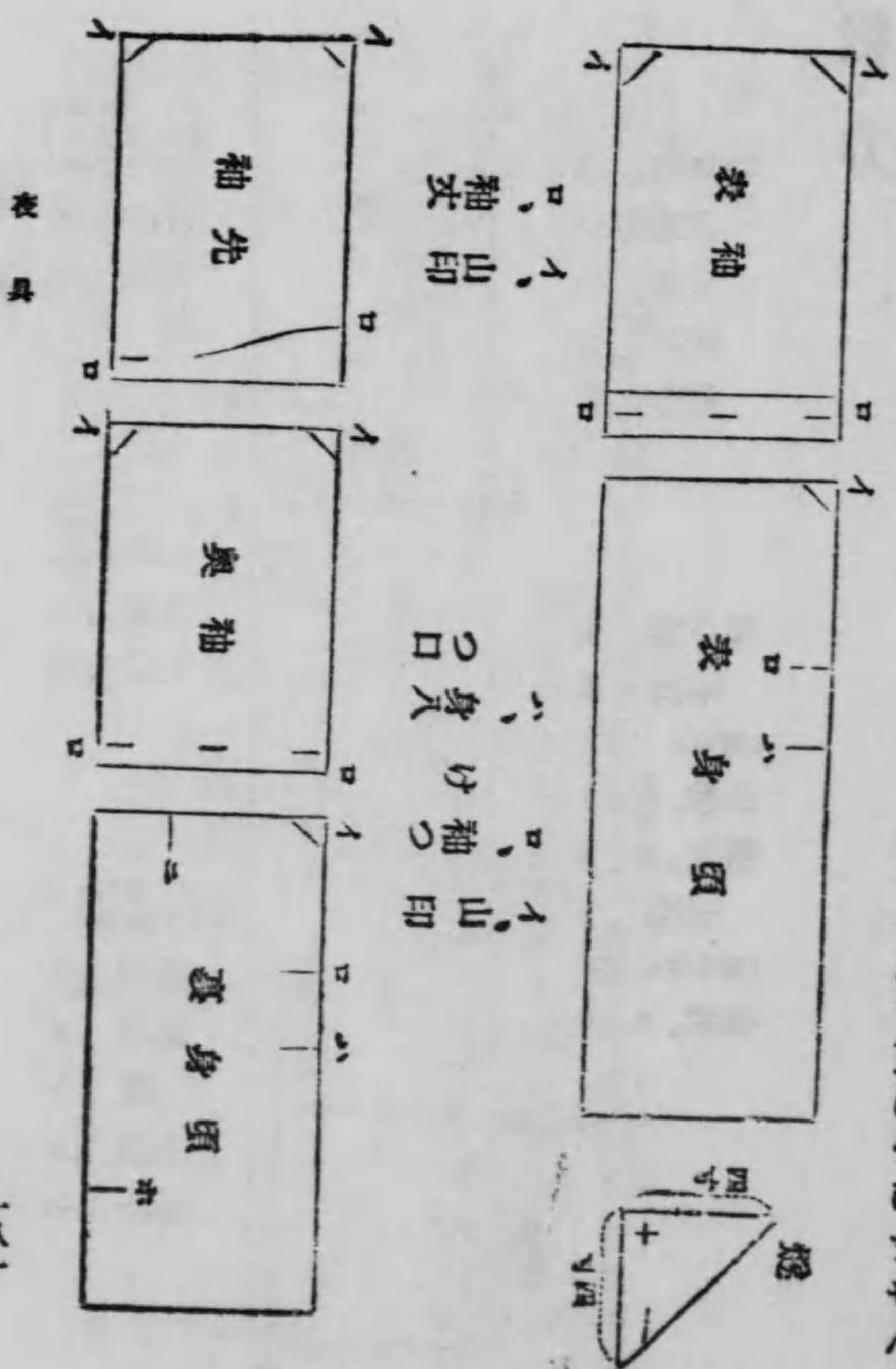


$(62寸 \times 4) + (16寸 \times 2) = 280寸$
 $(身頭 \times 4) + (袖 \times 2) = 一 反$
 $(16寸 \times 6) + (62寸 - 3寸 + 4.3寸) = 200寸$
 $(袖丈 \times 6) + (身丈 - 袴下 + 袴下) = 足し布$
 $280寸 + 200寸 = 480寸$
 一 反 + 足し布 = 總尺

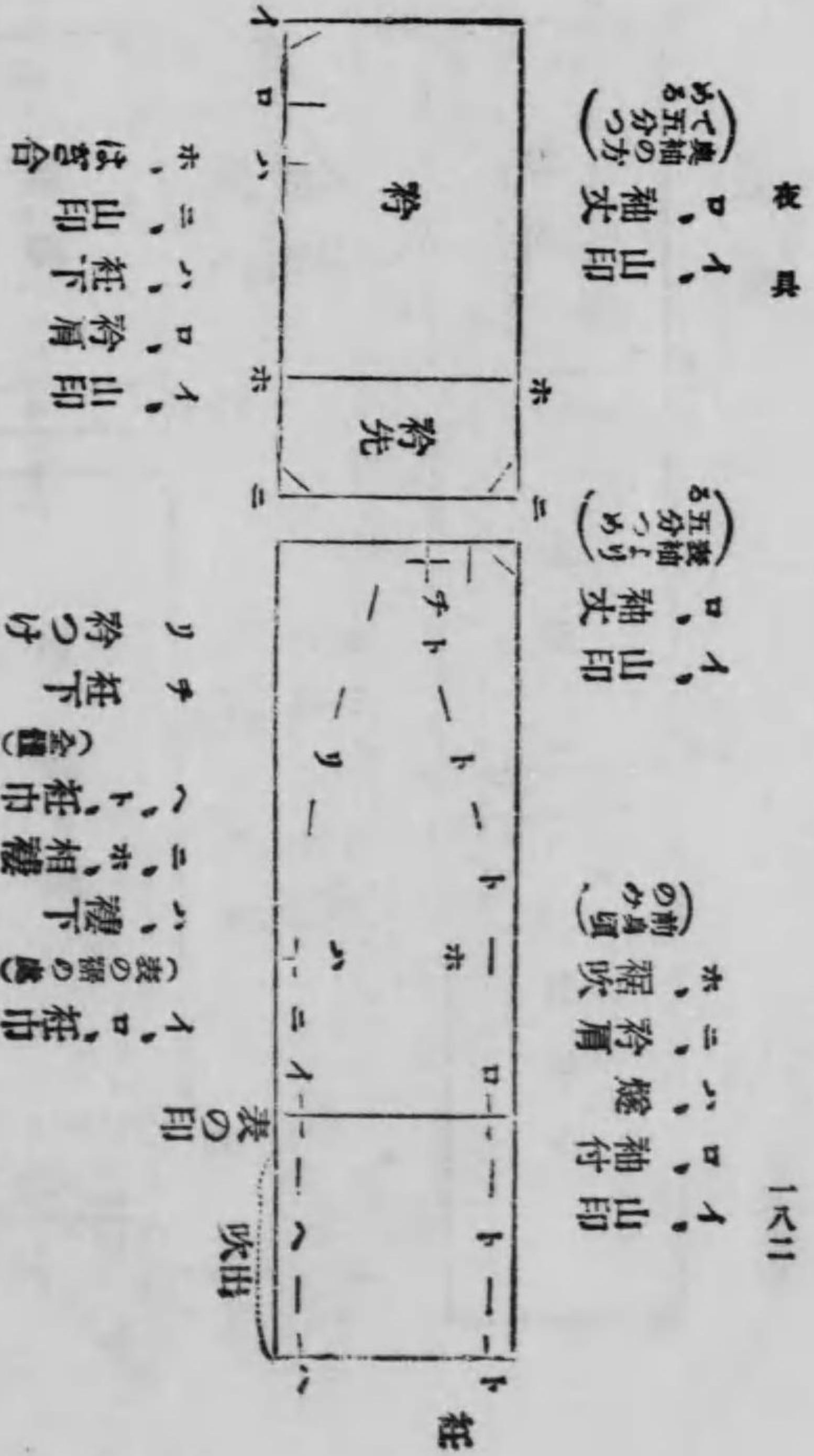
方り讀

標付

夜具や蒲團類は別に記を致しませんが縫りばつとしてひて
 處を縫ふやらわかり縫ひぬめ左の様に致します。
 位置は着物の時同様に置きまつばいに縫ふ處の記はつけません。



一八一



三、縫方

1、袖

1 表袖に先袖を合縫にして表の方へ折つて縫目より一分離して隠

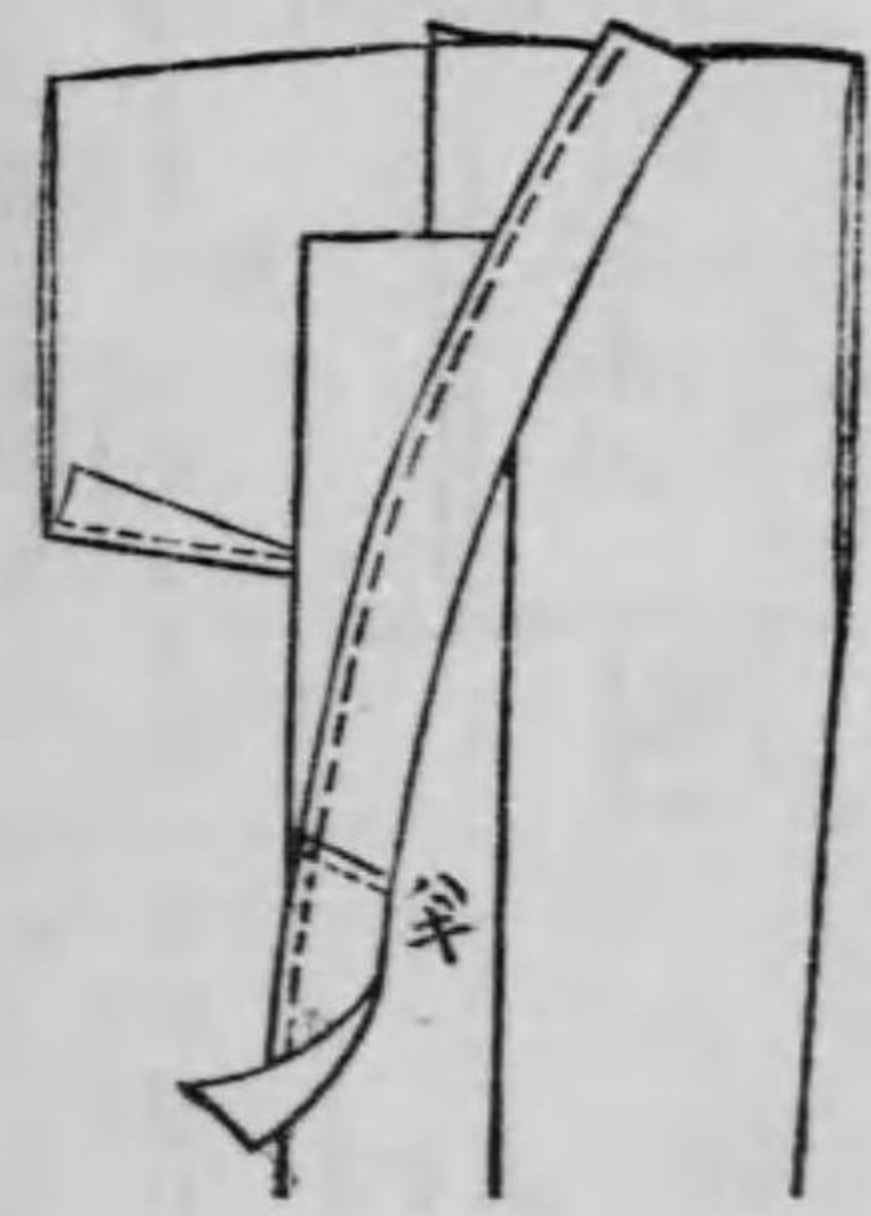
裏を五分足にかけ共糸圖の様に後袖から前袖と云ふ順につけます。
袖下を普通に縫つて隠裏をして置きます。
□ 裏袖も表の時同様熨を入れてから袖下を縫つて折りは前につ

2、身頃

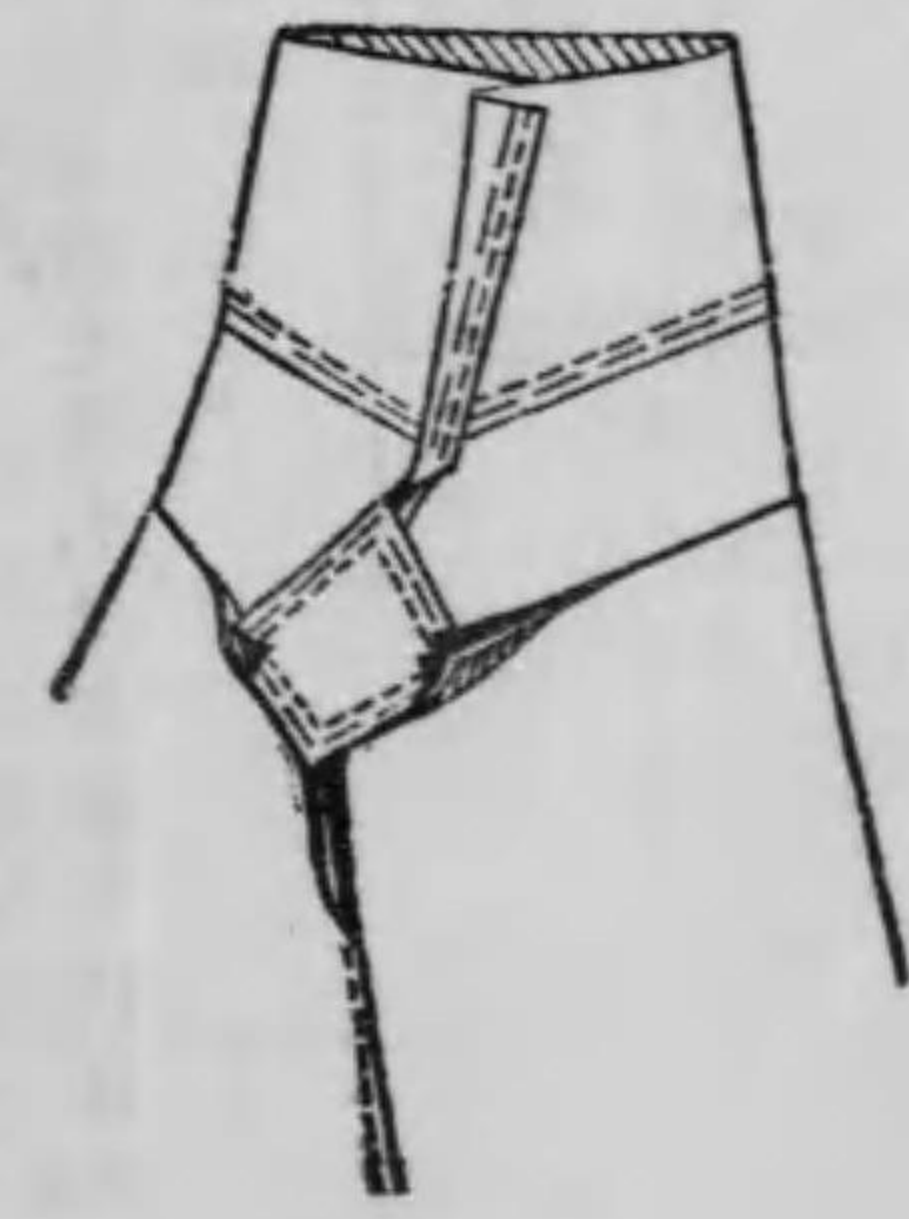
1 表身頃は脊を合縫にして直ぐに衿をつけます(衿肩明より三分少
い處から下へ斜に折つて衿をつけます)次には衿を裏表はぎ合せて
圖の様に仕上げます。衿がつかましたら脇縫を致しますがこれは大
さい物で取扱よゝ爲めに脇縫を後に致します。



袴のつけ方



袖つけの圖



袖つけ 袖をつけますには、燧の處は身頃へ返へして、袖の處は袖の方へ圖の様に返へして隠裏をかけて置きます。

ハ 裏身頃は脊脇と合縫にして、袖つけは表の時同様返へし、衿の出吹きの處は真直ぐに表の丈けと同じ處だけを斜に附けます。

3、裾合せ

裾は表裏との縫目くを合せて合縫にして折りを表を返へして隠裏をかけて置きます。

4、袴下の縫方

袴下は裏の袴をつけましたら、その糸を切らずに縫つて表に返へし、隠裏をかけます。次に袴を裏表のはぎ目まで袴巾通りに縫つて置きます。

四、綿の入方

綿を一貫八百匁入れるとして、其の内袖へ五百匁と云ふ様にわけます。疊み方は經濟的極巻の様に致しまして、六寸位身頃より大きく三枚程重ねましたら、袴肩の一方を残して三方だけを夜具の大きさに切り、袴先の處は切つて袴の形に折り、袴下も同じに致しますが、袴先の綿は一枚宛重ね組合せて其の上に二枚の掛綿をし、裾だけ表を返へして、袴先や袴先裾等によく綿の行届く様に手を入れて加減を致します。肩の綿を行きつき通りに燧の處で切つて、裾の方へ折つて置き前に残し

て有ります綿を二分して、兩袖へ入れ身頃との間をよくなほします。
 袖口の方に四寸許りは綿の芯を入れて折ります。薄い處は凡べて屑綿を
 入れて平にし、上から一枚掛綿をして裾を軽く据えましたら、與袖との合
 せ目を縫ひます。
 裾の方に折つて有ります綿を伸して前に載せ、三つ衿に組合せて衿をつ
 くり、肩で後と前とを厚くならない様に組合せて袖の綿も口先をよく組
 合せ、薄い處へは屑綿をたして掛綿を一枚しましたら、衿の明いてる處か
 ら表に返へします。

五、衿け方及仕上げ

衿け及び綴ぢで、肩當を當てますのは、經濟的擴卷の時と替り御座いませ
 んから別に申上げません。

鏡蒲團

鏡蒲團は、掛蒲團や炬燵蒲團等に用ひまして、大きさは普通の五布蒲團に相
 當致しますが、表を四布にして裏を六布にし、裏が半巾づゝ表のまわりへ折り
 返へる事になつて居ります。地質は普通の蒲團と同じ表裏を用ひます。
 寸法は出來上り丈五尺に致しますと、表四尺の裏が六尺になります。

一、裁方及積り方

裁方は一巾の物を尺だけに切りますので、別に申上げるだけの事も有り
 ませんが、積り方を左に記します。

41寸 × 4 = 164寸
 表1次布敷 表用布
 61寸 × 6 = 366寸
 裏1次布敷 裏の用布

鏡蒲團

二、縫方

1、表

四布を巾いづばいに合縫ひにして同じ方に折りを返へし、縮緬の時は縫袢をかけますが、外の物はかけません。

2、裏

六布を表同様合縫ひにしましたら、真中の縫目は上下一尺五寸位縫うて間を明けて置きます。

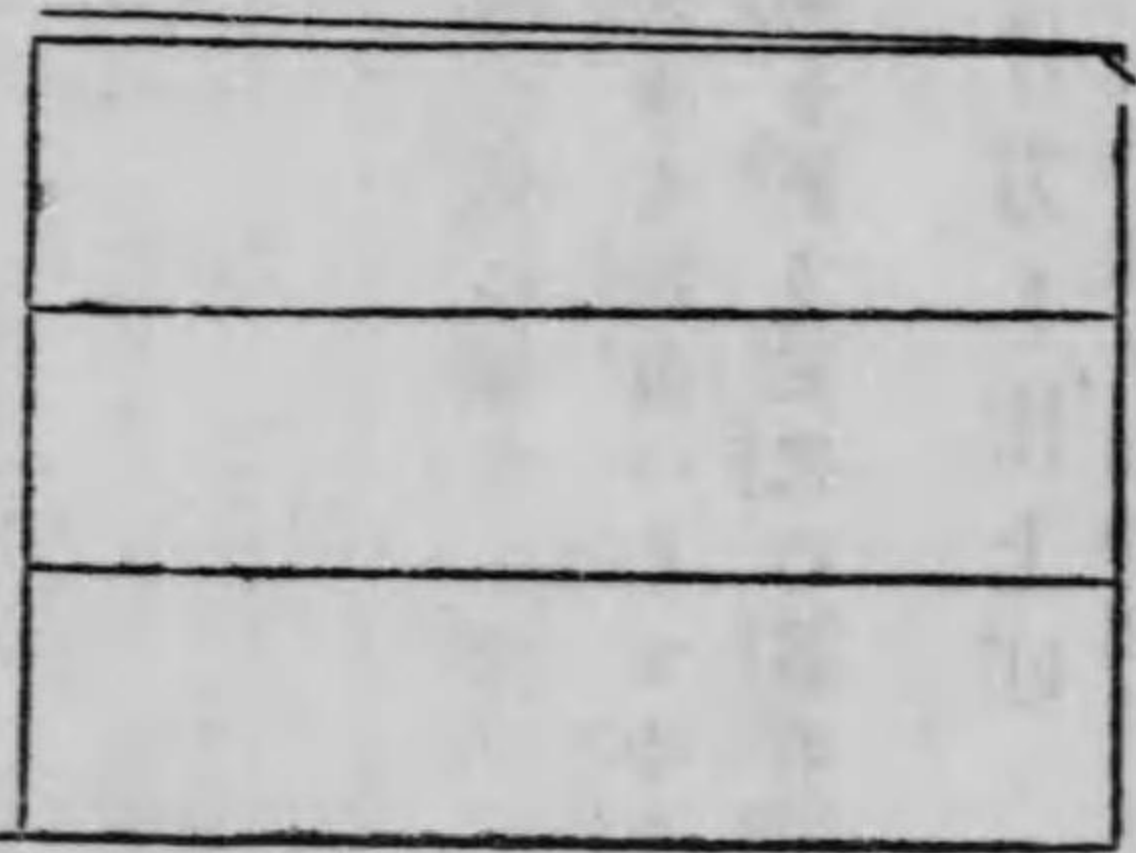
3、裏表と四角の縫方

裏表共巾をはぎ合せましたら裏の圖の様に表も四つ折にして丈の真中の印をつけましたら表裏の縦は印と印とを合せ、横は縫目を合せて合縫ひにし折りを裏に返へして隠袢をかけて置きます。

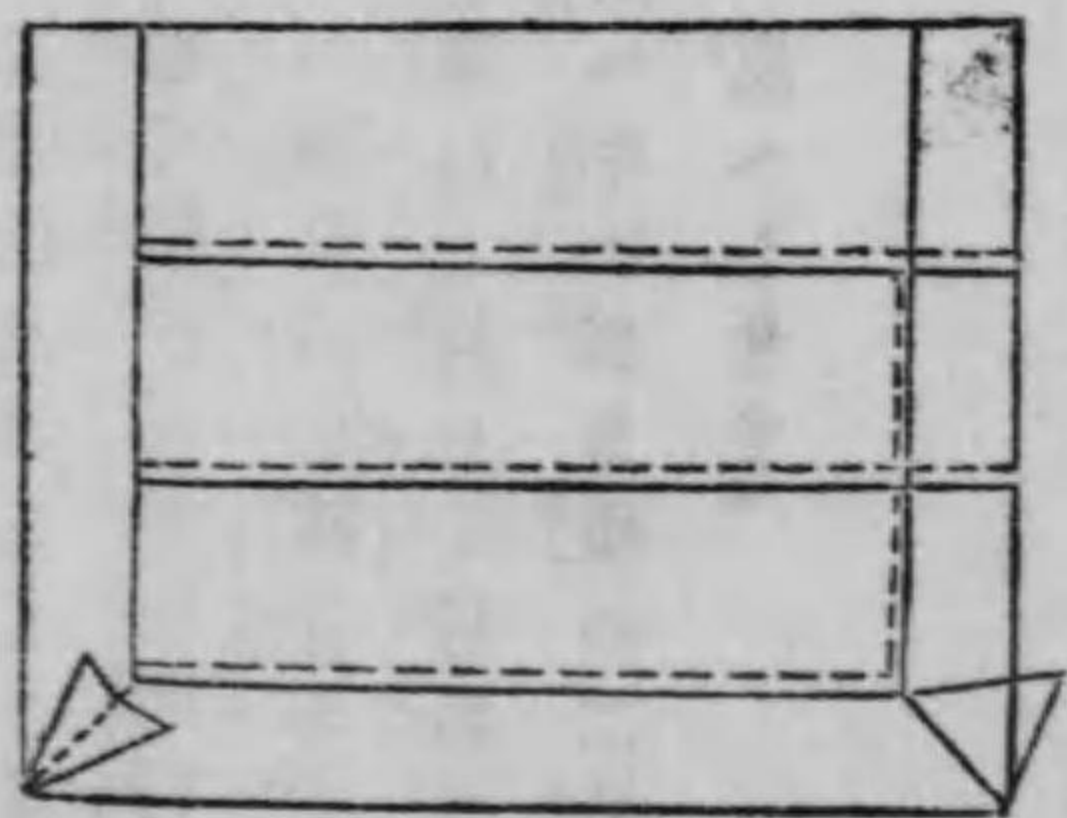
裏表が縫ひ合されましたら、四角を圖の右の様に折つて折りの處

を縫ひ皆同じ方に返へして隠袢をかけ縫目は圖の左の様に折りをつけて置きます。

裏を四つ折にした圖



角の造り方圖



丈の中
央の標

角を縫ふ折

折りのつけ方

4、綿の入れ方

二貫目の綿を入れるとして枚数が二十枚なれば、四枚残して置きます。